

行動する知識人・橘樸 -大正生命主義と中国経験-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 趙, 東旭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20873

行動する知識人・橘樸

—大正生命主義と中国経験—

Tachibana Shiraki: An intellectual of action

Concerning the vitalism of the Taisho period and his experience of China

博士後期過程 教養デザイン専攻 2015年入学 趙東旭 ZHAO Dongxu

はじめに：橘樸研究の意義及び方法

橘樸(たちばな しらき、1881-1945)は日本のジャーナリスト、中国研究者である。1881年に大分県に生まれ、1905年に『北海タイムス』に入社、翌年に中国の大連に渡航、当地の日本紙『遼東新報』に入社、記者として活動を始めた。その後、橘は日中両民族の正しい関係の理論及び方法を模索するために、35年間も中国で過ごし、中国社会の各方面、例えば通俗道教、民間信仰、民衆心理、農村組織などを深く考察、研究していくことになる。1911年に辛亥革命が起きた時、彼はジャーナリストとしての半生を中国問題に捧げたい覚悟を持ち、北京に入り込んだ。辛亥革命の「失敗」、すなわち1916年以後の、中国の軍閥割拠と南北分裂という状況は、橘の目線を政治エリートから民衆と社会組織に転じさせた。1918年のシベリア出兵の時、橘は青島守備軍囑託の従軍記者としてチタに赴き、チタからの帰途、ウォッカを飲み過ぎで脳溢血で倒れ、それからおよそ5年間の療養生活を送ることになった。1923年から1924年にかけて、体調の回復とともに、彼は独自の人生観、歴史観及び中国観を形成したのである。1924年1月に開かれた国民党第一回全国代表大会をメルクマールに、中国は国民革命期に入った。橘は情熱をこめて中国革命の動向を観察し、大量の論説を発表し、それを追いかけることになった。しかし1927年の蒋介石クーデターから、1929年以後の国民党左派の墮落と南京政府の難航、また戦争や混乱が一層拡大したという、一連の厳しい現実直面した橘は、大きな刺激を受けた。1931年に満洲事変が勃発し、橘はこれまでの中国革命に対する同情や支持の立場を捨て去り、関東軍の協力者、また満洲国のイデオログになった。それ以降、橘は満洲国に基づき、農民自治論、東洋改造論ないし世界改造論などのような大きな構想を展開していったが、現実はいずれも彼の予想に反していった。日本が敗戦した2ヶ月後の1945年10月25日に、肝硬変末期の橘は瀋陽(当時は「奉天」)で臨終を迎え、64年の生涯を閉じたのである。

以上は、橘樸の生涯に対する簡単な紹介である。東アジアの転換点としての日清、日露両戦争の時期に青少年期を送り、20世紀前半の世界史の激動期に身を以て、日中両国の正しい関係を探求していた橘は、思想史研究における重要な人物であったに違いない。橘の思想の性格及びその形成の背景は何か。橘の中国研究の特徴はどこにあるか。橘の中国革命に関する構想はどのようなものであったのか。また、なぜ日中両国の正しい関係に対す

る探究を一生の志向とした橘が、満洲事変をきっかけに、思想的にも行動的にも180度の転換を起こしたのか。これらの一連の問題に答えることによって、思想史における橘の位置を解明することだけでなく、近代日中両国の葛藤に対する理解、また今日の日中関係の再構築に対して、ある種の思想的資源を提供することはできるのではないか、と思われる。

しかし橘に関する研究は、中国どころか、日本でも不十分だと言えよう。

中国において、橘に関する研究が進んだのは主に2008年以降のことであった。それでも、中国の「知網」(学術論文を掲載するインデックス)で「橘樸」を入力して搜してみると、論文の数が少ない。すなわち1988年(1)、2001年(2)、2002年(1)、2006年(1)、2008年(2)、2010年(1)、2011年(4)、2012年(5)、2013年(3)、2014年(3)、2015年(2)、2016年(1)、2018年(1)、という合計27点であったが、中国の橘研究は、基本的にまだ橘に対する紹介のレベルに止まっていると言える。例として取り上げられるのは、朱越利の《鲁迅与橘朴的谈话》(《日本の中国移民》1987年3月)、孫江の《橘朴与鲁迅》(《读书》2012年3月)、趙京華の《鲁迅与日本の中国研究——以橘朴为中心》(《新文学史料》2013年11月)、《近代日本有关“中国”的知识生产——以橘朴为中心》(《现代中文学刊》2014年第1期)、潘吉玲の《橘朴的中国社会和国家论》(《近代史学刊》2012年5月)及び祝力新の著作《〈満洲评论〉及其时代》(2015年1月)などである。

日本の橘研究は早くも戦前に始まった(1930年代)。戦後になると、その形式は主に回想会(1956年田中武夫「橘樸を考える会」発起及び機関誌『楠』の発刊)、橘の著作の編集(1949年中野江漢編橘樸遺著『道教と神話伝説—中国の民間信仰—』、1950年日本評論社出版の『中国革命史論』など)であり、まだ準備段階にとどまっていた。

1950年代には橘に関する本格的な研究はほぼ行われなかった。なぜなら、50年代で隆盛となり、侵略戦争に対する反省と中国革命に対する礼賛を内容としたいわゆる「戦後史学」において、橘樸——満洲国の協力者を研究する余地はなかったからである。しかし60年代の「安保闘争」とともに、「戦後史学」の基盤は揺るぎ始めたこと⁽¹⁾、橘にも光が当てられることはなかった。したがって「戦後史学」における比較的単一化された評価基準に対して、60年代に入ると、人間・社会・経済・政治などいろいろな側面から再評価また再発見の風潮が台頭した。60年代の橘研究としては、1963年の判沢弘による「橘樸『開かれた東洋』への思想」、1964年の吉本隆明による「日本のナショナリズム」、及び1967年に高橋和己の「中国民衆史の断面—橘樸にふれて—」などがあり、また1966年に編集された『橘樸著作集』三巻があげられる。

70年代に入ると、橘に関する研究は一定の成果をあげた。代表作には、橘の弟子たる田中武夫の『橘樸と佐藤大四郎—合作社事件・佐藤大四郎の生涯』(1975)と、以後の橘研究にとって不可欠で、橘の生涯を全面的に描写した山本秀夫の評伝『橘樸』(1977)また『甦る橘樸』(1981)などがあげられる。このように、戦後から80年代に至るまでの橘研究の主流を為したのは、彼の知人や弟子らによる、橘に対する回想、著作の整理及び伝記の編

集など、「述而不作⁽²⁾」のような土台作りであったと言える。1981年に出版された『甦る橋樸』もまた、依然として土台作りの継続であった。

80年代以降の橋研究は、知人や弟子に限らず、他の研究者によって多方面にわたって展開されるようになり、今日まで至る。代表的研究者としては、野村浩一、山田辰雄、中西勝彦、浜口裕子、家近亮子、酒井哲哉、福井紳一などが挙げられる。

山田、浜口、家近の三人は主に、橋の言説に依拠し、各時期における彼の思想の様態を緻密に整理した。例えば、山田辰雄の「橋樸の中国国民革命論」(1983)、浜口裕子の「橋樸と石原莞爾」(1988)、家近亮子の「橋樸の中国共産党批判」(1990)等々である。またこの三人は、1993年から天津市の新図書館と交渉して許可を得て、『京津日日新聞』の1922年から23年にかけての橋が残した360余りの記事を編集して、2005年に『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』として出版した。この新資料は、橋研究に新しい可能性を与えた。

野村浩一と福井紳一は、アジア主義の角度から橋の思想史的位置を検討しようとした。近現代の中国革命の思想的研究に従事していた野村は、その論文「橋樸—アジア主義の彷徨—」(1980)において、中国革命と関連づけた上で、農民自治を原則とした橋のアジア社会の再構築に関する構想の意味と虚構性を見出した。それに対し、満鉄、満洲国研究を専攻していた福井紳一は、「満鉄調査部事件」を手がかりとして、橋について左翼的アジア主義という文脈の中で捉えていた(2017年「橋樸と左翼アジア主義」参照)、というこ⁽³⁾となる。

橋樸の思想について、大正期の社会思潮と関連付けて研究を展開したのは中西勝彦と酒井哲哉である。中西は、日露戦争前後の民衆勢力の台頭と、国家に対する不信感を持つ青年たちの「煩悶」という背景に、橋の思想の根源を求めようとした(1975年「橋樸の思想形成—渡航動機とのかかわりで」)。それに対し、酒井は大正期のギルド社会主義を、橋の思想の根底として論を展開したのである(2007年「アナキズム的想像力と国際秩序—橋樸の場合」)。二人はともに、橋思想の形成の背景として、明治から大正への転換期に触れたが、橋思想の構造及びその後の発展に関する研究は、不十分であったと言わざるを得ない。本論文は主に、両者の議論をふまえつつ、それを発展させるものである。

ある歴史人物を研究しようとするなら、彼の具体的な言葉や一時的な判断に注目する他、言葉や判断の中に隠れている思想的核を把握しなければならない。それは対象の思想史的位置を解明するカギであると思われる。橋樸を研究する場合には、その問題に注意深くある必要がある。「XX主義」を以て、橋を定義づけられないのは、橋の思想の深層部において、何か根強いものが流動しているからではないか。一般にある人物の思想は、その青少年期の時代風潮から深く影響されたと考えられる。それゆえ、筆者は明治から大正への転換期における思潮に注目することを通じて、橋の思想のエートスを解明することを試みたい。

次に、橘はもちろん日本の知識人であったが、彼の35年間にも及ぶ中国経験が彼に与えた影響は無視されてはいけない。中国視角の不在は、先行研究の欠点であったと言える。筆者は辛亥革命と療養経験を手がかりとして、橘思想の形成及び形態を明らかにすることを試みたい。後で詳しく述べるが、橘の思想の中で最も重要視されたのは、「個性」である。では、橘が捉えた中国社会の「個性」とは何か、その「個性」を知った上で中国社会改造の方法は何か、その方法が現実の乖離に突き当たってどのような衝撃が橘の思想にもたらされたのか、衝撃を受けた橘は自らの思想をどのように調整し、どのような形を以て発展させようとしたのか、ということは本論文の筋である。まとめると、橘の人生をめぐる重要な問題はすなわち、(1) 中国研究 (2) 中国革命論 (3) 「方向転換」 (4) 東洋観及び東洋改造論ということであった。したがって、本論文の章立ては、以下のようなものとなった。

第一章、「橘樸思想の形成及びその背景」。本章において、筆者は山本秀夫と中西勝彦の先行研究を踏まえ、大正生命主義の興起、辛亥革命及び橘の療養経験を糸口として、橘の思想の形成及びその構造を究明してみたい。

第二章、「橘樸の中国研究—官僚、家族及び農村—」。筆者は本章で、橘が中国の歴史、社会を把握する基準について論じてみたい。橘にとって、家族組織は中国社会の成立の根拠であった。その根拠をめぐる、彼は自身なりの中国論を展開していった。

第三章、「橘樸と中国革命—『革命同盟』の理論的構造—」。橘は自分の中国論に基づき、中国革命の前途について「中産階級革命論」を提示した。筆者は彼の「中産階級革命論」の理論的構造を「革命同盟」として捉え、「革命同盟」論と国共両党が掲げた「統一戦線」論を比較した上で、両者の根本的な違いを指摘しようとした。さらに中国革命の路線に関する両者の基本的な違いから、橘を中国革命の反対側に立たせた原因に対して吟味を加えてみたい。

第四章、「方向転換—歴史に介入する行動—」。「方向転換」は従来の橘研究にとって避けられない課題であった。筆者は山本秀夫、山田辰雄、野村浩一、福井紳一、中西勝彦また酒井哲哉の研究を踏まえながら、橘の思想の基本構造と関連づけた上で、彼の「方向転換」を再検討しようとした。

第五章、「橘樸の東洋論—『実体』としての東洋は存在するか—」。1925年から、橘は「東洋」のあり様を模索し始めた。直接的な契機は、前年の孫文の「大アジア主義」講演であった。孫文とは違い、橘は「社会」を根拠として、「実体」としての東洋を創り出そうとした。1930年代以降、橘は満洲国を拠点にして東洋改造論ないし世界改造論などのような壮大な構想を展開していったが、結果的に日本の敗戦とともに水泡に帰したのである。橘の行動は、「社会」の限界性を提示する一方、「実体」としての東洋が存在し得るかという問題をわれわれに残している。

I 橘樸思想の形成及びその背景

はじめに

これまでの先行研究において、橋樑は多くのレッテル——アナーキスト、アジア主義者、左翼アジア主義者、農本主義ファシストなど——を貼り付けられた。これら定義づけの多様さは、橋樑の思想を把握し得たというより、むしろ橋樑思想の複雑さと難解さをよく示しているのであろう。それら諸定義は、橋樑の思想の側面の一つを示しているが、橋樑の思想の軸、つまり彼の思想の基本的な展開のあり様を説明できていないと考えられる。

筆者が橋樑に出会ったのは、修士論文を執筆する時であった。当時、筆者は満洲国に関する研究をやりたくて、何を手がかりとしていいのかについて指導教授に意見を尋ねたところ、橋樑を読んでみるとよいと勧められた。それから筆者は、『橋樑著作集』三巻と山本秀夫が書いた伝記作『橋樑』を読み始め、関連する幾つかの先行研究にも目を通したが、全く要領を得なかった。最初に抱いた感覚と言えば、橋樑の文章には、物事に関する既成の見方をばらばらにして、如何に細部であっても再検討しようとする性格が強く存在している、ということである。既成理論にとらわれない人は、必ず根強い精神と根深い思想の持主であるだろうと筆者は考えた。研究を進めるとともに橋樑の肖像を見ると、筆者のそういった認定はしだいに固まっていく。

この写真は（図1⁽⁴⁾）、1941年晩春、調布町国領の橋樑自宅にて撮影したものであった。写真を撮った人は誰か、なぜこの写真を撮ったかは不明である。当時の橋樑はちょうど六十歳——中国の論理では「耳順」であった（六十歳では、人の言うことを逆らわず素直に聞けるようになったという意味）。山本秀夫編の『甦る橋樑』（1981）の「年譜」によると、1941年から、橋樑は『興亜』、『大陸』、『中央公論』、『改造』、『東亜聯盟』などの雑誌に多彩な執筆活動を始め、また多くの座談会などを通して当時のジャーナリズムの花形となった。

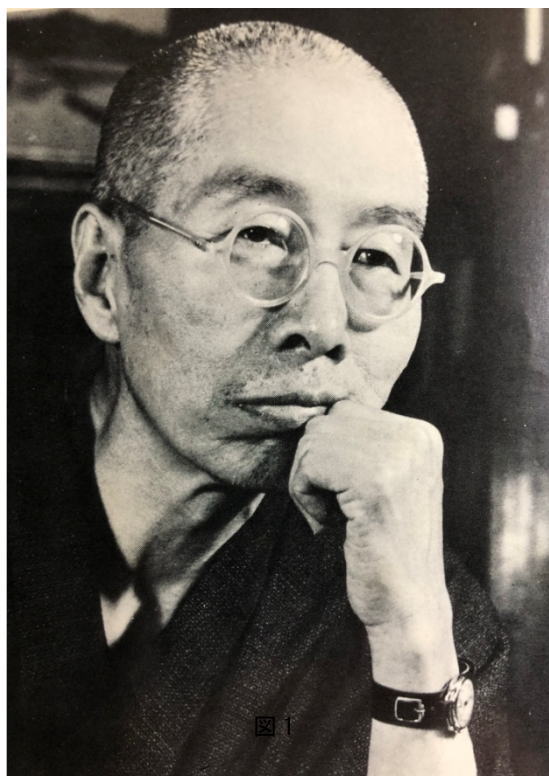


図1

筆活動を始め、また多くの座談会などを通して当時のジャーナリズムの花形となった。

当時の東京国領の橋樑宅には、小林英三郎、富重義人、平野義太郎、福島正夫、頭山秀三、原覚天、柴岡文雄、山本秀夫、池上隆祐、大上末広など、多くの知人やジャーナリストが訪れてきた。この肖像は、この中の誰かによって撮られたものであることと、想像できる。

写真中の橋樑は、簡素な和服を着て、左手で顎を支え、前方を凝視している。前に置いた何かの物事に対して思考しているようであった。注意すべきは、彼の

目である。表情と同じく、その目からは何の感情を見出すこともできない。それは確かに冷たい目であるが、軽蔑の目ではなく、むしろ平和の目であろう。この写真から、橘がこの平和の目で物事の複雑な現象を看破し、対象の本質を突き詰めようとした姿勢が見出され、その姿勢の背後には、橘の思想の深さ及び人格の強靱さが感じ取られる。一切の神秘的、空想的、形而上学的なものは、この目に突き当たったらすぐにもその原型が暴露されてしまう、という感じである。

この感覚は主観的なものであるかもしれないが、研究を進めれば進めるほど、筆者はいよいよこの写真には橘の思想的性格が投影されていると信じるようになった。筆者は、橘の思想には、具体的な主張や主義を超え、通奏低音（丸山真男の言葉）のように響く思想的核のようなものがあると想定する。筆者は仮に、その核を「生命思想」と名づけておくことにする。「生命思想」だけで橘の言動をすべて説明しつくせるわけではない。それは今回の試みであるが、ここで筆者が目指したいのは、彼の思想の性格及び運動形態である。橘の「生命思想」は、彼の生まれつきの性格はもとより、19世紀末から20世紀初にかけての日本の「個人樹立」と「内面発見」の社会風潮に影響され、さらに中国の辛亥革命の失敗及び1918年からの療養生活などの影響のもとで形成されたものであったと考えられる。本章では、橘の「生命思想」の形成及びその背景を中心として論を展開してみたい。

1. 橘樸思想の形成に関する先行研究

橘樸の思想はいかにして形成されたのか。先行研究を見てみると、解釈の系統は大きく二つある。一つは山本秀夫説、もう一つは中西勝彦説である。

山本説は主に1973年1月に発表した論文「橘樸」（『歴史と人物』）と1977年7月に出版した伝記『橘樸』（中央公論社）に示されている。彼は、橘の思想形成の原因をその青少年時代の個性、すなわち「豪傑病」のなかに見出した。橘樸はかつて、自伝『手』において自分の個性を「第一に豪傑病、第二に反逆癖、第三に懐疑又は批判癖⁽⁵⁾」だと告白したことがある。山本は、この自伝の脈絡に沿って、橘の青少年時代の出来事を探し出し、その個性の模様を描こうとした。

山本によると、少年時代の橘は常に「修身、算術の時間に「哲学じみた奇問」を発してしばしば先生を苦しめ、時には顔色を変えさせたこともあった⁽⁶⁾」、「キリスト教嫌いで、自宅の筋向いにあった教会堂のステンドグラスを破壊し、年若い女宣教師から母親に泣きこまれたりしている⁽⁷⁾」という。また中学校の時には、「新任の漢文の教諭兼舎監長でKと呼ぶ陽明学者に気に入られて、『十八史略』や『史記列伝』を読まされ、大いに英雄豪傑観念を吹きこまれた⁽⁸⁾」。さらに最も橘の個性をよく示しているのは、酒の力による乱暴である。山本は次の如く橘と酒との縁を述べる。「樸の性癖で、もう一つ落としてはならないものがある。それは酒である。彼の嗜好といえば酒に限られるといえるほど酒が好きであった。酒飲みの血統は母方のものである。母は藤田武蔵の長女サケヲであるが、彼女の実家

は、前後三代にわたって家禄と身代とを奇麗に飲みほしてしまったという堂々たる左派(ママ…趙)だったという⁽⁹⁾」。また、酒が好きということは、橘の特徴でなく、当時の青年の中で流行っていた傾向であったと、山本は指摘している。酒を飲むだけでなく、当時の青年学生たちは、「脱帽するものは甚だ少なく、甚だしきは濡手拭を肩に引掛け、聞くに堪へざる俗謡を唱へ、恰も元禄時代に於ける侠客の出来損ひ然たる風態にて、平然として去来せる……⁽¹⁰⁾」。そのほかに、遅刻やカンニング、教員への不敬、校舎を放火するなど、橘は様々な乱暴なことをやった。ここから見ると、制度や秩序に従わず、個体生命の自由を追求する行動は、1900年代前後の青年たちの一つの傾向であり、個性が特に強い橘は、その中でも抜きん出ている。そういう「豪傑病」の性格からして、橘は家庭や学校を離れ、より広い天地を求め、北海道へ赴き、さらに中国大陸へ渡航することを決意したのだ、と考えられる。

山本はもともと、橘の性格に何らかの定義付けをしようとした。だが、橘の思想の多様さと難解さに触れた結果、山本は橘を「定義」付けるという姿勢から、橘に関する既成の定義の偽りを剥ぎ取り、橘という人の本来の様子をそのまま描写して、後世の研究を見守ろうという態度を取るに至ったのである⁽¹¹⁾。それが、彼が伝記『橘樸』を書いた要因であったと考えられる。著者の意見をできるだけ抑制、保留して、橘の一生を描くやり方は尊重されるべきだが、橘という人物が不可解であるという印象も残した。結局のところ、橘の思想の基本的な動因については、「個性」という曖昧な言葉に帰しただけであった。

それに対して、中西勝彦から批判が寄せられた。中西は橘の人生の方向性を決定する原因を「おもに橘の家庭環境における性格形成に求めるだけでは弱すぎる。とりわけ橘の思想の中で大きなウェイトを占めていたのが勤労農民大衆に対する関心であったことを考えれば、このことを説明する渡航動機の内発的契機としてはあまりにも弱いといわざるをえない。このことから渡航動機を、単に「豪傑病」だけで説明するには無理があるのではないか、という疑問が生じてくる⁽¹²⁾」と述べた。つまり中西は、ある歴史人物の思想を解明するに、その人物の性格よりも、時代背景と彼が経験した事件を手がかりとして分析したほうがよいのではないかと主張したのである。そして、中西は日露戦争に至る日本国内の状況、日露戦争に対する青年の反応と橘の身に生じた事件を分析することで、橘の思想形成の原因を究明しようとしたのであった。

こうした考えに基づき、中西はまず、日露戦争時の国内状況に関する分析を行った。中西によれば、「日露戦争の勝利は日本の帝国主義化を確固なものにしたが、同時に「平民日本ノ主人公トナル機会」を与えるものであった。つまり日清戦争後わずか十年で強国ロシアに対抗できる軍備をもつ帝国主義国家となるためには、国民大衆のエネルギーを十分に且つ能動的な形で引き出すことなしには不可能であった⁽¹³⁾」のである。民衆の力の台頭を象徴する事件としては、1905年9月5日にポーツマス条約反対のために起きた日比谷暴動がよく取り上げられる。そういった事件が、青年たちに多大な影響を与えたのである。「こ

のように戦争によって示された民衆のエネルギーの強大さ、講和条約反対運動に端を發した権利意識の高揚は、人々に、とりわけ青年たちに民衆の意識の動向をぬきにしては何事も語れない新たな時代の到来を感じさせるに十分であったといえよう⁽¹⁴⁾と中西は述べている。

次に日露戦争に対する青年の反応に関して、中西は20世紀初頭の日本資本主義国家体制の合理化、機能化という背景を提示した。その背景のもとで、青年たちは、資本主義社会において立身出世するか、それとも社会の公平と正義を追い求めるかという選択肢に直面せざるを得なかった。それゆえ、日露戦争の時の青年たちは、簡単にナショナリズムに賛成し得ず、また国家の栄光が個人の栄光に結びつくかどうかと懷疑しながら、日本社会の行く末に「冷淡」と「煩悶」を抱えたのである。中西は、橘樸もそういう当時の青年の意識を共有していたのではないか、と考えたのである。

中西が指摘した三点目は、橘樸の父・量の教科書疑獄事件である。所謂「教科書疑獄事件」とは、1902年に発覚した、教科書採用をめぐる教育業界の贈収賄事件である。この汚職事件は、当時の民衆の政府に関するイメージに大きな打撃を与えた。実際は、橘量は無実であったが、その事件に巻き込まれ、罰金を課せられた。中西によれば、「橘の「国家の栄光」に対する幻想を父の事件がかなりの程度破壊したであろうことは想像しかたくない⁽¹⁵⁾」、「国家への幻想が破れるにしたがい、橘の国家・社会に対する現実認識は増していく（ママ…趙）⁽¹⁶⁾」、そして「橘の生涯を通じていえる民衆に対する関心と、また思考方法にみられる観念的方法を排除する現実主義、神秘的なものを解明しなければ済まない合理主義といった特徴は、大いにこの青年期の体験とそれにもとづく精神形成によっているといえる⁽¹⁷⁾」と述べている。

こうして、中西は当時の時代背景を手がかりする緻密な分析にもとづく橘観を打ち出した。中西の見方に対して山本は、彼が1981年に編輯した『甦る橘樸』の中で以下のように応答している。山本はある程度において橘量事件が与えた影響を認めたのであるが、しかしこの事件によって、橘ははじめて父及び家庭からの自立、独立を獲得したというパーソナルな側面も否認できず、この事件が橘に与えた影響はむしろ両面的なものであろう、と主張している。つまり「この「独立」の背景として、父親の量がいわゆる「教科書疑獄事件」（明治三五年十二月）に連座し、結局、明治三八年四月から清国浙江省鎮江の八旗中学堂教習となって赴任するという事態が生じたことによって、「独立」の決意をしたという事情もあった⁽¹⁸⁾」ということである。さらに山本は、幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三、石川三郎郎などを中心とする、日露戦争反対を掲げ、社会主義思想を唱えた『平民新聞』（1903-1905）の日本社会に対する影響力を提示し、この新聞及びそれをめぐる各地に成立した読者会、特に北海道の社会主義研究会が、橘樸のジャーナリスト志向及び社会主義傾向に対して多大な影響を持ったであろうと推測している。彼は次の如く述べている。

橋は、父の教科書事件の判決に対する政府のごまかしを見てから国家権力に対する不信の念をいだいたと推測できるが、週刊『平民新聞』により、筆一本の力がいかに強力なものであるかを感得したにちがいない。彼の中学時代と五高時代の言動を知る者にとっては、持ち前の「豪傑病」と「反逆癖」とさらに「懷疑癖又は批判癖」とは、この時期になると一体に融合し、言論界に雄飛する夢をかき立てたといっても誤りではないであろう。(19)

札幌時代の土岐（孝太郎、『北海タイムス』記者、橋樑の先輩、社会主義者——筆者注）が橋を誘って平民新聞読者会や社会主義研究会につれていき、橋はそこで大いに社会問題に興味をもつに至った、と推測しても誤りではないと思う。(20)

また山本は、橋の中国渡航の動機について 1905 年頃の橋が中国革命に抱いた関心の中に見出そうとした。山本はこう述べている、「橋の中国大陸渡航の動機についてふれるべきであるが、今のところ確たる資料的根拠がない。ただ中国の革命に対する関心が、すでに札幌時代にあったことを指摘できるのみである」、「一九〇五年（明治三八）七月、東京で中国の反清朝の革命家、孫文、黄興、宋教仁等とその一党が中国革命同盟会を結成したが、この報道を札幌で聞いた橋はたちまち孫文ファンとなった、と後年述懐している(21)」。

つまり、山本は中西の「時代背景説」を参考にした上で、『平民新聞』及びそれをめぐる社会主義団体の興起、中国同盟会の形成などの事件も合わせて、また元よりの自身が説いた「豪傑病説」も含め、一種の「総合説」を打ち出したのである。

筆者は山本と中西の意見を総合し、青少年橋樑の思想の性格を次のようにまとめてみたい。例えば、外部の制度や規則に沿わず、自分の感覚に従うこと（校則違反、飲酒）、キリスト教などの外来の理論を軽視する一方、自分の心の判断を重視すること（陽明学的志向を好む）等の特徴が挙げられる。こうして橋の思想において、一切の価値を超えるものが浮かび上がって来る。それを筆者は「生命」と呼ぶ。このような傾向からすると、1886 年に発足し、1890 年の帝国憲法と「教育勅語」を象徴として確立し、1905 年の日露戦争期まで徐々に強化していった近代資本主義国家体制は、橋にとって、当然「生命」を支配、制限、圧迫するものにほかならなかった。そう考えると、彼がこういう状況を脱出し、九州から東京、北海道さらに中国大陸に行ったことは、自分の生命力を不断に解放する行為であったと見なしてもよいと思われる(22)。

2. 明治から大正への転換期と橋樑

ある思想家を研究する場合、その時代背景と思想の基本的な展開の仕方を究明しないまま、その人物を把握、ないし思想史において彼を定位することは不可能であろう。橋樑も同様である。明治から大正への転換期で青春を送った橋を研究するため、その「転換期」において社会思潮の変化及びそれが青年たちに与えた影響を明らかにすることが必要であ

る。以下では、この「転換期」について論じてみたい。

(1) 「個」の覚醒

大正とはどんな時代なのか。船山信一は彼の『大正哲学史研究』において、明治または昭和の哲学と比較しながら、大正の哲学を次のように定義している。

明治哲学は、概括的にいえば、または少なくともその主流についていえば、政治・国家と密着し、政治・国家に従属していた。昭和哲学においても政治・社会との関係が大きな問題であった。ところが大正哲学は、少なくともその主流であるアカデミー哲学は、政治・社会から「超越」していた。……明治は国家の時代、昭和は社会の時代であるとすれば、大正は個人・自我の時代である。⁽²³⁾

さらに彼は、明治哲学が「観念論は直ちに現実主義であったのである」のに対し、「大正哲学においては主観は独自の内容をもち客観的なもの実在的なものに還元されない。現実主義に対立する理想主義もここにはじめて成立する⁽²⁴⁾」と述べている。つまり個人の自我の時代であると同時に、内面的個性性、観念論及び理想主義の真の成立がまさに大正時代において為されたのであった。

「観念即実在」、「現象即実在」といった思考法は、明治時代における外部と内部との緊密性あるいは時代の緊迫性を示している。緊迫性について言えば、明治政府の国策の基本たる「富国強兵」のスローガンが示すように、当時の時代の主題は「日本民族対欧米列強」という対立の図式の中にある国家・民族・政治にかかわる主題であった。さらに、飯田泰三の研究によれば、以下の二点の変化が起きた。

第一に、1894年の日清戦争、1904年の日露戦争を経て、日本は植民地化の危機を脱しただけでなく、強国の一員として帝国主義列強クラブに加入したのである。それとともに、国家・民族・政治のような硬い主題が思想界では後退し、その代りに社会・民衆・生命（生存、人生）といった概念が新しい時代の主題として浮び上がった。

第二に、国家体制の強化、資本主義及びその理論の発展、共同体の解体と競争社会の形成、市民社会の公共性と原理がなお確立されなかったことなどの原因によって、国家に対する個人の疎外感が一層強まり、個人主義の要素がそこから析出され、社会問題や自我問題に対する関心が、当時の知識人の主要な時代課題になった。⁽²⁵⁾

こうして、ナショナルな危機意識の解除とともに、明治末期から大正にかけての知識人たちは、その目線を「レーベン」（生命、生存、生活）という、より根本的、普遍的な領域に向けていったのである。それは具体的な主張や主義でなく、ある種の傾向性を持つものであるから、筆者は既成の概念を借りて、それを「大正生命主義」と呼びたい²⁶。さらに、「レーベン」に向う傾向は二つに分かれ、一つは生活と人生、もう一つは生物と生存など

の注目となった。以下ではさらに飯田泰三の研究を踏まえながら、その分化について論説を展開する。

(2) 知識人の分化：「ある」と「べき」

2017年に出版された飯田泰三の著作『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』は、「大正生命主義」の基本構造を解明するための、一つの新しい視角を提供している。飯田によれば、当時の知識人の基本的な動向は三つある。つまり、「第一に「自我」の“内面的主体化”への志向であり、第二に「社会」の“実証的対象化”への志向であり、第三に自我と共同体の“ロマン的融合・合一化”への志向である⁽²⁷⁾」。前の両者は、大正知識人における基本的な分化を示している。飯田の言葉を借りると、前者は「主体の」レーベンであり、後者は「環境に向かったの」レーベンである。明治期においては、両者の関係は相互促進的で、幸福な関係であった。それについて、飯田は次のように説明している。

“明治ナショナリズム”においては、個人主体とその環境との関係は、概して言えばその“乖離”の痛切な自覚を要せず、相互促進性をもって互に他を予定しているような、「幸福な」関係にあったと言える。国家-職業集団-共同体-家という生活空間、環境に向かったの適応と、個人的アチーブメントとが、さらには、普遍的な価値・規範によるその意義付けや方向付けとが、乖離することなく、相互補強しあう関係にあったところに、「明治国家」の飛躍的發展の一つの原動力があった。⁽²⁸⁾

簡単に言えば、明治期の人々にとって、「国家のため」は即ち「個人のため」であった。国家が自明の価値をもつというだけではなく、個人の価値を実現するためにも、国家という対象が必要であった。しかしこういう関係が明治末期からどんどん崩れていった。前項で提起したように、「国家」に対する「個人」の疎外感が強まっていったため、レーベンに対する姿勢も二つに分かれてしまったのである。このことについて、飯田は次の如く述べている。

したがって、そこに始まるレーベンの意識化も、その「主体の」側面に即してのそれと、「環境に向かったの」側面に即してのそれが、互に他を見失った形で進行することになる。主体と環境との“乖離”の自覚そのものさえ欠いた形で——したがって、主体性と対象性の両側面の実践的統一体としてのレーベン本来の性格さえ見失った形で——、それぞれの意識化の方向が自己運動を始める。すなわち、一方、「主体における」対自化は、「環境に向かう」営みたる面を置き去りにした「内面的」意識化となり、他方、「環境における」対象化は、「主体の」営みたる面を置き去りにした

「実証的」認識となる。個体における「内面化」は、実践的「主体性」を見失い、環境認識における「対象化」は、「実践性」——実践的主体意識との緊張関係において成立するところの——を見失うのである。⁽²⁹⁾

明治末期から大正にかけての知識人の外部と内部に関する感覚は、明治前期のように、国家と個人あるいは外部と内部が生産的緊張感を持ち、相互促進の関係にあったのではなく、いわば断裂したと言える。彼らは、自我は外部の実践を通さずとも自我の内部で確立し得ると考えるようになったため、外部は彼らにとってただの「対象」になり、実証的に研究し得るものになった。

こうして、国家・民族・政治の主題から離脱した後の大正生命主義は、同じ生命（レーベン）をめぐって二種類に分かれ、さらに知識人の系譜も二つに分化したのである。一部分の知識人は、「人生」、「人格」を主題として、新カント主義、新理想主義の旗を掲げ、「人生の価値はどこにあるか」、「理想の社会はどのような社会なのか」という問題を追求した。たとえば阿部次郎、土田杏村などがそうである。それに対し、他の一部の知識人は、「生物」、「生存」を主題として、外部社会に対する実証的研究を行っていった。彼らは、明治末期の社会主義者や長谷川如是閑によって代表される。この二種類の知識人の基本的な傾向から見ると、前者は物事のある「べき」状態を構想する人々であるのに対し、後者は物事の「ある」状態を研究する人々だと言えるであろう。知識人の分化に加え、政治から文化の領域にかけて「中間層」の台頭、「中間化」の傾向を見れば、大正という時代はやはり過渡的、中間的であり、いわば未完成の時代だったことが分かるのである。

(3) 中間性と未完成性

竹山護夫はその著作で、大正の特徴を次の如くまとめた。「この時代を最も時代特徴的な形になった担い手は「中等社会」であり、なかんずく新旧の中間層の人々であった⁽³⁰⁾」。ここでいういわゆる「中等社会」あるいは「中間層」は、主に小官吏、小会社員、巡査、教員、小地主、小商人、小市民、小農民を指す。

まず文化領域に関して、竹山は次のように述べる。「芸術と娯楽の間に位置する中間文化が「趣味」という名で普及を企てられ、建築や服装には「和洋折衷」が風俗化した（南博「文明から文化へ」）。後に田辺元の間接者の哲学として集約される哲学者の営みから、総合誌と娯楽雑誌の間隙を目標とした中間誌としての『文芸春秋』の発行とその成功（井ヶ田良治「知識人とプロレタリア文化運動」）に至るまで、文化領域は「中間」を意識した発想で占められた⁽³¹⁾」と説明している。

次に広義の政治的領域について、竹山は次の如く述べている。「新中間層を基盤にして成立した民本主義は大正リベラリズムの政治的表現であり、「大正デモクラシー」の代表的実質であったが、それは、藩閥官僚勢力による国家の指導に対抗して「一般民衆」の意向

に基づく「憲政」を主張する一方、社会革命を目標とするボルシェヴィズムに対しては同じく立憲政治を当為とすることによって反対する中間的な「改造」の思想であった⁽³²⁾と。

そして狭義の政治上の状況に関して、竹山は岡義武の『転換期の大正』を引用して以下のように説明した。すなわち「大正初頭のいわゆる「大正政変」⁽³³⁾と「シーメンス事件」⁽³⁴⁾は、従来政権をタライ廻しにして来た桂太郎と西園寺公望を刺し違いにし、陸軍の発言力を低下させ、薩派の巨頭山本権兵衛を挂冠させて、海軍の発言力を封じた。……諸政治勢力は均衡し、この中で例外として上昇を続けていったん「政権の中心点」を構成した政友会が原敬の死によって後退した後では、この状態を象徴するように「中間内閣の季節」（岡義武『転換期の大正』）が続く⁽³⁵⁾」、ということである。

こうして、新旧中間層の台頭、藩閥政治の弱化などを原因として、過去の同一の国家目標に縛られたさまざまな思潮が一斉に噴出したにもかかわらず、再統合されなかったため、大正はその「中間性」及び「未完成性」を主な特徴として歴史に現れてきたと言える。竹山はその意味について、次のように説明している。

政治指導から生活文化に至るまで「中間」という言葉で象徴することができる大正時代は、しかしながら、中間を制度化し、恒常化することはできなかった。時代の特徴的な担い手である都市の新旧中間層と農村の旧中間層は、もともと様々な方向へ分化していく可能性を抱いていたが、これまたこの時代の特徴である好況と不況のあいだで揺り動かされ、それを具体化していった。「民衆」は大衆に、民本主義は社会主義に、中間内閣は政党内閣へと変わった。そして、そのように中間自体が定着することに失敗したからこそ、われわれは後から顧みてそれを中間であり、過渡期と評価し、逆説的ながら大正にとっての「時代の同一性」を見い出すのである。⁽³⁶⁾

以上で述べたように、大正はまず政治的主題から離脱した個体の内面的な確立の時代、「ある」に関する研究と「べき」に対する構想が生命思想の両面として併存する時代であり、またさまざまな思想が噴出する、中間的で未完成の時代であったと言える。これらの特徴が、1881年に生まれ、日露戦争前後に青年期を送った橘樸の思想の鑄型を形成したのである。

(4) 橘樸——時代の子

1881年に生まれ、明治末期から大正初期にかけて青年期を送った橘樸は、当時の時代風潮に深く影響を受けた。その青少年時代の履歴を見ると、やはり橘は典型的な時代の子であったと考えられる。ここで簡単に橘の青少年時代の経験を参照しながら、彼の思想の推移を分析する。

1895年に日清戦争に勝利した日本は中国から植民地と多額の賠償金を獲得した。これは

日本にとって、外部危機の解除の第一歩であると同時に、植民地帝国の始まりでもあったが、同時に前の時代のナショナルなものへの志向の稀薄化もそこから始まった。

1897年、岡崎の愛知二中の三年生に進級した16歳の橋樸は新任の教諭兼舎監長であるKという陽明学者と出会い、彼の豪傑のような性格に魅了され、英雄豪傑になりたいという観念が生まれた。当時の橋において、「英雄豪傑」の対象はインドにあり、具体的にいえば、彼は「印度大統領」になりたかったのである。その理由について、橋はその自伝『手』で「ワシントンがが亜米利加で建てた勲業を、私は印度で繰返してやろう⁽³⁷⁾」と考えていたと回想している。その時の橋を当惑させた問題は、天皇の問題、つまり「大統領になることはよいが、然し大統領は国の元首であるから、天皇陛下との縁が切れて了いはしないかと云う心配⁽³⁸⁾」であった。ここから、愛知二中時代の橋の関心は、まさに国家・政治そのものに向かっていたことがわかり、その述懐の中には、国家主義的な思考が読み取れる。

その背景にはどのようなものがあったか。初代文部大臣森有礼は、1885年から国家主義的な教育改革に着手し始め、1889年1月28日に発布した文相説示「学政の目的」で、「学政の目的も亦専ら国家の爲と云うことに帰せざるべからず。例へば、帝国大学に於て教務を掌る學術の爲と国家の爲とにかんすることあらば、国家のことを最先にし、最重んぜざるべからざるが如し。夫れ然り、諸学校を通し、学政上に於ては、生徒其人の爲にするに非ずして、国家の爲にすることを終始記憶せざるべからず⁽³⁹⁾」と、教育の目的が専ら国家にあることを規定していた。それに続いて、明治国家は、1890年10月30日に発布した「教育ニ関スル勅語」の冒頭において「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス⁽⁴⁰⁾」と示し、国家主義の教育趣旨を天皇の権威を借りて定着させたのである。

このような教育環境が少年の橋に深く影響を及ぼしたのは当然であったが、それにもかかわらず、1894—95年の戦争が日本のナショナルな志向の頂点である一方、前述したように、その後、そうした考え方から転換が生じ始めた。この変化も橋個人において反映されていた。自伝において橋は「印度大統領の空想が全く私の頭から影を潜めたのは十八歳の春頃（1899年、筆者注）であり、人生問題に対する懐疑の始まったのも亦その頃であった⁽⁴¹⁾」と回想している。彼の自己評価としての「第二に反逆癖、第三に懐疑又は批判癖⁽⁴²⁾」が彼を支配し始めたのも、ちょうどその頃であった。翌年の卒業の直前に、橋はリーダーとして、高山中学校で同盟休校運動を引き起したため、放校になり、東京に行くことを決めるに至った。学校の制度に違反して転校せざるを得なかったところに、青少年期の橋樸の特徴が表れている。それは当然生まれつきの性格によってであるが、1905年に『北海タイムス』の採用試験のために書いた小説が「徴兵忌避の思想を鼓吹」しているのではないかと問われた時、橋は「嫌なものは嫌だし、忌避は偽はらざる自然の人情に過ぎない⁽⁴³⁾」と答えている。ここに、彼の中で国家主義的側面が衰弱しつつあることを窺えるのである。

橘の制度化あるいは体系化したものに対する反感と、生命の自然及び解放に対する追求などの傾向の原点は、まさに彼の学校での「暴行」に示されているのではないと思われる。

当時の日本青年たちの思想状態を理解するために、ここで夏目漱石の小説『三四郎』を取り上げる。1908年に出版されたこの小説は、九州から来た青年三四郎の東京見聞を内容とし、西洋の個人主義を批判する意味合いを持っている。その中で、三四郎に対する「広田先生」の発言は、小説の趣旨であるとみなしてもいい。広田先生は次のように言っている。

近ごろの青年は我々時代の青年と違って自我の意識が強すぎていけない。我々の書生をしているころには、する事なす事一として他を離れたことはなかった。すべてが、君とか、親とか、国とか、社会とか、みんな他本位であった。それを一口にいうと教育を受けるものがことごとく偽善家であった。その偽善が社会の変化で、とうとう張り通せなくなった結果、漸々自己本位を思想行為の上に輸入すると、今度は我意識が非常に発展しすぎてしまった。昔の偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある。

44

「露悪家」は、漱石が創造した言葉であり、自らの「悪」を露にする人を指している。以上のフレーズの中に、青年の個人主義態度に対する漱石の反感が読み取れるだろう。反感は反感だが、この小説は都市のさまざまな社会問題に直面している青年たちの精神的苦悶をよく反映していたと言える⁴⁵。日露戦争前後、日本社会にこのような青年が多く現われてきた。徳富蘇峰は彼らを「煩悶青年」と呼び、次のように彼等の様子を描写している、曰く、「社会を一掃しつつある成功熱に反抗し、若しくは其熱に取り残され、其他種々の理由よりして、一世を不可とし、而して此の不可なる世を、如何に渡る可きかに当惑する、所謂煩悶青年の一群⁽⁴⁶⁾」ということである。つまり、競争社会で立身出世するか、それとも社会の正義を追求するかという問題が、当時の青年たちの目の前に立ちはだかり、橘もそういう問題に直面せざるを得なかった。

戦場で日本軍の優勢が明らかになっていった頃、ある軍事通の意見による、もし日本が勝ったら「少なくとも樺太の割譲、これを足掛りとするニコラエウスク及び浦鹽の経営、更に一步を進めて黒龍江畔では哈爾濱から奉天、こうした広大もない新天地が我々の前に開かれる⁽⁴⁷⁾」という予測を聞いた橘は興奮して、「好矣と云うので、私は一夜の内に北海道行を決した。札幌は西比利豪傑の中野天門と云う男がその活動の根拠地とし、彼の作った「北海タイムス」と云う言論機関があると云うので私はその記者となった⁽⁴⁸⁾」と述べている。ここから見ると、国家の境界を踏みこえた、地域としての樺太、シベリアないし中国東北部のすべてが、橘にとって、個性が縛られる「煩悶」の状態から脱出し、生命力を解放すべき「新天地」であった。国家に対する懐疑、社会に対する「煩悶」など、当時の青

年たちの一般的な特徴は、橘樸にも当てはめられる。橘を時代の子と呼びうるゆえんである。

3. 療養経験と女性観の革命

(1) 療養経験

①「個性」に対する自覚

前節の最後で橘樸が時代の子だと述べたのであるが、橘の思想家としての独自性は、また元々の彼の個性の強さにも由来していたと言える。「個性」は橘の思想の中の最も重要なものであった。しかし彼が「個性」そのものを自覚し始めたのは、療養経験の時であった。この療養経験とは、1918年9月に橘が従軍記者として日本軍とともにシベリアに赴いたとき、チタからの帰途においてウォッカを飲み過ぎて脳溢血で倒れ、その後、マンチュリー⁽⁴⁹⁾の病院でおよそ三か月間の療養生活を送ったことを指す。それは橘にとって、人生の危機であると同時に、彼の思想の形成を促した契機でもあった。

医者にまず七年は大丈夫だろうと言われたものの、右半身不随になった橘は余生を五年と仮定し、これから何をなすべきかについて考えた。その結果一時期、一種の「自己否定」、「享楽主義に近い独善主義」の態度をとったのである。しかし、この生き方は順調に進まなかった。当時の心境に関して、橘は次の如く述べている。

健康な時代には厩大複雑にして処女地の如く残された支那社会を対象とした学究生活に私の全生活興味を没頭させていたのであるが、廢残の身となつては斯様な大きなアンビションは綺麗に捨てて了う外ないとあきらめたのである。然し私の享楽主義は如何なる意味に於ても酬いられたと云われぬ。これには勿論物質的理由もつき纏ったが、然しそれ以上に精神的理由、換言すれば私自身の個性が私の計画を裏切つて、不可抗的に私を昔の学究生活に引もどした。気がついて見ると成程この方が自然であり、形式的には兎に角、実質的には享楽主義の本旨にかなつて居たと云うことが出来る。……学究生活なるみすぼらしい生活様式を義務又は貢献という意味に解釈すると、その生活は本人にとって一つの重荷となる。然し独善主義と云う新しい立場からこれを眺めると学究生活でも自ら好んでこれを選ぶとすれば、主観的には樂の一種、換言すれば享楽主義的生活の一方便となり得る。この数年来の私の生活態度はかかる人生観の上に立ち、稀に物質的困難の場合を除いては何等の不安、何等の不満足を感じない。⁽⁵⁰⁾ (下線は筆者による)

この回想は、橘の個性や自然に対する自覚を示している。注意すべきは、彼の場合の自然は、ただ自由放任のみではなく、むしろ一種の「個性」に適合する状態を指している。橘によると、その状態こそ、楽しみであり、真実である。外部の強制や義務を負うことな

く、自分の「個性」に適合する方式で生きることが、橘が考えていた理想状態である。青年期の橘はそういうやり方で生きていたが、それはあくまで個人の傾向性に過ぎなかった。「個性」そのものを自覚し、それを人生観ないし世界観のレベルにまで昇華し始めたのは、今回の療養経験からであったと考えられる。

②生命の内面性と普遍性

橘が療養経験から得たもう一つのものは、生命の感受性あるいは内面性と普遍性に対する発見であった。1918年、病床に伏した橘の面倒を見ていたのはお喜久という女性であった。彼女との付き合いによって、橘の女性観に革命的な変化が起こった。1923年に、五年間の死期意識が過ぎ去った後、橘はお喜久との付き合いを回想しながら、「垣間見の記」という小説風な文章を書いて『京津日日新聞』に連載していた。

これまでの橘は、女性を人間として扱わない、偏った女性観の持ち主であった。それは恐らく彼自身の偏った性経験のためである。彼が異性に触れ始めたのは、日露戦争後に北海道で記者として勤めていた頃であった。彼はある日、酒の勢いで、同僚の一人とともに札幌の『薄野』という遊郭に遊びに行った。その後も、恋愛を経ずに同じ事を何回も繰り返した。橘は遊郭の女性だけとの関係の中で、女性に対する偏見を築き上げていったのである。彼は女が男と同じように人格をもつものとは考えなかった。またもう一つの原因として、理智に長けていると自負していた橘は、女性の感受性を無視し、女性を無知の動物と見做したことである。彼の場合においては、理性は圧倒的に感受性を優越している。そのような生き方から、橘は女性だけではなく、芸術にも無縁である。小説の中で橘は自分と芸術の無縁さを述べている。

Tは天草生れだと云ふ老船頭を雇って朝晩沖にこぎ出した。船頭の唱ふ追分けが羨ましく思はれたので根気よくその稽古を続けた。船頭は時々呆れた顔をして彼を眺めた。自身も進歩の見えないのを心細く思って居ると一週間に老船頭からきっぱりと伝授を断はられた。頑固で無邪気な老爺であったからTの怒は船頭に向わずに追分けに向った。追分けから凡ての「俗謡」にまで類焼し序にそれのつきものとして三味線を排斥するやうになった。⁽⁵¹⁾

Tは小説の主人公で、橘自身のことを指す。小説内の記述を事実としてそのまま信じてはいけないのであるが、心情の自叙として、それは知識や理論を得意とする一方で、芸術に無縁で感受性のない橘の性格をよく示しているのではないか。当時の橘においては、女性や芸術を軽蔑すべきもので、一顧の価値もないものであった。そのため、Kさん（お喜久）とともに興安駅までの山道を歩いていた時、Tが挑戦的な目的で、彼女に山中に住む「蛮族」について理論を大上段に振りかざした時、Kさんが怒って「ようござんす。私は

貴君をそんな方だとは知りませんでした。もうお話をすることは御免を蒙ります⁽⁵²⁾」と言うと、Tは面食らったのである。それは、理智や理論が感受性に出会った際、敗北感を抱いたことをTを借りて表現したものであった。そして、結婚について両人が相談する際にも、Kさんに「比較にならない程高い理智を持って居らつしゃる殿方が反って無智な女性にも異性を諒解する事の出来ないのはつまり殿方に「思ひやり」が足りないせいではないでせうか⁽⁵³⁾」と言われ、「この言葉は深くTの心肝に徹したやうであった⁽⁵⁴⁾」のみならず、病床にふしたTはKさんに雑誌か講談本を読んでもらっていた時、「おKさんに相当な学問のある事はこれまでも度々驚かされた程であったが可成り難しい論文をスラスラと読みこなす手際には全く敬服してしまった⁽⁵⁵⁾」のである。（下線は筆者による）

こうした経験は橘の女性観の革命を引き起こした。つまり、理智はもちろん重要なことであるが、「感情も亦人格を構成する重要材料」であり、女性たちは理智方面で男性に及ばないかもしれないが、感情方面において男性に優越していると考えようになったのである。彼の友人宿南八重は、橘とお喜久のことを回想して次のような記述を残した。

おきくさんとは、橘さんが満洲の西北端ダウリアの番小屋で倒れ、満洲里の私立病院え療養なされた三ヶ月間付き切って献身的看護に尽された千代の屋のおきくさんのことである。

私は橘さんからおきくさんについて「男子にもあれくらい人間はない」と最大級の賛辞を幾度となく聞いた……その後『京津日日新聞』に寄せられた女性観について書かれた文から、おきくさんによって橘さんの女性観が一転したのだということが解った。⁽⁵⁶⁾

このように、「病院生活の二ヶ月程の間にTはおKさんに征服されてしまったのである⁽⁵⁷⁾」という言葉が示すように、橘は性別の差異を認めながら、人格において女性を男性と同等に扱うことで、その生命の感受性あるいは内面性に対する認識も深まっていったと考えられる。こうして、Tが「昔のドグマを打破って「女性は男性と同じく人格なり」と云ふ真理を発見した」、「女にも夫々人格があるとすれば当然その個性が存在する⁽⁵⁸⁾」という認識に到達したことに見られるように、橘樸も療養経験を通して、生命の普遍性と内面性に対する認識を樹立したと考えられるのである。

(2) 女性観の革命

①大正女性運動の興起

前節で主に橘樸の個人経験を手がかりとし、彼の女性観ないし思想全体の推移を論じたのであるが、それは彼個人の独立した経験ではなく、むしろ大正時代の女性運動の興起と深く関わっている。ここで簡単にその背景をまとめてみたい。

明治時代の日本において、女性の社会的地位は非常に低かった。1898年に発布した『民法』（旧民法とも呼ばれる）には、「戸主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ称ス」（第746条）、「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル」（第788条）、「夫ハ妻ノ財産ヲ管理ス」（第801条）などの条項が設置され、女性の権利に対して厳しく制限が加えられていた。1900年に公布した『治安警察法』の第五条は、明白に女子が政事上の結社に参加してはいけないとも規定していた。

政治上だけではなく、また教育においても、良妻賢母主義⁽⁵⁹⁾が一貫していた。1895年の『高等学校規程』によれば、「高等女学校ノ学科目ハ修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操トス又随意科目トシテ教育、漢文、手芸ノ一科目若クハ数科目ヲ加ワルコトヲ得」る、となっていた。しかし20世紀初頭までには、教育制度が整備されていき、最初の女子大学生と女子博士が誕生したことに示されるように、「良妻賢母」主義とはいえ、教育はやはり否応なく女性の近代的意識を刺激し、彼女たちを社会の舞台に登場させる役割を果たしたのである。それについて、女性運動研究者である石月静恵は次の如く評価している。

多くの女学生にとって学校は、新鮮な刺激と教養を与えてくれる場であった。洋食の調理やミシンを使っの授業、衛生や栄養の話など文化的生活の知識を得たり、体操による基礎体力づくり、学校によっては富士登山に出かけたり……合唱や文学作品を読む楽しさを体得したのである。良妻賢母教育とはいえ、従順な女性の養成というよりは、自己を確立した近代的な女性を誕生させた。⁽⁶⁰⁾

経済面においては、明治末から大正にかけて資本主義が発達したため、各種の産業労働者が増大し、俸給生活者（月給制のサラリーマン）が階層として誕生するとともに、都市における専業主婦も現れてきた。主婦を対象として種々の女性雑誌が次々に登場し、女性文化が隆盛することになった。その他、商社の発達にしたがい、事務員、タイピスト、電話交換手などを含む、各種の職業婦人と呼ばれる階層も生じた。また工場で働く女工も増えていった。米田佐代子の統計によれば、「第一次大戦後、かつてない戦争景気とともに資本主義は大発展をとげ、はじめて工業生産高が農業生産高をおいこして、日本は名実ともに世界の工業国となりましたが、これに応じて工場ではたらく婦人の数も、開戦当時一九一四（大正三）年の約五三万五〇〇〇人から、戦後の一九一九（大正八）年には九一万二〇〇〇人にもふえた⁽⁶¹⁾」のである。こうして、女性たちは都市中産階級の一部及び工場労働者として、社会の各分野で働いて生きていくようになった。

大衆文化においても、女性は社会の一勢力として浮上してきた。1911年に年文芸協会主催でイプセンの「人形の家」が東京で上演された。そこに示された近代的な女性像は、知識人の男女の間で大きな反響を呼んだ。その主人公ノラを演じた松井須磨子も、新劇女優として注目されていた。また「1913年には、小林一三が宝塚唱歌隊を組織し、翌年初めての公

演が行われ、1918年には東京帝国劇場で初公演が行われた。翌1919年には宝塚音楽歌劇学校を設立し、宝塚少女歌劇団が誕生した。観客の増加に応えるため、1921年には花組と月組が組織され、1923年には華やかなレビューをみせることになり、若い女性たちの夢とあこがれの的になった⁽⁶²⁾。こうして大衆文化における近代的な女性像が生まれ、影響力を拡大していったのである。

思想界における女性問題に関する議論もその頃から盛んになった。注目すべきは、それがはじめから女性自身によってなされた、ということである。例えば、1914年から1916年にかけて雑誌『青鞥』で行われた貞操論争、墮胎論争、1918年から1919年にかけて、当時の女性運動の各派の代表人物である、与謝野晶子、平塚らいてう、山田わか、山川菊栄らが母性保護をめぐる展開した論争などである。女性運動の努力の結果として、1922年3月18日に衆議院、25日に貴族院が『治安警察法』第五条の修正案を可決し、最終的に女性の集会、結社の参加権を承認したのである。

雑誌『青鞥』創刊号で、与謝野晶子が「山の動く日来る⁽⁶³⁾」と、そして平塚らいてうが「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった⁽⁶⁴⁾」と宣言したように、大正時代は確かに女性の自覚の時代であったと言える。教育の整備、経済的自立などによって、女性たちはこれまでにはなかった姿で社会に進出し得た。ジャーナリストとしての橋樑が、当時の女性に関する論説に触れなかったはずがない。橋の終生の女性の友人である宿南八重が彼女の姪の読書について橋に問うと、橋は「小説を読ませるがいいだろう。併しそれは教育の材料だから選択が必要だ。雑誌は山田わか女史のもの、その他与謝野晶子の著書などもいいだろう⁽⁶⁵⁾」と答えたという。このように、橋樑の女性観における革命は、当時の女性運動の進展と深く関わったものであり、独立した偶然の出来事ではなかったと理解できる。

②女性と社会改造

大正女性運動の興起を背景としつつ療養経験によって、橋樑は生命の「個性」、「内面性」及び「普遍性」に対する自覚を得て、その人生観において大きな革命を引き起こしたのである。それだけでなく、橋は社会改造における女性の役割について、認識を一層深めていった。

まず先天的性質において、橋は男女の差異について、「男の態度は感情の満足を味う外に多少とも理智を働かせることの快感を要求する傾向がある。女はこれと反対に動もすれば感情の満身に没頭して知らず識らず理智の活動を閉塞させる傾向がある⁽⁶⁶⁾」と認識した（下線は筆者による）。したがって、両性は社会活動におけるそれぞれに就くべき職位も異なる。例えば病院で就職することについて、橋は次のように述べている。

私は病院にも女性の力をモット迎え入るべきだと思う。抑々「医」には二つの部門

がある。其の第一には科学としての医である。第二はそれの応用としての医である。男女の特色を大ザッパに区別すると男性は理智に長け女性は感情に強い。男性は女性と較べて一帯に知識欲が旺盛であり、細い専門的研究に深入りすることに興味を持ちたがる。女性はこれと反対に感情に刺激せられて行動し思惟することを其特長とする。又両性の理智を比較するに男のは深く狭く突き進むに長じ女性のは浅く広く行き互るところに長所がある。これ等の性情から考えて見ると男性は学的の医たるに適し女性は応用の医たるに適するようである。(下線は筆者による)⁽⁶⁷⁾

それだけでなく、社会救助、孤児看護などの仕事についても、「相互扶助又はソリタリイの情操を豊富にもって居る女性の手に綺麗に渡してしまうべき⁽⁶⁸⁾」だと橘は述べた。

次に、女性観の革命から、橘は資本主義社会の改造における女性の役割を発見した。彼は資本主義世界を「男のもの」とし、その世界で女性や労働者が被圧迫者となったと認識した⁽⁶⁹⁾。彼から見れば、資本主義にせよ、社会主義にせよ、すべて「生産経済学」に基づいたものでしかなかった。橘にすれば「生産経済学」とは、「人類の経済活動の価値は生産に尽き其他は従属的価値しかもたないとする迷信⁽⁷⁰⁾」である。生産と相対するのは、消費である。橘によると消費とは、「男のもの」と「理智」に相対して「感情の価値の尊敬せられる⁽⁷¹⁾」活動であり、「生産経済学」に対する有力な修正となりうるものであった。しかも「物質的には消費精神的には感情のはたらきが重要視せられ前者の管理は男性よりも女性の性能により多く恰適し後者も亦男性よりも（少くも現代では）女性の方が純粹且豊富な持ち主である⁽⁷²⁾」という判断から出発して、橘は女性が運営者とする「消費組合」を重要視するようになった。そして彼は女性たちには「人間の経済生活のうちで消費が一番大切であ⁽⁷³⁾」ると、男性たちには「亭主が月末に役所から受取る状袋はソックリ其ままにして女房にわたさなくてはいけない⁽⁷⁴⁾」と呼びかけている。

そのほか、資本主義社会に対する改造を唱えていた橘は、「私は決して女性を煽動して赤旗を振らせるようとするのではない⁽⁷⁵⁾」と述べたように、社会主義的女性運動と一線を引いた。彼によれば、女性の政治に干渉する範囲は「市区町村の自治体」に限られるべきであった。なぜなら、「それらは第一に範囲（地理的にも権能的にも）がせまく第二に家庭生活とより緊密な関係をもち且第三に私の強調しようとする女性中心の消費組合の勢力を政治の範囲内に持ち込み易い⁽⁷⁶⁾」ためである。地方自治体を通じて女性たちが果すべき役割は、「村の政治に人間味を注入すること」と「村の生活の芸術化を計画する」ことである⁽⁷⁷⁾。つまり橘が主張した女性運動は、一種の改良主義的なものであった。資本主義そのものに対して、橘は基本的に改良主義的態度を持っていたと考えられる。

以上、女性及び社会改造における女性の役割に関する橘樸の観点を整理した。橘が主張した女性運動は、資本主義を批判する一方、社会主義に対しても一定の距離を置くべきこと、また市区町村の自治体などのような社会の細部に着手して社会改造を行うべきことで

あったと言える。後の議論からわかるように、こうした女性運動に対する主張は、橘の社会改造という課題における一貫した姿勢であった。ここで問うべきは、大正女性運動の背景のもと、療養経験によって得られた橘の「生命」に関する見方が、如何に彼の社会改造観に繋がったのか、という問題である。それは辛亥革命とその認識に関わる問題であり、次節で述べてみたい。

4. 辛亥革命の挫折と生命思想の展開

第二、第三節において、筆者は大正生命主義及び療養経験が橘樸の思想の形成に重要な影響を与えたことを述べた。しかしそれらの影響のもとで形成された思想は、あくまでも個人のものでしかなかった。さらに、中国渡航までの橘の思想は、臆気ながら一定の傾向を持っていたが、個体の感覚、思想の傾向もまだ混沌の段階に止っていたと言えよう。彼のこの傾向がさまざまな個人的経験を経て、また具体的な政治革命、社会改造等の問題と結びつき、ある種の体系（その体系にはかえって反体系の性格が内包される、これは後述することにしよう）を持つようになったのは、おそらく辛亥革命以降のことであると推察される。辛亥革命が橘に与えた影響は、従来の研究においてあまり重要視されてこなかった。筆者は本論文でその欠落を補い、橘の生命思想の展開を具体的に論じてみたい。

(1) 辛亥革命の挫折：生命思想と社会改造の結合

1905年9月、孫文を中心とした中国同盟会が東京で成立した。当時『北海タイムス』に勤めていた橘は孫文ファンとなったのである⁽⁷⁸⁾。辛亥革命は橘にとって、生涯の志向性を決定する大事件であった⁽⁷⁹⁾。1911年10月の武昌蜂起をはじめとして、中国の南部各省が続々と清朝政府から独立すると宣言し、孫文を指導者とする中国同盟会の名義のもとである種の革命聯盟を結成し、北部の清朝の実力者である袁世凱と対峙していた。双方の妥協によって和議が達成され、清朝の末帝溥儀が1912年2月12日に退位の詔書を発布し、中国を2132年間支配した皇帝制度に終止符が打たれたのである。

当時の橘樸の活動について、『京津日日新聞』の「橘樸略歴」によると、1911年に革命が勃発した時、大連の日本紙『遼東新報』に勤めていた「橘は「江南」のペンネームで盛んに執筆を行う。革命後橘は初めて北京を訪れ、段祺瑞にインタビューするなど新聞記者としての活動を活発化する⁽⁸⁰⁾」。この略歴を見ると、橘が辛亥革命に対して多大な関心を持っていたことがわかる。なぜ橘は辛亥革命に対してこれほどの関心を持ったのか。『遼東新報』の記事が現在まで発見されていないので、その解明は難しい。しかし、彼の経歴と思想、性格を合わせて考えると、橘が九州、東京そして日本を離れて中国に渡るのは、徐々に強化されていく日本の国家体制の支配から逃れ、自分の生命力を発揮できる別の新天地を探そうとしたからと推測できる。しかも辛亥革命は、清朝の皇帝制度と官僚制度を打ち砕き、共和制を建設することを目標とするなど、当時の日本人の興味を深く喚起する

ものであった。日本政府の清王朝維持方針とは反対に、世論の大勢は辛亥革命に同情的であっただけでなく、宮崎滔天、犬養毅、内田良平、北一輝、萱野長知などのように直接に革命を支援した人も多く存在していた。彼らはさまざまな角度から辛亥革命を支援した一方、日本の現状には不満を持ち、変革が必要だと考えたのであり、こういった発想は共通していたのであろう。その中で橘も、生命力を圧迫しつつある国家に嫌気が差し、自分の希望を他国の革命に託したのではないかと考えられる。ただし、孫文ファンであったこと、また段祺瑞にインタビューするなどのことが示しているように、当時の橘は革命の主力がエリートか民衆かといった問題を考える段階にはまだ至っていなかった。彼が北京に乗り込んだ時、「記者は其生活の基調を支那研究に置き、支那研究の最も入り易く且つ最も興味深い題目はその政治現象に外ならぬと信じこんでゐた⁽⁸¹⁾」といった回想からは、当時の橘の関心は主に政治家の動向に向っていたことが読み取れる。

その関心を変化させたのは、辛亥革命のその後の挫折であった。辛亥革命は新しい国家を作り出せなかったのみならず、政局の混乱をもたらしたのである。特に1916年袁世凱の死をきっかけとして、中国は軍閥割拠の状況に陥った。大統領の交替と軍閥の跋扈の繰返しを見た橘は、政治エリートたちによる革命や改造に興味を失い、自分の目線を中国の民衆及び社会そのものに転じたのである。以下の回想は当時の彼の心境を示している。

記者（橘…趙）が支那の政局に対して劇的興味を失った第二の理由は、丁度民国五年頃から始めて支那の政治なるものの無意味さを感じたからである。……時局の主人公たる袁世凱の死によって此の大芝居があっけなく大団円をつげた有様を見せつけられて、支那の所謂政治の如何に馬鹿々々しいものであるかと云ふ其本質を悟り得た次第である。⁽⁸²⁾

此の「政治」を根底から踏みつぶして了ふことこそ支那の改造の根本要件であると云ふ考が臆気ながらも袁の死と相前後して記者の頭の中に芽生へて来たのである。⁽⁸³⁾

こうして、中国の既成政治に対する疑問を解くために、1916年から1918年にかけて、橘は「行政殊に税制の民衆の実生活に与へる影響を調べると同時に、小説を読み耽ることに没頭したのである⁽⁸⁴⁾」。その結果、「此の如き社会組織からは必然に此くの如き政治の発生するものであること従つて支那の政治を我々の政治学から教えられたような性質のものに鑄直す為には其社会組織を改造してかかる外無いのだという結論に到着した記者が支那なる偉大な生物の生命に触れ得たと感じたのは実に此の認識に到達した以後のことである。其後の記者の理智的興味が殆んど全く政治現象から離れ社会現象の一途に傾いた⁽⁸⁵⁾」。
(下線は筆者による)

これらの記述が示すように、当時橘の眼中に映っているのは、硬化した官僚体制と無能

な政治エリートの向こう側に、多様な社会組織と生命力に富む民衆が対峙しているというイメージであろう。そして、社会改造について彼は、上層部の政治を改造するには、必ず下層部の社会組織から着手する外なぬという認識に到達したのである。橘個人の思想や傾向が、辛亥革命という巨大な変動を通じて、社会改造という実践的課題と結合し始めたと考えられる。彼の思想は、現実投射したからこそ、その前の混沌たる状態から離脱して明晰化していったとも言える。上記引用において下線を引いた「生命」という言葉が示しているように、橘が社会組織に見出したのは中国社会の生命そのものである。このことは、彼の生命思想の明晰化を表明する例の一つであろう。

もう一つの例として、橘の美意識が関与する点について論じてみたい。美意識というものは常に人物の考え方の核心にあるものであり、それを手がかりとして人物の思想を研究することも一つの方法だと考えられるからである。1918年10月、橘樸はシベリア出兵の従軍記者としてチタからの帰途、辺境の小さい町ダウリアでウオッカを飲みすぎて脳溢血で倒れ、その後凡そ5年間の療養生活を送っている。その間、1921年3月3日から3月17日にかけて、橘が済南病院に入院している時、小森という青年画家が林檎のスケッチを送ってくれた。その絵を眺めているうちに、橘は偶然に別の画面を想起し、自分の構想を次のように手紙に書き、友人に送ったのである。

小森の画を眺めつつ次のような構図を思いついたこれは真面目な意味でいい画になるだらうと考えますが如何でせう

茂った雑木林、下草も盛に萌えて居る、光線は潤葉樹の葉面に止まって地上までは達しないそこで小森が野糞をする彼は傀偉で蛮的な表現を持つ青年であるから排泄物も当然ヒダリネチの雄大なるダングヒルであらう但健康躰の上に粗食？だから臭気は割合に強くない此物象を勁い筆触で殊に草いきれと糞の臭いとが混融して一面に立ちこめて居る心持を強調するツマリ天地間の活気がせまい場面に汪溢する画

今度小森に逢ったら彼を煽動してかかしてやりたいと思ふ（午前十時四十分）⁽⁸⁶⁾

「雑木」、「下草」、「傀偉」、「蛮的」、「雄大」、「粗食」などの言葉に注意すべきである。橘はこれらの言葉を通じて、一種の原始的なもの、何の拘束もない、生気にあふれている生命力を礼賛しながら、文明人の価値観と体系化された一切のものに対して骨に浸みた蔑視を示したのである。橘の生命思想の性格は、このイメージからかなりの程度推察される。社会改造の実践と結びついた後、橘の生命思想は成熟したと言える。しかも1923年に書かれた「人生観成立の過程」は、その生命思想についての一つの総括あるいは宣言であったとして見えるのであろう。

(2)「人生観成立の過程」：生命思想の展開

「人生観成立の過程」は、橘樸の物事に対する見方の基本を示しているので、橘研究において無視してはいけない文章である。それは1923年12月14日から『京津日日新聞』で連載し始めたもので、その年の橘の最後の文章であった。当時橘は旅順に住んでおり、天津『京津日日新聞』家庭欄の主筆を担当し、婦人問題に関する論説を発表していた。1924年1月に国民党第一回全国代表大会が開かれたことをきっかけとして、第一次の国民党と共産党の合作が正式に成立した。そのことは、まさに中国が国民革命期に入ったことを示している。長い期間にわたって中国社会の動向を観察していた橘は当然、この転換期を象徴する大事件を等閑視するわけにはいかず、1924年1月から2月にかけて、「孫文の赤化」という長い論文を『京津日日新聞』に連載することになる。その後の橘は中国革命を自分の思想の試練場と見なし、観察者として中国革命を追跡することになった。時間的に考えると、やはりこの1923年最後の文章は、橘の自己認識の試みであり、自分の思想の基本的な姿勢の表明でもあった。筆者はこの論文は二つの部分から構成されると考える。以下ではそれぞれ分析してみたい。

①個性、普遍性、体験、思想

まず人生観について橘樸は、「系統つけられずに自然に成立した、独特な人生観」に賛意を捧げていた。つまり「人間である以上は誰にも其独特な人生観があるに相違ない。独特とは借り物でないと云ふ意味である。借りものであればそれは大抵既成の哲学であらうから原持ち主の作った系統がある。然し独特に且自然に出来上った人生観となるとその儘では一定の系統がない、然し系統のある借りものより無系統な独自のものの方が自身にとっては比較にならぬほど有難いのである⁽⁸⁷⁾」。さらに橘は次のように自分の人生観を三点にまとめている。すなわち「一、一定の形式を持たないこと、二、独自のものであること、三、借りものでないから如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働くこと⁽⁸⁸⁾」である。(下線は筆者による)

前述した竹山護夫の観点を借りれば、大正時代は中間的、未完成の時代であった。かつての国家次元の旧政治の解体にともない、「個人」が価値の断片化した空間に疎外されることになった。しかし、大正の空間は「国政次元の政治シンボルが国民の底辺に解放されていく過程であり、「政治」の再発見が試みられる舞台でもあった⁽⁸⁹⁾」。つまりそれは、未完成の状況に置かれていたと同時に、再度の完成に向っていった時期でもあった。さらに、飯田泰三も日露戦争前後の世代と大正世代の「解体」に対する態度の基本の差異について、次の如く分析している。

日露戦争前後の世代の場合には、その知的「解体」状況に直面して、「自我」の「煩悶」——アイデンティティ喪失ゆえの——からデカダンに陥ったり、またそこから「修養」の苦闘に旅立ったりもしたわけだが、つづく「大正の新青年」世代になると、

むしろ「型の解体」は「解放」と受け止められ、「教養と無秩序」の中で、知的享受や美的享樂にいそしむ様相が目立つようにもなる。⁽⁹⁰⁾

この姿勢は、日露戦争前後に青春を送った橘にも共通していた。国家や政治などに関する旧知識体系の解体の過程を経験した橘は、体系そのものに対する懐疑を抱いた一方、新たな体系を立て直すために、「如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働く」ように努力していたのである。その姿勢をまとめると、第一に体系を批判しながらも、自ら体系を持つこと、第二に体系を解体させることをもって、体系の再建を模索すること、という二つの特徴がある。それゆえ、このような独特な姿勢を「反体系的体系」を呼んでもよいであろう。この「反体系的体系」という思考法は、まさに「体系」の解体後に生じたものである。それについて橘の言葉を見ればわかる。つまり、

私はこの十数年来哲学的思索を放擲して居る。まとまった人生観のない事を物足らず感じては居たが併しそんなものを積極的に追求して見た所でどうなるものかと考えて居た。之は私が青年時代に恰度犀の河原の石こづみのような失敗を幾度も繰り返した経験から生じた一種の諦めであった。然るにこの諦めの十数年の間にいつの間にか一つの人生観が出来上がった。⁽⁹¹⁾

戦後の思想家竹内好は『アジア主義』⁽⁹²⁾を編纂する際に、「満洲事変あるいは満洲国の頃に橘先生の文章を入れたいと思ひまして……橘先生の面目が出ている文章を一篇だけ選ぶことができませんでした。どの論文も完成度が低くて、あまりに流動的である。結局、人間の方が大きくて、文章がそれを包括していない。橘先生という方は大きな野心を抱いておられたが、ついにそれを何分の一も表現しないで終られたのぢやないか」、「先生が発表された文章はその人格の片鱗を伝えているが、全貌を伝えていない⁽⁹³⁾」という感想を述べていた。この説明は確かに橘の思想の性格をよく描き出している。なぜなら、橘の考え方にはある種の体系があると同時に、反体系的傾向が根強く存在しているからだ。そのため、橘が書いた文章は、せいぜい彼が接触できる情報、理論、思想に対して検証、批判及び咀嚼を行う足跡に過ぎず、したがってその足跡を橘の思想の本質として捉えるのは誤りである。そのため、彼の文章を根拠として、彼をアナキスト、アジア主義者、左翼アジア主義者、農本ファシストなどの名称で総括しようとしたやり方も不充分であると考えられるのである。

ところで、ここで問いたいのは、体系を批判、解体させる姿勢は、どのような標準を基盤としているのか、ということである。一定の標準がなければ、それは無尽の暗夜に陥るに過ぎないであろう。この点について橘に言わせると、次の如く三つの標準があるということになる。

先づ第一の標準は歴史である。多くの歴史的現象を分析して観るとその中に恒久的な要素と一時的な要素とがある。私は前者を重く後者を軽く取扱ふものである。前者が比較的正しく後者には比較的誤りが多いとするのである。

第二の標準は生物または人類の本然の姿である。これに関する知識は私自身の体験から得たものを主として、これに学問の教へるところを加えて決定するのである。その結果に出来上った標準から正邪を選り分けるのである。

第三の標準は社会組織の進化の過程である。これは理論上第一の標準の一部分に過ぎぬのであるが、意義が重大であるから実際的には独立させて取扱ふのである。資本主義も家族制度も、男女関係も法律も、道徳もその存在価値を総て進化の一過程として批判するのである。⁽⁹⁴⁾ (下線は筆者による)

この三つをさらにまとめれば、実際は第一の歴史性、第二の生命の自然状態という二つの標準が設定されていると言えるだろう。さらに言うなら、まず進歩史観をもってすべての理論、制度、法律、道徳を相対化した後、生命の自然状態を基準として、それらのものを咀嚼、批判、吸収するということ、これが橘の考え方の基本であったと考えられる。それゆえ、橘は「私は従って現在を肯定する、然しそれを尊敬することは出来ない。私の尊敬するものは未来である、未来が現在になればまたそれを尊敬せずに次の未来を尊敬するであろう⁽⁹⁵⁾」と言ったのである。

では次に、生命の自然状態とは何を意味するか。橘樸によれば、生命の自然状態は二つのものからなる、一つは「個性」、もう一つは「普遍性」である。その中で、橘が最も重視するのは個性であった。彼が「人々に固有のものは唯個性のみである。個性は自然の即ち運命的のものであって、人格は夫を種として発生し、人生観はそれを鑄型として形成せられる⁽⁹⁶⁾」、「ある人の個性はその人の生命であり永久の価値である⁽⁹⁷⁾」と述べたように、彼にとって個性は、人の主体性を築き上げる本質的な存在であったといえる。(下線は筆者による)

橘における生命の普遍性は、第一段階の「生きんとする欲求」と第二段階の「ヨリよく生きんとする欲求」⁽⁹⁸⁾ということであった。そのリアリズムと生命主義との両方を含んだ考え方は、もちろん当時のイギリスの功利主義や、ロシアの思想家クロポトキンの「相互扶助論」の影響を受けたものである。さらに「これに関する知識は私自身の体験から得たものを主として、これに学問の教へるところを加えて決定するのである」という言葉が示しているように、橘の生命の普遍性に関する論説は、脳溢血に襲われ、何回も死期を意識したことと、療養期間における女性観の革命がもたらした認識であり、また彼が長年にわたって生物、生存の問題をめぐって展開した実証研究の思想的な帰結でもあったと言える。(下線は筆者による)

彼にとって個性と普遍性は生命の自然状態を形成するものであった。しかし、上述したように橋は普遍性より個性の方を強調している、曰く「個性の自由な開展が無ければ独特な人生観も人格もその開展の機会がない。……型にはまった人生観は尊重するに足らぬ。人類の普遍性に立脚した人生観でさへも、他人は知らず私どもは満足しない⁽⁹⁹⁾」のである。つまり橋の思想において、「外来のもの<普遍性<個性」という対比の図式が存在していた。彼にとっての望ましい状態は各人の個性が積極的に働きかける状態であった。その言葉を借りると、「各人が個性開展の自由を持ち、その個性に鑄だされた人生観を造り、その個性を種子とした人生観を養って、互に相競争し相協力する社会が最も幸福であり且繁栄する社会⁽¹⁰⁰⁾」である。個性と普遍性は人生観の形成の先天的要素であった。次に、その後天的要素を分析する。(下線は筆者による)

橋樸によれば、個性及び普遍性は人生観の容器であるが、「但し瀬戸物のやうな死物でなく生きて他に働きかける力を有つ⁽¹⁰¹⁾」。それに対して人生観の内容を構成する内容は、「思想」である。しかしそれは「読書や通りに一遍の思索から得た薄っぺらな思想ではない。彼の体験によって真に自身のものと成りきったところの思想のみが人生観構成の要素となり得るのである。即ち各人の人生観は先づその形式を個性によって規定せられ、第二に体験なる手段によって内容を充たすところの思想の有機的統一を得た一団であると定義することが出来やう⁽¹⁰²⁾」とある。ここから見ると、橋が重視するのは外部の理論や思想ではなく、むしろそれらを受ける側の問題であった。「体験」は外部の思想を生命に内部化する役割を果すため、それは「人生観成立の過程に於て熊手のやうな働きをする、それが思想をとりいれて容器の内容を充たすのである⁽¹⁰³⁾」。さらに体験にも、運命的体験と自主的体験という二つの種類があるという。前者は不随意的な現象に出会ってから生成したものであるに対し、後者は主体が選り出した経験である。続いて、主体は「練習」を通じて、何回もその経験を繰返した後、それは本能と殆んど違わぬところがなく「自分のもの」になり、「或る刺激を受けると無意識に従って自由自在に一定の反応を起す⁽¹⁰⁴⁾」ということとなるのである。(下線は筆者による)

生命が体験や練習を通じてその内部に取り入れた思想は、もし旧思想、つまりその個人がすでに持っている思想より影響力が強ければ、旧思想を統合することも可能で、逆もあり得る。同時に、個性及び普遍性から構成される人生観の外郭は、死物ではなく、外部の世界に対して積極的に働きかけるべきものである。もし取り入れられた思想の方が強ければ、この外郭もそれにしたがって変わる。曰く「個性及び普遍性と体験と思想とは互に活発に働き合ふ。たとへば個性または普遍性が体験を指揮してその取入れる思想の種類及び實質に影響を与へることがある。それと正反対に、体験がその取入れた思想を通じて個性及び普遍性に影響を及ぼすこともある⁽¹⁰⁵⁾」。まとめると、橋樸によれば、人生観は性情(個性と普遍性)、体験及び思想の相互作用の産物として形成されるであった。

②人格と反省

本項の(1)で、橋樑における人生観の各要素とその働き方に関する分析を行った。ここで注意すべきは、人生観とは何か、人生観の構成要素とは何か、各要素の役割と相互の関係はどうかという観点から見ると、それらの分析は基本的に物事の「ある」状態を究明する範囲に留まっていたように見えるという点である。言い換えれば、それは人生観そのものを「対象」として「実証的研究」を行うことであり、大正生命主義の傾向から言えば、それは生物、生存に基く冷静でリアリスティックな論説であるように見える。しかし文章「人生観成立の過程」の第9に入ると、橋は突然に人格と価値のことを語り始め、そこで「反省」の概念を取り上げることになる。曰く、

一個の文化人の人格は他人の批判によってのみ形成されるかと云ふに決してそんな事はない。自己が自己を客観し得ることは十分に可能である、単に可能であるばかりでなく最も深く且正確に自己を知り得るものは自己に外ならぬ。人間の凡ゆる行為のうちで自己を反省するといふ事位正確で従って有効な行為は無いのである。……自己を反省することを知らないものはをしなべて馬鹿である。……何となれば、彼等には人間としての価値が乏しいからである。……自己反省はその人生観及び人格を築きあげるための第一の鍵である。⁽¹⁰⁶⁾ (下線は筆者による)

この部分は、明らかにその前の文章と違い、冷静な分析というより、呼びかけに近いものである。人格、反省、正確、価値などの言葉を見れば、この部分はすでに「ある」に関する研究から離れ、「べき」に対する構想、即ち大正生命主義における人生、人格に向う部分に入り込んだもの、ということがわかる。橋の文章もそのため、前後に二分されている印象がある。

上記引用した文章の前の部分においても、橋は「人格」と「人生観」の関係を「重箱と牡丹餅の関係でなくして鐘と撞木との関係である」と喩え、即ちそれらは「内的関係ではなくして外的関係である⁽¹⁰⁷⁾」と述べていた。人格は「客観的概念」であり、三要素（性情、体験、思想）の「価値」であるに対し、人生観は「その生活態度」である⁽¹⁰⁸⁾。「客観的」という形容詞は、人格の価値の普遍性を表明している。その一方、人生観は独自の、主観的なものに近い。橋の人格に関する語り方は、明かに当時に流行っていた人格主義、理想主義の影響、特に代表人物たる阿部次郎⁽¹⁰⁹⁾と土田杏村⁽¹¹⁰⁾の影響を受けたものと見受けられる。「八重日記」(1921年12月14日)には、橋が二人の著作に触れた状況が書かれている。すなわち「橋さんが持って来て下さった『改造』十二月号の土田杏村「文化主義原論」と阿部次郎「理想主義の爲に」を併せて読み、興味深し⁽¹¹¹⁾」とある。以下では、この二人、特に阿部次郎の方が橋に影響を与えたと考えられる部分を取り出して分析する。

(a) 両者ともまず人格を最高の価値としている。

阿部：人格主義とは何であるか。それは少くとも人間の生活に関する限り、人格の成長と発展とを以て至上の価値となし、この第一義の価値との聯関に於いて、他のあらゆる価値の意義と等級とを定めて行こうとするものである。(112)

土田：其れ自身に存在し、しかも其れ自身に決定するものは人格である。人格は決して自然物に征服せられるものでは無い。而して同時に人格ほど尊厳なるものは宇宙に無い。即ち人格は此の宇宙の本体であると言う可きである。(113)

(b) 両者ともカントの思想の影響を受け、理想の成立には普遍性が不可欠であると主張した。

阿部：理想は、これを懐抱する人に与えられる世界の全体に妥当することなしにその人の全生活を支配することが出来ない。この意味に於いて、それは、個人の素質と生活とを越えて、万人に普遍的に妥当するところにその権利を築かなければならぬ。(114)

土田：(快樂そのものが人生の理想になれるかどうかについて、筆者注) 此の如き刹那的純粹個人的なものは人生を規定する価値原理とはなり得ないのである……(115) 自然物は其のまま目的では無い……(116) 我々の生活の意義は自然生活の快樂にあるのでは無く、人格の自由なる表現、個々経験に於ける生命の味識にある……(117)

(c) 橘の「人生観」また「人格観」に多くの影響を与えたのは、やはり阿部次郎の思想だと考えられる。ここで両者(阿部次郎と橘)の共通点と相違点を以下に分析してみる。

まず、阿部次郎は次のように、外部理論の内面化を主張している。

自ら欺くことなしに一つの主義を信ずると言明することは決して容易なことではない。一つの主義を信ずるとは、これによって生活の全体を律する義務を負うことを意味するからである。あらゆる思想とあらゆる実行とを、この原理を以て貫かむとする情熱を持ち続けることを意味しなければならないからである。この操持と情熱とを缺くとき、吾々の主義はただ名称であって生活の原理ではない。生活原理としての主義は、吾々の心の奥底に深い根を植えているものであることを要する。(118) (下線は筆者による)

一つの主義を信ずるとは、それを生活の規準として、自律しなければならないということである。これは橘のいった「体験」とよく似ているが、方向は逆であったと言える。つまり阿部は理想主義の情熱を以て、自分の生活のある主義に接近させようとしたが、それに対して橘は、「主義」そのものを歴史的に相対化し、むしろ個性に適合するものを生命が自主的にそれを取り入れ、自分のものにする、ということを主張したのである。阿部が内から外へという姿勢をとったとするならば、橘の方が外から内への姿勢をとったと考えられる。にもかかわらず、方向は逆だが、内面的世界と外部の世界の合一化を図ろうとする点で、両者は目的を同じくしていた。

次に、阿部次郎は反省そのものを強調している。曰く、

吾々が人生の行路に於いて無数に与えられる岐路に踏み迷うとき、そうして本能も衝動もその決定を吾々に与えるほどの力を持っていないとき、人はこれの解決を生活全体の方向に求めなければならない。抑々自分の行く可き道は何処にあるか、自分の生活を全体として導きつつあるものは如何なる力であるか。此等の反省は吾々の眼を当然に生活全体の基礎に向わしめるであろう。そうして、人生に於いては、基礎に向うとは目標に向うことである。茲に於いて吾々は又理想を明かにせむとする欲求に駆られる。⁽¹¹⁹⁾ (下線は筆者による)

自己反省ができなければ、人間としての価値が乏しいと考えていた橋樑は、この阿部の言葉に深く感心したはずである。

第三に、物事を考察する標準について、阿部次郎は「個性」、「歴史」及び「現実の組織」という三点を取り上げた。曰く「個性を顧慮すること、歴史を顧慮すること、凡そ対象となる現実の組織を顧みて抽象的普遍と劃一とを排すること——此等のことは皆目的適合性（合目的性）の問題として、理想主義が無視することを許されぬ重要な一視点である⁽¹²⁰⁾」と。それに対して橋は、「歴史」、「生物または人類の本然の姿」及び「社会組織の進化の過程」という三つの標準をとった。橋は個性と普遍性を生命の「本然の姿」に組み入れた上で、歴史と社会組織にも着目し、それらを結び付けたのではないかと考えられる。(下線は筆者による)

最後に、阿部次郎は体験そのものを重視し、それを「吾々の生活の発展の最初の地盤」、「吾々の思索の第一の出発点」と見なしている⁽¹²¹⁾。橋樑も体験を重視し、それを思想の熊手であったと考えた。しかしそれはあくまでも後天的要素に過ぎない。橋にとって最も本質的なものは、「個性」である。他方で、阿部次郎における人間の本質たるものは人格である。彼は人格を次のように四つの次元で捉えている。

第一に人格は物と区別せられるところにその意味を持っているものである。

第二に人格は個々の意識的経験の総和ではなくて、その底流をなしてこれを支持しこれを統一するところの自我である。

第三に人格は分つべからざるものと云う意味に於いての Individuum (個体)である。一つの不可分な生命である。

第四に人格は先験的要素を内容としている意味に於いて後天的性格と区別される。カントの言葉を用いればそれは単純な経験的性格ではなくて叡智的性格を含んでいるところにその特質を持っているのである。⁽¹²²⁾ (下線は筆者による)

まとめると、阿部のこの説明は人格について、物と違う人格、人格の本質性、統一性及び先験性という四つの特徴を語っている。こうして見ると、人格というものが阿部次郎において、最も本質的な存在であったことがわかる。一方橋の場合では、個性が「自然の即ち運命的」なものであり、人格にとってそれは種であり、人生観にとっての鑄型であった。つまり橋において個性が人格より根本的であった。人格は価値の概念であるに対し、個性は自然の概念である。個性と人格の区別は、橋樸と阿部次郎の考え方の最大の違いであり、大正生命主義の二つの傾向性——「生物、生存」と「人生、人格」——の違いを示していたと考えられる。

(d) 阿部次郎、土田杏村の二人とも、唯物論に対する批判を通じて、階級闘争を否定しようとした。

阿部次郎によると、労働運動は人格生活向上の条件として所有の増加を求める運動でなければならない。もし労働者がその創造欲を喪失したなら、「彼はただ、飢えた資本主義者、嫉妬と猜疑とに満ちた資本主義者、新たに資本主義の軍門に降れる労働道徳の謀反人に過ぎない⁽¹²³⁾」のであった。

土田杏村は、労働は人格的、自律的、自己目的的な行為であると主張していた。彼によれば、労働運動も人格運動の一種であり、「労働は人格を離れて其の意義を持たない⁽¹²⁴⁾」。しかし階級闘争は人格のことを離れ、全く利害心に基く活動になってしまった。それゆえ土田は「プロレタリアの利害の為にブルジョアの利害の専制を攻撃するものは、人生観上の理想に於て資本主義者と何の区別するところがあるか⁽¹²⁵⁾」と厳しく非難したのである。

ここで見たように、二人とも「下部構造—上部構造」を基本とする唯物史観を批判し、人格の自律性を強調し、階級闘争を否定した。ここにおいて、彼らと橋の考え方の根本的な違いを見出せる。橋が「階級闘争は私の全支那観の骨子を成すものである⁽¹²⁶⁾」と言ったように、階級闘争は橋の中国の歴史や社会を研究するのに最も重要な手がかりであった。しかし見逃してはいけないのは、橋は当時の日本のマルクス主義者のように唯物史観を教条主義的に捉え、経済の基盤だけに目を向けていたのではなく、心理、習慣、風俗、信仰などの要素も考慮に入れて、社会の全面的考察を行ったことである。橋樸の認識の基盤は専ら下部構造や「ある」に関する研究に置かれていたにもかかわらず、上部構造の要素あるいは「べき」に関する構想を無視したものではなかった。彼はむしろ、大正生命主義のこの二つの傾向を彼なりに結びつけ、自分の独特な思考法を形成したと考えられる。

5. 橋樸の思想に内在した緊張関係

以上、筆者は明治から大正にかけての時代背景を参照しながら、橋樸の青少年期の思想動向、1916年の辛亥革命の挫折、1918年の療養経験及び1923年の文章「人生観成立の過程」を手がかりとして、橋思想の形成及びその性格を解明しようとした。橋は時代の子で

ある。彼は大正生命主義の二つの対立した傾向に対して自分なりの結合を試み、「反体系的体系」という独特な思考法をもって、未完成の時代において新たな完成に向けて努力していたと考えられる。

ところが、橘の観点にしたがうと、「個性」は先天的、自然的なものであるのに対し、「反省」は一種の後天的、人為的な行為である。「ある」としての「個性」と、「べき」としての「反省」との間には、一種の緊張感が存在しているのであろう。つまり橘は、「個性」に対して「人の生命であり永久の価値である」と礼賛していると同時に、「反省」を「人生観及び人格を築きあげる為めの第一の鍵」としている。突き詰めれば、もしこの「個性」から、「反省」を生み出すことができない場合にはどうなるのかという疑問が生まれる。

その問題に直面して、「ある」としての「個性」に立脚していた橘は厳格に、「べき」としての「反省」を、「自己が自己を客観し得る」という範囲に限定した。彼の考えでは、自己の「個性」及び「普遍性」を認識した上、外来の情報、知識、理論、思想に対して検視、批判、咀嚼、吸収を行い、自主的な「体験」と「練習」を通じてそれらを「内部化」することは、「反省」そのものの最大の意義であった。「反省」は生命の「個性」と「普遍性」を離れた、超越的なものとなつてはいけぬ。

橘は超越的なものを、基本的に疑問視していた。例えば、彼は国家そのものを玉子の殻、社会を玉子の中身とたとえ、社会という実体を超えたものは存在しないと述べ、形而上学的な国家観を否認した。つまり、「実在するものは唯社会を構成するところの民衆の集合意志のみである。集合意志は個々人に依存するもので別に人間から独立した総合意志が懸在するのではない⁽¹²⁷⁾」ということである。

そうかといって、橘は超越的なものの存在を徹底的に否認するわけにもいかなかった。生命の生きる欲求及びよりよく生きる欲求を出発点として、実証的研究に努力していた橘であるが、超越的なものに対する意見を、心の中で保留していたと言える。1923年1月5日に『京津日日新聞』に載せた評論「私の元旦（上）」において、橘は病気で倒れて以来、四年ぶりの清酒を味わった際、その感想を記述した。曰く、

清酒の匂いと味とは四年前と少しも変わらないなつかしさを以って私の心を動かすのである。私の佛教で説く業の永久性を連想し酒と私の間には永久に切る事の出来ない因縁があるとたわむれに断定して見た。⁽¹²⁸⁾

酒は、橘に重大な危機をもたらしただけでなく、彼の女性観の革命をも引き起こした。ようやく体が回復し、再び酒を味わった結果、橘は自分の一生が酒と離れられないことに気付き、以上の悟りに至ったのである。実在した生命の基本的欲求と、冥々の中に存在している超越的なものとの関係は、橘を当惑させる思想の深層部に流れている問題であったと考えられる。この点は、彼が書いた新劇脚本「指蔓外道」においても見出される。「指蔓

外道」の中で、橘は女性の口を借りて求道者のように、「梵天（ぼんてん）」との対話を展開した。

脚本の内容を略説すると、梵天の伝道者婆羅門（ばらもん）の妻（三十歳）は、婆羅門の高弟鶯岨摩（おうぐつま）と恋に落ちた。このことは大変鶯岨摩を当惑させた。鶯岨摩は、その女が自分の靈魂を「外道」に引き付ける存在だと危険視した。妻はある晩に鶯岨摩を訪ね、「神聖な婆羅門の教理」に対する自分の反駁を打ち出した。曰く、

善悪と云う事に本質的存在でないから、それに対する業報のすらう〔？〕筈はない。又こんなものもあります。人生は物質の集合に過ぎないから靈魂はその死と偕に消滅する。だから人生の目的に時々の快樂以外に何事もない。又こんなものもあります。その時々の主観が凡ての物の尺度である。従って一切の主義一切の法則は凡て虚妄に過ぎない……⁽¹²⁹⁾（下線は筆者による）

この部分は実に、橘自身の立場を示したと言えよう。続いて橘は「妻」の口を借りて、生命の基本的欲求の眞実性とそれを離れたものの虚妄性を以下のように語った。

聖典は人生の事を書いたもので聖典から吾々人間を引去ったら何が残る……恐ろしい力で今の私を働き動かして居るものはあなたに対する恋の炎です。此の眞剣な純粹な力こそ私の業を永久に引き得る唯一の力であると云う事を妾は痛切に体験します。……

善悪は空名です。私の恋は、貴方唯一人に対する恋は百劫を通ずる業に相違ありません。……善悪の觀念を投げ棄てた者に解脱など云うものが映るでしょうか。かりにあったとした処で妾の方からお断りします。本当の人間のめざす物は業の外にありません。唯業のみが人間に永遠の生命を与える唯一の力です。⁽¹³⁰⁾（下線は筆者による）

「業」とは、インド宗教の用語であり、意志による身心の活動を意味する言葉である。恋愛はもちろん「業」の一種である。善業また悪業を作ると、因果応報の道理によって相應の樂また苦が報いる（果報）。仏教から見れば、前世の業は、後世にも影響を及ぼす。そして「業」の存在は、人世の「輪回」を起させた原因である。求道者たちは、身、口、念を含む「業」そのものを捨てて、「輪回」から解脱して超越的な世界に到達することを目標としている。しかし主人公たる「妻」は、人世の「業」に執着して、「解脱」あるいは超越的な世界に興味をもたなかった。彼女は、目の前の人間の欲求及び行動を「永遠の生命」と見なしたのである。その根拠について、彼女は「体験」という概念を取り上げた。曰く、

空に花片の影を認める者はそれを逐いかけて帰る事を忘れます。然し私はそんな幻

覚に重きをおく事が出来ません。天界の事は存じませんが此の人界では体験程確かなものはありません。体験を根拠として築き上げた信仰の他口人間を司配する真の道があろうとは考えられないじゃありませんか。妾から見ますと解脱に憧憬れる人々の努力程儚ないものはありません。(131) (下線は筆者による)

「体験」の重視は、橘樸の一貫した原則であった。彼にとって、その身、目及び耳を通じて得た経験しか信用できなかった。身、目、耳の経験を離れた外来の知識、理論また思想は、すべて検視する必要があり、「個性」に適合した部分が「体験」によって生命の内部に取り入れられるものである。「体験」こそ真実なのである。それにもかかわらず、超越的なものは全く無意味であるのかといえ、そうではない。劇の最後に登場した人物「釈迦」(十二、三歳の少年)は、超越的なものの代表として「妻」に対して次のように話す場面があった。

あなたは非常に明らかな理智と清らかな感情とを持って居られる。唯私から見るとあなたは肉に或は肉の働きに余り多くをたのみ過ぎておられます。肉が衰え失せる時に私はまた貴女にお目にかかる事を望みます。其の時こそあなたと私とは何のこだわりもなく握手する事が出来るでしょう。(132)

あなたと私とは今道を異にして居ます。随って御一緒には参れませんが道の落ち付く先は矢張り一つですからどうせ又お逢いしてあなたの快よい御意見を承わる事が出来る筈です。(133)

この場面は、橘の内面で起きた哲学的闘争を示していると思われる。前に述べたように、橘樸は大正生命主義の二つの側面の影響を受けた。「ある」を選んだ彼であるが、「べき」そのものの要素を思想の中ではっきりと払い落とすこともできず、官能の世界に耽溺することもできない。それは旧い知的、精神的体系の解体に直面し、アイデンティティの喪失に焦慮を感じた日露戦争世代の一般的傾向であったと言える。その傾向が橘に反映すると、古い体系と外来の体系を解体することを通じて、新しい体系を建てるというやり方となった。それゆえ、「釈迦と鶯峯摩去る。婆羅門の妻恨みと失望の目で見送る⁽¹³⁴⁾」という終幕が示したように、超越的なものは橘の性格、思想において重要な位置を占めることができないにもかかわらず、最小限度で保留されていた。それと同じく、「反省」の範囲も最小限度に制限されていた。このような考え方は、橘の中国改造論、中国革命論を貫き、1933年の彼の「東洋改造論」に至って新しい様相を呈するようになるのである。

おわりに

本章は、大正生命主義、療養経験及び辛亥革命を三つの軸として、橘樸の思想の形成及

びその構造を解明しようとした。

明治から大正にかけての時代思潮の特徴は次の三点でまとめられる。第一に、国家・民族・政治に関する主題の衰弱と社会・民衆・生命に関する思潮が浮上したことである。第二に、大正生命主義が、生物・生存の視角から出発した「ある」に関する研究と、人生・人格の視角から出発した「べき」に関する構想という、二つの基本的傾向に分化するように見えることである。第三に、旧体系は解体したが、新しい体系や秩序が結局成立しなかったことである。それらの特徴は、橘思想の基本的なエートスをなしている。橘は時代の子である。彼は大正生命主義の二つの対立した傾向に対して自分なりの結合を試み、「反体系的体系」という独特な思考法をもって、未完成の時代において新たな完成に向って努力していた。

療養経験は、橘に生命の「個性」、「内面性」及び「普遍性」を気づかせ、「個性」、「普遍性」、「体験」、「練習」、「思想」及び「反省」という六個のカテゴリーからなる、彼の人生観の形成を促したのである。これらのカテゴリーは、橘を研究するための重要な根拠であると考えられる。

辛亥革命の挫折は、橘がその個人的思想や傾向を社会改造という実践的課題と結びつける機会を提供した。これまで政治エリートたちによる社会改造に注目していた橘は、1916年の軍閥割拠、南北分裂の状況を直面して、その視線を民衆、社会組織に傾けていった。個人の思想と社会改造との結合は、橘の思想の進歩であり、彼の人生観、歴史観及び中国観の成熟を示したと言えよう。

II 橘樸の中国研究——官僚、家族及び農村——

はじめに

本章は、官僚、家族及び農村という三つのモメントをめぐって、橘樸の中国研究に関する論説を展開するものである。

筆者は、満洲事変以前の橘樸の思想の発展を二つの段階に分けることができると考える。

第一の段階は、橘の青少年期から1923年末に彼が「人生観成立の過程」を書いた時期までである。日清、日露両戦争で勝利を収めた日本が、外部の脅威を退けたとともに、帝国主義列強のクラブに加入した。国家、民族、政治という時代的テーマが現実によって稀薄化していき、資本主義の発達で「個人」というものを析出させたことに加え、国家体制の完備また強化が国民に一種の疎外感を与えた。そうした時代的背景のもとで、知識人や学生たちは、古いテーマ、すなわち「国家・民族・政治」から離れ、視線をより深層的な領域、すなわち「社会・民衆・生命」という方向に向けていった。そういう風潮は、大正生命主義と呼ばれるものであった。橘も生命思想の影響を受け、日本社会の煩悶の雰囲気から脱出するために中国に行き、そこで辛亥革命の挫折と療養生活を経験したのである。

それらの経験は、橘の独自の思想の形成に重要な作用を及ぼした。1923年末に『京津日日新聞』で掲載された「人生観成立の過程」という文章は、まさに橘の思想の宣言であったと言える。

第二の段階は、中国の国民革命の起点たる1924年から1931年の満洲事変までである。独自の思想を樹立した後の橘はしだいに、中国に関する研究を整理する段階に入った。中国の「性情」とは何か、中国改造の「原動力」はどこにあるか、改造の方法とは何か、という問題は、橘の関心事であった。そのため彼は、中国社会の各方面、例えば経済組織、社会組織、通俗道教、民衆心理などについて自己が抱いていた知識を整理、総括したのである。この動向は、橘の個人誌と言われる『月刊支那研究』の中によく現れている。国民革命の進行は、橘にとってまさしく自分の中国研究、中国改造論を検証する一つの機会であるにほかならなかった。そして橘は情熱をこめて中国革命の動向を観察し、それに関する大量の論説を発表し、革命に同行するようになった。そうであるからこそ、国民革命の失敗は、橘に大きな衝撃を与えたことも想像できる。それは、「満洲事変」後の橘の「方向転換」を促した重要な原因であった。

筆者は前章で、橘の独自の人生観の形成の過程とその展開、及びそれが社会改造の実践との結合の過程について論じたのである。そこで、1923年の文章「人生観成立の過程」とは、決して橘個人の人生哲学の表明だけでなく、社会を観察、分析、改造するという彼の一連の方法論でもあった。その文章を読むと、ある社会を観察するために、橘が三つの標準を取り上げたことがわかる。即ち第一は「歴史」、第二は「人類の本然の姿」、第三に「社会組織の進化の過程」であった。三つ目の「社会組織の進化の過程」は、明かに「歴史」のカテゴリーに属している。したがって、橘が取り上げた標準を、「歴史」と「自然」の二つに分類しても問題ないであろう。ここでこの二つの標準を以て、彼の考え方を改めて略説する。

橘が最も重視するのは「個性」である。個性は人間や社会にとっても、先験的本質的なものであり、最も重要な価値である。個性と普遍性との混合を、彼は「性情」と呼んだ。それは明らかに「人類の本然の姿」また「自然」そのものであると言える。次に、橘は「体験」と「思想」を取り上げた。両者とも後天的のものであるため、「歴史」のカテゴリーに取り入れることができよう。そして、「性情」、「体験」及び「思想」は共に、ある人間の人生観だけでなく、社会や民族の性格そのものをも構成したのである。動態的に見れば、人生観の容器としての「性情」があり、積極的に外部に働きかけ、「体験」を通じて「思想」を掴み、人生観の内容に取り入れて充実する、というプロセスである。

次に、もし外部の「思想」が、ある人の「性情」に適さなければ、それはただ表層に止まり、「内部」に入れない、すなわち「内部化」はできないと彼は述べる。それゆえ、人生観を改造するにせよ、社会を改造するにせよ、まずその「性情」を把握しなければならない。そこで「反省」そのものが必要である。橘における「反省」は、一般に理解されるよ

うな、自分の過ちに対する反省でなく、自分の「性情」に対する深い認知である。「反省」がなければ、自分の「性情」や、外部の「思想」が自分の「性情」に適合であるかどうかさえもわからず、改造に着手することはできないのである。橋樑が「人生観成立の過程」において、「反省」の主体は誰かを明言しなかったにもかかわらず、「自然」と別物としての「反省」が提起されたことから、彼は意識的か無意識にか、一般民衆と異なる人間の存在を設定していると考えられる。社会改造の場合に於いて、そういう人々は、社会の研究に従事して知識を獲得し、理論及び実践を以て民衆に対して啓蒙、動員及び組織の役割を果たす。もしこうした彼の考え方を中国の国民革命期⁽¹³⁵⁾に当てはめれば、彼にとって「反省」の任務を担うものは、まさしく知識人或は政党そのものであると言えよう。

1923年末から1924年初めにかけて、橋樑が「人生観成立の過程」という文章を発表した頃、中国の情勢も一変した。1924年1月、中国国民党第一回全国代表大会が開かれ、孫文の「新三民主義」思想と「聯ソ、容共、農工扶助」政策に基づき、封建軍閥と帝国主義を打倒することを目標として、国民党と共産党との合作が実現した。これから、中国は国民革命の激動期に入った。橋もその変化に気づき、これまでの蓄積された中国に関する研究をまとめ、自覚的に中国革命を観察、分析し、それと同行するようになった。本章は、国民革命前後の橋の中国研究に着眼し、彼の中国社会の構造に対する把握、具体的に官僚、家族及び農村という三つのモメントめぐって議論を展開する。人生観と社会改造との結合の観点からすれば、当時橋が臨んでいた問題は、中国社会の「性情」とは何か、改造の原動力はどこにあるか、そして改造の方法あるいは政党、知識人が担当すべき役割は何か、という三つであったと言えよう。

1. 「社会」：中国研究の出発点

(1) 橋樑と内藤湖南：社会か政治か

橋樑の中国研究の性格に重大な影響を与えたのは辛亥革命であった。

辛亥革命はいうまでもなく日中両国に多大な刺激をもたらした歴史事件である。日本側では、政府の清朝維持の立場をとったのに対し、民間の知識人たちの多くは革命支持の立場をとった。その理由は人によって異なるが、基本的に日本国内の状況に対する不満や、東アジアの情勢を考慮するなどという範囲を出ていなかった。ここでまず取り上げたいのは、橋の中国認識と深く関わり、シナ学の権威たる内藤湖南の態度である。橋はつとに、内藤湖南を優れた中国学者として彼に好感と敬意を払い続け、相手の学問から深く影響を受けた。しかし、辛亥革命の挫折に対する態度において、橋は内藤湖南と根本的に違った。その違いから、橋の思想の性格を把握することができると思われる。

① 内藤湖南の辛亥革命観

まず内藤湖南についてである。1911年に中国で辛亥革命が勃発し、激動の最中にある中

国に直面した湖南は、中国が共和制に向いていると考えた⁽¹³⁶⁾。革命が勃発した後、1911年11月24日から12月8日にかけて、湖南は清朝の成行きについて三回の演説を行っている。この演説は速記され、まとめられ、1912年1月15日に「清朝衰亡論」として出版されている。革命はまだ進行しているが、湖南は将来の中国における共和政治の実現に希望を抱き、現下において、列強は中国に干渉すべきでないと意見を出した。

政体の選択に就いて他国の内政に干渉するということは、随分昔の神聖同盟などが
欧羅巴にあった時代ならば知らず、今日では余り流行しませぬ。私の考えでは当然黙
って懐手をして見て居る方がよいと思う。⁽¹³⁷⁾

革命の将来に関して、湖南は強固な中央政府を樹立すべきであると主張した。「革命軍の首領たる孫逸仙は近頃或人の間に答えて、強固なる中央政府を樹立する必要ありと云えりと。さすがに卓抜の識見たるを失わざるものか。連邦制は支那国情の許さざる所也⁽¹³⁸⁾」。

つまり、「清朝衰亡論」時期の湖南は、革命に対する希望を抱き、中国が強固な中央政府のもとで共和政治を実現するはずだろうと予測し、列強はこのような局面の前では自重し、中国に干渉しないほうが良いと主張していたのである。

しかし、1913年3月20日の宋教仁暗殺事件、7月に勃発した「第二革命」の失敗、10月6日に袁世凱が初代大統領に当選したことに示されたように、袁世凱が個人の権威を高め、共和制度を破壊しつつあったことは、内藤湖南に大きな衝撃を与えたのである。湖南は、1913年11月11日から12月3日にかけて、京都大学で「支那論」という演説を発表し、中国の前途について極めて悲観的な態度を表明し、列強の中国干渉を呼びかけている。

袁世凱などの考では、最近の一時的反動の潮流を、政治上変遷の大勢の発見と誤信して居る傾が歴々と見え、一日々々と其の国運を底なき暗黒の坑に投げ入れんとして居る……

大なる都統政治が出現すべき時期は、あまり遠いとは思われぬ。……またこの都統政治の方が、国民の独立という体面さえ抛棄すれば、支那の人民に取って、最も幸福なるべき境界である。……支那の官吏よりは、廉潔に且つ幹能ある外国の官吏によって支配されるから、負担の増さぬ割合に善政の恩沢を受ける。袁世凱を大統領にさえ仰ぐ国民が、都統政治に不満足を訴えるなどということは、有り得べき道理がない。

⁽¹³⁹⁾

つまり、政治エリートたちの活動に失望した内藤湖南は、政治の失敗をただちに中国全

体としての失敗と見なし、さらに中国人には自力で自国を改造する能力がないという結論に至ったのである。以下に見ていくように、橋樑の態度は、それと対照的であった。

②橋樑の辛亥革命観

橋樑も当初、辛亥革命に多大な熱心を持っていた。山田辰雄、家近亮子、浜口裕子が編集し、2005年11月に出版された『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』には、辛亥革命の当時の橋の行動が次のように記載されている。

一〇月一〇日、辛亥革命勃発。辛亥革命に際しては遼東新報社社長の弟・末永節が孫文と親しかったため（日本において『民報』の出版を援助）、上海に赴き革命状況を『遼東新報』紙上で具に伝える。これに刺激され、橋は「江南」のペンネームで盛んに執筆を行う。革命後橋は初めて北京を訪れ、段祺瑞にインタビューするなど新聞記者としての活動を活発化する。⁽¹⁴⁰⁾

この記載によると、当時の橋は辛亥革命に大きな関心を寄せたと同時に、その関心は主に政治エリートに向いていたことがわかる。

しかし、政治エリートたちによる変革は、中国社会に根本的な変化をもたらさなかった。袁世凱の死後、中国は清朝よりも一層混乱に陥り、軍閥割拠の混迷期に入ったのである⁽¹⁴¹⁾。橋は政治エリートたちの「芝居」が繰り返される状況を見ていたところ、エリートたちの活動の無意味さを感じたのみならず、政治そのものに対する興味も失った。1940年5月31日に東京・嵯峨野で举行された座談会「東洋の社会構成と日華の将来」において、橋は当時の心境を回想して次のように言っている。

私は、元来、ジャーナリスト出身で、中国問題にジャーナリストとしての半生を捧げたいつもりで、辛亥革命の当時、北京に入り込んだ。それから袁世凱政権というものは、今で云えば、その社会科学的性質に於て、我々日本のことを中心として考えていたのと、余程調子が変わっている。それを多少辨えなければ、ジャーナリストとしての政治的意見が立ち兼ねるので、かりそめに半学究生活に入った。そうやっているうちに、袁世凱に限らず、中国軍閥的政権の本質を突き止めるには、人民との繋がりになっている財政方面を研究することが、最も捷徑だと思った。⁽¹⁴²⁾

つまり、軍閥の本質を突き詰めようとするために、橋はまず中国の財政状況を調べ始め、各省の資料を大量に閲覧し、漸次に自分の研究の範囲を拡大させていった。そして、

今度は、土地であるとか、生産であるとか、或はその地盤になっている地縁的血縁

的の集団の本質は何かとか、だんだんと拡がって、取止めがつかない。これで到頭、ジャーナリストはお留守になって、中国の社会を歴史的に明かにすることが必要じゃないかということまで、自然発生的になって来た。それには無方針に、いろいろな人の経済史とか、経済学とか、社会学とか見て、それを自分の武器とした。⁽¹⁴³⁾

結果的に、橋樑は「此の如き社会組織からは必然に此くの如き政治の発生するものであること従って支那の政治を我々の政治学から教えられたような性質のものに鑄直す為には其社会組織を改造してかから外無いのだ⁽¹⁴⁴⁾」という認識に到達したのである。政治はただ表層のものに止まっているのに対し、社会は生命力を持つ、政治を左右する根本的な力である。こうして、橋の視線は政治から社会や民衆に転じ、社会組織だけでなく、彼は民衆の心理、信仰、習慣、道徳などに関する研究も怠っていなかった。

ここに、橋樑と内藤湖南との違いを見出せる。湖南は伝統の「漢学」の影響を受けた世代であるため、その関心がおもに儒教、国家、政治（政体）、エリートに向いているに反し、橋は大正期において、国家・民族・政治という硬い課題の衰退の影響を受け、社会・民衆・生命のようなより根本的な領域に関心をもつようになったのである⁽¹⁴⁵⁾。湖南が政治エリートたちによる辛亥革命の失敗を中国全体の失敗であると捉えていたのに対し、橋はむしろ、政治が失敗したとしても、社会がまだ生命、エネルギー及び可能性を孕んでいると主張しているのではないか。湖南が辛亥革命の挫折に失望を味わった後、ただちに列強の中国干渉を呼びかけたのに対し、橋は、外国の対華干渉を認めたにもかかわらず、干渉の範囲には明確な制限を加えた。つまり、

先ず武力干渉は最短期内に終結されなばならぬ。

次に兵数は必要の最小限度でなくてはならぬ。

且目的完成と同時に全部無条件撤退すべきである。

出兵の実行、配置、裁兵順序等の細目は支那側の申出に基づき関係列国に於て詮考協議の上具体案を作成する。

此具体案は更に交渉委員の評議にかけた上で実行上の準則となるのである。⁽¹⁴⁶⁾

また干渉の目標があくまで「支那民族の真の代表者を選び出してそれに統一に必要な資金を供給する……と同時に彼等の必要とする範囲の武力を貸与する⁽¹⁴⁷⁾」ことにあるというのが彼の主張であった。つまり橋の場合では、中国には自力革新の可能性が存在し、外国の干渉はせいぜい中国の自力革新を援助する一つ的手段に過ぎない、ということである。これこそ、橋の湖南との根本的な違いであり、彼の中国研究の基本でもある。

(2) 橋樑とアーサー・スミス：中国自身の標準に立って

橘樸の中国研究のもう一つの特徴は、良いにせよ悪いにせよ、あくまで中国社会自身の標準に立脚することである。中国社会の「性情」を究明するために、橘はアメリカの中国研究者アーサー・スミスの観点を多く引用した。ここで両者の共通点と相違点を分析し、橘の中国研究の性格を明らかにする。

アーサー・H・スミス (Arthur Henderson Smith、1845—1932、中国の名前は「明恩溥」) はアメリカ人で、アメリカの最古の海外伝道組織アメリカン・ボード所属の宣教師であった。1872年に、スミスは教会に派遣されて中国に渡り、およそ20年間滞在した。その期間、天津や山東などに居住し、布教や慈善活動を行いながら、上海のイギリス紙『ノース・チャイナ・デイリー・ニュース』(中国紙名は「字林西報」)に、中国に関する大量の論説を発表していた。その研究は、中国人の心理、信仰、道徳、生活習慣など多岐にわたって展開され、その目的は、彼の代表作と見なされている著作『支那人気質』の題名が示しているように、中国人の性格を究明することにあった。魯迅はその逝去の二週間前にスミスに言及し、「私は今も、スミスの『支那人気質』を誰かが翻訳してくれることを願っている。それらの指摘を読んで、自ら反省し、分析し、指摘の正しい点を明らかにし、それを改めようとし、もがき、修練を積み、それでいて他人の寛容や賞賛は求めない、そのようにして中国人とは結局のところいかなる存在なのかを証明するのだ⁽¹⁴⁸⁾」と述べている。

魯迅の評価は、スミスの著作の中に、中国人に関する認識の正しいところが多いことを示している。橘樸がスミスを多く引用した理由は、まさにそこにあった。もう一つの理由は、スミスの中国を観察する足場が、橘のそれと似ていたことである。スミスはその序章において、自分の研究の基本的方法を「中国の人々についてのこれまでの実証に基づいた知見を、その他の複雑な事象同様に順序良く整理⁽¹⁴⁹⁾」することとまとめた。続いて、スミスは中国人に関する情報を獲得するための情報源を三つあげた。即ち「小説」、「民謡」及び「演劇」であった。ところがそれらより、スミスが最も重視するのは、中国農村の家庭生活であった。曰く、

最初の三つを併せてよりも更に価値のある四番目の情報源がある。それは、中国人の家庭生活を調査することである。ある地域の地形は都会よりも田舎にいる方がよく分かるが、人々の性格についても同様である。中国人の家庭生活の内情については、外国人が十年中国の都会に住んでも、中国の田舎に十二か月暮らすことによって得られるほどの知識は得られない。家庭に次いで、中国人の社会生活の単位として位置するのは村落である。⁽¹⁵⁰⁾

建前より実際、都市より農村、公的場所より私的場所(家庭)という、スミスの研究の手法は、まさに橘樸の中国研究によく似ている。橘が農村を重要視することは、1906年から始まり、彼が遼東新報社のもとで、大連・長春・ハルビンの農村において「支那民衆ノ

社会経済生活状態ヲ調査」⁽¹⁵¹⁾していたことによって裏づけられた。また、橘の中国研究の綱領と見なされている「支那を識る途」の中で、彼は日本人が中国を儒教の国であると思ひ込むことを批判し、儒教はすでにその形骸のみが残されたのに対し、道教が中国の「支配階級たると被支配階級たるとを問わず、支那社会の隅々に迄隅なく行き渡るり今も尚力強く彼等の私生活を左右して居る⁽¹⁵²⁾」と述べたのである。言い換えれば、儒教的知が中国を専ら「政治」のアンクルから見るのに対して、橘は道教的世界への注目が中国を「社会」の側から観察することが可能だ、と考えたのである。橘が農村、道教、私的生活を研究対象とした理由は、現実において一体中国人がどのように働いているのか、という問題を突き止めようとしたためにほかなかった。そこに、橘とスミスとの類似性が見出される。他方両者の根本的な違いは、観察の標準にあった。

スミスは料理人、苦力、庭師、使い走りの男、荷馬車屋、外国病院の中国人患者など、一般の下層民衆を観察の対象として、中国人の性格について「面子」、「儉約」、「勤勉」、「礼儀」、「正確な時間の軽視」、「正確さの軽視」、「誤解の才能」、「婉曲表現の才能」、「従順にして頑固」、「知的混沌」等々26章に分けて論じた。彼は中国人の才能と忍耐力に驚嘆すると同時に、中国人の良心や品性の欠如に対して批判を加えた。スミスによれば、「中国に欠如しているものは知的能力ではない。忍耐力でもなく、実務能力でもなく、楽天性でもない。これらの点においては、中国人は非常に卓越している。彼らに全く欠けているものは、品性と良心だ⁽¹⁵³⁾」。次いで、スミスは中国人の道德性の欠如の原因を、次のようにその多神論と無神論に帰している。

純粹な無神論よりも悪いものがある、それは無神論が正しいかどうかについて一切関心がないことだ、と言われてきた。中国では、多神論と無神論は同じサイコロの反対側の面に過ぎない。そしてこのことは、教育を受けた多くの中国人によって、多少なりとも意識的に正しいことと考えられてきたし、何らの矛盾のないこととされてきた。人間の本性において最も深奥な靈的眞実に対する絶對的な無関心、これこそが中国人の心の最も嘆かわしい特徴である。それは、魂なき肉体、精神なき魂、生命なき精神、根柢なき宇宙、すなわちこのような神なき森羅万象を喜んで受け入れることにほかならない。⁽¹⁵⁴⁾

道德性を正そうとすれば、その「生き方」自身を改造するほか方法はない。それゆえ、スミスは、キリスト教文明と一神教信仰を中国人の生活に導入することが、中国改造の唯一の方法であることと力説したのである。曰く、

中国を改革するためには、品性の源泉にまで遡って、これを清めねばならない。…
…中国が必要するものは正義だ。そして中国が正義を獲得するためには、神の存在を

認識し、人間についての概念を変革させ、人間と神の関わりを理解することが絶対に必要である。中国は、全ての人々や、家庭や、社会に新しき生き方を必要としている。この時我々は、中国に必要とされる多様なものが、実はただ一つのものであることに気付く。正義を恒久的に完全に実現し得るもの、それはキリスト教文明のみであろう。

(155)

スミスのように、キリスト教の標準を以て、中国人の道德性の欠如を指摘するやり方について、橋樑はもちろん不満であった。「支那を識る途」で、橋は日本人の中国に関する「没常識」を次の三点にまとめている。

- 一、日本人は一般に支那に対して先進者であると言うことを無反省に自惚れて居る。
- 二、日本人は支那を儒教の国であると思い込む（ママ）で居る。
- 三、右の誤信とは一見矛盾する様であるが日本人は支那人を道德的情操の殆んど全く缺乏した民族であるかの如く考えて居る。(156)

第一の点について、橋樑は日本人の中国人に対する優越感が、西洋を模倣して近代化を実現させたところから生じたものと指摘した。続いて彼は「東洋史」の標準を打ち出し、もし東洋の標準に照らして見れば、「日本が支那に対して先進国であると正当に主張し得る範囲は極めて狭いものであるに過ぎず、東洋史を一見しても明らかである通り先進国として誇り得る理由は逆に支那の方が遥に多くを持ち合わせて居ると言う方が正しいのである⁽¹⁵⁷⁾」と述べた。

第二の点について橋樑は、中国は儒教の国でなく、道教の国だと主張した。彼によれば、「生命ある儒教は其宗教性と共に早く二千年前に滅亡し、爾来朝廷の政治的威力と支配階級の社会的勢力とに依り、只其形骸のみが辛うじて今日まで維持されて居るに過ぎぬのである。之に反して原始民族教の嫡統と見なすべき道教は徹底的に、即ち支配階級たると被支配階級たるとを問わず、支那社会の隅々に迄隅なく行き渡り今も尚力強く彼等の私生活を左右して居るのである⁽¹⁵⁸⁾」、ということになった。

そして第三に関して、橋樑は「考察者は先ず自身の持つ偏見、即ち善悪の標準は人類に普遍妥当するものであると云う迷信、殊に自身の属する社会の道德標準の普遍妥当性に対する迷信から脱却しなくては到底正しい結論を得ることは出来ないのである⁽¹⁵⁹⁾」と言った。ここからは言うまでもなく、キリスト教の規準を以て中国人の道德性を判断してはいけないという考えが読み取れる。中国人の道德性を考察するためには、儒教でなく、道教を把握しなければならない。もう一つの手がかりは、「面子」というものであった。橋は、中国人の「面子」に対する研究を通じて、中国人の道德は「純なる情操に非ずして」、功利的道德であるという結論に到達した。もし「功利的道德」が道德の一種と認められるなら

ば、中国人の道徳は「案外厳格に守られて居る⁽¹⁶⁰⁾」、と言えたのである。

最後に、スミスが中国人の多神論と無神論を指摘したのに対し、橘樸は、中国人も一神教信仰だと説いた。中国における一神教信仰は、上古に形成した「上帝」に対する信仰であり、そのほかの神々は、「上帝」の職能を分担する役人に過ぎないのである⁽¹⁶¹⁾。総じていえば、中国を観察する際、橘樸はあくまで中国社会自体の標準に立脚したのである。彼の人生観に照らして見れば、ある社会の「性情」を知らない限り、如何に美しい「思想」であっても、「内部化」が出来ず、それによる社会改造などは、全く空論になってしまう。以上の議論を踏まえ、以下では、橘の中国改造論の構造を論じる。

(3) 政治革命と社会革命

橘樸はその人生観を述べる時、「自覚」という概念を提起した。曰く、

各人は自身の持つ個性及び普遍性を出来る限り完全に自覚せねばならぬ。自覚しないでも相当に働くが、自覚すると個性や普遍性が新しい活気を帯びるばかりでなく、ある程度までは自身で任意にその働きを統制することが出来る。それがよりよき人生観を築き上げて行くうへに一番大切な用意である。⁽¹⁶²⁾ (下線は筆者による)

個性と普遍性との混合は、「性情」である。各人が自身の「性情」を自覚しなければ、統制することもできないし、よりよい人生観を築き上げることもできないと同じように、社会改造に従事する人々が、自分の社会の「性情」を知らなければ、どのような改造にしても無意味だ、ということである。橘樸が中国社会の研究に従事する目的は、「日支両民族の正しい関係の理論及び方法を探索する⁽¹⁶³⁾」ことであり、その目的から出発して「日本人に必要な『支那常識』供給⁽¹⁶⁴⁾」に努める一方、中国の改革者たちに中国社会の「性情」に関する資料を提供することでもある⁽¹⁶⁵⁾。日中関係にせよ中国改造にせよ、橘の中国研究は、すべて中国社会の「性情」を把握する立場から出発したと言える。彼は中国の小説『聊齋志異』を研究する時に、この基本的な姿勢を表明した。

『聊齋志異』(りょうさいしい)は、中国清朝の短編小説集で、作者は蒲松齡(ほしゅうれい、1640-1715)である。この小説は神仙、幽霊、妖狐等の物語を描写することを通じて、当時の社会状況を反映し、官僚政治の暗部に辛辣な風刺を加えた。その芸術性の高さゆえ、怪異文学の最高峰と評価されている。橘は、この小説を研究する価値が二つあるとし、一つが芸術的価値であり、もう一つが中国民族性の研究資料としての価値であるとした。しかも彼の研究の目標は「其芸術的価値でなく専ら前に所謂第二種の価値にあるのだ……聊齋志異の各篇のなかに豊かに盛られた作者の情熱を験することによりて私共はこれらの伝説を民衆が如何ように理解して居るかを察知し得るのである⁽¹⁶⁶⁾」、というものであった。

この姿勢が、橘の道教研究においてもよく示されている。中国人の女神崇拝に関する論説の冒頭において、橘は中国人の宗教心の深さ及び我々がそれに対して取るべき態度を、次のように言っている。

支那人は宗教心の深い民族であり宗教的信仰なしには安住し得ない民族である。而して道教は即ち彼等の民族的宗教であるから短い時間に之を滅す事は不可能である許りでなく或民族に固有な思想とか性情とかというものが実在し夫が各民族の個性を形成する要素であるという学説が若し真であるならば明かに支那民族の個性其ものの表象と認められるところの道教は縦令外国人と雖もこれが撲滅を企望すべきでない。私は読者が斯くの如き態度を以て道教を取扱い又私の記事に接して頂きたく思う。⁽¹⁶⁷⁾ (下線は筆者による)

道教信仰は民族の個性を形成する要素として中国社会に深く根を下ろしていた。そのため、「道教に関して問題とすべき点はこれが改革であって断じてこれが撲滅ではない。改革の原理は所謂合理主義よりも之を民族性及び民族思想換言すれば支那民族の個性に適合するや否やに求めねばならぬ。即ち適合が第一義であって合理ということは第二義以下の要求に過ぎない⁽¹⁶⁸⁾」(下線は筆者による)のである。前に述べたように、「性情」は「個性」と「普遍性」から構成される枠組みである。中で橘が最も重視するのは「個性」である。「個性」はその民族の性情を決定する要素にほかならない。こうしてみれば、橘の道教研究は即ち中国民族の個性に対する研究であったのではないか。

次いで、橘樸が研究する道教は、通俗道教である。通俗道教とは何であるかについて、彼は「支那の学者達が好んで研究する処の哲学的道教及宗教家達はその本職として修行する所の所謂道士の道教と対立して、民間に行われる一切の道教的信仰や行為や思想やを総称したものであります⁽¹⁶⁹⁾」と言った。それはつまり、哲学的道教でもなく、宗教家たちの道教でもなく、中国民衆の「性情」を表現している道教であった。こうして見れば、中国の社会や民衆の「性情」を把握することは、橘の中国改造論の第一歩であったと言えよう。

次いで、橘樸の中国改造の方法を分析する。橘はまず「政治革命」と「社会革命」という二つの概念を取り上げ、河上肇の『社会組織と社会革命』参考し、その中の社会革命に関するマルクスの定義を引用し、区別を説く。曰く、

「あらゆる革命は旧社会を解体せしむる限りに於て社会革命である。又あらゆる革命は旧権力を転覆せしむる限りに於て政治革命である」と云うのがマルクスの解釈である。だからマルクスの云う意味の社会革命は社会全体が進化の一階段を上る事である。⁽¹⁷⁰⁾

言いかえれば、権力の交替が政治革命であるに対し、社会全体の変革をもたらすのが社会革命である。前者は少数の政治エリートによっても行われるものであるが、後者は大多数の民衆の参与がなくてはならないものである。橋によれば、辛亥革命は少数者の革命であり、「政治革命」であった。それゆえ、「支那の民衆は四千年の専制政治に馴れて少数識者の理想を理解することが出来なかった⁽¹⁷¹⁾」のみならず、権力の交替さえも完成させずに失敗した「政治革命」に過ぎなかった。辛亥革命が皇帝制度を倒し、共和政治を建設したと言われていたが、その共和政治はただ名目上に止まり、国家の支配権が依然として官僚軍閥の手の中にあった。したがって、橋が辛亥革命に相対して「癸亥革命」という概念を提起し、癸亥革命を通じて辛亥革命が残した政治革命の任務を完成させること、即ち統治者から権力を奪還することで、次に社会革命の役割を果すことを構想していた⁽¹⁷²⁾。

さて、橋は如何に「社会革命」を理解するのか。まず彼のそれに関する論説を見よう。

私共の見る所によると社会の歴史は進化の連続である。この長い連続の中から旧社会組織の解体及び新社会組織の発生の急速に行われた部分を選んでこれを切り取ればこの断片の全体を総称して「社会革命の過程」と呼ぶ事が出来よう。他の言葉で云えば社会革命は只進化の急調を呈しその内容が社会組織の一新を含んで居る或る時代に対する呼称であって特にこれを革命と名づけるのは寧ろ不穩当であると思う。⁽¹⁷³⁾（下線は筆者による）

この部分を読めば、橋樸が社会革命を観察、評価する基準は、社会組織の変革そのものであったことがわかる。社会組織は、民衆の「性情」の集中的な体现であった。例えば、橋は各民族の神に対する想像とその社会組織の関係について、次の如く述べている。

各民族の持つ神々の性質及夫れの体系は、決して彼等自身の社会組織と独立した存在ではなく、寧ろ夫れの精密な反映である場合が多いのである。⁽¹⁷⁴⁾

それゆえ、「地方的部落的な多神的宗教体系は社会の組織単位が拡大せられ、夫れの政治体系が拡大と共に統一の傾向を辿りつつ進み行くに伴れて、宗教体系も亦漸次に拡大せられ同時に統一的傾向を辿る⁽¹⁷⁵⁾」のである。このように、社会組織は橋の中国改造論の基底をなしていると言える。国家の上層部だけを目標すれば、大多数の民衆と無関係で、社会組織に何の変化をも引き起こさない。そのため、社会革命は、必ず民衆の参加を要請しているものだと言橋は主張したのであった。

しかし、社会革命において、政治エリートと民衆の関係はどのようなものであったのか。橋はその文章「英雄か民衆か」の中で、次のような比喻を提示した。

英雄は時勢を作り時勢は英雄を作るという諺がある。又日本の俗諺に鐘が鳴るのか撞木がなるか鐘と撞木の間が鳴ると云うのがある。英雄と民衆との関係は甚だ良く撞木と鐘とに似て居る。この場合に英雄は撞木であり民衆は鐘である。⁽¹⁷⁶⁾

だが、エリートと民衆との関係と「鐘と撞木」との関係との「相異」は、次の二点であった。

第一の相異は「鳴らずの鐘」である。英雄が何程叩いても民衆の自覚がない間はど
うする事も出来ない。

第二の相異は鐘と撞木の場合には必ず撞木の方から動くのであるが英雄と民衆の
場合に於てはその反対に後者から働きかけて前者を動かす実例の方が寧ろ多いよう
である。⁽¹⁷⁷⁾

つまり、民衆の要求がなければ、エリートたちの活動はどういうことにもなれないし、
民衆が積極的にエリートたちに働きかける場合も多くあった、ということであった。した
がって橋樑は「民族的大事業が先ず民衆の物質的乃至精神的要求を動力として起りその
英雄が現われて民衆運動に適当な組織を与えると云う外、道はないのである。……民衆が
主であり英雄は従である⁽¹⁷⁸⁾」という結論を打ち出し、社会改造の「原動力」があくまで
も民衆のなかに存在していると力説したのである。

第一節の内容は以下のようにまとめられる。辛亥革命が挫折した後、軍閥の社会的基礎
を究明するために、橋樑はその目線を政治から社会に転じた。それよって、政治が失敗
したとしても、社会はまだ可能性を孕んでいるという認識を得た。それゆえ、社会改造を
行おうとする人々は、政治の建前より、社会の「性情」をよく理解しなければならない。
しかも社会の「性情」を理解するには、外来の標準によってでなく、その社会の深層部に
分け入り、その独自の標準を以てしなくてはいけない。「性情」を集中的に表現しているも
のは、社会組織である。社会組織を改造する革命こそが、社会革命と呼ばれるものである。
社会改造の原動力は、あくまで民衆であり、政治エリートたちは、ただ補助の役割を果す
べきだ、というのが橋の議論の流れであった。これが、橋樑の中国改造論に関する構想の
基本であった。

2. 官僚、家族及び農村——橋樑の中国史観

(1) 社会階級としての官僚

①Bureaucracy と官僚階級

前節において、筆者はすでに橋樑の中国改造論の基本的な構造に触れたが、本節では、

具体的に橘の中国認識について議論を展開する。

橘樸の中国認識の基本的枠組みを構成したのは、官僚階級対中産階級の闘争そのものである。1925年2月の文章「支那はどうか——内藤虎次郎氏の『新支那論』を読む」の中で、橘は中国の基本的な対立関係を「支配階級たる官僚階級と被支配階級の一部たる中産階級との」対立として、「此の階級闘争は私の全支那観の骨子を成すもの⁽¹⁷⁹⁾」だとしている。それゆえ、橘の思想を究明するためには、官僚階級と中産階級をそれぞれに分析することが必要であると考えられる。官僚階級の発生、成長及び覇権を握る過程が、橘における中国社会の「性情」に関する研究であるとすれば、中産階級に関する彼の論説は、むしろ橘の中国革命の方策であると見えるのではないか。ゆえに、本節では、官僚階級の形成及びその性質について議論を展開し、中産階級に関する議論は第三章に譲る。

官僚といえば、人々はおそらく自然に官僚主義ということばを思い出し、硬化した行政機関や腐敗や賄賂などのイメージを連想するのであろう。政治権力を以て民衆を圧迫し、大げさに威光を振るうような嫌われる人間が、どの国においても存在している。しかし、橘樸が取り上げたのは、個々人としての官僚でもないし、官吏の集合体そのものでもなかった。彼が注意を払ったのは、階級としての官僚であった。そういう「官僚階級」は、西洋のいわゆる「bureaucracy」とは全く別物である。

西洋で、「官僚」という言葉の語源は「bureau」で、「書き物机」や「仕事部屋」を意味するものである。その英語訳語として「bureaucracy」という言葉が出てくるのは、19世紀中葉のことである。ところで、「執務」の意味でのbureaucracyは、アメリカで広まった。それは、商業組織の規模の拡大にしたがって、政府の介入、法的な規制が増え、その要求に応じて組織的で専門的な中央政府が強化していく現実を指している。ドイツ語のBürokratieはより肯定的な意味で使われることが多い。例えば、シュモラーはそれを、君主制を別にすれば「階級闘争における唯一の中立的な要素」としていること、ウェーバーはさらに「法的に確立された合理性」とまで評価している。もちろん、「官僚的な手続きの煩雑さと形式主義」を意味するものとして、否定的に捉えられることもある⁽¹⁸⁰⁾。マルクスの学説によれば、真の階級はただ資産階級と無産階級の二つだけであり、官僚そのものは、階級に数えられない存在でしかない。官僚は、政府や監獄や軍隊と同じように、国家機関であり、支配階級の意志を体現する役人に過ぎないのである。これらの解釈から見れば、bureaucracyの意味での官僚というものは、支配階級に奉仕するものや、中立的で形式主義的なものでしかないことがわかる。

しかし、橘において、中国の官僚階級はすなわち支配階級そのものであった。そのような官僚階級は、明治維新後の日本の官僚群やドイツの官僚群に似ているように見えるが、決して同一のものではなかった。彼等は自分の組織、利益及び意志を有するのみならず、その支配を社会全体まで浸透していったのである。橘のことばを借りれば、官僚階級は、一種の**社会階級**である。

ここで言う社会階級とは何かというと、橋は「先ず第一に部分社会である、すなわち国家又は民族と云う全体社会を構成する一要素であると同時にそれ自身が一つの社会を構成するものである。第二に他の凡ゆる部分社会が縦の存在であり其の横拡がりは全体社会の前面に互ることの絶対がないに反し、社会階級だけは必ず横の存在であって其の拡がり全体社会の全面に及むで居る⁽¹⁸¹⁾」と定義づけた。では官僚階級が如何にして社会全体に互ってその支配を樹立したかについて、橋は次のようにを説明している。

支那の官僚群は国家又は民族なる全体社会の中に在って一つの部分社会を構成して居ると同時に一つの社会階級を構成し、而も支配階級として国家乃至民族の最上層に位するものである。……社会階級としての官僚群は文武官僚及び之に準ずる者は勿論其の家族及び家系をすらも併せて包含するものである。……之れが支那の政治及び社会組織を他の凡ゆる国家乃至民族と差別せしむるところの根本原因の一つである。⁽¹⁸²⁾ (下線は筆者による)

このような官僚階級に対する考察は、橋樸の中国研究に一つの重要な手がかりを提供したと言える。ゆえに、われわれは官僚そのものを糸口として、橋樸の中国史観を窺うことができる。まず取り上げたいのは、橋の「支那革命史論稿(一)「乱世」に関する社会史的考察」(1924年12月)という文章である。橋の中国研究の綱領と見なされている「支那を識る途」の直後に書かれたことから、「支那革命史論稿」の重要性がうかがえる。

②官僚の歴史

橋樸は、中国の宋(960年建国)以後から、今日(1920年代の当時)までの期間を、官僚階級が支配権を握った時代だとしている一方、官僚階級の起源はそれより遥かに時代を遡るものものと認めている。橋によれば、官僚は春秋時代の初期に萌芽を發したが、「此の新しい政治方法を初めて実行したものは戦国時代の秦⁽¹⁸³⁾」であった。続いて彼は、「支那革命史論稿(一)「乱世」に関する社会史的考察」で秦の崛起のプロセスを紹介し、秦の歴史的條件とそれが君主専制及び郡県制を採用したこととの関連性を次のように説明した。

秦は新興の国家であり従って封建制の影響を受けることが浅かった許りでなく、当時西戎と呼ばれた蕃族の間に国を建てたことであるから、所謂中原の旧い大名達のような能率の挙らない封建の形式を踏襲して居たのでは、国家の命脈を維持することが出来ない。此の自然の要求に応じて自然に採用したものが、偶然にも後ちの二千年に互って、支那を支配したところの政治形式即ち中央集権的君主専制であったのである。秦は文化の最も後れた国であり且つ人口が稀薄であった為に積極的に人間の移入に

努めその中の智識あり能力あるものが登用せられて支配階級を組織し、然らざるものは荒蕪地を与えられて手一ぱいに其富を増殖することができたのである。従って秦の勃興及び其の力に由る天下の統一は、謂わば適者生存と云う生物学的原則の実現であった。……始皇が郡県制を採用したのは、斯様な歴史的及び社会的背景を基礎としての仕事であったのだから……大体に於ては自然の勢に過ぎなかったと言うことが出来る。⁽¹⁸⁴⁾ (下線は筆者による)

君主専制や郡県制にともなって出現するのは、官僚そのものであった。この部分を見ると、橘における官僚階級は、実用的な見地から、当時の険しい環境に対応するなものであったと言える。しかし、秦から唐末までの期間で、中国の支配権を掌握したのは官僚階級でなく、あくまで貴族であった。君主専制といえども、「貴族階級と云う請負人を通じて行われたものに過ぎない⁽¹⁸⁵⁾」のである。橘は秦から唐の歴史を、君主と貴族との闘争史と捉えている。その期間、有為な君主たちは官吏登用制度を設立することや、その修正などを通じて、貴族から権力を回収しようとしたが、宋の建国(960)までの努力は、悉く失敗したのである。唐末五代の軍閥は、「貴族の勢力に致命傷⁽¹⁸⁶⁾」を与え、宋の初期に一種の支配階級の真空期を形作った。官僚階級は、その機会に乗じて一躍して国家の支配階級となり、その後凡そ一千年の長い歴史において覇権を握っていた、ということである。

なぜ官僚階級が支配階級として長い生命を維持し得たのか、その原因は、まず「彼等が朝廷からその特殊な地位と権力を保証された⁽¹⁸⁷⁾」ことである。次に、最大の原因は「彼等が現任官吏である間に蓄積する所の富であって、之が支那に特有な所謂宗法的家族制度と相俟って、官僚階級なる一社会階級を構成し且つ維持せしむる⁽¹⁸⁸⁾」ことである。(下線は筆者による)

第一の原因については、疑いなく朝廷が官僚に政治的権力を与えたことを指しているが、そのような政治的権力は封建時代のそれとは同じでない。橘は「官僚生活の営業性」(1925年4月)の中で、「歴代の王朝が殆んどすべて征服国家或は夫れに準ずる性質を帯びて居た⁽¹⁸⁹⁾」ことを、官僚階級が全社会の支配階級として確立したことの前提としている。「征服国家」の性質とは何か。その問題についてわれわれは、橘が内藤湖南の欠陥を指摘したところから、いささかのイメージを得られると思われる。(下線は筆者による)

内藤湖南はその名著『支那論』(1914)において、まず宋以前の政治を貴族政治と見なした。貴族政治について、湖南は天子と貴族との関係に着眼し、孟子による周の封建制に対する描述「天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位」を引用し、「内外共に天子の地位と云うものは、この幾等の階級ある貴族制度の上に、単にその一階だけの高さを占めて居るのであ(り)……各諸侯の上に特別に擢んでた絶大の力並に地位を有って居ると云うのではない⁽¹⁹⁰⁾」と説明した。つまり貴族は、封建制度によって身分が保証され、天子に対する独立した地位を持ち得る支配者群であったと言える。内藤湖南はそのような貴

族政治が、上古から宋まで続いていたと認め、秦漢以後に平民出身の宰相や将軍がしばしば出現したにもかかわらず、それは「戦国の後を受けた実力本位時代の余波と、並びに其時に産出した政治上の理想で加味する」ものに過ぎず、「何時までも権力は貴族の手中に在るのである」と主張している⁽¹⁹¹⁾。君主は、貴族階級の私有物で、超越的な権威を持たなかったため、その権力は常に外戚（君主の母の親族）や宦官に奪われた⁽¹⁹²⁾。これが、内藤湖南による宋までの中国史に関する一つの解釈であった。

それに対して橘樸はむしろ、秦漢以前とその後の貴族政治との違いに着目し、君主専制制度の確立がもたらした影響を重視する。周は秦漢と同様に征服王朝であったが、「周の征服は、殷及びその直接支持者を征服するに止まったに反し、中世期の各王朝は一切の政権及び兵権を征服しない限り、彼の国家を建設することが出来なかったのである。無論それには例外があり、殊に中世期には、内藤氏の主張する通りに屢々篡奪と云うことが繰り返されたのであるが、篡奪者の国家は一つそして鞏固且つ永続することを得なかったのである。王朝建設の経過が上古と中世との間に、斯くの如く相違して居た結果、王朝の地位乃至権力に著しい相違が生じた⁽¹⁹³⁾」のである。ここでいう「中世期の各王朝」は秦から唐までの数個の王朝のことを指している。秦が中央集権的君主専制を樹立して以降、後世の「征服王朝」は、自らの領土内において独立した諸侯の存在を許さなくなった。官僚階級は、そのような政治形式とともに根強く存在し続け、宋に至り、「君主専制の徹底」にしたがって官僚階級もその「完全な意味に於ける」形態となって現われたのである⁽¹⁹⁴⁾。

官僚階級が成り立つ第一の条件が政治的権力であるゆえ、宋以降の君主の権力がしだいに強まっていき、清朝に至ってピークに達したとともに、皇権に根ざした官僚階級も、発達していったのである。しかしながら、なぜ皇権が辛亥革命によって倒れたにもかかわらず、官僚階級は存在し続け得るのか、という問題が残っているであろう。橘は続いて、官僚が社会階級として存在し得る根拠たる家族制度を提示する。

③官僚と家族制度

筆者は本項の①において、「社会階級としての官僚群は文武官僚及び之に準ずる者は勿論其の家族及び家系をすらも併せて包含するものである」という橘の解釈を引用し、中国の官僚階級とヨーロッパ、日本における bureaucracy との区別を説明しようとした。橘によれば、中国の官僚が社会階級になれるのは、家族及び家系の力によってであった。何よりも、家族主義なる社会組織の存在は、中国社会と西洋社会との根本的な違いである。それについて、橘は次の如く述べている。

欧羅巴の社会組織が個人主義であるに反し、支那のそれは完全なる意味での家族主義である。何事に依らず世襲を欲すると云う強い傾向は家族主義に固着した特徴の一である。官僚なる法制的身分は勿論世襲の目的物とならぬが、官僚なる社会的身分な

らば支那の社会は容易に之れを認めるのである。社会的承認が時の進むに従って、一の新しい支配階級すなわち私の所謂官僚階級を生み出したのである。⁽¹⁹⁵⁾ (下線は筆者による)

まずは、「世襲を欲すると云う強い傾向」という家族主義の特徴について検討する。橋は中国の家族組織を、一種の「家族共産制」と名づけ、その性質を次の如く語っている。

支那の社会は其の根本組織として所謂大家族制を維持して居る。此の制度にあつては一つの家族の財産権が家長の一手に集中せられ、家族成員各自の消費財を別とし、其他の財物は動産不動産に論なく一切家長の名で所有されるのである。家長は此の特権の代償として全家族を扶養する義務を負う者で、此の意味に於いては所謂家族共産制が文字通りに行われて居る次第である。此の家族共産の観念は本来の意味から拡大せられ、家族成員の或者が出世して大収入を得る地位を獲得した場合に、彼は其の消費財以外の財産又は収入を以て其の実家を賄わすことが不文の義務となって居る。⁽¹⁹⁶⁾

このことを官僚に当てはめると、中国の諺「一人得道、鶏犬昇天」(一人が道術の修行をして仙人になれば一家眷属や鶏・犬まで天に昇る。一人が出世して権勢を握れば一族郎党までそのお陰を被る、という意味)が示しているように、官僚個人の持つ権力を、その家族全体が共有するのである。家族の人々は、政治的には庶民に過ぎないにもかかわらず、親族の権力をもって社会の各部門まで浸透させ、社会における一つの大きな勢力を隠然と樹立したのである。

次いで「社会的承認」について、後で詳しく述べるが、中国では家族制度が社会全体(官僚階級とも)に行き渡っていたため、一般民衆は、官僚の家族はその政治的身分を継承し得ないが、官僚の権力やそれを通じて獲得した富を共有し、社会の各部において運用することが可能だ、と認識していたと考えられる。

本項の②において、政治的権力(「地位と権力」、経済的勢力(富)及び家族制度の運用(宗法的家族制度)が、官僚階級の支配地位を維持するために不可欠な条件である、という橋樑の論点を引用した。これまでは主に、官僚階級の「政治的権力」の基礎、すなわち君主専制の歴史とその作用、また家族制度の働き方に関する橋の観点を整理したが、中国の家族制度の歴史については触れなかった。以下では、橋の中国の「家族」の歴史に対する論説をまとめていく。経済的勢力、つまり官僚階級が富を集積する方法に関しては、「4. 真のアジア的生産様式」の部分で詳しく説明を加える。橋において、官僚階級ないし中国社会の「性情」を把握するために、家族制度もしくは家族組織の作用及び官僚階級の搾取方式こそが、「政治的権力」よりも一層重要な要素であった。

(2)「家族」の歴史と唐宋変革説

①内藤湖南の見方

橘が捉えたいいわゆる「官僚階級」は遠く、春秋戦国時代まで遡れるが、宋以後の官僚階級と比較すると、量の差だけでなく、質の差も見出される。この点において、橘は内藤湖南の「唐宋変革説」をそのまま受け入れた⁽¹⁹⁷⁾。

湖南の「唐宋変革説」は、その代表作『支那論』のなかに初めて現れた。内藤湖南は、貴族政治の滅亡、君主独裁政治の確立及び人民の力の向上という三点をめぐって唐宋変革の内容を語った。それをまとめると次のようになる。唐の中期以前、君主は後世のようにやや神秘的な色彩を帯びた至高無上の存在ではなく、ただ貴族の一つの家族の首長に過ぎなかった。当時の貴族は、すなわち家族制度に基づく「名族」であり、その社会的地位が非常に高く、「天子の家もしくは外戚の家とでも容易に結婚をすることをゆるさないほど……全く特別な地位を占めるような⁽¹⁹⁸⁾」存在であった。しかし君主は「大きく言えば、貴族階級の私有物、小さく言えば、その一家族の私有物のような地位⁽¹⁹⁹⁾」に過ぎなかった。しかし、安史の乱をはじめとして、ほぼ二百年間も続いた動乱は、貴族階級に致命的な打撃を与え、貴族階級の滅亡をもたらした。それゆえ、「君主というものは、従来は貴族の中の一人が政権を執るに過ぎなかったのを、貴族がなくなったので、その結果として君主は万民の上に超越した地位になって来た。そうして事実上万民の上に君臨するというようなことになって来た⁽²⁰⁰⁾」のである。湖南が「古代に貴族だけが臣僚の位を占めておいた時には、その臣僚というものは天子の輔佐役であり、相談相手であり、決して天子の奴隷ではなかったのである……今度は一人の天子に万民が隷属するということになっておるから、その大臣というものも単に独裁君主の秘書官であって来た」と述べたように、官僚の役割も相応に変わった。のみならず、外戚、宰相、宦官の権力もそれとともに下降していったのである。

貴族政治の滅亡は、すなわち君主と人民の間に介在していた一つの階級の滅亡であった。それによって、君主が直接に万民に君臨するようになったとともに、人民の勢力もある程度の成長を遂げたのである。湖南は、宋の王安石の変法を例として取り上げ、それによって人民の「財産と労力との自由を幾分か認めるような傾きになって来た⁽²⁰¹⁾」と主張した。人民の力の向上は、もう一つの現象を引き起こした。それはすなわち吏胥政治であった。吏胥は、科挙を通じて官僚になった人と異なり、直接に人民に接触する土着役人の一種である。彼等の勢力の膨張も、ある意味において人民の勢力の向上を裏づけていた。つまり、「吏胥に権力がありとはいいいながら、また一方からは人民に接触する者に権力があるとも看ることが出来るのである。人民はそれがために害を被っておって、胥吏が人民と官吏との間に蟠まっておって私腹を肥やすということは、弊政には相違ないが、つまるところ人民に近い者が精力が加わって、上級の者に実際の勢力が無くなっておる⁽²⁰²⁾」のである。

人民の力の向上は必然的に共和政治を要請し、胥吏という障害さえ排斥すれば、ただちに権力を自分の手に回収した、と湖南は断定したのである。彼から見れば、これこそが「近世」というものの本義であったといえるのではないか。

橘樸と内藤湖南の主張の相違は、むしろ「官僚階級」に関する判断の中にあると考えられる。湖南は、中級・高級の官僚と低級の胥吏をそれぞれ分けて把握したのに対し、橘は官僚そのものを全体として捉えていたのである。両者の見方の違いは、橘の家族制度に関する独自の観点から生じたと考えられる。橘の家制度に関する独自の観点は後に詳述するとして、まず内藤湖南の観点を整理しておきたい。

湖南は貴族の家族たる「名族」を「自然にその血統上持って生れたところの資格であって、例えば上古の周の時に、諸侯が天子から命を受けて、そうしてその封土を得る⁽²⁰³⁾」と定義づけ、その特質を「官爵も領土もともに無くとも、依然として名族は名族であって、いつまで経ってもその名族の資格を失わないのがその本義である⁽²⁰⁴⁾」と捉えていた。この定義は確かに、橘が提示した「社会階級」の性質に近かった。そして、日本の藤原時代の貴族政治と同じく、中国の貴族政治も武人の勃興によって滅びつつあった。唐末の藩鎮（当時の軍閥）は、軍隊を以て実権を握り、貴族の支配を転覆したのみならず、彼等が行っていた「養子制度」も「家族制を打ち壊す原になった⁽²⁰⁵⁾」。中国の貴族の家族は、血縁に基き、名族の譜牒（家や氏の系譜を書き表した文書、系図など）を持っていたため、首長が死ぬ時、必ず血統のある一族からその後継者を選び出す。それに反し、藩鎮たちは、血統がないにしても、能力や人望さえあれば、その人を自分の養子にし、後継者にすることもできる。後周の世宗柴榮が太祖郭威の養子であったことは、この新しい社会現象を裏づけていたのである。湖南の観点を引用してこの現象の意義を説明すると、「これは支那のような家族制度を尊ぶ国としては、非常な社会上の変化である。このごとき風習が一時盛んに行われたために、一般に支那の社会の根底を成しておるところの家族制度というものを破壊した⁽²⁰⁶⁾」、ということであった。

貴族だけではなく、官僚たちも家族制度そのものを失った。それについて、湖南は次のように述べている。

（韓退之は）昔は官吏をする者は、皆各々自分の家があって、官吏を罷めれば自分の家に帰って暮らせるものであった。それは家族制度が成り立っており、名族が存立しておるからである。ところが隋・唐の時代からして既に官吏が渡り者になって、官吏が官を以て自分の家とするようになった。官を罷められるとどこへも帰って行く家が無いような有様であると云っておる。……地方官などが比較的上官であるところの県丞にはさらに勢力が無くして、その下におるところの主簿、尉などの方に勢力がある。主簿、尉は人民と直接に関係しておって、定まった分職があって、常に民事を取り扱っておるから、その言うことを何でも県丞が聴かなければならぬ。それいよ

いよ権力が、人民に直接しておるところの吏胥に移ることになり、上官は単に盲判を押すというようなことをも言っておる。⁽²⁰⁷⁾

県丞は、秦漢時代以来の地方長官県令の副官であり、主簿、尉は県丞より低級で、それぞれ公文書、民事と治安、軍事を主管するものであった。官僚はその家を失ったことで、その勢力も萎縮していき、「政客」になった。地方の長官は、下級の胥吏の意見に従わざるを得なくなったのである。したがって、官僚の実権は漸次胥吏の手に移った。この現象に関して、湖南はその『新支那論』で次のように説明した。

近来になるに従って、支那でいう「一命以上の官吏」は悉く政客化した。官吏はすなわち天子を取り巻いた政客階級の団体である。官吏の商売と地方の安全ということは、何の関係もなくなって来た。これは殊に隋の時に「郷官」を廃してからだといわれて居るが、然し隋が郷官を廃したのが、既に政治が一種の階級の手に落ちたがためであったので、殊に隋が制度上官吏の渡り物たることを承認した事になったから、益々政治は政客の商売となってしまった。⁽²⁰⁸⁾

ここで現れた「一種の階級」というのは、疑いなく胥吏そのものである。

②橋樑の見方

以上で述べたように、湖南が官僚を「政客⁽²⁰⁹⁾」とし、それを「胥吏」と分けて考えていたのに対し、橋は、湖南が提示した「政客」とすなわち自分が言うところの「官僚階級」が同じであることを認めていたが（「支那はどうなるか」、官僚と胥吏との関連性にも注意を払っていた。

橋は官僚の生活を、営利を唯一の目的としているものとし、県知事の役所は、一つの個人商店にほかならなかつたと見做していた。ゆえに官僚と胥吏との関係は、この商店の内部の事情に過ぎなかつた。つまり「県知事の営業系統に直接繋属するものは彼の私人たる幕友及門丁のみであつて、属官や書吏は其の補助機関たるに過ぎない。而して是等の補助機関各自はそれぞれ独立した営業を有し、彼等と県知事との間はお互に利用し合うと言う関係に於て連結されて居る。此の関係を県知事の側から見れば属官及書吏は彼の補助機関であり、属官及書吏の側から見れば県知事は彼等の営業に対して背景を成すものである。平たく言えば属官及書吏は県知事の威光を笠に着て人民に臨み、是によって彼等の営業を行う⁽²¹⁰⁾」ということである。橋によれば、官僚と胥吏との間で、時に利益の衝突が発生したとはいえ、根本的な利益において両者は一致した。この点において両者はともに「官僚階級」の構成要素に過ぎないと、橋は主張したのである。橋が官僚を一つの社会階級として捉えたのは、彼の家族制度に対する見方と関わっている。

橘樸の家族制度に対する理解は、明かに湖南のそれと違う。彼は、家族制度を「民族又は国家の社会構成と其の機能とを維持する目的を以て人為的に組み立てられたる家族生活の規範である。それは家族生活の後に発生して其の内容に干渉する」ものとし、「支配階級の文化的及び経済的要求に副うて制定せられるもの⁽²¹¹⁾」であると定義づけたのである。

橘によれば、中国の家族制度は遠く周初期まで遡れる。封建時代の「家」というものは、「士なる政治的社会的特殊地位を有する家族⁽²¹²⁾」であり、その「血統が家及び身分と不可分的に結附いて、此の三位一体の存在が政権に依って保証されたもの⁽²¹³⁾」である。秦から五代までの家族制度の社会的基礎は、やや拡大した。それはなぜかという、封建制度の崩壊とともに、自由民——橘によると、それは「商人・自作農及び手工業者⁽²¹⁴⁾」であったものが発生し、支配階級の家族制度を模倣したからである。

中国現行の家族制度は、宋の時代に発生し、且つしだいに社会の下層まで浸透していった。その原因について橘は次の如く説明している。

貴族の没落につれて其の荘園から解放された半自由民なる多数の農民が自由を獲得したばかりでなく、唐代を通じて発達しつつあった国民経済組織が宋に入って益々充実したと同時に、製紙及び印刷術の発達普及から学問の民衆化と云うことが長足の進歩を見た。被支配階級側に於ける此の急激なる社会的経済的文化的発展は、為政者が其の政治的便宜から企図した宗法的家族制度民衆化の推行に極めて好都合のものであった。⁽²¹⁵⁾

さらに、社会階級としての官僚が「階級性を取得するに至ったのは家族制度の自動的作用に基づくものである⁽²¹⁶⁾」と橘は述べた。内藤湖南が言った「名族」というものは、橘の場合では、貴族時代の世襲的身分たる「宗」そのものであったと言えよう。橘は続いて、「宗」と「家」を区別して次のように述べている。

封建及び貴族時代には宗が必然之れを保有する人又は家の政治的乃至社会的身分を決定するものであったに反し、解放的なる官僚階級支配の時代に入りては宗の階級的性質が殆んど全く失われ、其の結果宗又は家と身分との関係は断絶した。前の時代には世襲的身分又は階級の觀念に重心を置いて居た家族制度が、新しい時代に入っては斯くの如き客観的要素を失い、従って何か之れに代るべき基礎を得て其の社会的地位又は勢力を維持する必要に逢着したのである。かかる変化の当然の帰結として、所謂宗法の伝統的精神に動揺を生じ、形式的には兎に角實質的には以前と反対に宗より家の方が家族制度の重心たるに至った。⁽²¹⁷⁾

こうして、「家は申す迄もなく、主として具象的な存在であるが、宗は之れに反し主と

して抽象的な存在である。祖先崇拜なる半宗教的情操が其の血筋を引いた一団の人々を統合する作用の上に宗の心理的根拠がある⁽²¹⁸⁾」という考えが導かれた。

要約すれば、橋は唐から宋にかけての変革の中に、次の二点を発見した。第一に、家族制度の中心的な要素は、貴族時代の世襲的身分の抽象的な象徴たる「宗」が、宋を経て、より具体的で、社会的機能を持つ「家」に移ったことである。第二に、貴族の専有物たる家族制度が、宋以後から次第に社会全体まで浸透していき、官僚階級はそれを利用してその勢力を社会の各部門において樹立することができたという二点である。ここに、家族制度について橋樑と内藤湖南の理解の違いが見出されるのであろう。湖南のほうは、貴族にせよ官僚にせよ、ただ政治エリートたちの家族制度を対象とし、それと庶民との関連性にあまり注意を払わず、権力の転移のみを基準としていたため、中級・高級官吏と低級の胥吏をそれぞれに把握したのに対し、橋はむしろ、家族制度の共通性から出発し、官僚がその制度を利用したため、一つの社会全体をわたっている社会組織になった、として捉えていたのである。

上述したように、橋から見れば「社会組織は、民衆の「性情」の集中的な体现であった」と述べたが、家族制度及び家族組織は、まさに橋が把握した中国社会の「性情」の根底であったと言えよう。

(3) 農村の危機：人口過剰、土地の過小分割と問屋工業の破産

前に述べたように、橋によれば、家族組織は、中国社会の「性情」を構成する中心的要素である。唐から宋にかけての変動を経て、家族組織の範囲はしだいに、支配階級と被支配階級を含み、社会全体まで拡大していった。この変化が一般民衆にどのような影響を与えたのか、あるいは、民衆はどのように家族組織そのものを運用していたのかということについて、以下検討する。

①家族組織：中国社会の根底

筆者は第一項の③「官僚と家族制度」において、家族共産制の原則に従えば、官僚個人の権力がすなわちその家族の共有する権力であると述べた。官僚はまさにその原則を通じて、一つの「全体社会の全面に及むで居る」社会階級となったのである。それに対して民衆は、血縁集団を基本単位とし、家族組織の互助精神を利用し、家族内の成員の物質及び精神の要求を満足させるだけでなく、外部の侵害に抵抗していた。

橋樑の中国史観を顧みると、民衆がそのような家族組織を持ったのは宋からであった。秦漢から唐にかけては、貴族階級がその支配権を握り、自由農民がほとんど貴族の荘園に吸収され、農奴的生活を送っていたのであるが、唐末五代の乱世を経た後、貴族の荘園が崩壊し、大量の自由農民はそこから解放された。この変化は農奴にとって、人身の従属関係の束縛と搾取からの解放であった一方、保護者を失った無秩序の状態に陥った原因でも

あった。こういう無秩序な社会状態が、いつの間にか再び動乱を引き起しかねないと考えていた宋の支配者たちは、それを防止するために、自由農民に一種の社会組織を与えた。それはすなわち「家族主義に依る農村社会の組織⁽²¹⁹⁾」で、詳しく言えば「男系の血統に沿うて家族団体及宗族団体の結束を固め、これを基礎とした村落自治体を編出す⁽²²⁰⁾」ということであった。橘はその性質に基き、それらの自治体を「父権の自治体⁽²²¹⁾」と呼んでいたのである。

一つの家族が、一つの村落を構成した場合もあり、数個の家族が村落を構成した場合もある。「父権の自治体」という原則は、「数家族から組織された場合でも矢張此の原則が行われる」ことから見れば、中国の郷村は、すなわち家族組織の拡大と見てもかまわないのであろう。橘は、家族そのものを、中国郷村の基底と見なしていた。彼は中国社会の構成を次のように説明している。

支那民族の形作って居る全体社会は家族なる小さい部分社会を其の成立の根拠とするものであります。此の単位が血縁に沿って結合したものが所謂宗族である、宗族は祖廟をその精神的中心として結束し、全体社会に対して第二の単位であると同時に一箇又は数箇の宗族が結びついて村落自治体を形作る。……支那人の社会生活は村落生活に依って完全に代表されて居る……⁽²²²⁾

「家族」は中国社会の根拠である。この考え方は、アーサー・スミスの観点に関する橘の評論においてもよく示されている。アーサー・スミスはその「Village life in China」の中で、郷長の選任について次のように書いている。

郷長となるに適する村民の性質は、他の一切のビジネスに於ける成功の資格と同じものである。且つ彼は其双肩に投げかけられるところの有ゆる事件に対して、無際限な時間と注意を喜んで且つ有効に捧げ得るものでなくてはならぬ。⁽²²³⁾

スミスの観察によれば、ある人が郷長になる為に最も重要な素質は、ビジネス経営と同じくような能力そのものであった。橘はスミスに敬意を払いつつも、彼の観点を「家族を全体として取扱わずに西洋流の個人主義的見地から描写し、然らざれば経済的見地から之を説明しようと企てた為に、所謂龍を描いてその睛を点ずることを忘れた恨みがある。況んや村落の自治を記すに当っては其構成分子たる家族に就て殆んど何等の注意を払って居ない」と論じ、そのうえで、「郷長の選任が其实選挙に非ずして指定であることはスミス氏の説く如くであるが、然らば其指定者は何人であるかと言うにそれは最も厳格に各族の有力者に限られて居る⁽²²⁴⁾」という評論を加えたのである。(下線は筆者による)

家族組織或は家族制度はもともと、朝廷と人民との共通利益の上に機能していたもので

あったが、官僚階級は朝廷と人民の間に介在して利益をあさるゆえ、朝廷と人民との対立及び衝突を惹起した。したがって民衆の家族組織の機能には、精神また物資的要求を満足させ、社会の安定を維持するほか、官僚の搾取及び外来の一切の侵害に対する防衛の任務が加わった。橘はその変化について、「支那社会組織の根底をなす所の家族、宗族及村落と言う三段の結社は、血縁及地縁の自然的紐帯に依て結び付けられて居る許りでなく、又社交本能とか経済的欲望の満足とか言た種類の平和な関係に依って結び付けられて居る許りでなく、前記の結社が一旦成立した上は、その存在及利益を侵略者に対して擁護する為めに、深刻なる団結意識の発生を促すのであります⁽²²⁵⁾」と述べたのである。郷村の自衛組織として、橘は「保衛団」というものを取り上げた。つまり、「村落に発生した真の意味での自治的防衛組織は所謂保衛団であります。保衛団の単位は申す迄もなく各村落であります。土匪や軍隊の力は大きくして到底一村の手に負えるものでない、そこで彼等は必要に応じて数箇乃至数百箇の村落を結合し、仮想敵の大いさに応じて有力な団体を作らなくてはなりません⁽²²⁶⁾」ということである。郷村の保衛団は、橘によって中産階級の自衛組織に数えられるが、このことについては、後に中産階級に関する部分で論じることにする。

②人口過剰と土地の過小分割

これまで、橘樸の中国郷村における家族組織の発生、成長及び機能に関する観点を整理したが、このような家族組織は、近世の推移にしたがって重大な問題に直面し、崩壊の危機に追い込まれていた。橘によれば、その問題とはすなわち「農村の人口過剰」であった。1930年4月、橘樸は『上海日報』で「永久飢饉論」という論説を発表し、中国農村の飢餓問題を「永久飢饉」と名づけ、「農村の生産が永久的に急激又は緩慢に破壊せられ、且つ其の為に相当広い地域内の社会が食糧の缺乏から悲惨なる生活状態に陥ることを意味する⁽²²⁷⁾」と定義づけたのである。永久飢饉を誘致する原因について、橘はそれを明の中葉に発生した人口過剰の現象に帰した。曰く、

宋初から明の中葉に亙る約六世紀間、国民は民族及び宗族組織の保障の下に自由を拘束されつつも而も物質的には安全な生活状態に対して大体満足して居た様である。明の盛時に於ける打続く泰平の為に人口が急速に増加した結果、先づ宗族組織内に相対的人口過剰現象が現はれ、貧民は徐々に彼の属する血縁団体から排出されて所謂流民（ルンペン・プロレタリア）となり、組織内の弱者すなわち婦人及び少年者の不平が漸次台頭して来た。⁽²²⁸⁾（下線は筆者による）

それゆえ、家族組織は、成員の生存を維持することさえもできなくなった。つまり、

明の中葉以後に起った人口増加の勢は家族・宗族団体の場合と同じく、部落団体の社会政策的機能を消滅せしめ、従って部落習慣中の相互扶助に関する部分は、各部落の過剰人口すなわち失業貧民に対しては事実上其の適用を中止される。⁽²²⁹⁾

橘樸の考察によれば、中国社会をなす基礎たる家族組織は、人口過剰の問題にしたがって漸次に崩壊の一途を歩まざるを得なくなった。同じ現象は清朝においても起こった、それについて橘は次のように言う。

康熙から乾隆に亙る引続いた平和及び経済の発達に伴って、人口の急激なる増加が行われた。支那本部の肥沃にして交通便利な地方は乾隆の末年頃から一般に人口の過剰に苦む様になった。人口の増加に依って農村に所謂収入遞減の法則が行われ出すと、宗族制度の族人を包容する力はそれと正比例して減退せざるを得ない。……宗族制度は乾隆の末年から下り坂に入ったものと認めざるを得ない。此の下り坂に当って第一に圧迫を感じるものは無産者であることは云うに及ばない。曾ては無産者の憑依であったと思われる宗族制度も、今日では寧ろ彼等を苦めるところの桎梏に過ぎない。⁽²³⁰⁾ (下線は筆者による)

人口過剰の発生した時間に関して、橘は「明の中葉」と「康熙から乾隆に亙る」という二つの時期を取り上げた。それは彼の中国に対する研究の段階の差によるとも言えるが、別に矛盾したものではない。橘はむしろ「明の中葉」の出来事を人口過剰という大きな趨勢の遠因であるとし、「康熙から乾隆に亙る」時期の出来事を近代以来の中国の乱世を誘発する直接的な原因としていたと考えられる。

次いで、橘樸は農村の人口過剰をもたらした原因を、経済組織及び生産方法の停滞に求める。曰く、「交通が開けず、二千年来其経済組織や生産方法に著しい変化の起らなかった農村に在っては、土地は既に早やくから収穫遞減の法則に支配せられて際限なく増加する人口を養うに適しない。中産以下の農民が此の困難な環境に順応する方法として、職業を変えるか或は人口の稀薄な地方に向って出稼ぎ乃至移住を行う外に生活の安定を得る道がない⁽²³¹⁾」。また、橘はさらに熊徳山（中国の歴史研究者、社会学者）の『中国社会史研究』を引用して、「生産力の発達を規定する第一要素は申す迄もなく器具又は機械の発達であるのに、支那では農業用の器具が二、三千年来変化していない。其間に何百万倍か上昇した人口は僅かに耕地の増加、経営の集約化から生ずる拡大生産によりて養われ、なお不足する分は生産標準の低下や死亡率の高騰によりて決済される外はない⁽²³²⁾」と、中国の生産器具の停滞性を説明している。

続いて、橘樸は人口過剰と相まって中国の相続習慣すなわち男子均分制が土地所有の過小分割をもたらしたと論じた⁽²³³⁾。土地の過小分割を免れ、労働力を保有して其の効率を

高め、また家門の名誉と幸福とを誇るために、中国社会は支配者の提唱とともに自ら「大家族制」を確立し、幾世代の家族成員をして一つの大きな家族団体を維持しようとしたにもかかわらず、前に提示した生産力の停滞、人口の増加に加えて、地方官の悪政、土匪の掠奪及び「家族の不和又は過失・天災人変等⁽²³⁴⁾」の原因のために、大家族制は決して長く持続せず、崩壊する一途を歩まざるを得なかった。それゆえ橘は、「支那の伝統的相続習慣たる男子均分制と農村に於ける人口過剰とは、土地兼併の趨勢を抹殺」し、「農業経営に於ける資本家的機構を孕み出す余地」がなくなったことを説いた後、「土地所有又は保有状態の過小なる分割、之れが近代支那に於ける社会的疾患及び経済的苦悶の源泉である⁽²³⁵⁾」という結論に到達したのである。

こうして農村の生産力はすでに、急速に増加してきた人口を養えなくなったため、大量の農民は家族共同体からの排出を余儀なくされた。彼等は生存のために、人口の稀薄な地方へ移民するか、あるいは問屋工業で働き、僅少な収入を以て生きるか、いずれかの選択肢を選ばざるを得なくなったのである。

まず、移民のことを検討していこう。橘樸の考察によると、移民には、海外移民と国内移民という二種がある。海外に移住した人は、広東や福建の民衆を主とし、その目的地が主に東南アジアすなわちマレーシア、インドネシアまたフィリピンなどにあり、一時的出稼ぎの場合が多かった。それに対し、国内移民の方は、「一時的単独出稼が多く永久的家族移住となり、最初から永久的家族移住者として出発するものも少からぬ⁽²³⁶⁾」ということであった。橘は農村の寺廟などにある古碑の記載を観察することで、国内移民の動向と時間を推定した。例をあげると、橘は「北満洲は山東及び直隸、綏遠・察哈爾は山西・直隸・山東・河南、西康は四川の過剰人口を吸収したのであるが、此等の各省に人口問題の発生したのは康熙末年以後のことで、移民の流れが現実に辺境地方に押寄せたのは恐らく乾隆時代以後のことであろう⁽²³⁷⁾」と推定した。ところが、国内移民といえども、農村の崩壊の速度には到底及ばない。ルンペン・プロレタリアに墮落した貧民たちは、土匪か軍閥の兵士になるほか、生きる道がなくなった。また大規模な移民の事業の遂行や、軍備軍隊の縮減などを実現するには、一つの統一した国家組織が絶対不可欠であった。しかし、官僚の新形態としての軍閥が存在する限り、如何に美しい計画としても、実現する見込みはなかった。この現実の厳しさは、1920年代前後に盛んに進行していた湖南の「連省自治運動」の失敗によって裏づけられた。

③湖南「連省自治運動」及びその失敗

政治学者塚本元はその著作『中国における国家建設の試み—湖南 1919～1921年—』の中で、1920年代前後に各地に湧き出た連省自治運動の誘因を、各省のエリートや民衆における、中国の南北対立(北京政府と広東政府)と軍閥割拠の現状に対する絶望に求めた。1918年末、北京政府は内外の圧力を受けて武力統一の政策を放棄せざるを得なくなり、南方の

広東政府（孫文）との和議を締結しようとした。1919年2月、上海において「南北平和会議」が開かれ、辛亥革命以来の動乱の苦しみを味わった国内の輿論がこの上海会議に大きな期待を寄せた。しかし、1919年5月、上海会議は様々な問題に関して南北の利益が衝突したため、なんら成果をあげないまま決裂したのである。塚本はこの点について次のように述べた。

上海和平会議にかけられた中国統一への期待は裏切られたのであった。その期待が大きかっただけに和平会議の決裂に対する失望は大きく、それが北京政府と広東政府への不信、不満へとつながっていった。すなわち、現在の北京政府及び広東政府によっては中国における国家建設は実現できないとの認識が中国全体にかなりの程度広がってきたのである。これは、一九二〇年代前半に北京政府、広東政府とは別個に中国における国家建設をめざす様々な運動——連省自治運動がその最大のもの——が展開される重要な前提条件であった。⁽²³⁸⁾

湖南の連省自治運動は、「湖南人が湖南を治める（湘人治湘）」というスローガンが示しているように、一種の「湖南モンロー主義」（塚本の語）であった。五四運動の影響のもとで、湖南支配層によって「駆張運動」（北洋軍閥政府の湖南省の代理人張敬堯を湖南から駆逐する運動）が勝利を収め、1920年7月に、湖南本省人の譚延闓政府が成立した。当時の譚政権のもとで、湖南支配層は「省政府高級官吏、長沙総商会、省議会、長沙公団勢力、湖南軍幹部⁽²³⁹⁾」という五つのグループから構成された。これらの勢力は互に協調、対抗しながら、連省自治のビジョンの最大公約数を持っていた。すなわち、「(1) 中華民国現状に対する絶望から出発し、まず湖南の自治を実行する、(2) 自治を実行することで省政治の民主化を行い、これによって新たな湖南を建設する、(3) 他省が自治と民主化を実行するのを待ち、自治と民主化を達成した省が連邦を形成することで、中国において「真正の統一国家」を建設する⁽²⁴⁰⁾」ことを目指していたのである。

湖南のエリートたちが連省自治に多大な期待を寄せていたにもかかわらず、成立したばかりの譚延闓政府はまもなく、財政の困難という最大の障害に直面した。1920年11月末に公表された民国九年度の省政府収支の統計によると、湖南の年収入の1000万元に対し、軍事関係の支出は驚くべきことに3600万元に達した⁽²⁴¹⁾。軍事費負担は、湖南省政府にとって最大な難問であった。軍事長官や軍隊に相応した給料を払わないと、他省の軍閥に対する防衛と本省の治安の維持ができなくなるだけでなく、大量の貧民及び流民を收容する場所も失うことになるのである。譚延闓政権は、この問題をうまく解決し得なかったため、1920年11月中旬から湖南軍の実力者の反対に直面し、僅か四カ月の寿命を終えた。つまり、財政難が譚延闓政権を崩壊させた最大の原因であった。塚本元は続いて、そのことを中国社会がかかえた構造的な問題と見なし、次のような結論を打ち出している。

省政府の財政難の最大の原因は過大な軍事費支出にあったから、軍隊の規模を縮小することによって財政支出を削減することが、財政難の解消のためにはまず第一に必要なであった。軍隊問題の解決なしには財政難の根本的な解決はありえなかったのである。しかし、生活に困窮した貧農、流民が生計の資を得るためにやむを得ず兵士になるのが一般的であるという当時の状況においては、除隊兵士に対する十分な対策なしに単に軍の削減を行うことは、生計の道を絶たれた元兵士の匪賊化をもたらすのみに終らざるを得ないのである。⁽²⁴²⁾ (下線は筆者による)

この結論を見ると、貧民や流民が兵士になるか、それとも土匪になるかという状況は、湖南省のみでなく、中国にわたって普遍的であったことがわかる。軍閥を倒し、生産力を向上させ、強力な国家を建て直し、全国的な政策を樹立しなければ、こういう問題は永遠に解決されずに残される。それに関する議論は、次章に譲ることにしよう。以下では橋樑の提示した問屋工業のことを振り返ってみたい。

④問屋工業の破産

橋樑は、家族、宗族あるいは村落共同体からの排出を余儀なくされた貧民たちは、「其の余剰労働力を利用して営む内職すなわち家庭仕事及び家内工業（問屋工業）の形を取って現われる⁽²⁴³⁾」と述べた。問屋工業、すなわち問屋制家内工業は、「分散した家内手工業を商人である問屋が官吏、統括するシステム⁽²⁴⁴⁾」である。橋によれば、それは「旧支那社会に於ける資本家的生産関係の主要形態⁽²⁴⁵⁾」、ということである。橋は、中国の問屋工業の発生を、「商業資本の発達は南北の経済交通が発達して所謂国民経済の成立した⁽²⁴⁶⁾」随の時代に置いた。その発達は、明の万歴時代であった。なぜなら、「支那本部の土地肥沃且つ交通便利な地方の大部分が此の時代までに人口の飽満又は過剰状態を呈し、都市及び近郊農村の安価なる過剰労働力が所謂問屋工業の飛躍的な発達を刺激し、それ以来此の比較的新しい生産様式が、手工業を超えて、旧支那に於ける中心的産業組織と成るに至った⁽²⁴⁷⁾」からである。言い換えれば、明の中葉以後に発生した人口過剰あるいは労働力過剰は、その過剰な労働力を問屋工業に送り込んだため、問屋工業の繁栄をもたらした、ということである。その時代から問屋工業は、中国の失業した貧民にとって、僅少な活路の一つになった。

問屋工業の存在のために、中国社会は辛うじて脆弱な平衡を維持できたのであるが、1840年の貿易開放以来、中国の問屋工業は西洋の近代大機械工業の圧迫を受けて破産しつつあった。ゆえに、「問屋工業の衰微は人口稠密地方の都市及び農村に於ける家内仕事の大部分を、それにより辛うじて生計を支へて来た貧民の手から奪ひ去り、従って旧社会安定の最も重要な経済条件の一つが失はれる⁽²⁴⁸⁾」ことになったのである。農民の最後の活路も

それによって絶たれたと言える。

人口過剰、土地の過小分割及び問屋工業の破産はすべて、中国社会の根底たる農村及び家族組織に致命的な打撃を与えた。それらの問題を解決しないと中国は滅亡の一途を歩まざるを得ない、というのが橘の主張であったと言える。この問題を解決する前提条件は、官僚階級及びその新たな形態たる軍閥を打破することである。次項において、橘における官僚階級が中国社会の進歩を阻害した作用を分析する。

(4) 「真のアジア的生産様式」

①アジア的生産様式とは何か

いわゆる「アジア的生産様式」は、カール・マルクスが東洋社会の経済形態を把握するために用いた言葉であった。マルクスはその『経済学批判』序言（1859）において、「アジア的生産様式」を「古代的、封建的及び近代資産階級的生産様式」と並立的に提示し、これらの社会経済形態をすべて、人類社会の前史として捉えたのである⁽²⁴⁹⁾。それに加えて、「インドにおけるイギリスの支配」（1853）において、マルクスはイギリス支配下のインドをアジア社会の一つの標本とし、その特徴を、治水や灌漑の要求に応じて生じた政府機能の肥大化と、農業と家内工業との結合によってもたらされた自給自足の村落経済形態に求めている⁽²⁵⁰⁾。

マルクスのいわゆる「アジア的生産様式」というものは、一種の歴史的概念であり、時期によって変わるものであった。中国社会科学院の研究者趙一紅は、マルクスの「アジア的生産様式」に対する認識を次のように四つの段階に分けて分析した。第一の段階は、西洋諸国の植民地主義が東洋に浸透していったとともに、マルクスも東洋社会の問題に関心を払い、米国の新聞『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙（中国語で「紐約毎日論壇報」）で、彼の東洋に関する一連の論説を発表し始めた時期である。この時期、マルクスはアジア的社会という概念を明確に打ち出し、それが西欧社会と全く異なるものであるとした。第二の段階は、1857年から1858年にかけて『資本論』の創作と完成の時期であった。マルクスは資本の起源、地租、商業、高利貸しなどの現象を突き詰めた後、東洋社会に関する研究も一層深めていき、村落土地の公有制及びそれに基づく土地国有制が、東洋のみでなく、人類の歴史の早期における普遍形態であったという認識に到達したのである。第三の段階は、マルクス晩年の『人類学メモ』や『民族学メモ』などによって代表されている。マルクスはこの段階において、東洋社会の土地所有制及び村落制度を研究することを通じて、東洋の社会経済構造が西洋のそれと根本的に違い、西洋社会のモデルを東洋に当てはめていけないことと、東洋社会には西洋的な封建主義そのものがかつて存在しなかったことを力説していた。東洋社会の歴史的位置やその方向性というものが、マルクスにおいてしだいに顕現してきた。第四の段階は、1870年代後半からマルクスの死までの時期であった。この段階は、「ザスーリチへの手紙」（1881）が示しているように、マルク

スはアジア的生産様式の前途を展望し、ロシアのような東洋社会は、資本主義の段階を経ずに社会主義社会に到達することが可能だ、と主張していたのである⁽²⁵¹⁾。

したがって、趙はマルクスが見た東洋社会の二つの基本的な特徴を、「土地の国有化」及び「自給自足の村落制度」としてまとめたのである。これこそが、マルクスの「アジア的生産様式」の根底だと言える。

第一の特徴について、マルクスはかつてエンゲルスへの手紙の中で、「東洋（彼が指すのはトルコ、ペルシア、インド）の一切の現象の基礎は、土地の私有制が存在しなかったことにある。これこそが、東洋天国を理解する真のカギだ⁽²⁵²⁾」と言っている。なぜ東洋において土地の私有どころか、封建的私有制度さえも存在し得なかったのか、という問題について、マルクスはその原因を人工灌漑の要請に帰している。気候や土壌の条件のために、人工灌漑は東洋の農業の前提条件であった。そういう事業は、村落、省或は中央政府の力なしに実現できなかったため、土地の所有権は最初から個人ではなく、村落の公社に握られたのである。しかも国家は、最大の地主であり、公社のような一切の小共同体に君臨している「唯一的所有者」でなければならなかった⁽²⁵³⁾。もう一つの原因は、生産力の低下である。「インドにおけるイギリスの支配」において、マルクスは節水や共同用水などが人類の普遍的な要求であると認め、こういう要求がかつて「フランドルやイタリアにおいて、私人企業家の自覚的聯合を促した」のに対し、「東洋は、その文明の程度が低すぎ、領土が広すぎたため、自覚的聯合を生み出すことができなかった。それゆえ、中央集権的政府の干渉が必要だ⁽²⁵⁴⁾」という結論を打ち出したのである。言い換えれば、東洋の経済構造における国家の重要性は、個人の団体に対する高度の依赖性（人工灌漑）と、村と村との分散状態（生産力の低さ）の当然の帰結であったと言える。

第二の特徴は、農業と家内工業の結合を内容としている自給自足の農村公社制度である。こうした農村公社は、いわゆる「東洋的専制制度」の経済的基礎であったと言われている。このような制度は、専制政府の圧迫に抵抗することに役立つ一方、そこで「競争」が拒否されたため、工業や農業の生産力の発達を抑制していたのである⁽²⁵⁵⁾。マルクスは、東洋社会の「停滞」をもたらした直接的な原因は、まさしく農業と家内工業との結合を内容としている自給自足の自然経済構造そのものであったと見做した。彼は「これらの自給自足の公社は絶えずに、同じ形式によって自己の再生産をなしている。たまたに破壊に遇ったとしても、かれらは同じところで同じ名称で再建する。こういう公社の簡単なメカニズムは、次のような秘密を明らかにするために鍵を提供してくれる。アジア各国は崩壊、再建また王朝の交替を何回も繰返しているのに、アジアの社会はかえって変わっていない。このような社会の基本的な経済構造は、政治領域の嵐によっても動かなかった⁽²⁵⁶⁾」と、東洋農村公社のイメージを描いている。

東洋がこういう構造を持つために、自己の内部から根本的な革命を生み出す可能性がなかった背景のもとで、西洋のアジアに対する植民侵略は、客観的に歴史的な役割を果たした

とマルクスは主張していた。冷戦時期、この論説が帝国主義の侵略を合理化するために利用されたが、ここでは詳しく論じない。目を転じて橋樑の「アジア的生産様式」に対する評論を振り返って見よう。

②官僚階級の搾取方式

1927年4月12日の蒋介石のクーデターと、7月15日の汪兆銘の武漢国民政府の反共決定にあって、中国の国民革命は大いに挫折した⁽²⁵⁷⁾。この緊急な事態に対処するために、中国共産党は同年8月7日に、臨時中央拡大会議を開催し、労農運動を推進して可能な場所で暴動を起こすべきことを決定したのである。一連の武装蜂起を経た後に、11月9日から10日、共産党中央は緊急会議を開き、「中国共産党土地問題党綱草案」を農民運動の指導原則として策定し、急進主義の革命政策を採用した。

「草案」はまず、中国の社会経済制度を「マルクス、レーニンの所謂アジア的生産方法」と捉えた。以下は橋による「草案」の翻訳の引用である。

支那の農業経済と土地関係とは、現代資本主義の行われる欧米と同一でない。此の相異の最も重要な前提は支那生産の自然的環境及び其の歴史的発展の特殊条件に在る。支那の農業生産方法には幾多の特徴があつて、それが農村経済の特殊状態を生み出した。すなわち水利改良（人工灌漑）の重要を意識し、水旱害調節の為に多量の道具と工事とを必要とした。次に支那本部の重要地方に牧畜業が無い結果、農村経済中役畜の使用が比較的少い。また休閒法を行わない農業であるから、多量の施肥を必要とし且つ多量の徒手労働を空費する。斯くの如き農業生産方法に加えるに、商業及び高利貸資本が早くから発達している。遊牧民族の侵略及び水害を防衛する必要から長城や運河や黄河堤防などの巨大な土工が起され、天災に応ずる為にも又種々なる救済組織が営まれねばならない。遊牧民族を征服し得た場合には彼等を強制して農業民族たらしめねばならない。支那の社会経済制度は、実に此等の事情の総合から出来上つたものである。すなわちマルクス、レーニンの所謂「アジア的生産方法」の制度である。支那国内の無数の小農経済は實際上の相関関係の薄いものであるが、併し支那には非常に古くから一見統一的な国家政権が発生した。人工灌漑は此の国家政権の物質的基礎の一つであり、支那官僚制度の絶大なる作用も亦之れに原因する。支那の官僚は単に地主及び商業高利貸資本の利益の政治的代表者のみならず、彼等自身直接に高利の搾取と大商業の経営とを実行する本人でもある。⁽²⁵⁸⁾

以上に見るように、「草案」はマルクス、レーニンの理論を継承し、人工灌漑を基本としながら、牧畜業の欠如、商業及び高利貸資本の発達及び遊牧民族に対する防衛という三つの要因を加え、「アジア的生産方法」を論じた。続いて、「草案」はこのような「アジア

的生産方法」の安定を長く維持する原因を、「農業と家庭工業との結合」の中に求めている。曰く、「農業と農民の家庭工業（紡織等）がお互いに結びついて、アジア的生産方法の内部に根強い安定性を与えた⁽²⁵⁹⁾」、ということであった。つまり「草案」によれば、「人工灌漑」は「アジア的生産方法」の基礎を構成したのに対し、「農業と家庭工業との結合」は「アジア的生産方法」に安定性を与え、それを長く維持していた要素であった、ということになる。

橘樸は、「草案」の取り上げた二つの特徴について実証的研究を行い、異なる意見を打ち出した。まず「農業と家庭工業との結合」について、橘はそれが「必ずしもアジアに限られた現象でない」とし、「中世末期から近世初期にかけ、すなわち所謂産業革命以前の欧羅巴諸国の地方経済組織は多く之れに属した」ものだと見なしている⁽²⁶⁰⁾。そして「水利問題の支那農業生産方法に与えた影響はそれが政治に与えた程明瞭なものとは認められない」、「人工灌漑」の範囲にも「南北に依りて著しい相違がある」、つまり「南方の水田地帯では灌漑が農業生産方法の基本を為すのであるが、北方の畑作地帯ではそれ程重要でなく、菜園等の僅少の地積以外は全く自然任せの状態⁽²⁶¹⁾」にある。

人工灌漑にせよ農業と家内工業の結合にせよ、橘樸から見れば、それらが「アジア的生産方法」の基礎をなしている要素とする考え方には、疑問の余地が存在していた。しかも橘は中国にせよ、ヨーロッパにせよ、その封建時代と貴族時代の発展の経路は「唯時間の相違がある⁽²⁶²⁾」だけで大体同じくであり、むしろ「唯支那は君主対貴族の闘争が唐末から五代に亙る二世期間（ママ）の大規模且つ深刻な内乱に依りて其の幕を閉じたところから、其の結果として生み出された新社会の構成が著しい点で欧羅巴と異なるに至った⁽²⁶³⁾」と主張した。「新社会の構成」とは、すでに述べたように、社会階級としての官僚が歴史の舞台に登ったことである。それに加えて、「社会の富は政治的搾取の道を通じて官僚群にかたよらざるを得ない⁽²⁶⁴⁾」ことが、中国社会のもう一つの特徴であった。周知のように、資本主義の生産様式が全社会においてヘゲモニーを樹立するために、資本の原始的蓄積—多数人の富が少数人に集積する—という段階が必要である。中国の旧社会において、資本の力を代表する商人や問屋工業の経済的搾取は、官僚階級の政治的搾取による集積の速度に及ばなかったため、原蓄の過程が阻害されたのみならず、商人や資本家自身も官僚資本から生れたものであり、後者と断とうとも断ち得ない関係にあった。それゆえ、中国は資本主義社会に入らずに、旧社会の末期の苦痛に喘いでいたのである。したがって橘は、宋以来一千年間の中国の政治経済及び社会的機構を特色付けている「官僚階級」の支配こそが、「真に所謂アジア的——少くとも支那的なる呼称に値するものである⁽²⁶⁵⁾」と結論づけた。

官僚階級には、文官と武官という二つの種類がある。血縁関係に基く家族組織は、文官の階級的基礎をなしたものであるが、そのほかに、同郷関係や学閥関係も文官のシステムにとって、不可欠の条件であった。ゆえに、文官たちは「所謂面子を保持する為に、親へ

の孝行と言う理由のもとに家屋を新築したり田地を買ったりする事が必要であり、同族又は同郷者を世話することが必要であり、名士や学者を優遇したり慈善事業に関係したりするさえ官僚生活の中の必要事項とされて居る⁽²⁶⁶⁾」のである（下線は筆者による）。このような生活が、大量の搾取と浪費をもたらしたのは当然であろう。文官に相對し、武官（軍閥）が社会に与えた破壊は文官のそれよりも一層大きかった。軍閥の毒害について、橘は不換紙幣の濫発、悪質貨幣の鑄造、無際限なる増税、内外債の増加、御用金融業者の詐偽的行為、阿片強制裁培などのほかに、「將校兵卒及び土匪無頼漢の横行掠奪、投機の流行、破産の頻出等の現象を誘発せしめる⁽²⁶⁷⁾」という事例を取り上げた。こうして見ると、生産力の向上が先に議論した人口過剰の問題を解決するための前提条件であれば、官僚階級そのものを消滅させ、資本主義を発展させることは、中国革命の当面の課題であったに違いない。

おわりに

本章は、橘樸の中国研究の特徴と、彼が官僚、家族及び農村の中に発見した中国社会の「性情」について詳しく述べた。簡単にまとめると、橘の中国研究の出発点は、あくまで「社会」に注目するという立場にある。彼によれば、中国社会の「性情」の中心的要素は、家族制度あるいは家族組織そのものである。官僚はまさしく家族組織を通じて一つの大きな社会階級となった。中国は二つの重大な危機を迎えていた。一つは、農村の人口過剰であり、もう一つは、官僚階級の支配である。この二つの問題がお互いに絡み合い、中国社会がそれによって破滅の道まで追い込まれる。以上のような認識は、橘の中国史観の骨子であった一方、官僚軍閥打倒を主要な任務とする彼の中国革命論の基盤ともなったのである。橘の中国革命論については、本論文の第三章で論じる。

Ⅲ 橘樸と中国革命——「革命同盟」の理論的構造——

はじめに

筆者は第二章において、橘樸が見た中国の二大問題が農村の人口過剰及び官僚階級の支配であったことを詳しく分析した。橘の論説を見ると、官僚階級は政治的搾取を通じて大量の富を集積し、資本の集積を妨げ、生産力の向上を阻止する、こうした官僚階級が中国の独自の存在であるとわかる。生産力が停滞したままであれば、人口過剰の問題が緩和する見込みはない。それゆえ、官僚階級を打ち倒すことが、橘の中国改造論の前提条件となっていた。だが、その官僚階級を打破する力はどこにあるのか、あるいは中国改造の「原動力」はどこにあるのか、という問題に直面した橘は、そこで「中産階級」という概念を持ち出したのである。筆者は本章で、橘の「中産階級革命論」に関する構想をめぐって論を展開してみたい。

1. 橋樑の中産階級革命論——革命同盟の理論的構造

(1) ダイナミックな革命同盟

① 「中産階級」とは何か

「階級 (class)」という言葉の語源たるラテン語「classis」は、ローマ市民の財産に応じた分類を意味している。「階級」という言葉を見て思い出すのは、社会の経済構造における個人の位置を明らかにするという、マルクス主義が提示した概念であろう。生産資料を占有し、雇用労働者の余剰価値を搾取するものはブルジョアジーであり、賃金を得るために労働力を提供するものはプロレタリアートである、というふうに理解されている。しかしマルクスの「階級 (class)」という言葉自体、少なくとも二つの意味あいを持っている。一つは「分類」であり、もう一つは「組織」というものである。両者をはっきりと区別することは難しい。また「分類」としての階級は、直接に「組織」としての階級を作り出すことはできない。ピーター・ブルッカーの『文化理論用語集』においては、「階級 Class」という概念に関して次のような解釈が付いている。

客観的な階級アイデンティティは「階級意識」を与えるものではない。というのも階級意識はまず、客観的諸条件の認識を、そして（少なくとも労働者階級のために政治化された形での）政治的意志を、さらに、そうして認識された不平等を解決するための（労働組合や政党の形をとった）階級組織を要求するからである。⁽²⁶⁸⁾

この引用からわかるように、「階級」という言葉は経済的カテゴリーを超えるものであり、政治、経済、社会の変動の際、立場の異なる人々によって再定義されるものである。だがその構図において、先の中産階級 (middle class) というものは、どのように位置づけられるべきなのか。これはややこしい問題であるが、「階級」が変動するものであると同じく、「中産階級」も変動していると考えられよう。中世ヨーロッパの、支配階級としての貴族、僧侶と被支配階級としての庶民という社会構造を覆すために、新興の都市商工業者、自由職業者などのような当時の中産階級 (middle class) を自称した人々も、後には便宜的に労働者階級 (working class) と自称するようになった。しかも「下層階級 (lower class)、中産階級 (middle class)、上流階級 (upper class)」というように、近代の社会構造が決定的に再編成されたのは、18 世紀後半から 19 世紀にかけての産業革命によってであった⁽²⁶⁹⁾。

中産階級のもう一つの英語訳語は「bourgeois」である。それはもともと、古フランス語からきており、自治都市 (borough) の住民 (borges) のことを指している概念である。その基本的な定義は「生活状態が安定していて支払い能力のある、信頼できる市民」というものであった。「bourgeois」は常に商売と関連している。「bourgeois」という存在は、

「middle-class」と同じく、資本主義の生産形態の各段階によって変動するわけであるが、「middle-class」が経済用語に近いのに対し、「bourgeois」は割と社会用語に傾いていると言える。ちなみに、マルクス主義以前の歴史における「bourgeois」は、貴族がそれにあたる人々に対して軽蔑を示す語として流行していたものであるが、もっと下の階級においては尊敬を表示する語として使われていた⁽²⁷⁰⁾。

以上の解釈によれば、「中産階級」は、歴史にそって絶えず変化していたことがわかる。とくに1990年代以降のグローバリゼーション及び2008年に曝露した資本主義の経済危機に及んでいる、今日のような変動の激しい時代において、中産階級に対して厳密な定義をつけることは、ほぼ不可能だとも言える。しかし、もし時代をヨーロッパの中世から近世への移行期に限定するならば、中産階級は新興の都市商工業者と自由職業者のことで、経済的にも社会的にも労働者階級より上位のものであるが、中世の支配階級たる貴族や僧侶に対する被支配階級の一員であったと定義付けることができる。中産階級の行動は、一時的に労働者階級と革命の同盟を結び、封建階級の支配を打ち倒し、ブルジョアの社会における覇権を樹立する、という経緯として説明されよう。

②革命同盟の構成：商人、学生、労働者、地主

中産階級に関する以上の説明は、橋樑のいった「中産階級」概念に当てはめられ得る。ただし、橋が革命の敵と位置付けたものは、封建貴族ではなく、官僚階級そのものであった。彼は『月刊支那研究』第一巻第二号（1925年1月）の「雑録 時評数則」において、次のように、当時の中国と大革命の前夜のフランスとの類似性と、中国の階級構成を分析している。

今日の支那社会の階級的関係は、大革命前のフランスのそれに似て居る。即ち社会の最上層に専制時代とその儘の貴族階級があり、その下にブルジョア及びプロレタリアの二つの階級がある。上位の階級は、十八世紀末のフランスにあっては貴族及び僧侶の構成するものであり、支那にあっては文武官僚が此の地位を占めて居る。中位の階級はフランスも支那も共に地主及び商人の構成するところに係り、下位の階級は何れも無産者からなりたって居る。無産者は軍隊編成の素材となって上位の階級に奉仕するものである……⁽²⁷¹⁾

つまり橋は、当時の中国をフランス革命前の情勢に照らし、「支配階級」のところに官僚階級を置き換えた。「被支配階級」には、「中位の階級」と「下位の階級」がある。「中位の階級」は、すなわち商人と地主であり、「下位の階級」は無産者であった。言い換えれば、官僚階級以外のすべての勢力は、被支配階級であり、官僚階級の支配を倒すために、一種の革命同盟を結ぶべきだ、というのが橋の見方である。しかも中国社会で実生活を送り、

中国の現実を心身ともに深く感受していた橋樑は、その革命同盟に対してより豊富で、ダイナミックな定義を与えたのである。その結果、官僚階級に関する定義がはっきりしたのに対し、「民衆は其全力を揮って彼等の剥削者たる軍閥及官僚を掃蕩せよ、これが支那青年の民衆運動の唯一の標語でなくてはいけない⁽²⁷²⁾」という橋の中国青年に対する呼びかけを見れば、橋の「革命同盟」に対する想像は、むしろ官僚軍閥の支配を打倒するためのすべての民衆の連合だ、というような比較的曖昧な概念となる。

革命の勢力の定義が曖昧になった原因は、中国の中産階級がフランスのそれより力が弱かっただけでなく⁽²⁷³⁾、彼らが官僚階級と深い絆を結んでおり、断とうとも断てない複雑な関係にもあったからだ。つまり「支那の大きな金持ち（士階級以外の）はその体面を飾り兼ねて社会的勢力を進める為に必ず士階級との間に血縁を作る……次に地方で一流の商店には大抵富裕なる士階級の資本が入って居る。……何れにしても専制政治の現に行われて居るシナに於て富がその社会の支配階級たる士の家に集り従って彼等が政治のみならず産業界の覇権をも掌握するのは当然の現象であろう⁽²⁷⁴⁾」ということであった。この「士階級」とはすなわち官僚階級そのものである。それゆえ、商人や地主を内容とする「中産階級」は必ずほかの勢力からの支持を求めようとする。これから橋の「革命同盟」の構成員及びそれぞれの役割を説明してみたい。

橋樑は中国改造の原動力を「民衆」としているが、それは具体的に「主として各省城の青年学生団体及総商会に代表せられ及指導せられる民衆⁽²⁷⁵⁾」であった。学生と商人が、「中産階級」の主な成員であり、官僚軍閥を消滅させ、中国統一の任務を担当しているほか、一部の地主たちも、革命の陣営に入る可能性がある、としている。つまり「尚此外に農会がある。……其会員は各省の有力な地主達であるから統一事業などになると或は熱を出さないとも限らない⁽²⁷⁶⁾」、ということである。こうして、橋は商人、学生及び地主を「新建国の主脳者⁽²⁷⁷⁾」と想定していたのであるが、労働者に関しては、彼の態度は以前は、はっきりしなかった。労働者が革命に参加することは、「先進国では自明のことだが支那ではそうは行かない。寧ろ大なる疑問に属する⁽²⁷⁸⁾」のである。なぜなら、筆者は前章で、橋が中産階級による中国改造の事業にとって、外国の援助が不可欠だと主張したことに触れたが、革命における労働者は、その「勢力はまだ微弱であって其社会的地位は甚だ低い」のみならず、「商人地主及外国政府は多分労働者を統一運動に参加させる事に反対する」可能性もある⁽²⁷⁹⁾。そういうことで橋は、中国民族を代表すべき団体の組織を論じる際、労働者が「暫く隠忍して彼等の利益及意思を青年団体の誠意に一任し自身は院外団の格で明に国内及国外の相手に対して必要且有効な運動を行うがよかろう⁽²⁸⁰⁾」と認識しているからである。こうして橋の革命同盟は主に、商人、学生及び地主という三つの勢力よりなり、労働者はしばらく圏外において活動するものでなければならない、という認識に至るのである。（下線は筆者による）

③商人、学生、労働者の「三角同盟」

次いで、革命の成員のエートスとその役割について、橋樑はまず、商人、学生、地主の組織を「生命は常に其中心に宿る……此組織を構成する各細胞の求心力は一斉に且不断に其中核に向って働く……」ものとして捉え、その中心たるべき勢力は商人団体でなければならないと説いた⁽²⁸¹⁾。この判断はもちろん、当時の中国を大革命前夜のフランスと喩えていた橋の観点の中に包含されている一方、後述するように、商工業者のギルド団体の有するエートスとも深く関わっている。

しかし商人団体自身にも問題がある。曰く「建国運動の中堅たるべき商人団体の弱点は臆病の二字で掩いつくすことが出来る⁽²⁸²⁾」、ということである。その臆病は、「第一は自覚の足りないことで第二は彼等の利己心から生ずる⁽²⁸³⁾」と橋は述べた。臆病はともかく、橋はそれより一層危険な弱点を商人団体が持っていることに気づいた。それは「各地方の実業家が有力であればあるほど其人と該地方に於ける軍閥官僚との関係が深いことである。……彼等は其情実及利己心から裏切者となり易い⁽²⁸⁴⁾」、ということである。その問題を修正し得る勢力は、青年学生と「上海を中心とする実業家中の新人一派」である。学生たちは「過半は社会主義の信者である」のに対し、上海の新人実業家は「英国風の自由主義を思想的背景とする真物の資本主義」そのものである⁽²⁸⁵⁾。社会主義思想の持ち主としての青年学生と新興資産階級たる上海実業家の任務について、橋は次のように説明している。

青年団体は其好むと好まざるとに拘らずこの若い近世資本主義者の団体を尊重し且共通の目的のためにこれと緊い握手をしなくてははいけない。この二つの団体が先ず努力せねばならぬことは全国の商人団体及一般民衆に向って彼等の新国家建設の計画を提示し其意義及効果を徹底的に了解せしむることである。唯これ丈の仕事にも相当の手数と月数とが要るのである。此宣伝が或程度まで信仰すると彼等は愈々商人団体の挙国一致的組織運動に着手すべきである。此段に着手すると同時に彼等は商人を激励して前記の諸弱点を打ち掃うことに努力しなくてはならぬ。⁽²⁸⁶⁾

次の労働者の役割について、橋樑の観点も時勢にしたがって変ったのである。第一次世界大戦の時期において、イギリス、フランス、ドイツ及びロシアなどの西洋列強が戦争の泥沼に陥ったため、それらの国々の中国に対する支配力が一時的に衰え、工業品の輸出が減少し、中国からの輸入品が増加した。それは疑いなく中国の民族工業伸張の機会であった。そのため中国の産業、殊に軽工業と日用品マニュファクチュアは、この間隙を利用して一定の発展を成し遂げた、それに伴って労働者の勢力もしだいに強まっていくのである。

1914年の第一次世界大戦の勃発から1922年までの期間は、一般的に中国民族資本の「黄金時代」と見られている。この繁栄期において、中国民間の紡績工場は22個所から64個所に、紡錘数も700014から2221000に増え、また製粉所も戦前の40個所から1921年の120

個所まで増加した。そのほか、マッチ、製紙、煙草、セメント、製油、製糖などの軽工業もそれぞれに成長を遂げたのである。外国資本の中国における投資の比率は、1913年の80.3%から1920年の70.4%まで減りつつあったのに対し、中国のそれは、1913年の19.7%から1920年の29.6%まで増加していた。1914年から1919年にかけて新しく設立された本国工場の数には379個所もあり、新しく投下された資本は1430万元にまで及んでいた。商工業の発展とともに、労働者の人数も増加し、1919年になると、すでに200万人程に至ったのである。⁽²⁸⁷⁾

それと相俟って、1921年に成立した中国共産党が積極的に労働運動に乗り出し、労働者に堅強な組織を与え、罷工を主とする労働運動を活発化させていた。この背景のもとで、労働運動はその第一回の高潮期を迎えていた。そのうち、1923年2月4日に始まった京漢鉄道（北京から武漢までの鉄道）労働者のストライキは、その頂点となった。京漢鉄道は当時の呉佩孚政権の財政の主な収入源であったため、ストライキは呉佩孚政権の残酷な鎮圧にあい（二・七虐殺事件）、失敗した。それにもかかわらず、橋はその事件に「学生商人労働者の三角同盟成立の気運が愈々熟して来た⁽²⁸⁸⁾」ことを見出したのである。つまり、「罷工は商人のおそれる所に相違ないがしかし軍閥の跋扈は一層商人の為に禁物である。従って商人と労働者は現在に於いても相容れない点があり将来は一層両者の破綻が著しくなるに相違ないけれ共共同の大敵たる軍閥の倒れぬ間は即ち政治革命の過程に於ては兎も角手をたずさえて進む事が出来る筈である⁽²⁸⁹⁾」、という意見であった。

労働運動の発展にしたがって、橋樑は今回の革命における労働者の意義についてしだいに重要視するようになった。1924年12月の「支那革命史論考（一）」という評論で、橋は太平天国はすなわち官僚階級に対する中産階級の闘争であったとし、「無産階級はその一小部分が軍閥に加担するほか、その大部分は意識すると否とに論なく、また好むと好まざるとに論なく中産階級に味方する……軍閥に加担する者は兵士であり、中産階級に味方する者は総ての産業に従事する所の無産者である⁽²⁹⁰⁾」と述べたように、労働者の役割を肯定した。さらに1925年の「五・三〇事件⁽²⁹¹⁾」の際に、橋は次のように積極的に労働者の作用を評価するに至った。

私の所謂ブルジョア革命にしても組織ある労働者の中産階級に対する援助あるに非れば満足な結果を挙げる事は出来ない。官僚軍閥に対する革命が中産階級及労働階級の Kooperation の下にのみ行われるものであるとすれば、其結果として現れた資本主義社会なるものは始めから欧米乃至日本を悩ましたる同じ名の社会組織と著しく実質を異にしたものでなくてはならない。⁽²⁹²⁾

こうして労働者階級は、橋樑の中産階級革命に関する構想のなかに、徐々に不可欠な地位を占めるようになったと言える。

④地主

最後に「地主」である。橋によれば、地主とは、「小農から家を興したものは至って少なく商人や高利貸しで地所を買い入れたものもある……⁽²⁹³⁾」ということであった。つまり橋が認めた地主は、一切の特権と関係せず、民間で自発的に成立した土地の持ち主であると言える。こうして橋樸は、地主そのものがすなわち農村の中産階級であるにほかならない、と述べている⁽²⁹⁴⁾。

地主はそもそも中産階級であるのみならず、軍閥に対抗する中国の農村組織の組織者でもあった⁽²⁹⁵⁾。前章で触れたように、農村組織は、家族制度に基づき、相互扶助の精神を以てその成員の精神的、物質的要求を満足させるのみならず、天災、土匪また官僚軍閥の搾取などの外部からの侵害を防衛する作用を持つものである⁽²⁹⁶⁾。橋は広東、福建で起った農民運動を「郷村の中産階級者が団結して、武力を以て地方軍隊の勢力を拒絶しよう⁽²⁹⁷⁾」とした運動だ、と捉えている。

橋は、地主を農村の中産階級と捉えていた一方、現実的には、地主の位置が官僚階級に独占された、ということも解っていた。彼によれば中国の地主は、「最も多いのは官僚で之に次ぐものは軍閥である⁽²⁹⁸⁾」ということであった。農村における官僚階級の代理人は「郷紳」⁽²⁹⁹⁾であるが、地主は「事実上その大部分が所謂郷紳である⁽³⁰⁰⁾」と述べられている。このような、農民自ら地主になった場合と、政治権力を利用して農村の土地を占有する場合とははっきり区別しようとしたやり方自身は、橋の「政治か民衆か」という二分法に基づいているのではないと思われる。

橋樸の持つ「政治か民衆か」という認識方法は、辛亥革命の「失敗」の現実を見たからこそ生れたものである。中国改造の問題において、政治エリートたちの試みは失敗した（軍閥混戦、南北分裂）が、民衆の間には、エネルギー及び可能性が存在している、という認識であった⁽³⁰¹⁾。このような認識から、橋は、農村そのものを政治から完全に独立した団体として捉えるようになる。例を挙げると、「支那人気質の階級別的考察」（1925年6月）において、橋はY.K. Leongの「Village and Town Life in China」を引用して中国農村の実態を以下のように説明している。つまり「支那の村落は自治的結合である。名義上は官僚の階級的連鎖を通じて中央政府に支配されて居るのであるが、事実上には地租の納附其他の例外を除いては、村落は中央政府から独立したもので、例えば英国の自治植民地が帝国政府から独立して居る如きである。……支那では、中央政府は極めて僅か村落生活に関与し得るに過ぎない。随って村落は産業、商業、宗教其他一切の事項に関して完全な自由を持ち、地方の行政、秩序及保護を行う。村民の幸福に取って必要とする處のものは、勅令や其他政府の手による事無く、凡てが任意な結合に依って供給せられるのである。警察、教育、公衆衛生、道路及運河の修理、点灯其他無数の仕事は、斯様な訳で一切村民自身の運営する處である⁽³⁰²⁾」、ということであった。（下線は筆者による）

⑤郷紳

しかしこのような村落組織において、「郷紳」の位置はどうか。橋の「政治—民衆」二分法にしたがえば、郷紳は明らかに官僚階級に属しているのであるが、事実はおそらくそうでない。

張仲礼の研究によれば、「郷紳」とは、郷村に生活している「紳士」そのものである。「紳」の古義は、士大夫の飾り帯である。その帯を着用できる人間は、みな身分が高く、特権を握っていた。中国の『辞源』によると、「紳」はすなわち高い功名或は官職を有する人々であった。「士」とは、学生或は学者を意味している⁽³⁰³⁾。王先明は直ちに、「紳」を退職した官僚として捉えた⁽³⁰⁴⁾。こうした意味で、退職した官僚「紳」と科挙試験を受けて官職を得ようとした「士」は、まさに現任官僚と異なった、官僚の未来態と予備軍を形作っている⁽³⁰⁵⁾。

19世紀の紳士階層の形成について、王先明によれば、清朝の中葉から近代に至り、科挙を通じて功名身分を取得した「士」の人数がしだいに膨張していったのに、官僚の数は不変であった。故に、任官できない官僚の予備隊は、漸次に沈殿し、ある固まった社会勢力となった。次いで、「捐納」（中国王朝で行われた、臨時財源を補うために、人民に功名また官職を与えて金銭や穀物を納入させた制度）は、清朝において科挙制度の補助として重要な機能を発揮するようになった。太平天国以後、清朝政府は財政難を救うために、「捐納」を大きく活用しはじめたのである。そのため、多くの人はいそれを通じて功名を獲得したが、前に述べた通り、その中の多くは官職を得られずに社会の下層に沈殿していった。退職して田舎に戻った文武官僚も加え、中国近代の紳士階層がそういう事情で成立したのである⁽³⁰⁶⁾。張仲礼の推算による、太平天国前の「生員」（すなわち学生）数が74万、太平天国後には「捐納」も含めた紳士層が140万以上まで増えてきたことは、紳士層の激増をしめしている⁽³⁰⁷⁾。

張と王はともに、紳士を政府と民間の仲介人、地方勢力の代弁者として捉えている。

張の研究によれば、紳士は、その地方の公共事業に対し、積極的な作用を発揮していた。彼らは官員と地方の仲介を担当し、官員に助言や援助を与える一方、地方の利益を代表している。平和の時期には、政府と紳士の主な利益が一致していたにもかかわらず、太平天国以後の「非常時期」に際し、紳士は、政府を支持するか、もしくはその権威に挑戦するか、という二つの選択肢に直面していた。太平天国鎮圧の名分のもとで、自分の軍隊、政治機関を樹立、財源をコントロールして私的勢力を培養した紳士も存在する。曾国藩や李鴻章は、その例であった⁽³⁰⁸⁾。王によれば、紳士階層の生成は、中央政府に対する巨大な遠心力を帯びていたから、清王朝の崩壊をもたらした、ということになる。皇権は神聖であるが万能ではない、と王は言っている。「紳士」そのものは、むしろ地方の実際生活を基礎とし、「神聖」の権力に対して挑戦し得る勢力であった。王は、中国の皇帝の権威を示し

た詩句「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣（この天の下に王のものでない土地はなく、地の果て（浜辺）まで王の臣でない人間はいない）」（『詩経』小雅・北山之什）に対して、「天高皇帝遠（僻地にあるので皇帝の威令が行なわれない）」（明・黄溥『閑中古今録』）という熟語を対峙させ、後者がまさに社会の紳士の権威に対する承認だ、と見なしている⁽³⁰⁹⁾。

紳士の問題に関して、溝口雄三は、中国の地方事業の上での「官」と「民」との間に「明確な境界線が存在しない」ことと、そこにある「紳」の存在の意義を提示したことがある。曰く、

日本のように官と民との境界が明確で、「官治」と「民治」の区分けも容易である国とは異なり、中国では「官治」と「民治」はさらに郷紳層の「紳治」を加えて錯綜し、あるいは互いに補完し合い、依存し合いあるいは相反発し合いながら、官・紳・民合同で「自治」を形成していた、というのが実態であった。⁽³¹⁰⁾

溝口はこのような地方自治について「郷里空間」と名付けた。彼は『中国思想史』という著作の中で、詳しく説明している。つまり、「明清期の郷里空間とは、官、吏、郷紳、民の有力層、一般民衆らが、宗教、ギルド、善会、団練などの組織やネットワークで交わりながら、社会的・経済的な共同関係を構成した地域活動空間または地域秩序空間で、宋代から民国期までつづいたものである⁽³¹¹⁾」、ということであった。

進んで溝口は、中国（清代）の「郷里空間」という地方自治の形態を分析する際、中央政府（皇帝）と地方自治体（郷里空間）との関係の複雑さに関して留意すべき点を次のように指摘している。曰く、

皇帝は「郷里空間」がもう一つの体制空間となることは容認しないが、体制内で膨張・成熟することには、むしろ協力的でありかつ唱道者にもなる（六諭衍義、康熙皇帝聖諭広訓、洋務運動）。その意味では清朝皇帝は逆説的な「自治」の推進者である。なお、中国の皇帝に冠せられる「専制」という用語も「自治」と同じく実態に即して検討されるのが望ましい。

「郷里空間」は自衛の武力を保有しそれが王朝保衛の補完物として機能した一方、清末に郷里の軍隊に成長と遂げ、やがて王朝の対立物となっていった。なお武力を存立させる原理は「愛郷」である。⁽³¹²⁾

以上の溝口雄三の論説をまとめると、中国の農村自治体は、決して政府や政治のレベルを離れて完全に自由独立したものではなく、むしろそれが「郷紳」を通じて政府や政治とある種の繋がりを持ち、時勢の変化によりその機能も変化する存在である、ということだ

ある。前に述べた、橋樑の「政治か民衆か」という二分法に基づき、既存の政治権力（官僚）と関係を持つすべてのものを「支配階級」のカテゴリーに入れ、「民衆的」なものとの線を画すようなやり方を、民衆の「純化」と名付けても差し支えないであろう。すこし脱線するが、ここでこの民衆の「純化」という発想法によって、橋は国民党や共産党などの革命党の、中国革命における役割を捉えかねたのではないか、という点を指摘しておきたい。

最後に、皇帝制度と「科挙」制度を前提としていた「郷紳」は、1906年「科挙」制度の廃止と1912年皇帝制度の終焉とともに、歴史の舞台から消え去るはずであったのに、なぜ1920年代の橋は「郷紳」という概念を繰返して提起していたのか、という問題が出て来る。ここで理解しなければならないのは、橋の物事に対する判断の基準である。彼は政治制度の変遷よりも、社会の変遷のほうを重要視していた。本論文の第二章を参照すると、橋が対象とした「官僚」は、行政機関の一環でなく階級意識及び利益を持つ社会階級であった、ということがわかる。社会階級としての官僚の「法制的身分は勿論世襲の目的物とならぬが、官僚なる社会的身分ならば支那の社会は容易に之れを認める⁽³¹³⁾」。しかも皇帝を頂点とした政治制度は、官僚階級の特権を保証するものであるが、皇帝制度が崩壊した後も、官僚階級は依然として生存できる。なぜなら、中国の家族制度あるいは家族組織は、社会の側面において官僚階級の生存を支えていたからであった。それゆえ、20年代の橋の論文に「郷紳」が出現したのも、不思議なことではない。

歴史の推移とともに、「郷紳」の中にも動揺が発生した。つまり官僚階級の内部で、現任官僚と官僚家族との間に、利益衝突が起こる。その現象について、橋は次の如く説明している。

官僚階級中のより大なる部分、即ち現任文武官僚以外の官僚家族が、主として経済的事情から現任官僚との間に利益の衝突を感じ、彼等との協働を避けてプチ・ブルジョアと接近する傾向を示して来た。此傾向は内乱の打続くに従って将来益々顕著となるに相違無い。而して此現象は一方に官僚の階級性を破壊するものであると同時に、他方に官僚階級中の分離派が伝統的な貴族の性質を失ってブルジョアの仲間入りをすることを意味するのである。⁽³¹⁴⁾

「郷紳」、すなわち退職して田舎に戻った「官僚」及びその家族は、常にこれまで蓄積した富を以て、地方において商業或は農業を興す。辛亥革命後、皇帝制度が倒れた。これらの「元官僚」は、漸次にその「官僚性」——橋のいわゆる「階級性」——を失い、純粋な資本家或は地主となった。彼らは、現任官僚及び軍閥が農村を擾乱する行為に不満を持っていた。橋樑は彼らを「変質した官僚階級の一部⁽³¹⁵⁾」と呼び、「変質した官僚階級」が、革命陣営に参加する可能性があるとは指摘している。

⑥そのほか

商人、地主、学生及び労働者は、橋樑の「中産階級革命」を遂行する諸主体を構成している。そのほか、彼はさらに、以上のような革命同盟が積極的に、敵の陣営から脱落した者たちを味方に引き入れるべきだ、と主張している。「変質した官僚階級」はその者たちに含まれている。のみならず、軍閥の軍隊にも動揺する可能性がある。橋はその目線を軍隊の下層に向けた。橋によれば、士階級（すなわち官僚階級）と民衆という二つの陣営の闘争において、軍人はそもそも「中間階級たる地位を保って居るに過ぎない」ものであるはずだが、「世の中が今日のように乱れると民衆の敵は本物の士階級よりも寧ろ軍隊の上層者である」、ということになった。一般の中国人が愛読する三国史や水滸伝を読んでも、軍人に対する民衆の態度が、官僚階級に対するほどの反感がないことからして、橋は「民衆を率いて改造運動に従事して居る人達が成るべく早く軍隊の下層者と連絡をとってその上層者を打倒する」ことを希望したのである⁽³¹⁶⁾。

こうして、橋の「革命同盟」には、商人、地主、学生及び労働者のほかに、「変質した官僚階級」と軍の下層も加入する見込みがある、ということになる。

(2) 革命同盟論と統一戦線論

①中国研究の方法の問題

(a) 抑圧民族の知識人の限界性

前節において、橋樑による「中産階級」という概念が地主及び商人のことを指しているということ、また「中産階級革命」を遂行する団体が官僚軍閥を打倒するために、商人、地主、学生、労働者及び官僚軍閥の変質した者たちを含むすべての民衆のダイナミックな革命同盟である、ということを明らかにした。そういう革命同盟に対する構想は、国民革命の時期において国共両党が主張していた各階級の反帝国主義反軍閥「統一戦線⁽³¹⁷⁾」とよく似ているとも言える。「中国国民党第一次全国代表大会宣言」（1924年1月23日）は、各階級の統一戦線の必要性について次のように表明している。

国民党は、努力し続けて中国民族の解放を求めざるを得ない。われわれの頼みとなるのは、実は多数の民衆、例えば知識階級、農民、労働者、商人などである。蓋し民族主義はいずれの階級にとっても、帝国主義の侵略を免れるという意味であるにほかならない。⁽³¹⁸⁾

橋の革命同盟構想と、国共両党の統一戦線論は、構造的にはほぼ同じものに見える。それは、1927年国共分裂の際、橋が統一戦線を維持することを主張していた国民党左派の立場を肯定したことにも原因がある。二つの理論の相違は、おそらく次の二点にある。

第一に、橋の革命同盟にとって、革命の対象は専ら官僚階級及び軍閥であるのに対し、統一戦線論は、その目標を帝国主義と軍閥両方に向けているということ。第二に、橋樑の革命同盟論には、政党の役割に関する叙述が見られない点である。それに対し、統一戦線論は、革命の勝利を収めるために、革命政党の作用が絶対不可欠なものだとしている。まず、第一の相違点について検討してみよう。

1924年の年末、日本を訪問していた孫文は、各地において記者会見や演説を行い、帝国主義打倒、日本の中国援助を呼びかけていた。それに対して橋は、「支那統一の先決問題として軍閥打破を選まず（ママ…趙）に所謂帝国主義の打破を選んだことは、吾々から見ると聊か不合理の感なきを得ない。……国家改造の問題に関する限りに於て孫氏の目標とする處は矢張主として軍閥にある。帝国主義の列国が支那の国内問題の解決を碍げるのも、畢竟彼等が軍閥を煽動したり援助したりするからだと言うにあるので両者を比較して見れば支那統一の敵は軍閥が主であって列国は従である」と言い、孫文が軍閥打倒を軽視していると認定し、その原因を、孫文が「自ら軍閥の上に立脚し……軍閥に関する觀念の不徹底」ということに求めている⁽³¹⁹⁾。（下線は筆者による）

軍閥に対する徹底的闘争を主張している一方で、帝国主義に対する橋の態度は比較的消極的であったと言わざるを得ない。その態度に関して、まず指摘しておきたいのは、橋自身が当時の帝国主義国家の国民の一人であった、ということである。山本秀夫は伝記『橋樑』において、橋と孫文、魯迅、李大釗のような中国民族の生存権を主張する人々との間に、「抑圧する民族と抑圧される民族という除去できない溝が厳存していた⁽³²⁰⁾」と指摘した。つまり、如何にも被抑圧民族たる中国に同情を寄せていたにもかかわらず、橋には限界性が存在していた。山田辰雄の研究によると、橋は「主観的には日本の対中政策を批判し、中国の反帝国主義の要求を理解する立場にあった。しかしそれと同時に、客観的には彼自身が日本人として中国の反帝国主義政策の対象とならざるをえなかったことも確かである。そこには、中国の反帝国主義を理解しつつも、それを一定の範囲に抑制しようとする橋の心情があった⁽³²¹⁾」、ということである⁽³²²⁾。また中山義弘は、孫文の民族主義と橋の中国革命論とを比較した上で、次のように結論づけた。

孫文の民族主義は、軍閥と帝国主義とを打倒して国内諸民族が連合した中華民族を組織することであった。橋樑は、中国の近代社会を前資本主義社会であるとし、封建社会から資本主義社会への過渡期的段階と規定する。そして官僚階級や軍閥を打倒する勢力としては中産階級＝ブルジョアジーを考えており、ブルジョア革命の構想は同じであるが、橋樑には帝国主義打倒の構想はない。つまり橋樑は、中国民衆の立場に立って、中国を理解・認識することは出来ても、日本・日本人の立場では理解・認識できないのである。⁽³²³⁾

つまり中山は、橘の限界性を、彼の日本・日本人の立場に求めている。抑圧民族の知識人としては、被抑圧民族に同情を寄せているにもかかわらず、相手方の自らの経験から生じた要求を無視する可能性もあると言える。先行研究によれば、橘樸も、抑圧民族の知識人としてのエートスを、徹底的に洗い落とすことはできなかった、ということであった。

(b) 大正思潮と第一次世界大戦の衝撃

続いてもう一つの橘樸の中国認識にかかわる限界の要因をさぐると、おそらく橘の中国研究のやり方にあるという問題が見えてくる。中国史にせよ、中国革命にせよ、橘はあくまで中国自身の発展のロジックに立脚してそれらを把握しようとしていた。大正生命主義の影響を受けた彼の思想を遡ると、生命である限り、各々の「個性」を持つはずだという考えは、橘の一貫した主張であった。社会組織の研究に取り込んだ橘は、自分がようやく「支那なる偉大な生物の生命に触れ得た⁽³²⁴⁾」と言った。このフレーズを見ると、橘は明らかに中国を一つの「生命」として捉えていたとわかる。「生命」である限り、「個性」を持つ。「個性」は本質的、先天的なものである。それと比較すると、外来の知識、理論また思想は、あくまでも二義的なものに過ぎなかった。このことは、橘が中国自身のロジックに執着した思想的動因であったと言えよう。

しかし橘の論理を見ると、彼は西洋伝来の専門語（階級、資本、近世など）をよく使っている。中国社会を革命前夜のフランスにたとえていた橘は明らかに、西洋社会のモデルを以て中国社会に当て嵌めようとしたのではないか、と思われる。それならば、なぜ橘が中国自身のロジックに立脚したと言えるのか、という問題が出てくるだろう。ここから橘の中国研究の性格を説明してみたい。

晩年の橘は、座談会「東洋の社会構成と日支の将来」において自分の研究方法の形成の過程を回顧した。彼の中国研究は軍閥研究から始まり、しだいに政治現象を離れ、軍閥形成の財政的、社会的基礎を究明することに傾いていった。「土地であるとか、生産であるとか、或はその地盤になっている地縁的血縁的の集団の本質は何かとか、だんだんと拮がって、取止めがつかない」うちに、橘は「無方針に、いろいろな人の経済史とか、経済学とか、社会学とか見て、それを自分の武器」とした。そして「歐洲戦争の終りに近づいて中国にも民族主義的勢力の台頭がぼつぼつ始まった。それと相前後して私共も亦マルクス主義理論に触れる機会が与えられて来た。それで私も研究の対象が新しくなり、研究の方法も、おぼろげながら一つの纏りが起って来た」、ということになった⁽³²⁵⁾。(下線は筆者による)

この部分を見てわかるのは、橘は「階級」や「資本」また「歴史発展段階論」の専門語（例えば古代、中世、近世）をよく使用しているが、それらの言葉は中国を研究する「武器」、言い換えれば「道具」に過ぎなかったことになる。道具を使用すれば、必ず道具の背後に存在している理論や主義の信者になるとは限らない。マルクス主義のような整然とし

た体系性を持つ理論に対する橋の態度も、同じである。新しい現象が現れれば、新しい道具が必要になる。したがって彼は、五四運動、五・三〇運動という新しい対象を研究するために、マルクス主義理論という新しい研究の方法を用いた。しかし使用しながらも、橋は次の如く「不安」を吐露した。

東洋と西洋と、それぞれ質を異にした社会があるのじゃないか。従って、東洋の社会に対しては勿論改造も進歩も図らなければならんが、その方法なり理論なりが、根本的には兎に角、ヨーロッパの歴史なり社会組織なりを基礎にして作り上げた現在のマルクス主義の理論や方法そのままを、東洋に当て嵌めては無理が来はしないかということの不安を感じて来た。⁽³²⁶⁾

まず提示しておきたいのは、橋樑は、その思想において、整合性を持つ理論に対する根強い懐疑を持つ傾向がある、ということである。橋の思想的背景たる大正期の思潮の性格を顧みると、それは旧来の体系や理論が崩壊しつつあるが、新しい体系や秩序がまだ樹立されていない、という状況であった。「国家・民族・政治」など、生存危機に臨んでいた明治期にほぼ自明の概念は、大正期になるとほとんどその自明性を失い、さまざまな角度から検討されるようになった。言い換えれば、かつての堅固なものは、漸次に流動的で、ばらばらなものになってしまう。唐木順三の言葉を借りると、「型の喪失」こそが大正期「教養派」知識人の特性なのであった⁽³²⁷⁾」、ということになる。そういう「型の喪失」の現実に臨んでいた知識人は、年代別によって異なる反応を持つことになった。飯田泰三はその区別を、「日露戦争前後の世代の場合には、その知的「解体」状況に直面して、「自我」の「煩悶」——アイデンティティー喪失ゆえの——からデカダンに陥ったり、またそこから「修養」の苦闘に旅立ったりもしたわけだが、つづく「大正の新青年」世代になると、むしろ「型の解体」は「解放」と受け止められ、「教養と無秩序」の中で、知的享受や美的享楽にいそしむ様相が目立つようにもなる⁽³²⁸⁾」、という具合にまとめている。

飯田の標準に照らして見れば、橋樑はまさに、日露戦争前後に青春を送った「煩悶」の世代に属している、と言える⁽³²⁹⁾。橋は『職域奉公論』の冒頭で、「私の支那評論の動機は物好きや知的欲求にあるのではな⁽³³⁰⁾」いと述べ、明白に「知的享受や美的享楽」の志向を拒絶した。また、彼が「人生観成立の過程」(1923)で、自分の研究の仕方を「借りものでないから如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働くこと⁽³³¹⁾」とまとめたところには、「借りもの」すなわち体系の持つ既成理論に対する懐疑と、喪失したアイデンティティーを再構築するために「万遍なく行き亘って働く」努力をするという、両面的感情が見出される。そのような思想的傾向は、橋が既成理論に対して不安の心情、また懐疑の態度を持っていたからだ、と考えられる。故に、橋を研究する場合、彼が使用した「武器」に執着するよりも、むしろその「無方針」の態度及びそのなかに潜んでいた精神的気

質のほうが、重要視されるべきであると思われる。

次に近因である。第一次世界大戦の進行は、日本の知識人に大きな衝撃を与えた。この戦争はまず、世界の範囲において普遍価値としての「西洋」の崩壊を促した。オスヴァルト・シュペングラーの『西洋の没落』は、そういう状況に応じて現われた著作であった。しかし、文化、価値、精神の側面における大戦の衝撃は、ヨーロッパの場合と日本のそれは違うと言わざるを得ない。

竹山護夫によれば、「西洋」という価値は、ヨーロッパにおいて「あるもの」であると同時に、「あるべきもの」とされる。つまり「西洋」は、ヨーロッパ自身の伝統から生じた「総合的象徴」であると同時に、人類社会の理想状態を代表する「普遍価値」でもある。しかし、「ナショナリズムという（ある側面を誇張して見れば）その実際の表現がより多く「政治」の契機に媒介される存在が、広義の「文化」の表象である「総合的象徴」（即ち『ヨーロッパ』）の統合性を裏切った時、すなわち、「総合的象徴」の下位に従属してあるべき現実の政治が自立してこれに反逆した時に実在において「没落」しはじめ、次いで、普遍原理としての「総合的象徴」＝『ヨーロッパ』自体が分裂して、いつかのパティキュラーな「総合的象徴」の相対的關係に転化した時、その「没落」を理念の中で完了した⁽³³²⁾」、ということになった。

つまり、「普遍価値」としての「西洋」の喪失は、直ちに「伝統文化」としての「西洋」の喪失につながった。西洋人はそのため、一種のアノミー、絶望の状態に陥った。しかし日本の場合には違う。日本が臨んでいたのは、むしろ「一つは内において「西洋」価値への幻滅であり、今一つは外において「日本」価値の消失である⁽³³³⁾」というような、「二重の喪失」である。これまで「西洋」の価値を信奉し、西洋的近代化に追随してきた日本は、自身の伝統すなわち「あるもの」を捨て去ったが、戦争がもたらした「西洋の没落」にしたがって、目標や彼岸すなわち「あるべきもの」をも失ってしまった。竹山は揶揄して、それを「辺境版の「西洋の没落」⁽³³⁴⁾」と呼んでいる。それゆえ、大戦後のヨーロッパと日本の精神的反応も異なることになる。竹山は次のように述べている。

ヨーロッパにおいては、「西洋」価値への幻滅の発生は、とりも直さず伝統文化というものが「あるものとして」失われていくことのみではなく、「あるべきものとして」の価値から没落していくことを意味する。これに対して、日本においては、（「西洋」価値の動揺によって喚起された）「日本」価値の消失の認識の発生は、「あるべきものとして」の伝統文化が「あるものとして」失なわれているとする意識の顕在化である。それ故に、ここにおいては、価値自体が不在となるニヒリズムとそれに伴うペシミズムは発生せず、むしろ、当為の価値を志向する態度が生じ得る。日本においては、伝統文化の喪失の認識は、文化価値が内側から崩壊して行くという感覚によってではなく、西洋からの「借り物」を否定して、本来的なものに帰るという心

理と論理によって概念化されたのであった。⁽³³⁵⁾ (下線は筆者による)

「没落」に対する反応の違いから、日本とヨーロッパの変化、さらに日本ファシズムの形態とヨーロッパのそれとの違いが生じる。つまり、「アノミーの浅さと、「伝統文化」の意味する内容自体の中に伝統文化の動揺からの脱出口を見出し得る希望の存在とは、続く日本の社会の中に、体制と伝統とに対する否定と反逆の担い手として、アキュートな反体制集団よりも、体制の「読み直し」を意図する「改造」思想の諸団体を結局は有力ならしめ、体制のラディカルな破壊を通して(新しい)伝統をつくり上げようとするよりは、体制に働きかけることによって伝統の再構築(伝統の中の「西洋」価値の捨象、または、「日本」価値による「西洋」価値の消化)を行なおうとする態度を招来することになった⁽³³⁶⁾」、ということであった。(下線は筆者による)

ファシズムの形態はともかく、普遍価値としての「西洋」の没落は疑いなく、日本の知識人に再び「体系」の喪失感を味わわせ、「東洋」をめぐる新しい普遍価値への探求を急がせたのであろう。それは、橘が中国、少なくとも「東洋」自身のロジックに立脚して新しい体系を模索する努力を支えた、重要な動因であると考えられる。こうして見れば、橘は何回も、当時の中国を革命前夜のフランスにたとえたにもかかわらず、フランス革命に関する知識は、あくまでも橘の中国研究の「武器」に過ぎなかったと言えよう。

(c) 橘樸の中国研究の到達点

以上のような思想的傾向にしたがって解読すると、橘樸の中国研究は、1940年代初頭において最終的に一つの結論を下したと理解することができる。ここで、橘の文章「漢民族の性格と其の文化」(1940年11月)と「孫文思想の東洋的基礎」(1943年9月)を手がかりとして彼の観点を如何に簡単にまとめてみたい。

中国は五世紀の動乱を経て秦の統一に至り、宿命的な二大問題に突き当たった。一つは「辺境問題」、すなわち辺境の遊牧民族との戦争の問題であり、もう一つは「農民問題」であった。農民問題は、戦国初期まで遡ることができる。その時、自由農民と新興土地貴族がともに生まれ、両者の闘争はこれから二千年の中国歴史の流れを構成したのみならず、土地分配に関する思想も、二千年間のさまざまな社会思潮の根底をなしていた。土地の平均分配すなわち「均田」は、中国の自由農民の中心的要求であった。中央政権は均田政策を以て、地方貴族の遠心力を克服しようとしたため、しだいに農民に接近しつつあり、宋以後の「半封建官紳社会」(橘)を形作ったのである。この社会は、辛亥革命まで約十世紀間続き、明末を分水嶺として二期に分けられる。

第一期において、優秀な官紳階級の代表人物、例えば呂大鈞、朱熹、王陽明、呂新吾、袁了凡の指導にしたがって、漢末に現われた「大同思想⁽³³⁷⁾」が漸次に郷土社会に浸透していき、大同思想の下部構造が形成されたのみならず、中国の「個」の思想、すなわち「天

下興亡、匹夫有責」(「天下の興亡、匹夫に責有り」、橘はそれを宋の陸象山の語としている)が示しているように、これまでの個と集団の「服従-保護」の関係から、「個人が自主的に、其の責任に於て、社会の機能たる職分を果すと云う積極的な態度⁽³³⁸⁾」が発展していった。橘はさらに、「東洋社会に於ける各個人の責任感及び責任能力の涵養は、必ず右の線に沿って行わるべきであるとし、「西洋の個人主義思想を躁急無批判に受入れることの弊害は、特に近時の日本に顧みて明らかであろう⁽³³⁹⁾」という批判を下した。

しかし明末から始まった第二期に入ると、中国社会は「官紳は其の道徳的政治的理想を失い、地主として又商業・利貸資本の投下者としての階級的利益に執着した。其の結果、上部には地主、商人、金貸業者の三位一体的支配層が蹻蹻し、下部には農民、手工業者、労働者、小商人等の広大な被支配者層が呻吟し、階級対立の激化に連れて、社会不安が鬱積し、貧民暴動が永久的な組織の上に行われる⁽³⁴⁰⁾」、という状況になった。とくに明末の農村人口の激増にしたがって、中国社会は「慢性的動乱期⁽³⁴¹⁾」に陥った。明末清初の戦乱を経て、大量の人口が失われ、また荒蕪の土地が現れた。その状況に恵まれた清朝前半期において、社会の平和は無事に持続していたが、清末になると再び慢性的動乱闘争の時代に入り、社会の構造を変革しないと生きられない境地には追いこまれた。太平天国、また孫文の指導による革命は、すべて社会構造を変革させる社会革命であった。橘はその連続した革命のプロセスについて「第三次社会革命⁽³⁴²⁾」と呼び、さらに西洋の影響がなくても、社会革命が必ず中国のロジックにしたがって発生するだろうと主張し、ここで中国社会の独自性を強調する。曰く、「これは必ずしも西洋勢力の東漸と云う外的原因によるのではない。それが無くとも中国社会の内部から自然発生的に生れ来た⁽³⁴³⁾」、ということである。中国将来の変革の方向について、橘は「一方に均田を目標とする農民運動、他方に中央集権的な金融組織及びマヌファクチュア(ママ…趙)の発展⁽³⁴⁴⁾」という三点としてまとめた。(下線は筆者による)

橘の最終的な中国像は、中国社会が自身の法則にしたがって、生成、発展、変化を続ける過程であるにほかならなかった。西洋の衝撃は到底、中国自身のロジックの根強さに及ばなかった⁽³⁴⁵⁾。それは橘の中国研究の到達点であった。中国自身のロジックを究明しようとした研究方法は、橘の場合において花を咲かせたと言える。このような研究方法にしたがうと、帝国主義というものは、あくまでも「外部」の存在であるに止まっており、革命の客体としても二次的なものに過ぎなかった、ということになる。中西勝彦は「中国国民革命の展開と橘樸」において、1925年の「五・三〇事件」と「郭松齡事件⁽³⁴⁶⁾」は、橘の「対帝国主義での消極的態度を吹き払った」と主張しているが⁽³⁴⁷⁾、それはおそらく、革命の進展にともなう、情勢に対する判断の変化であったに過ぎない。橘の中国の「内部」に執着する姿勢は、基本的に揺さぶられなかった。五・三〇事件から「満洲事変」にかけて、彼の帝国主義に対する研究が僅少であるのに対し、軍閥(新軍閥と旧軍閥)に対して多く注目していたことは⁽³⁴⁸⁾、まさに彼の基本姿勢の存続を語っていると思われる。しか

しこういう研究方法或は思想傾向には、20世紀の到来とともに、世界の各国、各地域の間で起った激しい運動関係、また帝国主義が中国革命の形態に重大な影響を与えた事態を見逃す可能性が内包している、ということも否認できない。

②革命の担い手に関する問題

続いて、また橋樑の革命同盟論と統一戦線論の第二の相違点に入る。前に提示したように、橋の「中産階級革命」同盟の構想においては、政党、換言すれば革命の担い手或は革命の主体についての叙述が、全く見られなかった。しかし商人、学生、労働者、地主及び変質した官僚階級から成り立つ「革命同盟」は、具体的に誰によって指導されるべきか、という問題はやはり残されたのである。それとは対比的に、「中国国民党第一次全国代表大会宣言」は革命政党の重要性を繰り返して強調していた。曰く、

本党は、改組してから、厳格に自律的精神を以て、本党の組織の基礎を樹立し、本党の黨員に、様々な適当な方法を以て教育及び訓練を施し、彼らを、三民主義を宣伝、群衆を動員、政治的革命を組織できる人材にさせる。同時に、本党は全力を尽くして、全国の国民に普遍的宣伝を行い、彼らを革命運動に加入させ、政権を獲得し、民の敵を克服しようとする。既に政権を獲得して政府を樹立した後、国内の反革命運動及び各国帝国主義の我国の民衆の勝利を压制する陰謀を阻止、国民党の主義を実行する一切の障害を除去するために、われわれは党を以て政権の中樞を把握すべきである。蓋し組織と權威をもつ党は、革命的民衆の本拠であり、全国の人民に忠実な義務を果すものである。⁽³⁴⁹⁾ (下線は筆者による)

この意見に照らして見れば、橋の構想した革命同盟は指導性を欠いたものに止まっていると言える。同盟の各成分は、各自の機能を発揮しながら、自発的に「中心」に向いつつ、最後に大同団結に到達し得る、というイメージであった。彼は、民衆の自発性そのものを強く主張しており、事前に「中心」を設定することを拒絶していた。「中心」は結果であり、前提ではない。その傾向は、彼が内藤湖南の「新支那論」を評論する時に、よく示されていた。

内藤湖南はその「新支那論」において、中国改造の希望を中国の郷村組織の自衛機関（郷団⁽³⁵⁰⁾）と、曾国藩⁽³⁵¹⁾のような儒家的な天才に求めた。湖南の観点をまとめると、郷団は郷村社会の血縁関係に基づいて組織されたものであったため、父兄が殺されたら、その子弟が必ず敵を討たなければならぬ、強い戦闘力が出てくるわけである。曾国藩は、まさしく郷村の知識人を挙用して郷団の幹部にさせ、最大限まで郷団の戦闘力を発掘し、儒教的倫理を以て軍隊を指揮して成功を収めたのである。曰く、

曾国藩は政府の命令ということに頼らずに、全く自分の交際上の私信によって軍隊を支配して居たから、将校たるものでも、厭やになればやめて帰っても刑罰も責任もないのである。然しそれでも後には曾国藩の私信ならば我慢して職務を勧めるけれども、朝廷の命令では動かぬというものを出して来たのである。全く郷団の信義と父兄子弟の関係という様なものから、軍隊も成り立ち、政治も成り立ち、それによって大乱を平定した位であるから、政治も郷団自衛を必要とする迄、今日の支那の腐敗が徹底すれば、曾国藩の如き天才をも出して、外国の政治を真似せずとも支那人は自国に必要で、自国に最も適当な新政治を編み出し得るかも知れない。⁽³⁵²⁾

橘は湖南の論点に対して一定の賛意を表明しながら、異なる意見を打ち出した。彼はまず、湖南の提示した「郷団自衛」は大体自分の「中産階級革命」と同じようなものだとして認識していたが、その違うところは、「前者が例えば曾国藩のような統率者をインテリゲンチヤの中に求めて革命勢力を此の中心に集中せしめようとするに対して、後者は一層デモクラティックな地方分権的な形式を取る⁽³⁵³⁾」、という部分にあるとされていた。下線を引いたところ、「地方分権的」という考え方は、橘の生涯を貫いた思想的傾向であったと言える⁽³⁵⁴⁾。

「地方分権的な方式」からして、橘は湖南の観点を「英雄主義⁽³⁵⁵⁾」と断定した。そして「地方分権的な方式」の革命が頼んでいるのは英雄でなく、「社会階級の団結した力⁽³⁵⁶⁾」であった。「社会階級」といえば、疑いなくそれは中産階級である。続いて橘は次のように、中産階級の覚醒を礼賛している。

湘軍の時代には単に英雄の事業の素材としてのみ役立ったところの中産階級者が、今度は自発的に彼等の階級意識に目醒めて孟子の所謂「文王を待たずして起る」日が近づいて来たのだと私は主張したいのである。……近い話が広東省の中産階級者の所謂商団及び郷団の軍隊組織などは、私の此の主張に対して最も有力なる裏書人であると思う。

中産階級者の議会主義的運動が英雄主義を必要とせず、専らデモクラティックの方法に伴って進みつつあることは、私の特に説明を待たぬところであろう。⁽³⁵⁷⁾（下線は筆者による）

橘樸が想定した中産階級革命の進み方は、議会主義的な運動であり、デモクラティックの方法であった。革命の組織は、中産階級の自治組織である。橘は中産階級の自治組織について、「家族及宗族結社、村落自治体、会館、幫及公所（公会）、同業組合の聯合団体、総合ギルド、商会及其聯合体⁽³⁵⁸⁾」という七個にまとめている。それによれば、内藤湖南の提示した「郷団自衛」も、中産階級組織の一種であった。それらの組織の性質について、

橘はそれぞれについて分析した。以下において、彼の分析をまとめる。

- 家族及び宗族結社、村落自治体、会館は、血縁もしくは地縁を基礎とする結社である。
- 帮及公所は、地縁関係を其要素の一つとした一方、主として同業者が彼らの利益を擁護し増進するために形作った結社である。
- 同業組合の聯合団体、総合ギルド、商会及其聯合体は、帮及公所の連合、拡大及び進級した形態である。⁽³⁵⁹⁾

その中で、橘樸が一番重視したのは、商工業者の団体——ギルドそのものであった。彼によれば、ギルドは経済的機関であると同時に、官僚階級の搾取に抵抗する鬭争機関でもある。ギルドの中において、商工業者の政治的能力及び政治的徳が涵養されていくのである。橘は彼らの政治的徳を次の三点としてまとめた。

- ① デモクラチック……即ちギルド政治は各成員の利害及感情に平等の価値を認め、夫れを規整し糾合し発表するにある。
- ② 官僚政治は階級的搾取の手段に過ぎず随って其間に対内的にも対外的にも有効な道徳意識の発生する余地の無いに反し、ギルド政治は、各成員の共通利益を維持し発展することを目的とし、随って少なくとも対内的には各成員の道徳意識が政治運用の精神的基礎を成す。
- ③ 家族政治に於ては尊族の慈愛に対する卑族の孝悌が、夫れの精神的基礎を成し、ギルド政治にあつては相互扶助の対等なる道徳意識が夫れの精神的基礎を形造る。

⁽³⁶⁰⁾

このような商工業者ギルドは、傑出した政治能力と政治道徳を有するだけでなく、その階級意識も日を追って発達していく、と橘は考えた。橘によると、「阿片戦争の結果として西洋との交通が開かれ、経済機関の急速なる膨脹に伴れて国民経済組織もまた歳毎に緊密の度を加えつつある。夫れよりも一層重要な事は、中産階級者の間に民族政治に対する興味が少なくも此数年来驚く可き勢いで台頭して来た事実である。即ち彼等は官僚の手から自身の手に民族政治の運営を移すに非らざれば、彼等の安寧と幸福とは絶対に得られないものであることを意識するに至つたのである。換言すれば支那の中産階級も近世紀初頭の欧羅巴商人と同じ様に、階級意識に目醒めて来た次第である⁽³⁶¹⁾」という。(下線は筆者による)

そういう背景のもとで、橘は中産階級が官僚階級に取って代わらなければならないと断定し、その中産階級組織の前途を展望すると、「彼等の実生活に取って必要な組織は今日迄ギルド又は夫れの小規模な聯合に過ぎなかったが、階級意識に目醒めた後の彼等としては、

到底それに満足して居る事が出来ない。そこで、彼等は職業別的聯合から産業別的聯合に進み、地方的聯合から全国的聯合に移り、更に商工業プチ・ブルジョアの聯合から農業プチ・ブルジョアをも含んだ中産者の全階級的聯合に進入ろうとして居る⁽³⁶²⁾、ということになった。(下線は筆者による)

こうした部分から全体へと発展するプロセスについて、岸本美緒は「中国中間団体論の系譜」において、近代中国地方自治制度の研究者、黄東蘭の研究を援引し、「中国の伝統的自治理念が「小から大へ」の理念図式、即ち儒家の「修身・齐家・治国・平天下」(『大学』)の図式に端的に表されているような一身から天下へと拡大してゆく段階的秩序形成論を基盤としていること」であるとし、この自治理念が、内藤湖南や清末の改革派に影響を与えていたとしている⁽³⁶³⁾。そして岸本は、橘のギルドに関する理論を、「団体の内的結集力は、外敵からの防衛の必要に迫られるときに発動する(もの…趙)……そして、そうした団体が小から大へと拡大し、全国大の結集が行われるとき、中国の民族国家が実現する⁽³⁶⁴⁾」としてとまとめ、対照的に、孫文や農民運動を指導していた共産党員の議論に対して次のように指摘している。

彼らの議論に見られるような、中間団体の運動論的把握においては、かつての伝統的封建論がもっていたような、専制権力の発動を抑止する分権的志向は背後に退いている。ここで国家的統合との関係で着目されているのは、団体の対外的自律性よりも、内部の凝集力なのである。⁽³⁶⁵⁾

言い換えれば、孫文や共産党は、中国の「中間団体」の中から凝集力を汲み取り、国家的統合の力に転化させようとしたということである。孫文はかつて、中国の家族及び宗族団体の中に強い凝集力を見出し、それを「国族」すなわち「民族」まで発展させる基礎としていた(「民族主義講演」第五回、1924年)。しかしその仕事を成し遂げる担い手は、革命党でなければならなかった。革命党は、民衆の間で、宣伝、啓蒙、組織、動員の役割を果すべきものだ、とされている。

それに対し、橘樸の場合において、上記のような革命の担い手に関する叙述は全く見られない。橘が頼みとしていたのは、歴史の発展、情勢の変化によって影響を受けた、中産階級組織の自発的な機能そのものであった。歴史がこうなったら、英雄たちは自然に出て来るだろう。英雄は歴史の結果であり、前提ではないという発想法⁽³⁶⁶⁾から見れば、橘の英雄観は、彼の地方分権主義と連動関係を持っていたと言える。しかしながら、国民革命の「歴史の発展」は続いていたのに、橘の想像した通りの「英雄」は生まれなかった。橘による「正しい」理論の持ち主としての国民党左派は、「正しい」理論を現実に変化させる力を持たなかった。それは橘に、自身の過去の研究の方法に対する反省を迫っており、その「方向転換」を引起した重要な原因となっている。そのことは次章に譲りたい。

総じて言えば、橋樑の中産階級革命論は、第一に中国自身のロジックに執着し過ぎており、20世紀の帝国主義の影響力に対する認識が不足しているように思われる。また第二に地方分権主義と「民衆」あるいは「社会組織」の立場から出発したため、事前に「中心」の設定に対する拒絶があり、革命の担い手に関する問題を軽視することからして、橋の構想は最初のところにおいて、中国革命の実際のエートスとすれ違っていたと言えるのではないか。そのすれ違いの中で、橋を中国革命の反対側に立たせた満洲事変後の「方向転換」を起す思想的な伏線というものがすでに敷かれた、と考えられる。

2. 中国革命の理想と現実

(1) 広東商団事件及び橋樑の態度

前節で、橋樑の中産階級革命に関する構想を紹介し、橋の「革命同盟論」と国共両党の「統一戦線論」との区別を明らかにした。この二つの理論は、構造的に見れば、すなわち商人、学生、農民、労働者など諸階級、諸勢力の大連合という形式という点では、ほぼ同じようなものに見える。しかし根底に存在する違いが、その二つの理論に決定的な区別をもたらしていた。その違いこそが、結果的に橋を中国革命の対立側に立たせた、思想的な要因の一つであったと考えられる。ここでまず、橋がその中産階級革命論の現実的投射と見なしていた広東商団事件を取り上げて分析する。

広東は、清末最初に開放された、対外貿易がさかんな地域であった。そのため、商業の発達が高く、商人が強い勢力を持ち、自らの利益を守るために、しばしば地方の政府に対抗したのである。中華民国成立（1912年）以降十余年にわたり、広東政府は中央政府に対して半独立的な状態を維持しながら、商人を保護すると言いつつ、社会治安を維持する責任を果さなかったのみならず、商人に重税を課していた。それに加え、広東の匪賊問題が厳しかったため、商人たちは、自身の利益を擁護するために、自身の力を強めるほかに道がないという認識を持つようになった。「官之衛民、不如民之自衛（政府が人民を守るのは、人民の自衛に及ばない）」（「袁督抗阻紳商弁団之駁議」、『香港華字日報』、1910年3月29日）、ということである。そのため商人たちは、1912年に商団を組織し、しばしばストライキの方式を以て、地方政府に圧力を加えた。広東のような強い商人団体の存在は、当時の中国全国においてもめったにないものであった。1919年に、香港のイギリス系匯豊銀行の広東に於ける買弁陳廉伯が団長となってから、商団は、飛躍的な発展を遂げていた。1924年の「商団事件」前夜に至るまでに、商団は、27000人の武装隊を持ち、また周辺各地の商団、民団のおよそ十七、八万人の援助を得ることができたのである。

1924年に広東で革命政府が成立した後、孫文は様々な行動を取り、革命政府の権威を確たるものとし、社会に対する支配力及び動員力を強化しようとした。しかしそのような施策は、広東社会における商団の利益や権威と衝突することも避けられないのであった。しかして広東において、軍閥にせよ、革命軍隊にせよ、それら軍隊の増加は、疑いなく商人

に重い課税の負担をかけていた。また、孫文の広東政府樹立を助けたのは、主に広西、貴州の軍隊、いわゆる「客軍」であった。それらの「客軍」は、軍紀が悪く、恣意的に搾取を行い、商団との摩擦を惹起した。以上の要素が、1924年8月から10月にかけての広東政府と商団との衝突を醸成したのである。商人たちは、ストライキないし直接的な軍事手段を以て政府と抗争しようとしたが、ついに10月15日に鎮圧されるに至った。それがすなわち「商団事件」である。⁽³⁶⁷⁾

孫文は「商団事件」についての最初の対外宣言において、商団の対抗をイギリス帝国主義の陰謀だとしている。その証拠について孫文は、1924年8月29日イギリス総領事の広東政府宛ての緊急公文を取り上げ、公文の最後の行での威嚇が、宣戦に異ならないと認め、この部分を引用した。「現にイギリス（広東駐在）海軍長官の通知を受け入れた。いわく、彼（イギリス海軍長官…趙）はすでに香港海軍司令の命令を受けた。もし中国当局が城内に発砲するなら、動員され得るだけのイギリス海軍部隊は直ちに、行動を取って彼ら（広東政府…趙）に対処する⁽³⁶⁸⁾」という箇所である。そして孫文は商団の帝国主義的性質を説明した後、「この十二年間で、帝国主義列強が一貫して反革命に外交的、精神的支持、また数百万の善後費及びそのほかの名目を持つ借款を与えたことから見れば、帝国主義の行動は、私を主とする国民党政府を打ち砕く陰謀である以外の、何者でもなかった。この間、我が政府に対する公開叛乱が起きた。その首領は、所謂イギリス帝国主義の中国駐在機構から、信任を受けた代理人である。……帝国主義が打ち砕こうとしたこの国民党政府とは何か。それは我国の唯一の、革命精神を保持してそれが完全に絶滅しないように努める執政団体であり、反革命に反抗する唯一の中心である。それゆえに、イギリスの大砲はそれに向っている⁽³⁶⁹⁾」、と強い抗議を表明したのである。

ところが孫文は、帝国主義の行動に抗議した一方で、商団事件の内部の原因もよく理解できていたようである。9月10日の「告広東民衆書」の中で、孫文は商団事件の発生の原因を、「広東は革命との関係が最も深いから、その革命の負担も最も重い」ことに求めている。彼は続いて、軍事費や雑税の増加、物価の騰貴、軍紀の混乱、官吏の汚職行為などの現象を取り上げ、「広東人民、とくに商民はそれに苦しんで、漸次に革命政府に失望するようにな⁽³⁷⁰⁾」り、「革命政府は生存を計るため、強制に人民から資源を取らざるを得ず、政府と人民の間のわだかまりを招いた⁽³⁷¹⁾」ことを承認したのである。しかし孫文は、商団事件の発生が、自分たちの革命の「方法」の間違いによってであり、革命主義そのもの間違いによるものではなかったと主張している。曰く、

知らなくてはいけないのは、革命主義は、革命進行の方法と別のものである。革命主義は、革命政府が終始一貫して貫徹させるものであるが、革命進行の方法を、革命政府は忌憚なく、環境に応じて適用させようとする。今日の広東の現状は、革命の方法の未だ善くないことによって招かれたのであり、革命主義とは関係ない。現状の悪

さを以て革命主義を誇り、革命政府の存在に反対する企図があれば、革命政府はその主義を擁護するために、この企図を鎮圧せざるを得ない。⁽³⁷²⁾

以上は孫文の基本的態度であったが、橋樑はその事件について、孫文の説明と正反対の意見を打ち出した。前に述べたように、橋がかつて、商人を中産階級革命の中心としていたこと⁽³⁷³⁾によっても明らかであるが、橋の商人に対する態度は積極的であった。1924年1月に開いた中国国民党第一次全国代表大会の内容及び孫文の主張の変化を検討するために、橋は1924年の1月から2月にかけて、『京津日日新聞』上で「孫文の赤化」という文章を22回にわたって連載した。国民党は、「中国国民党第一次全国代表大会宣言」において、当時の他の四つの救国主張、すなわち立憲派、聯省自治派、平和会議派及び商人政府派の主張を取り上げ、それぞれに批判を加えた。橋は「宣言」の立場と違い、前の三派はともかく、商人政府派に好意を寄せていた。彼は商人の重要性と、これからの革命の前途を展望し、次のように述べている。

商人は支那の民衆の中で一番伶俐であり実力を有し且つ一種の強韌性を有って居る又其の人数に於ても農民に次ぎ恐らく労働者に超えて居る欧羅巴に於けるブルジョア革命の結果が資本家の壟断となったことは今更申すまでもないが併し今日の支那に於て其の民衆を代表して支配者に対し有効な戦いを挑み得るものは先ず第一に商人社会でなくてはならぬ商人のみで革命を起すと云う必要は無いが商人に此の運動の代表的地位を与え他の民衆がこれを援助すると云う事にしたが一番の早道ではあるまいか……⁽³⁷⁴⁾

さらに孫文に対して橋は、厳しい批判を下した。国民党側の「宣言」は、民国以来の国民党の繰返した失敗を承認しながら、その原因を「組織が不完全であり訓練が未熟である」ことに求めているのに対し、橋は「組織や訓練の足りないことは明らかだが夫れより一層悪いことは孫氏を初め其周囲の人々の狂躁な権勢慾である」と述べ、「之は多分孫氏の病気である彼の性格及び主義から考えても又時勢及び民族性から考えても不得意な戦争に従事するよりか得意な民衆運動に其エネルギーを集注した方が好いに決つて居る」と主張している⁽³⁷⁵⁾。

橋樑によれば、孫文の過失はその脱しきれない軍閥性によるものであった。つまり、軍閥は革命の大敵であるにも拘らず、孫文自身が「態々その得意するところの民衆政治家たる立場を捨てて最も不得意な軍閥の真似をして自ら苦む且つそれ以上に広東省民を苦めつつある」、ということである。その軍閥性を如何にして脱却し得るかについて、橋に言わせると、「孫氏にして若し真に所謂民生主義の感生を希うならば即時に今の地位を捨てて民衆に直接せねばならぬ筈である自ら民衆の一員として立ち民衆の信頼を背景とし徒手空拳

を以て正面から軍閥にぶつ突かるのでなくては駄目である」、ということである⁽³⁷⁶⁾。(下線は筆者による)

以上で見て来たように、商人政府論と孫文に対する軍閥性批判という橋樑の主張は、商団事件に関する評論の中でも持続していた。しかし「民衆に直接」、「民衆の一員」及び「徒手空拳を以て正面から軍閥にぶつ突かる」という言葉は、橋が孫文の主張したところと異なった革命の路線を提示していることは確かであるが、軍閥を倒す革命の具体的な手段はわからない。こうした言説から、その前に指摘した「民衆の『純化』」⁽³⁷⁷⁾という、橋の発想法に思い至る。その橋の発想法は「民衆でない、民衆の利益を守れない」というようにまとめられるであろう。その立場から出発することで、孫文の民衆から遊離していることに対する手ひどい批判を加えることはできるが、革命党の作用に対しては無視或は過小評価してしまう可能性もある、と思われる。その上で如何にして「徒手空拳を以て正面から軍閥にぶつ突かる」のか、という問題も残ることになった。その意味で、商団事件はまさに、橋にその構想の具現化を促したと言える。

結果として橋樑は、商団事件の経験に基づき、中産階級の革命の手段を「武装的自治」と定義した。しかも「最近の武装的自治は過去のそれと同じ機能を土匪及び軍隊に向って発揮する許りでなく、更に進むで省を単位とする常設的自治軍にまで押し広げようという理想を持って居るものである。即ち現在の中産階級者が意識して居ると否とに論なく最近に起った武装的自治の風潮は彼等を基礎とする社会革命の重要な一手段たるべき運命を持って居るものの如くである」、ということになった。橋はさらに、広東の商団軍を「武装的自治の率先者であり且つ最も進歩したもの」として高く評価したのである⁽³⁷⁸⁾。その立場から出発し、橋は10月に起った広東の市街戦（孫文の軍隊と商団軍の衝突）を「広州商人の立場から見るとは正当防衛の当然の手段であった⁽³⁷⁹⁾」とし、その正当性を認め、孫文側による、商団そのものが軍閥、帝国主義と結んでいた反革命勢力だという解釈に対し、橋樑はそれを根拠なきの弁解だとして反駁した⁽³⁸⁰⁾。そしてまた「広州市街戦の責任の大部分が却て広東政府にあり、従って孫文氏は広州市または広東省の民衆（ママ）に対して恐るべき罪過を犯した」、「広東省内の商団及び郷団が近年に至って俄に膨大し且つ全省の大団結を行い得るに就ては、孫文氏の悪政及び其麾下なる大小軍閥の際限なき搾取が其直接原因となった」と断定しているのである⁽³⁸¹⁾。

総じて言えば、商人政府論と孫文への軍閥性批判は、当時の橋樑の商団事件に対する態度の基本であった⁽³⁸²⁾。今回商団軍は鎮圧されたにもかかわらず、中産階級が「最後には勝利を得て官僚階級を滅ぼし自ら支配階級の地位に上り得る見込みは充分にある⁽³⁸³⁾」と、橋は希望を抱いて断言したのである。階級意識に目覚めた中産階級が、既存の組織を運用して官僚軍閥に対する自発の闘争を行うという橋の構想は、今回の商団事件に投影されていたなかには、帝国主義の作用に対する過小化評価と、革命党の役割を見逃したことも、もちろんその中に反映されていたと言えるのだ。

(2) 国民革命の進行と挫折

①中国革命の前途に対する展望

以上、橘樸の中産階級革命論の「具現化」としての商団事件及びそれに対する橘の態度を説明した。前節で整理した、商人を中心とした、地主、学生、労働者及び変質した官僚から組み合わせた革命同盟が、自らの信仰或は利益を守るために、革命に参加して官僚階級及びその新形態たる軍閥を打ち倒し、真のブルジョア社会を実現させる——こういったことが、橘の基本的な構想であった。しかし橘は、ブルジョアが覇権を握る社会に満足するわけにはいかなかった。彼は最初から既に、中産階級革命の後の段階、すなわち社会主義革命の段階を想定していた。つまり、「(官僚軍閥に対する…趙)権力闘争の過程に於ては学生と商人と労働者とが共通の敵に向って相提携する事が出来る訳である。然るにこの三角同盟が彼らの目的を達成した後には三つの勢力の相互関係がどうなるかと云うと私の創造する所では矢張り欧羅巴の後を追いつ資本家対労働者の階級闘争となるであろう。此場合に学生団体は少くともその主力は労働者に味方するであろう。そして労働者が最後の勝利を占める事になるであろう⁽³⁸⁴⁾」、ということである。

さらに続いて、五・三〇事件⁽³⁸⁵⁾の時に、橘は中国革命における労働者の役割に対し、認識を一層深めた。曰く、

私は曾て屢々繰り返した通りに支那には近き将来にブルジョア革命が行われるだろうと考えて居る者である。但し支那のブルジョアは未だ至って未成熟な状態にあり加えるに労働者の組織化が商人の勢力に殆んど相併行しつつ頭をあげて来た事実に鑑み、支那のブルジョア革命は英国の産業革命と余程趣を異にした結果を生み出すものであらうと予想して居る。此の点に於ては「経済的に甚だ幼稚な境遇にある支那はヨーロッパが曾て経験した二段の革命を同時に行わなければならない」と言った故孫文の言葉は正しいと思う、即私の所謂ブルジョア革命にしても組織ある労働者の中産階級に対する援助あるに非れば満足な結果を挙げる事は出来ない。官僚軍閥に対する革命が中産階級及労働階級のコオペレーションの下にのみ行われるものであるとすれば、其結果として現れた資本主義社会なるものは始めから欧米乃至日本を悩ました同じ名の社会組織と著しく実質を異にしたものでなくてはならない。⁽³⁸⁶⁾

つまり、労働者が中産階級に援助を与えることは、将来の中国において、資本主義の一般的な弊害を避け得る新しい社会をもたらし得る、というのが橘の意見である。

橘樸はかつて、自分が「社会主義に好意を持⁽³⁸⁷⁾」つことを表明していた。資本主義の発達とともに、社会問題が頻出していた大正時代において、社会主義に好感を持つのは、当時の一般的傾向であったとも言えるが、山本秀夫は、橘の社会主義傾向の形成を、1905

年の彼の『北海タイムス』時代に求めている。

社会主義を唱道していた『平民新聞』の影響を深く受けた土岐孝太郎という人物は、当時の『北海タイムス』社にいて橋の先輩記者であった。『平民新聞』の創刊以来、日本の全国各地に「平民新聞読者会」が結成されていたが、『北海タイムス』に勤めていた土岐も、札幌の薬剤師竹内余所次郎とともに、読者会を中心に、「社会主義研究会」を発足させていた。そして土岐と橋樸との往復書簡の内容から判断すれば、土岐が1905年1月に入社したばかりの橋を誘い、社会主義研究会に参加させた可能性は高い。故に山本は、橋の社会主義の問題に対して関心を持つようになったのは、以上の経験に根ざしているだろう、と推測したのである⁽³⁸⁸⁾。

②橋樸の中国共産党批判

しかし注意すべきは、橋は思想的には社会主義に傾いていたにもかかわらず、マルクス主義や中国共産党の理論を全面的に認めているわけではなかった点である。橋はむしろ、マルクス主義や共産党の理論の、中国社会の性格に適さない部分を指摘し、それに批判を加えていたのである。

まず思想のレベルにおいて、橋は「東洋思想の源泉及総匯であった支那民族のことであるから遠からず唯物主義のマルキシズムなどに不満を抱く日が来るに相違ない⁽³⁸⁹⁾」と予測した。というのは、橋から見れば、中国人は「宗教心の深い民族であり宗教的信仰なしには安住し得ない民族⁽³⁹⁰⁾」である。このような民族は、唯物史観を基礎とするマルクス主義の種々な理論に満足することができない、と見たのである。

次に現状のレベルにおいて、橋は「マルクスの理論から行くと社会主義は資本主義の発達の頂点から自然に発生するものである。所がロシアにしる支那にしる資本主義発達の頂点に達する事を待つ居る暇がない」、また「支那の人口の七割乃至八割は農民である。支那の耕地が資本主義的企業によって経営せられると云う事は永久に望まれないのである」との認識を有していた⁽³⁹¹⁾。

さらに橋樸は、ソ連及び中国共産党の主張していた「階級闘争」論や「無産階級独裁」論に対しても批判的であった。彼は1923年以來の労働運動の中に、労働者の階級意識が急調を帯びて覚醒してきた⁽³⁹²⁾ ことを見出したにも拘らず、労働運動「其の対象が国内の官僚階級と外国のブルジョア階級とに限られて居ることだから。マルクスの共産党宣言に主張した様な意味での階級闘争乃至社会革命まで辿り着くには未だ余程の時日を要すると見なくてはならない⁽³⁹³⁾」と認識している。そういうわけで、五・三〇事件に関しても、橋は、運動の「基調を為すものは何處迄も民族主義思想であって共産主義思想でなく、別の言葉で言えば支那民族の民族運動であって露国人又は其の手先たる支那共産党員の赤化運動ではないのである⁽³⁹⁴⁾」と述べた。

「赤化」に関する橋の定義は、「ロシア化」であり、「政治経済及び社会の各方面に互っ

て無産階級の優越状態を樹立することである。この状態をポリシェヴィキの用語に従へば、無産階級独裁である。又ロシアにはレーニンが国家資本主義と命名した一種の過渡的社會主義が実施されて居る」、ということである⁽³⁹⁵⁾。その状態はロシアにおいては確立されたが、中国では実現される見込みがないという。橘は次のように、その原因を中口両民族の進歩の差に求めている。

シナ民族の文化がスラブ民族のそれとは比較にならぬほど古く、複雑にして進歩して居るからである。ロシアの庶民は久しい習慣から、強力を以てこれを抑へつけ或は引廻すことが出来る。それは彼等の文化が幼稚であり、その社会が単純且つ薄弱だからである。然るにシナの庶民はこれを強力で抑へつけることは出来ても、彼等を強者の意思のままに引廻すと言ふことが出来ない。世界の何れの民族にも増して複雑且つ強靱なる彼等の思想、殊にその社会組織は、外力の自由になるにはあまりに根深い。⁽³⁹⁶⁾

約言すれば、中国には、いわゆるロシア型の「赤化」の基礎が存在しない。そのため、「シナ社会及び経済組織が十分に資本主義化した後ならば、この国にも所謂赤化の可能性を生ずると想像されるのではあるが、今日の状態では、マルクス理論の実現は申すに及ばず、レーニンの目論んだような飛躍も亦到底シナに行はれる見込みがない⁽³⁹⁷⁾」、という結論に至った。つまり、中国の場合にはそのブルジョアジーがまだ発達していないうちには、中国のプロレタリアートは共産主義どころか、無産階級独裁の政権さえも樹立することができないということである⁽³⁹⁸⁾。中国は、あくまでその歴史発展の規則にそって、自分に適した政治を編み出すべきだ、というのが橘の立場であった⁽³⁹⁹⁾。この立場から出発した、橘樸の想定した中国革命の進み方は、「「資産階級」者は勇を鼓してその信ずるところに邁進すべく、共産黨員及び無産階級者も亦自らを檢束しつつこの信ずるところへ邁進すべき」であり、「二大勢力が内輪喧嘩をやることが一番の禁止でなくてはならない」ということであつた⁽⁴⁰⁰⁾。

しかも国共両党の合作といつても、一定の時期範囲内に限られているという。ある段階に到達すると、両党の間で衝突が自然に起こるというのである。そのことについて、橘は次のように述べている。

共産党と国民党との提携し得る範囲は、シナ国民経済の自然的発達を阻害する所謂軍閥及び帝国主義勢力を押除けた後には、階級闘争理論に終始一貫しようとする共産党と、新たに発生する資産階級の支配的勢力をその幼稚な時代に「節制」するに止めようとする国民党との間に、正面衝突の起ることを避け難からうと思ふ。⁽⁴⁰¹⁾

「正面衝突」といえども、橋樑の考えではやはり「平和的な闘争⁽⁴⁰²⁾」という範囲に止まっている。資本主義社会が現実に現われた後、中国が資本の弊害を抑制するため、取るべき路線は孫文の路線、すなわち資本節制である。なぜなら、「孫文の方法に依るときは、彼が理想とする無（産）階級の共産社会に到達するには、共産党の方法に比べて、多少遅れるかも知れぬがその代りに理想に到達するまでの経路は、共産党のそれに比して遥に平穩である⁽⁴⁰³⁾」ということであった。橋がまた「卑見によれば所謂社会政策は資本主義社会と社会主義社会との間に架け渡された橋であり、即ち一種の過渡的方便である⁽⁴⁰⁴⁾」と述べたように、彼が期待しているのは、孫文主義的な「社会政策」を通じて中国社会を資本主義社会から社会主義社会に連れていく、ということであろう。しかし1927年に起こった国共分裂、都市と農村における激化した階級闘争の現実、橋のこの構想を打ち砕き、彼に自分の思想に対する再検討を迫るようになった。

③ 国民革命の挫折

国民党と共産党の間、主義、路線及び利益をめぐる摩擦はもとより存在していた。孫文がなくなった後、国民党右派は積極的に共産党を抑制することに動き出した。その頂点は、疑いなく1927年に起こった蒋介石が指導した「四・一二」クーデターである⁽⁴⁰⁵⁾。それまでの歴史的背景を顧みると、次のようなことが言えるだろう。

1926年7月、国民革命軍は広東から出発し、軍閥帝国主義打倒及び中国統一を目標とした「北伐」を開始した。当時の軍閥呉佩孚、孫伝芳の軍隊はみな私軍、雇用軍であったのに対し、三民主義の理論教育を受け、厳格な組織・規律を具えた国民革命軍・党軍は、破竹の勢いで湖南、湖北、江西、福建に進撃している。北伐の前後、軍総政治部・各級政治部などの機関は、軍隊の規律維持、政治教育、民衆に対する宣伝、動員及び組織化に努めていたため、各地の労働運動の高潮を巻き起こした。民衆が情熱をこめて北伐軍を支持していたことは、北伐の順調な進行を促した重要な原因であった。1926年10月10日、北伐軍が武漢を占領した後、広東国民政府は情勢に鑑みて、11月に武漢への遷都を決定した。また1927年のはじめ、不平等条約撤廃をさげふ民衆は、革命の勢いで、漢口のイギリス租界を接收した。さらに3月下旬に、中国最大の工業都市上海で国民革命に呼応する労働者の蜂起が成功するなか、北伐軍が上海に入った。しかしこの一連の事件は、上海を含め、莫大な資本をもつイギリスの態度を硬化させた。南昌、上海、南京を占領した蒋介石は、英米の外国勢力・国内財閥・大地主たちと妥協し、労働組合の鎮圧に乗り出したのである⁽⁴⁰⁶⁾。

当時、国共合作を擁護しつつ、蒋介石に対立していたのは、汪兆銘の指導のもとにあった国民党左派の武漢政府であった。しかし長江下流の経済発達地域に対する支配権を失った武漢政府は、財政・流通面の危機に直面せざるを得なかった。それに加えて、共産党のより急進的な労働運動、特に農民運動の展開は、武漢政府に刺激を与え、軍の一部による

武力鎮圧を招いた。こうして1927年7月15日に、汪兆銘の国民党は、南京政府の軍事的経済的圧力と国共内部の深刻化した亀裂を背景として、共産党との決裂を決定したのである。武漢を退出した共産党は、8月1日に南昌で蜂起し、失敗した後、8月から9月にかけて湖南、湖北、江西、広東にわたって武装蜂起を起して敗れた。湖南農民運動の指導者たる毛沢東は農民軍を率いて、朱徳の赤軍と合体し、湖南省東部の井冈山で労農割拠の政権を樹立し、且つ土地革命とゲリラ戦の方式を以て、長期にわたって南京国民政府との闘争を展開していった。

このような情勢に臨んでいた橋樑は、蒋介石を「郷紳や中産者の利益を擁護する右翼の理論的指導者戴天仇氏の流を汲むもの⁽⁴⁰⁷⁾」として捉えた一方、武漢政府の分裂の原因を「(一) 共産派のやり過ぎと(二) 民衆に直接する末輩運動員の軽燥⁽⁴⁰⁸⁾」に求めたのである。こうした国民党右翼と急進した共産党両方に批判を加えた橋は、国民党左派の立場を堅持している。それはすなわち、軍閥帝国主義を打倒するための労働者、農民、小資産階級との連合戦線であった⁽⁴⁰⁹⁾。山田辰雄によれば、橋の態度は「孫文思想の延長線上において大衆運動の左右の両極を批判し、その中間に国民革命の途を求めた⁽⁴¹⁰⁾」ことになる。

1927年7月、武漢政府の「分共」から、凡そ半年にわたって武漢、南京両政府間の闘争が妥協点を見出した後、1928年2月には蒋介石の指導のもとで、「第二次北伐」が再開された。6月、北伐軍は北京を占領した。張作霖⁽⁴¹¹⁾は北伐軍に敗れ、奉天に撤退する途中、関東軍が仕掛けた爆弾にあって爆死した。その長子張学良⁽⁴¹²⁾は、父のあとを継ぎ、東北の実権を握った後、1928年12月29日には三民主義を遵守、南京政府に服従、旗を国民政府の青天白日に変えることを宣告したのである。「北伐」はここで完成した。その期間において、橋の蒋介石に対する見方も少し変わっていく。

早くも1927年11月の文章において、橋は蒋介石に、在来の中国軍閥（唐生智、馮玉祥、閻錫山、張作霖、張宗昌など）とは違う新軍閥の性質を見出した⁽⁴¹³⁾。橋のいわゆる「軍閥」は、「軍人が本来の職権を超え、その握有する軍事勢力を背景として政権に干与し、又はこれを壟断する場合、この軍人を中心とする政治軍事的機構に対する名称である⁽⁴¹⁴⁾」、ということである。中国の「在来の軍閥」は、官僚階級の一員として、地方で郷紳と緊密な利益関係を持つものである⁽⁴¹⁵⁾。橋が見出した、蒋介石の旧軍閥と異なる点は、まさに資本主義性及び近代性である⁽⁴¹⁶⁾。そして「第二次北伐」が順調に進軍する中、橋は蒋介石に対して「近代的軍閥」と名付け、浙江、江蘇二省を本拠とした蒋氏の指導によるブルジョア革命に、ある種の積極的な評価をも与えた。曰く、

この二省（江蘇、浙江…趙）が近代的軍閥の首領なる蒋介石氏の勢力範囲なること、国民党の正統としての勢力が相当強大であること、資本家的民主主義思想が或る程度に発達して居る為、小軍閥の地盤たるに適しなくなったことである。若し私のこの

観察が、多少共真相に触れて居るならば、富と文化の程度の最も高いこの地方における前記の如き現象は、シナ革命の前途に対して、かすかではあるが一道の光明を投げけるものとして、頗る注目に値することだと思ふ⁽⁴¹⁷⁾。

1928年9月、10月に発表した文章「中国革命の本質」において、橋樑は今日（当時）の中国を「単純資本主義革命時代」と認め⁽⁴¹⁸⁾、資本家階級は経済的方法によって、軍閥を克服する可能性が十分にあると予言していた⁽⁴¹⁹⁾。ただ、単純な資本主義は橋の理想には合致しない。したがって「革命の明日の過程が単純資本主義のそれであり得ない…実際明日の革命過程は、ブルジョア中心の現過程の行詰りをその出発点とする⁽⁴²⁰⁾」、ということになる。将来、「蒋介石が一方に資本家階級を導いてこの使命のために努力せしむると同時に、他面小資本家的孫文主義者と提携して資本家勢力の過度の膨張を牽制する⁽⁴²¹⁾」こと、また蒋介石が「汪精衛氏の指示する途に従って左傾して行く」ことに、橋は期待を寄せている⁽⁴²²⁾。彼が堅持している政治経済政策は、やはり前に提示した孫文の「資本節制」の路線であったと言える。

おわりに

国民革命の曲折に直面していた橋は、自身の思想を再三調整せざるを得なかったが、現実には橋の期待を裏切った。1929年1月に開いた全国軍縮会議（国軍編遣會議）において、南京政府は各地の軍閥の抵抗を受け、政策実行が難航した。3月から11月にかけて、蒋介石と各地の軍閥（閻錫山、馮玉祥、李宗仁、白崇禧など）との間で激しい衝突が起き、1930年5月の「中原大戦」（蒋介石と閻錫山ら反蔣勢力の戦い）に及び、中国の軍閥戦争の規模は一層拡大していった。それだけでなく、3月15日に開催した国民党第三回全国代表大会で、鄧演達、陳公博、甘乃光など国民党左派の人物が党籍を奪われ、汪精衛さえも警告処分を受け、国民党左派は大きな打撃を被った。こういった現実は疑いなく、橋の想像した、資本主義勢力によって軍閥が克服された後で、国民党左派の指導を通じて社会主義的国家へ過渡するという路線の破綻を意味したのである。以上がつまり、満洲事変直前の橋が臨んでいた情勢であった。

IV「方向転換」——歴史に介入する行動——

はじめに

1931年9月18日の夜、日本関東軍の謀略により、鉄道の守備隊が奉天（今瀋陽）柳条湖附近の南満洲鉄道を爆破し、その責任を中国軍隊に転嫁した。またそれを口実にして瀋陽の中国軍隊に攻撃ははじめ、さらに進んで1932年2月までに、中国東北の全域を占領した。これらの一連の事件の発端、すなわち9月18日夜の出来事は「満洲事変」と呼

ばれている。満洲事変は、日中間のみでなく、世界史的にも重要な事件であり、それと同時に、橋樑の生涯にも大きな変化をもたらした事件であった。橋はこの事件をきっかけとし、これまでの中国革命を支持する立場を捨て去り、関東軍の協力者また満洲国にイデオロギーを提供する人物になった。この変化は、いわゆる橋の「方向転換」と称されている。

これまでの橋樑に関する研究においては、彼の「方向転換」は避けられない課題である。いずれの研究者も、この課題に向き合わなければならない。しかし中国人の筆者にとって、橋の「方向転換」を研究することに、一体どんな意味があるのか。1945年の日本敗戦と、1949年の中華人民共和国の成立によってもたらされた、中国革命の論理を主なロジックとしての革命史観が、戦後の日本の知識人に多大な影響を与えたことは周知のことである。日本において、侵略戦争を反省、中国革命を礼賛する風潮が一時期には盛んになったのであるが、その後は曖昧になっている。日中間の問題は、現在でも続いているのである。もちろん1950年の朝鮮戦争の勃発や、1950年代後半の冷戦の深刻化にしたがって日本の左翼勢力が分裂し、衰えていたことは、日中間の隔離をもたらした原因であるに違いないが、しかしもし冷戦のようなイデオロギー的見方を払い落とし（1991年のソ連崩壊が冷戦の終焉と見なされているが、冷戦はどのような意味で、どの地域において「終焉」したか、しなかったのかについて、検討すべきであろう）、近代以来の日中間の矛盾や戦争を突き止めようとする場合においても、悲観的に見れば一言では尽き難いのだが、おそらくより深層的な原因が浮かび上がるのではないかと思われる。橋が「おれの卒業論文だ⁽⁴²³⁾」と自称した『職域奉公論』の序説の部分において、晩年の橋は自分の中国研究の動機について次のように述べている。

往々支那学者と誤解されるが、私の本領は終始一貫、支那社会を対象とする評論家たることにある。そして私の支那評論の動機は物好きや知的欲求にあるのではなく、主として政治目的即ち日支両民族の正しい関係の理論及び方法を探索することにあつた。これは誠に広汎な問題であつて、少なくとも当時に於ては、学者として即ち深く狭く入るよりは、評論家として浅く広く進んだ方が遥かに適當と考えられるのである。⁽⁴²⁴⁾（下線は筆者による）

この述懐を見てわかるのは、橋の中国研究の元々の動機が、日中両民族の正しい関係を建設することにあつた、ということである。こうした動機こそが、橋の「方向転換」の不思議さを際立たせるのであろう。中江丑吉、尾崎秀実、石橋湛山などのように、中国革命を支持するか日本の中国侵略に反対する、戦前戦中の日本知識人は貴重な存在であるに違いないが、彼らの主張は歴史的に見れば正しいとしても、その「正しい」言説だけを取り上げることには物足りなさも感ずる。筆者は、彼らの努力や思想の深さを否認するわけでもなく、彼らの不足を責めたいわけでもない。しかし、もし話題を「近代の日中関係」と

いう枠組みに限定するならば、歴史的に見れば正しい言論がなぜ歴史において正しい現実をもたらさなかったのかという問題が、われわれに迫ってくる。それゆえ、現在の日中友好に思想的資源を提供しようとするならば、正しい言論のみでなく、歴史的に見れば「間違っただ」言論を研究する必要もあるのではないか、というふうを考えられる。その意味で橋樑の存在は、一つの範例を提供してくれるのであろう。日本の大正生命主義の影響を深く受けた橋樑、魯迅が「われらよりも中国を知る」と評価した⁽⁴²⁵⁾ように、中国におよそ四十年駐在し、中国社会に深い認識を持ち、且つ中国革命を情熱をこめて支持した橋樑、「方向転換」後、日中両国を中心として東洋共同社会の理論と実践を模索した橋樑という歴史人物は、まさしく日中両国の相互理解のために思想的、知識的な資源を提供してくれると同時に、日中間の「一言で尽き難い」難問を提示してくれるのではないかと筆者は考える。橋樑の「方向転換」は、この問題の一角を明らかにしてくれるのではないかと。筆者は本章で、先行研究の成果を踏まえた上、「方向転換」と橋樑の独自の思想との関連性について、議論を展開してみる。

1. 橋樑の「方向転換」に関する先行研究

橋樑の「方向転換」とは、1931年9月18日の「満洲事変」の直後に、橋樑の思想上において一連の変化が起き、関東軍の協力者及び満洲国のイデオログとなったことを指している。事変発生の当時、『満洲評論』の主筆の一人としての橋樑は、「厳正公平の立場で、関東軍や朝鮮軍の行動に対して直接非難を浴せたわけではないが、併し結局財政関係から早晚中央の統制下に復帰する外ないのではないかと」という関東軍の行動に「100%に懐疑的な」態度を持っていた⁽⁴²⁶⁾。『満洲評論』の発行人たる小山貞知は、橋樑にあなたの見方は認識不足だと告げ、それを「是正」するため、彼を直接板垣征四郎と石原莞爾に会見させた。10月9日⁽⁴²⁷⁾、関東軍司令部を訪れた橋樑は、板垣、石原両参謀と対面し、意見交換を行った後、今回の事件の意義を「認識」し、これまでの自分の思想に対して「反省」を加え、過去の立場を転向させたのである。1934年8月11日の『満洲評論』に載せた「私の方向転換」において、橋樑は当時得た認識について次のように述べている。

一、今次の行動は関東軍中堅将校のイニシアチブに依るものであって、上層部は寧ろそれに追随したものであること。

二、中央の統制力は資本家政党の覇権をその内容とするものであり、それが反資本家反政党を志向とするこの一握の新勢力により、たとえ一時とはいえ阻止されたものであること。

三、かくもさい爾たる（ママ…趙）小集団が如何にしてかくの如き威力を発揮し得たかという、それは本国に於ける同志将校の大集団が其の背景に立つためであり、この青年将校の集団が国軍の堅い伝統を破って所謂下剋上の態度を表示し得たのは、

更に其の背後に全国農民大衆の熱烈な支持があったためであること。

四、今次の行動の直接目標はアジア解放の礎石として、東北四省を版図とする一独立国家を建設し日本はこれに絶対の信頼をおいて一切の既得権を返還するばかりでない、更に進んで能う限りの援助を与えるものであること。

五、それと同時に、間接には祖国の改造を期待し、勤労大衆を資本家政党の独裁及び搾取から解放し、かくて真にアジア解放の原動力たり得る如き理想国家を建設するような勢いを誘導する意図を抱くものなること。⁽⁴²⁸⁾

まとめると、(一)と(二)は、今回の事件の性質、つまり「下から上へ」の方向から「反資本家反政党」を語っていると言える。(三)は、将校団の階級基礎を日本の農民大衆に求めているということ、(四)と(五)は、今回事件の三重の意義、つまり「満洲国」、「日本」及び「アジア」に対する意義を述べている。

次に、橋樑の「自己反省」における会見の影響について述べてみたい。過去の橋は「自由主義者であ」ったが、それと同時に、「自由主義の母体たる資本主義を否定する志向に強く支配されて居た」。したがって当時の橋は「自ら信ずるほど自由主義に安住して居たわけではなく、寧ろ資本主義末期の小市民にありがちな懷疑逡巡の心境から、しばらく自由主義に逃避してそこで自身の選ぶべき新しい路線を探し求めて居たもの」であった。しかし関東軍司令部での会見は橋に、「かく如くの脆弱な自身の立場に対する反省の機会」を与えた。「反省」の結果、橋は「自由主義と資本家民主主義とに決別し、新たに勤労者民主主義——満州建国のためには特に農民民主主義を取り上げて、これを培養し鼓吹することに最も深い興味を覚えること」になった⁽⁴²⁹⁾。友人の多くは彼の変化を右傾と解釈しているのに対し、橋はそれを、「私の思想の一步前進であると解し、同時に私の社会観に一つの安定を与えたものだ」と述べている⁽⁴³⁰⁾。

以上が、1934年の時点に立った橋の、満洲事変後の思想及び立場の変化に関する概括である。彼の「方向転換」は、先行研究にとって避けられない事件であった。筆者はまずここで、これまでの先行研究の主な意見を紹介して論点を整理する。

(1) 山本秀夫、山田辰雄：「方向転換」の研究基調

橋樑の「方向転換」を、中国の国民革命の挫折と関連付けて論じることは、先行研究の基調の一つであった。例えば、代表的な橋研究の一つと見なされている山本秀夫の『橋樑』(1977)は、橋が満洲事変を肯定する基礎について、橋の「中国ブルジョア革命が官僚軍閥に対する人民の闘争であるという見解」、また「満洲軍閥(張学良政権…趙)の日本軍による打倒は満洲人民の解放であり、中国ブルジョア革命の一翼をになうものだという見解」にあるもの、と論じた⁽⁴³¹⁾。つまり、国民革命が果せなかった軍閥打倒の任務を、関東軍によって完成したものとし、橋は関東軍の味方となった、という見方である。山本は、そ

れを「歴史の皮肉」としていると同時に、橘の行動を「ファシズムの流れに掉さしながら、このファシズムをその内部から乗り越えていく逆流を育てていこう⁽⁴³²⁾」としたものと認識し、彼に一定の理解を示したのである。また、山田辰雄は、緻密に国民革命期の橘の論説を整理した上で、中国共産党、中国国民党右派・左派の分裂、闘争、及び軍閥の反蒋介石戦争の拡大化という現状に臨んでいた橘が、国民革命に幻滅感を味わい、それに対する失望を満洲国に対する期待へと転化していったもの、という結論を打ち出した⁽⁴³³⁾。こうして国民革命の挫折は、橘の「方向転換」をもたらした歴史的原因であった——このような見解が、橘研究の基調となったと言える。

(2) 野村浩一、福井紳一：アジア主義の変形

野村浩一と福井紳一は、橘の「方向転換」の中に、アジア主義的意義を見出した。野村はそれについて、以下のように述べている。

橘において、それは何よりも「国民革命の挫折」によって閉ざされた中国社会変革の道を、再度、東洋社会に見合った形での独自の政治形態の創出、東洋的価値実現の路線として、新たな場において追求しようとするものだった。…橘は、まさに中国と日本とのほざまにあつて、いわば「アジア」＝「東洋」をテコに、前方へと飛躍したのである。それこそが、橘の「方向転換」のもつ本質的な意味合いの一つであった。

⁽⁴³⁴⁾

さらに野村は、橘の生涯を三つの時期に分けて説明した。

第一期は、中国に渡り、ほどなく辛亥革命に遭遇し、やがて中国社会研究に沈潜して独自の中国論を打出しつつ、「五四」から「北伐」-「国民革命」の激浪をへて、「満洲事変」（一九三一）を迎えるまでの時期である。

第二期は、「満洲事変」に際しての「方向転換」以来、満洲国協和会の理論的リーダーの一人として活躍し、同時にいわゆる『満洲評論』派を形成して、建国の渦中で活動する時期である。

第三期は、日中全面戦争の開始から敗戦、その死に至るまで、——この間、日中間を往来しつつ、一方で日本国内の改造、他方で日中戦争打開の方策を求めて、評論、実際両面にわたる最後の活動を展開する時期である。⁽⁴³⁵⁾

要するに、その生涯を通覧した上で、野村はそこに貫かれていた姿勢を、「一定の政治目的をひめた「評論家」から、次いで工作者、活動者へと大きく弧を描きつつ、「満洲事変」「支那事変」を転期とするくっきりとした輪郭をもった三つの時期を生きた⁽⁴³⁶⁾」人物だったとまとめたのである。ここでわかるのは、野村によれば、「満洲事変」が橘を「評論家」

から「工作者、活動者」へ転換させた契機、ということである。彼が指摘したように、橘の「方向転換」が、ただ思想の転換のみならず、自身の行動の転換でもあったことは、注目すべき点である。

福井紳一は、以下のように歴史状況から「方向転換」を説明した。満洲事変直前の状況にあって、橘がブルジョア革命と見なしていた中国国民革命の挫折のほかにも、日本資本主義の行詰りがあった。すなわち「金解禁と世界大恐慌によってもたらされた昭和恐慌は、労働者の解雇による大量の失業者を生み出すとともに、農村を直撃し、「娘の売り」「欠食児童」など悲惨な状態⁽⁴³⁷⁾」に陥ったことを提示しながら、日中両国の困難がともに、橘に「自由主義と資本家民主主義とに決別」させ、東洋の似合った形式を以て資本主義を超克すること、いわゆる「左翼的アジア主義」の立場に立たせたと述べた。そして「満洲事変」は、まさに橘に思想の実験場を提供したのだ、というのである。曰く、

満洲事変は、中国国民革命や中国の現実に、ジャーナリスト・観察者としてしか事実上は関わってこなかった橘に、彼の思想の実験場であり、「理想」の現実化の可能性を秘めた舞台でもある「新たな場」を提供してしまった。この時から橘は、行動者・工作者、或は「建国のイデオログ」として、現実の「政治の世界」の中を生きていくことになるのであった。⁽⁴³⁸⁾

つまり福井は、野村による橘の「アジア主義」及び「評論家から活動者へと転換」という見解を継承しながら、それに資本主義超克という左翼的意味合いを付け加えて「方向転換」への分析を展開した、と言える。

(3) 中西勝彦、酒井哲哉：橘樸思想への探求

上記した研究の方向性について、大まかに言えば、1、山本や山田は、橘樸の「方向転換」の歴史的原因を究明しようとしているのに対し、2、野村や福井は、むしろ「転換」後の、橘の行動の性格及び意義を明らかにするものであったと言える。換言すれば、「原因」及び「行動」に関する研究であった。しかし、たとえ同じ「原因」に根ざして、何らかの「行動」を起こすとしても、その人の「思想」によって、その起こす「行動」は異なることになるはずである。「思想」そのものは、人物の物事に対する判断及びその後に行った行動を決定する重要な要素であると同時に、一定程度の、歴史の拘束を超えた自律性を持っているため、今日のわれわれにある種の啓示を与えてくれるものとなる。橘思想の研究の意義は、まさにそこにある。ここで次に取り上げたいのは、中西勝彦の橘研究である。

①中西勝彦：民衆を基軸とする国家像

中西は、橘の思想の形成を、日露戦争前後に起きた民衆の台頭と青年の「煩悶」に求め

ている。「日比谷事件⁽⁴³⁹⁾」に象徴される民衆勢力の台頭という現象の背後には、「日清戦争後わずか十年で強国ロシアに対抗できる軍備をもつ帝国主義国家となるためには、国民大衆のエネルギーを十分に、且つ能動的な形で引き出すことなしには不可能であった⁽⁴⁴⁰⁾」という背景があった。故に、「民衆エネルギーの強大さ、講和条約反対運動に端を発した権利意識の高揚は、人々に、とりわけ青年たちに民衆の意識の動向をめぐりにしては何事も語れない新たな時代の到来を感じさせる⁽⁴⁴¹⁾」ものになった。中西によれば、橋の民衆に対する注目はその時期から生じた、ということである。

青年の「煩悶」とは、世紀転換期において、「青年たちの中で意識の流動化と価値基準の転換」が始まり、「挙国一致」体制ないし「国家」そのものの栄光に対する懐疑、さらに国家そのものに対する不信感が生じたことである⁽⁴⁴²⁾。中西はとくに、橋の父・量が罪を押し付けられた「教科書疑獄事件⁽⁴⁴³⁾」を取り上げ、「橋の「国家の栄光」に対する幻想を父の事件がかなりの程度破壊したであろう⁽⁴⁴⁴⁾」と推測している。

こうして国家に対する幻滅と、民衆に対する関心は、橋の思想的基底をなした。つまり、「青年期、国家に対する幻想を喪失した橋は、この時期からは国家の基盤をなしている民衆を理解することによって、現実の国家を把握しようとする⁽⁴⁴⁵⁾」ということ、「民衆を基軸とする国家形成の立場にたつ⁽⁴⁴⁶⁾」ということであった。こうした「民衆」に執着する立場から出発したために、国民革命期において橋の思想は、「党および政府の役割を「補助手段」というにとどまり、党、革命軍、大衆運動の相互関連、とりわけ革命権力の問題をそれ自体として取り上げるにいたらなかった」ことと、「革命権力の問題が、民衆運動そのものに解消されている」ことに帰結したのである⁽⁴⁴⁷⁾。それゆえ橋の想定した「理論は国民党左派、実践力は中共⁽⁴⁴⁸⁾」という構図は、1927年の国共分裂、国共戦争の長期化、1929年国民党左派の弱体化及び蒋介石政権の難航という現実には遭い、完全に破綻した。中西は、当時の橋の思想的変化を次のようにまとめている。

こうして橋は、孫文主義に基づく急進的民主主義革命を遂行する政治勢力を国民革命挫折後に見い出せず、また軍閥戦争終結後の期待を担ったブルジョア勢力も非力な中で、先に見た落胆を示すにいたるのである。⁽⁴⁴⁹⁾

しかし革命を担う「政治勢力」をどう扱うかという問題に直面していた橋樑は、民衆の要求及び革命の社会的基盤を見逃してはいなかった。つまり「橋が民主主義革命を遂行する政治勢力が存在しないことに落胆を示したのは、単にそのような政治勢力の存在にのみ国民革命の再生を期待していたのではない。逆に橋は、中国には民主主義革命を遂行する濃厚な社会的基盤が存在することを認めていたからに他ならない⁽⁴⁵⁰⁾」、ということである。こうした「政治勢力の不在と革命遂行の基盤が存在する⁽⁴⁵¹⁾」現状は、橋の強力な革命権力への期待を促した。中西は、橋のそのような心境を、「方向転換」でファシストを受け入

れた事態と関連付け、次のように述べている。

一九三〇年ごろの橋は、一方で一党独裁の強力な政治勢力を待望するとともに、他方で大衆運動を重視する姿勢は崩していなかった。橋の思想にあって、両者の関連性はともに大衆の要求を実現するものとして同一の方向を志向するものであったことは確かである。橋の関心が、中国民衆の欲求から離れない限り、それを実現する方向で、政治権力と大衆運動の正常な関連性が橋の内部において追求されたであろうと想像されるのであるが、しかし民衆の欲求に対する関心がぬけ落ちる時、一党独裁の期待と大衆運動の重視は、ファシズム運動を受け入れる素地に転化していくのである。

(452)

つまり関東軍は橋に、大衆を基盤とした強力な政治勢力というイメージを植え付け、そのことが、橋が関東軍の協力者そして満洲国のイデオログに転化した、すなわち「方向転換」を引き起こした原因であった、ということである。

②酒井哲哉：大正社会主義への還流

酒井哲哉は、橋樑の思想の根底を、「社会の発見」という大正時代の思想的特色に求めている。その時代の特徴について、彼は次の如く叙述があった。

大正期の思想界は、「社会の発見」と称されるような社会概念の析出状況のもとで、国家主権の絶対性が様々な角度から再検討された時代であった。(453)

次いで、酒井は橋の中国研究について、「政治の否定」を中心動機とした大正社会主義の圏内にあった⁽⁴⁵⁴⁾ということ、「国家制度や制定法の背後にある社会内在的な規範」に着目し、「大正社会主義に顕著な社会の自律性と相互扶助性という主題を、中国の歴史と社会のなかに読み込んでいく試み⁽⁴⁵⁵⁾」であった、としている。したがって酒井は、橋の思想の底流に対して、「アナキズム的な大正社会主義」と呼んだのである。

1920年代（殊に後半期）における、橋樑の中国ナショナリズムに対する理解と、「日中対等外交」を繰返して唱えたことは、高く評価されている。しかし酒井はかえって、橋の依拠する「アナキズム的な大正社会主義」は、「同時代のギルド社会主義や多元的国家論など「政治的多元主義」の主張と踵を接したものである」とし、「本来ナショナリズムとは緊張関係を持つ思想」とその区別を提示している⁽⁴⁵⁶⁾。その上で、孫文の「大アジア主義」演説に接した橋は「孫文の自民族中心主義を読み取り、これを完膚なきまでに論駁」したのだが、これについて酒井は「反ナショナリストとしての橋の面目躍如の感がある⁽⁴⁵⁷⁾」と述べている。

さらに「方向転換」の意味を説明するために、酒井は長谷川如是閑の「『無政府』と『独裁』」の次の部分を引用した。つまり、

「無政府」も「独裁」も畢竟社会進化を目的としているのであり、その違いは、後者が人為的援助により社会法則の障碍を排除したり社会法則の保存や発達を促したりするのに対して、前者は、その社会法則は「自然」が不合理的障碍によって阻止されずに社会を支配するときに合法的に実現すると考える点にあるに過ぎない。しかも、或る力によって「無政府」が妨げられている社会に「無政府」を持ち来すには、その障碍を排除するために「無政府」は強力を必要とするから、この場合無政府主義者は必ず可なり強力主義者でなければならない。是に於て『独裁』と『無政府』とは交錯した関係になるからである。⁽⁴⁵⁸⁾

酒井は、こういう見方からすれば、「橘にとって関東軍は、本来実現されるべき「自然」としての「自治」のユートピアを妨げる障碍を吹き飛ばす「強力」に他ならなかった⁽⁴⁵⁹⁾」、という結論に到達した。この結論は、「ファシズムの流れに掉さしながら、このファシズムをその内部から乗り越えていく逆流を育てていこう」という、山本秀夫の理解を発展させたものであると言えるかもしれない。つまり結果として橘は、関東軍と相互利用の関係に入った、ということになる。「方向転換」の意味に関して、酒井の言葉、つまり「満州事変後のいわゆる「転向」と呼ばれる思潮は、一般には「マルクス主義から日本回帰へ」という形で定式化されている。……だが、一見単純なナショナリズムへの回帰と解釈されやすい、一九三〇年代において多用された「郷土」、「共同体」といった表象が、仔細に検討すれば寧ろ大正社会主義のナショナリズム批判をくぐった重層的な構造を持っていることは決して少なくない」という指摘が示すように、橘の「方向転換」は、マルクス主義から日本へというプロセスでなく、むしろアナキズム的な大正社会主義の一つの展開であった、ということになる。

2. 「方向転換」の意味に対する再検討

以上、橘樸の「方向転換」に関する先行研究の代表的な意見を紹介した。本論文の構想は主に、多く中西勝彦と酒井哲哉両氏の研究の啓示を受けている。本論文のオリジナリティと言える部分は、橘の思想の形成を大正生命主義に根拠を求め、日本における文脈のほかには中国経験（主に辛亥革命と療養経験）を加えて分析すること、その思想の具体的な展開の仕方を説明すること、及びそれらを基礎とした橘の行動に対して再解釈することであった。これから、両氏の研究を踏まえながら、「方向転換」に関する筆者の意見を述べる。

(1) 革命の担い手について

中西はその研究で、「民衆」に執着していた橋樑が、革命権力の問題を見逃した結果、国民革命の挫折に対する反省からファシズムへと接近していく、といったプロセスがあることを指摘している。ただし、橋の革命権力あるいは革命の担い手に関する構想が、彼の思想のエートスと具体的にどのように関わってくるかという問題は捨象されているのではないかと筆者は考えた。筆者はここで、橋の初期思想と関連付けながら、その問題について補充を試みたい。

筆者は本論文の第一章において、橋の思想の背景——大正生命主義が、「国家・民族・政治」などの固いテーマに対し、様々な角度から再検討しようとする——そのような性格を持っていた、ということを指摘した。「国家・民族・政治」というような明治期において自明であった概念は、明治から大正への転換期を経て、民衆勢力の台頭、そして個が資本制によって析出されたこと及び個の国家に対する疎遠感に伴い、その自明的、先験的性格を失い失いつつあった。それらのテーマの衰退にともない、「社会・民衆・生命」といったより根本的、普遍的領域に対する関心が、時代の課題として浮上してきた。個の生存、生活問題及び価値の実現に関して、それらは必ずしも「国家・民族・政治」と関わらないものとなりつつあった。そのような風潮のもとで青少年期を送った橋は、当然国家や政治に対する懐疑を持つようになった。それは、1898、99年頃のことである⁽⁴⁶⁰⁾。国家・民族などの政治課題に対する関心を失った橋は、その目線を「個人」及び「個性」に向けていった。彼は自分の性格や傾向について、次のように述べたことがある。

私は幼少の時代から著しく個人主義的な傾向を帯びて居た。此の傾向は私の個性の中に固有のものであったかも知れない。家族主義、国家主義の行亘った社会に於て、私は常に憎まれ者となり廢残者となることを免れなかつたのである。それにかかはらず私の個人主義的傾向が、ことに私自身に関係する限り、遂に最後の勝利を得たと自信して居る。

ある人の個性はその人の生命であり永久の価値である。これを伸長させることによって人々は初めて「自分の為の生活」を楽しみそこに生存の意義を発見するのである。個人に於ける此の最後の自由を妨げるものは、仮令それが社会であらうと、主人であらうと、親であらうと総て間違つて居る。⁽⁴⁶¹⁾ (下線は筆者による)

ここでわかるのは、橋にとって最高の価値が、「個性」そのものであった、ということである。

個性(individuality)という言葉の直接的な原型は、中世のラテン語「individualis」による。それは、六世紀に出たラテン語源「dividere」(分ける)に、「in-」をつけて否定の意味をもつ、形容詞「individuus」から派生した概念である。また個(individual)に

内包されている、「分割できない」と「本質不可分」の意味は、主に中世の神学の議論、とりわけ三位一体の議論に根ざしていると言われている。一般的に理解されるように、「ほかと異なった」、「特異な」また「in the general (概して)」と対置される意味合いとは、全く逆のニュアンスと感じさせられる。その一方「分割できない」や「本質不可分」というイメージは啓蒙運動の政治思想のモデル、ライプニッツの「单子論」につながるものである。現代的意味での「individuality (個人性、個性)」という概念の登場は、中世の社会、経済、宗教の秩序が解体したことと関連させて考えられている。18世紀以降、individualは存在の基本的次元、集団というカテゴリーを形成するものとして、しだいに受け入れられていく⁽⁴⁶²⁾。

ところで橋が述べた、「個性の自由な開展が無ければ独特な人生観も人格もその開展の機会がない。ここに独特といふのはある個人にピッタリはまったものを指す。決して他に置き換える事の出来ないものである。唯個性のみが斯の如き貴重な人生観又は人格を形造る創造力を持って居るのである⁽⁴⁶³⁾」という言葉が示しているように、彼の言う「個性」は、明かに現代的意味での「特異な」及び「本質的な」といった意味合いを持つ。彼の構想した「理想社会」は、「各人が個性開展の自由を持ち、その個性に鑄だされた人生観を造り、その個性を種子とした人生観を養って、互に相競争し相協力する社会⁽⁴⁶⁴⁾」というものであった。こうした社会観においては、国家はただ、その構成分子たる個人が積極的に個性を発揮できる枠組みであり、その役割を離れた何らかの「目標」を設定するものではない。換言すれば、集団は、個人のために存在するものであり、個人は集団のために生きるものではなくなる。その発想法は、明らかに「富國強兵」のスローガンが示すような、外部危機に臨んでいた、明確に「目標」或は「中心的任務」を設定した明治時代の国家観を解体させ、個人の立場から集団のイメージを再構築しようとしたものであった。酒井哲哉は、橋のこの発想法について「多元的国家論」と呼び、その詳細について次のように説明している。

多元的国家論に多大な影響を及ぼしたギールケの思想は、主権論の文脈では、主権の唯一・不可分性を主張するボダン・ホッブズの主権論ではなく、社会における各種団体の連合に主権を基礎づけたアルトゥジウス主権論の系譜に連なる。橋においても、農民自治は職業自治に連なり、職業自治は更に「国際的政党」にまで発展していくものと捉えられている。⁽⁴⁶⁵⁾

酒井の叙述は、「方向転換」後の橋の思想的営為を整理するものであるが、初期の橋思想において、すでにその原形は形成されていたとも言えるのではないか。

集団より、分子のほうが根本的だ、分子は先験的且つ自明的な存在であり、各自の「欲求」に立脚して集団を形作る、というのは橋の思想の基本である。彼によれば、「欲求」と

は「生きんとする欲求」及び「ヨリよく生きんとする欲求」というものにほかなかった。橘は、この欲求を生命の「普遍性」と考えたと同時に、人類歴史の発展の動力と認めた。曰く、「生きんとする欲求からして吾々は群を形成するのである。群生活は必然的に社会生活にまで進み入る。社会生活とはそれを構成する各員の有機的關係によってのみ維持されるところの群生活である。即ち人間又は一部動物の幾世代に亘る経験から利他即利己といふ生活原理が自然に発生するのである。これを約言すれば、生きんとする欲望に出発した吾々は、生活の安全をヨリ固く保証する必要から即ちヨリ良く生きんとする欲求に駆られて利他的精神を獲得したのである⁽⁴⁶⁶⁾」、ということであった。(下線は筆者による)

「個性」の異なった各分子は、この「普遍性」(普遍的欲求)を満足するために、ようやく一つの「中心」に向いつつある——ということは橘の人類社会の形成に関する基本的な考え方となった。こういう考え方において、「中心」とは、前提でなく、結果である。この考え方は、橘の思想の背景たる大正生命主義と関わっている一方、中国経験すなわち辛亥革命の「失敗」とも関わっていると思われる。

辛亥革命後の情勢は、まさに橘の思想的性格に、事実に根拠を与えたのである。章永樂の研究によれば、1911年に起きた辛亥革命は皇帝制度を覆した結果、かつて多民族王朝国家としての中国の統一を維持し続けた皇帝の伝統、すなわち「皇統」が不在となり、国家は分裂の危機に臨んでいた。新しくできた「中華民国」は、一体何を統一の根拠とすべきかについて、1913年から袁世凱を代表とする北洋軍閥と、孫文を代表とする国民党が、それぞれに自らの答えを打ち出して論戦を展開していた。北洋軍閥の側において、康有為と梁啓超は、ドイツ＝プロイセンの経験をモデルとし、「主権在国論」、ないし国家意志及び強力な国家組織を以て中国を統合することを唱え、袁世凱政権に期待を寄せていたのに対し、国民党は「主権在民論」を主張し、議会を中心とした政体を通じて、国民の統合を実現させようとしていた。1912年、国家の統一を維持するために、北洋軍閥と革命派との間で成り立った妥協は、その基盤自身が脆弱であったため、両勢力の自己拡張を許容できる余地をしまい失いつつあった。したがって両勢力の対立は、軍事的闘争までへと発展していったのである。国民党は、宋教仁(1882-1913、国民党の指導者、議会政治の方法で袁世凱の権力を牽制することを主張、1913年2月の国会選挙で多数の席を獲得した)暗殺事件(1913年3月20日)を転換点として、孫文の指導したところの袁世凱に対する「第二革命」に打って出たが、実力の差によってまもなく鎮圧された。相対的に、孫文の革命を武力で鎮圧した袁世凱は、1913年から1914年にかけて、一連の改革を通じて革命派勢力を追払い、総統を核心とした地方の軍閥、士紳及び商人を内容としたエリート連盟を樹立した。が、強まっていく地方主義的勢力の反抗に突き当たり、1916年6月6日に急死したのである。⁽⁴⁶⁷⁾

袁世凱の死は、彼らなりの「国家意志」を以て中国を統合しようとした試みの失敗を印象づけたのである。橘樸が中国の「政治」が民衆と懸け離れたことに気づき、「この「政治」

を根底から踏みつづけて了うことこそ支那の改造の根本用件である」ことが頭の中に芽生えて来たのは、ちょうど「袁の死と相前後」の時期であった⁽⁴⁶⁸⁾。総統制にせよ議会制にせよ、それらすべては国家・政府レベルにおいて、「総統」もしくは「議会」を「中心」とし、「上から下へ」の方式を通じて、「部分」たる地方を統合しようとする試みであったが、ともに失敗した。その失敗を検討した上で、橋は別の方法を提示したのである。つまり、社会の各「部分」が自発的に「中心」に向くという、「下から上へ」の革命の構想であった。

そういった構想が橋樑の「中産階級革命論」に反映されることになった。すなわち、商人、学生、地主、労働者及び「変質した官僚」など、各分子が各自の生存を脅かされた際、自発的に革命に赴き、各々の機能を発揮しながら、最終的に国家の統一を実現する、という構想が出て来た⁽⁴⁶⁹⁾。このような構想においては、革命の担い手たる国民党や共産党の作用は当然、過小評価を受けざるを得なくなる。国民革命期に入ると橋は同じ視点から以下のように論じた。つまり小資産階級を代表する国民党左派と、無産者を代表する共産党がそれぞれに、「理論的指導」と「実践力」の機能を発揮し、革命に勝利を収めた後、「平和的な闘争」を通じて漸進的に一種の社会主義社会に到達するだろう、という予測を打ち出したのである。このことも、彼の思想の延長線上に出て来たもの、と言えるのではないか。

ところが、国民革命及び北伐をきっかけに崛起した二大政党（国民党と共産党）の勢いの強さに直面し、中産階級の自発的革命という橋の構想は、その影がしだいに薄らぐことになった⁽⁴⁷⁰⁾。それだけでなく、また国共分裂及び軍閥戦争の拡大は疑いなく、国共両党がそれぞれに「理論的指導」と「実践力」⁽⁴⁷¹⁾の機能を発揮して革命を遂行する、という構想の失敗を橋に印象づけた。そのような現実は少なくとも、革命の担い手のレベルにおいて、整合性の持つ「中心」勢力の必要性を橋に気付かせたのである。それはまさに、橋が関東軍を受け入れた、さらに後の「独裁政党論」を模索しようとした思想的素地を形作ったのではないか、と考えられるのである。

(2) 知識人と歴史

酒井哲哉は、前掲文章の中で、橋樑の「方向転換」に関して、アナキズム的な大正社会主義の思想的構造への回帰と認め、彼の事例を「大正期のギルド社会主義的秩序が一旦中国社会に読み込まれたうえで、それがアジア主義に還流していく過程として⁽⁴⁷²⁾」捉えている。これを解釈すると、「社会」を基点にして「国家」の行く末を再検討する場合、日中両国の矛盾が「東洋」社会の親和性によって隠蔽され、いわゆる「アジア主義」の枠組みに流れ込んだ、ということになる。以上は思想的レベルにおいて、橋の思想的变化を説明する試みであったが、筆者がむしろ注目したいのは、前に触れた野村浩一の観点、すなわち橋が示した満洲事変を転機とした「評論家」から「工作者、活動者」へという、行動的变化そのものである。言い換えれば、「評論家」の身分を守りつつ、筆頭で関東軍や満洲国

を支持することはできるのに、なぜ橋は「建国」の工作に身をもって投入したのか、という問題である。ここでまず「方向転換」の直後の、橋が採った「行動」について具体的に見てみたい。

① 行動者、工作者としての橋樑

「方向転換」は、具体的に1931年10月9日、奉天の関東軍司令部・東拓楼上に板垣征四郎、石原莞爾と対談した後でのことである。それら橋樑の一連の行動は、『橋樑著作集』第三巻の「年譜」によると、次のようになる。

(1931年)十月、奉天に赴き十数日滞在、東拓楼上に関東軍参謀板垣、石原と会談
……

十一月、奉天城内・自治指導部において講演——「王道の実践としての自治」。

十一月十八日、橋樑編『満洲と日本』刊行（改造社）。本書は「日本国民の立場から満洲問題解決の原則を闡明」し「満洲問題に関する日本国民の主観的真理を各国の読者の前に披歴すること」を目的とし（た…趙）……

十二月、野田蘭蔵と共に「建国社」を結成。これは「満洲国家の建設に直接間接の重要関係ある政治的経済的社会的な諸現象及び理論を調査考察及び宣伝するための所謂思想団体」として「自治指導部の機能の不足を補」う見地から発起されたもの。この頃、「満洲国建国大綱私案」……を草す。

(1932年)七月、協和会創立と共にその理事となる。⁽⁴⁷³⁾

ここに出て来る「自治指導部」とは、関東軍が満洲事変後に、占領地住民の日本軍への敵愾心や抗日意識を払拭し、民心を収攬して新国家建設への協力を汲み取るために、1931年11月10日、東北張氏政権の元官僚、日本とのかかわりの深い人物于沖漢の意見を採用して発足させた組織であった。于の意見は、「絶対保境安民主義」と「不養兵主義」、つまり東三省を中国本部から隔絶し、独自の経済・民生を図ることと、軍隊を設けずに国防を日本に委任すること、という主張であった。于によれば、「自治」は中国人の文化、習慣に適した制度である。が、柳条湖事件勃発後、東北各地において地方自治会や治安維持会などの組織が多く発生し、そこに日本人が顧問として入ったため、当該地域の住民と衝突する事態が多発していた。そういった情勢に鑑み、関東軍は「自治」を指導する組織を設定することを通じて、統一的な管理を樹立し、満洲国の地方自治制度を建設しようとした⁽⁴⁷⁴⁾。また「建国社」は、自治指導部の機能を補うために、橋樑や野田蘭蔵などによって、1931年12月に発足した組織である。該社の目的は、野田の起草した「建国社宣言」によると、「王道国家満洲国の建設」の「歴史的必然性」を主張する、ということにある⁽⁴⁷⁵⁾。また上記の「協和会」の前身は、1932年3月1日の「満洲建国」とともに消滅した「自治

指導部」の精神、つまり民族協和と完全独立を継承し、山口重次と小沢開作が組織した「協和党」であった。7月15日に発会、誉総裁に執政溥儀、会長に國務總理鄭孝胥、名誉顧問に関東軍司令官本庄繁、役員に各部大臣、日系高級官吏が就任し、「軍閥専制の封建主義、三民主義、共産主義に対決する思想戦」を展開していった。日本中央政府が満洲において、統制力を回復するとともに、その「協和会」は官製組織へと変わりつつ、植民地政策徹底のための宣撫工作、青年訓練、社会教化などの任務を担い、後に総力戦動員の組織となった⁽⁴⁷⁶⁾。

以上で見て来た、「自治指導部」、「建国社」また「協和会」などは、すべて満洲建国の事業と深く関わっていた機関である。橋樑が積極的に、それらの社団に参加し、自らの意見を建国の具体的な方略に変えようとした試みは、まさに彼の身分が評論者から、行動者或は工作者に転換したことを語っている。そして1931年11月から、橋は続々と『満洲評論』雑誌において、「新国家設計批判」（11月28日）、「王道の実践としての自治」（12月5日）、「満洲新国家建国大綱私案」（1月2日）、「回顧と展望——涙高かるべき昭和七年を迎えて」（1932年1月2日）、「独裁か民主か——蠟山教授の新国家論を読みて——」（2月27日）などの文章を發表し、満洲建国の各方面にわたる問題に論及していったのである。

橋樑の満洲新国家像とは、満洲国は「自身の軍隊を持た」ず、また「農業国家」であり⁽⁴⁷⁷⁾、そして自治、すなわち「自民自らの団体の力によりて自己の生活を保障する⁽⁴⁷⁸⁾」政策を行うべきものであった。その目標を実現するために、内部で「永久に軍閥支配再現の機会を防止する」こと、外部で「国本部の循環的動乱から絶縁する」ために、「国民党勢力」と「赤色農民軍運動」の侵入の機会を杜塞する、という工作が必要であった⁽⁴⁷⁹⁾。さて、満洲国のあるべき性質及び行政組織を知るためには、1932年1月2日の「満洲新国家建国大綱私案」に注目すべきである。そこで橋は、満洲国の建国方針を、第一に「保境安民を徹底する為には新独立国家の建設を絶対に必要とする」こと、第二に「公民に依りて組織せられる民族聯合国家たるべきこと、また第三に「分権的自治国家たる」こととまとめた⁽⁴⁸⁰⁾。新国家が農業国家たるべき理由は、「満洲社会の主要成分たる漢・満・蒙・鮮民族は、概ね農牧を生業とするが故に、この上に樹てられる新国家が農業国家たるべき⁽⁴⁸¹⁾」こととなる。そしてまた、農業国家と自治制の意義について、橋は次のように説明している。

農業国家は理論上、工商業国家即ち所謂資本主義国家に化成する自然の傾向を有すれども、資本主義の弊害より免れん為に、前記の如き自然の傾向を阻止し、永久又は半永久に農業国家として存続せしむることは決して不可能にあらず。満洲はその国民多数の福祉及び日本との特殊関係に鑑みて、永久的農業国家たるべき運命を有す。而して農業社会に対する合理的統制の機構が、分権的自治的国家たるべきことは多言を要せざるところなり。⁽⁴⁸²⁾

満洲国を「永久又は半永久に農業国家」とすること、また農業社会の幸福を維持することを實現ために、橋は、日本との関税撤廃及び企業公營の方法を打ち出した。つまり「主要貿易国たる日本への関税撤廃……は、農民の生産する輸出商品の価格を高め、彼等の需要する輸入商品の価格を低むることに依りて、農村の繁栄に寄与し得る代り、満洲内部に於ける工業の発達を甚だしく阻止することとなる。この缺陷を補う為に、大企業の国及び省を主体とする公營を行うこととすべし。斯くすることに依りて、新国家は農業社会としての幸福を維持すると共に、工業社会としても亦世界經濟の進運に伴うことを得べし⁽⁴⁸³⁾」、ということであった。

建国のプロセスについて、橋は「自治指導部」を指導者とし、それが県議会、省議会また国民議会を招集した後、国民議会が国家行政機構を組織すべきことを主張している⁽⁴⁸⁴⁾。国民議会の代表者数の比率は、満洲に在住している各民族の人口と、日本民族の「功績」を考慮に入れて、「漢（7）満（3）鮮（2）回（2）蒙（2）日（7）白（1）⁽⁴⁸⁵⁾」というように割り当てるべきだ、ということである。

橋樸によれば、満洲国の自治の方針とは、「消極的には国民が団体の力を以て自ら其の生存の保障を謀ることを意味し、積極的には同一方法に依り其の福祉の増進を謀ること⁽⁴⁸⁶⁾」とした。彼はまた、満洲の自治体を次のように、四種に分けている。

- 行政自治体（区（町村）、県、省、国）
- 経済自治体（各級共同組合、農会、商会、ギルド）
- 社会自治体（各種の文化宗教慈善団体、階級的共済結社）
- 総合自治体（家族及び其の聯合、自然部落及びその聯合）⁽⁴⁸⁷⁾

国家及び社会の構成単位は、個人でなく家族であり、「家族を代表して行政経済及び互助自治体を組織するものを公民⁽⁴⁸⁸⁾」としている。

また各級自治体の職務は、「立法、外交、財務、軍務、警務、教育、衛生、社会、戸籍、産業、交通、土木、金融、市場、電気、保険⁽⁴⁸⁹⁾」などの広い範囲に及ぶべきである、としている。自治指導部は、「各種各級自治体の建設及び整理の中枢機関たる」ものであり、「所管事項にかんして立法の権能を有する」ものとした⁽⁴⁹⁰⁾。また自治組織の整理建設は縣市から始まり、漸次に省、国及び町村に及ぼすこととした⁽⁴⁹¹⁾。それはつまり、中間から両辺にわたって自治組織を押し広げる、という構想であった。

続いて、橋樸の満洲新国家像であるが、それは蠟山政道の文章を検討する際に明確なものとなった。蠟山政道は1932年1月23日、満鉄社員会倶楽部で講演を試み、後に『新天地』二月号に、「満洲時局に対する観察」を題名とした文章を発表している。蠟山はその文章で、新国家が取るべき政治組織は寡頭的独裁的なもので、一民族がほかの民族を指導するものであり、日本人が指導的役割を果すべきだ、ということをも主張した。それに対して橋は、満洲において独立国家建設が日本のみならず、在住諸民族の熱望と協力によってし

か達成できないものであるため、新国家の政治組織は独裁でなく、デモクラシーの原則を取るべきだ、という意見を打ち出した。そういった民主制度のもとで、「互にウエイトを異にする各民族が問題毎に夫々の立場から離合集散することによりて自然の均衡状態を作り出すと共に、斯くの如き関係は或優秀なる民族の側に何等かの程度に於ける指導権の自然に発達することを決して妨げないであろう⁽⁴⁹²⁾」、ということになる。橘による新国家の将来は、「民主政治殊に社会民主主義国家⁽⁴⁹³⁾」そのものとされた。

以上見て来たように、満洲事変後、橘樸は各種の建国団体に参加し、情熱をこめて新国家の設計に関して発言し、自らの意見を現実に転化させようとしていた。物事の傍らに立ちながら発言するというので、かつての評論者の姿勢は、ここでほとんど見られなくなり、積極的な行動者、工作者の面目が躍如として現れていた。

② 「行動的」知識人

橘樸のこうした変化は、自分の身分及び役割に対する認識の変化に発したものと言える。橘は、疑いなく「知識人⁽⁴⁹⁴⁾」の一人であったが、専ら学術研究に従事する知識人＝学者と異なる姿勢を持つに至ったのである。彼の言葉、例えば「支那を識る途」で、「支那を学術的研究の対象とすることは勿論必要であり、又厳格な意味に於ては学術的研究が或程度に進む後でなくては国民一般に向って正しく且つ深い「支那常識」を与えることが出来ない道理であるが、翻って実用的見地からすると今日では最早やそんな悠長なことを言っている余裕がない」と述べ、自分の使命を、「学術的よりかも（ママ…趙）寧ろ主として実用的」なものにあると自認した⁽⁴⁹⁵⁾。それと『職域奉公論』において「常識では政治学・法律学・法制史等を専攻する学者の任務とされ、又それが正しいことでもあるのだが、併し評論家たる私の職域から見ると、この仕事を学者に一任して安心して居ることは出来ない。評論家はその自由な立場を利用して寧ろ学者に先んじ、少くともそれと雁行しつつこの重大であり、時には危険でさえもあるところの任務に挺身すべきだと確信するものである。但し門外漢として頗る困難な業であるため、敢てこれに従事する評論家の態度は最も慎重でなくてはならない⁽⁴⁹⁶⁾」という言葉が示しているように、橘は専門的知識人に敬意を払いつつも、「実用的見地」、また必要な時に「挺身すべき」という立場から、自分と専門的知識人との間に一線を引き、強い「行動性」を発揮していった。故に、彼を「行動的」知識人と一応名づけても構わないであろう。

橘樸という人の「行動性」は、彼の移動の軌跡によく現れている。彼の移動を目的によって区分すると、彼の移動の目的には、仕事関係を除き、主に現地調査と要人訪問という二種に分けられる。山本秀夫の『橘樸』（1977年）と『甦る橘樸』（1981年）の「年譜」を参考した上で、満洲事変までの橘の行動の履歴を次のようにまとめてみた。

1906年、4月、大連に渡り、『遼東新報』社に入社、記者となる。

1911年、10月10日の武昌蜂起の報をきくとすぐ上海に向い、革命派の動向を詳しく了解した上で、『遼東新報』で報道。その後、北京の動勢を知るため段祺瑞を訪ねた。

1913年、7月、天津に移り、『日華公論』の主筆となる。

1914年、橘は、当時北京の日刊『新支那』紙上の中野江漢の「白雲観遊記」を読んで、中野を訪問して道教について話をきた。

1916年、北京移住。

1918年、8月2日、日本政府がシベリア出兵を宣言。橘は9月、清島守備隊囑託、従軍記者として、シベリアに赴いた。帰途でウォッカを飲み過ぎて倒れ、その後およそ100日余りの療養生活を送る。

1919年、元旦はマンチュリーの医院で迎え、春に北京に帰る。五四運動の起きた際の橘は、まだ街頭に出られる状態ではなかった。

1920年、6月に青島の友人・福富卯一郎訪問、7月に『済南日報』（漢字紙）主幹として同紙の整理のため済南に赴任。

1921年、2月9日から下旬にかけて日本訪問（十五年ぶり）。京都では小島祐馬を訪ねたが不在、「曲阜大学建設について意見を聞きにきた」という置手紙を残してきたといわれている。

1922年、4月、済南を引きあげ、夫人を大連の松丸宅に帰し、単身天津に赴き、『京津日日新聞』の主筆として活動を開始。10月～11月初旬、橘は青島に近い李村に入り、農村の調査に従事する。この年の暮近い頃、当時北京で崇貞女子工読学校を経営していた清水安三と会い、民国以来の文学革命、思想革命の話聞く。その後、清水の案内で、当時中国の第一線で活躍していた思想家達と面談。陳独秀・蔡元培・胡適・李大釗及び辜鴻銘らである。

1923年、1月7日、魯迅訪問。5月、『京津日日新聞』を一応退いて静養をかねて旅順に移る。

1926年、1月から2月にかけて上海旅行。中共の施存統と面談。3月、熊午嶽城（遼寧省）付近の農村の自治制度を視察。

1927年、1月3日、大連から榊丸で上海に向う。上海では東方通信社上海支社長の龍岡登の家に滞在。偶然当地の山田純三郎と出会い、漢口視察から帰ったばかりの山田から情勢を聞く。上海では1月12日夕刻から英人経営の紡績工場で暴動が起り、罷業に入っていた。橘は青幫の一首領徐煜に会い上海の労働運動の動勢を質問している。

1928年、6月には青天白日旗のひるがえる平津（北平・天津）地方に小旅行をする。9月、満洲視察旅行に赴く。

1929年、4月上海に旅行。5月、朝日新聞囑託通信員として、南京より徐州、開封を経て鄭州に行き、馮玉祥・韓復榘戦を視察。6月、鄭州で韓と会見。年暮から翌年2月まで上海滞在。

1931年、9月18日満洲事変爆発。10月上旬、小山貞知の斡旋で奉天の東拓楼上（関東軍司令部がおかれていた）板垣、石原両参謀と会談、その結果「方向転換」を決意。⁽⁴⁹⁷⁾

以上のようにまとめた履歴を見ると、物事を了解するために、身を以て現地に赴いて調査研究を行うか、もしくは現地の要人と会見し、意見交換をするか、ということを繰り返している橋樑の姿が浮き上がる。そのような、少なくとも物事を理解するレベルでの強い行動態を産み出したのは、理論に不満足で、必ず自分の身、耳、目を以て現地に臨むという、橋樑の実証主義的な性格である⁽⁴⁹⁸⁾。しかもその性格は、むしろ彼の「思想」に関する見方に根ざしているものと考えられる。

橋樑はかつて、人生観の枠組みを形作るものは「個性」と「普遍性」であり、人生観の内容が「思想」であるとしていたが、しかし思想といえば、「読書や通りに一遍の思索から得た薄っぺらな思想ではない」、「彼の体験によって真に自身のものと成りきったところの思想のみが人生観構成の要素となり得るのである⁽⁴⁹⁹⁾」とも述べている。すなわち「各人の人生観は先づその形式を個性によって規定せられ、第二に体験なる手段によって内容を充たすところの思想の有機的統一を得た一団である⁽⁵⁰⁰⁾」、ということであった。橋の場合、恐らく思想だけでなく、一切の外来の知識や情報とも、「体験」そのものを経ずには信用できず、人生観の要素をなり得ない、ということであろう。橋が絶えず各地を移動し、身を以てそこで調査研究を行ったのは、まさしく外来の情報・知識・思想を自身の「内部」に引き入れ、それに対する検証・咀嚼・批判を行おうとした行為であった。もとよりこのような考え方は、橋の行動的性格を規定するのみならず、「方向転換」後に彼が行動者・工作者となったという、思想的伏線を敷いたものとも言えるのではないか。

③ 橋樑の歴史観：民衆、知識人、革命党

既に紹介したように、橋の外来の情報・知識・思想に対する不信感は、それを操る知識人というものに対する距離感に連なっていく。その態度が中国革命という特定の時空に反映されると、政治エリート及び革命党の役割に対する軽視へと変わった⁽⁵⁰¹⁾。ここでは、橋の知識人観を整理してみよう。

商人、学生、地主、労働者からなった革命連盟を論じる際に、橋樑は連盟の中心を商人であるとし、学生が上海の新人実業家とともに、商人の弱点を矯正する役割を果すべきだと述べた⁽⁵⁰²⁾。こうして、革命の陣営における知識人の一部としての学生は、ただ補助の任務を担当するものになる。『月刊支那研究』第一巻第二号（1925年1月1日）に掲載した「政治と『智識階級』」という一文で、橋は梁啓超の意見、つまり「支那の将来の運命は、全く其智識階級に政府を組織する能力があるか否かに依って定まる」という部分に対して、次のような反駁を打ち出した。

一体智識階級と云う言葉は多分日本語の輸入と思われるが、此場合の「階級」は社会階級を意味しない、且つ一つの部分社会として纏まった存在であるとも、厳密な意味に於ては言い切ることが出来ぬと思う。換言すれば所謂智識階級は社会的に一定した根拠を持たぬところの極めて散漫なる精神的な群の一種であるに過ぎない。斯くの如き無生命の、或はそれに近い「群」が支那の生命を決定すると云う程の大事業を担任し得ようとは、到底凡慮の計り及ばぬところである。⁽⁵⁰³⁾（下線は筆者による）

「社会階級を意味しない」や「無生命」の言葉は、疑いなく知識人における民衆及び社会を離れた立場に対する批判であった。続いて橋樑は、革命における知識人の任務及び限界性を次のように指摘している。

聡明にして熱情あるインテリゲンチヤが革命の火蓋を切るとは、古今東西を通じての動かし難い事実ではあるが、而も革命の実行者は、当時の支配勢力に反抗して立ち上った一つの社会階級であり、革命の水先案内者たるインテリゲンチヤの人々は、多くの場合に於て却って革命の進行中に社会から葬り去られるが常である。⁽⁵⁰⁴⁾

こういう知識人に対する橋樑の軽視は、国民革命期に入ると、革命の指導者たる政党の作用に対する軽視に繋がった。端的に言うと、革命党より民衆のほうが重要だ、という認識となった。彼は、北伐の勝利を「軍事的成功に非ずして、専ら民衆の力による⁽⁵⁰⁵⁾」と認め、蒋介石が「右翼」たるべき理由が「共産党を排斥して孫文の残した「容共政策」を否定し去ったからでは無く、支配者の利己的動機から民衆勢力を拘束した点にある⁽⁵⁰⁶⁾」としている。橋によると、革命党の役割は、ただ民衆に対する「啓蒙扶掖」であり、一種の「補助手段」に過ぎないものであった⁽⁵⁰⁷⁾。国民革命の「唯一前提」は「民衆運動であるとせねばならぬ⁽⁵⁰⁸⁾」、ということになった。

ここで少し顧みると、橋はもとより人類社会の形成及び発展の基本的な動力について、「生きんとする欲求」及び「ヨリよく生きんとする欲求」という普遍的欲求に求めている。その欲求が侵害されたら、民衆たちは革命を起こし、自分の「個性」と見合った形で新しい社会を作り直す、というプロセスである。それは、大正生命主義の課題たる「社会・民衆・生命」という、生存の基本的要求から出発した歴史観であった。換言すれば、橋の見た歴史は、民衆・社会の「普遍性」と「個性」にそって流れている、ということである。こういう歴史観のもとで、理論にせよ、知識人にせよ、革命党にせよ、民衆の「普遍性」と「個性」に親近したものだけが、生命力を有するのに対し、民衆の「普遍性」と「個性」から懸け離れたものは、「無生命」のものとなるしかない。「普遍性」と「個性」との比較では、橋が最も重要視したのは、やはり「個性」そのものである。この考えを個人に適応した場合には、「人々に固有のものは唯個性のみである。個性は自然の即ち運命的のもので

あって、人格は夫を種として発生し、人生観はそれを鑄型として形成せられる⁽⁵⁰⁹⁾」、「型にはまった人生観は尊重するに足らぬ。人類の普遍性に立脚した人生観でさへも、他人は知らず私どもは満足しない⁽⁵¹⁰⁾」、ということになる。社会改造に適応した場合でも同じである。道教の改革に触れた折、橋のこの態度は次のように現れていた。

支那人は宗教心の深い民族であり宗教的信仰なしには安住し得ない民族である。而して道教は即ち彼等の民族的宗教であるから短い時間に之を滅す事は不可能である許りでなく或民族に固有な思想とか性情とかというものが実在し夫が各民族の個性を形成する要素であるという学説が若し真であるならば明かに支那民族の個性其ものの表象と認められるところの道教は縦令外国人と雖もこれが撲滅を企望すべきでない。私は読者が斯くの如き態度を以て道教を取扱い又私の記事に接して頂きたく思う。

道教に関して問題とすべき点はこれが改革であって断じてこれが撲滅ではない。改革の原理は所謂合理主義よりも之を民族性及び民族思想換言すれば支那民族の個性に適合するや否やに求めねばならぬ。即ち適合が第一義であって合理ということは第二義以下の要求に過ぎない。⁽⁵¹¹⁾（下線は筆者による）

橋樑の共産党批判は、まさにマルクス主義とソビエトが中国民衆・社会の「個性」に適しない、としたことに根ざしている⁽⁵¹²⁾。また同じように、橋が国民党左派の立場を取ったのは、左派のグループそのものではなく、左派が掲げた路線が、よく中国の「個性」に適合している、と判断したからである⁽⁵¹³⁾。しかし実践力を欠いた国民党左派は、1927年以降の激しい政治・軍事闘争の局面において、早くもその勢力を失った⁽⁵¹⁴⁾。そのような厳しい事実は、橋の歴史観に大きな刺激を与えたものと想像できる。民衆の「個性」に適合した理論及び理論の持ち主——知識人にせよ、革命党にせよ——であっても、ただちにそれと見合った現実を作り出すわけにはいかない。「あるべき」歴史を、「ある」歴史に転換させるには、必ず強力な「行動」が要る。それはまさに、橋が関東軍を選んでしまった原因であり、彼が「評論者」の立場を捨てて「行動者・工作者」に変身した原因でもあった、と言えるだろう。

④ 「満洲事変」——歴史に介入する契機

最後に、橋樑の思想転換を促した動力について論じる。

明治から大正へという転換期において、かつての「国家・民族・政治」というようなテーマが後退しつつあったとともに、それらをめぐって建てられた知的系統も解体に向っていく。橋樑が属する日露戦争前後の世代は、その知的「解体」に臨んだ時、自分のアイデンティティーの喪失に対する苦悩と焦慮を感じていた⁽⁵¹⁵⁾。その情勢に直面していた橋は、

「借りものでないから如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働く⁽⁵¹⁶⁾」という方式を以て、前に提示した生命の「普遍性」と「個性」に立脚しながら、既成の体系や外来の理論を検証、批判、咀嚼、吸収した上、それらと「社会・民衆・生命」を関連付け、独自の人生観、歴史観及び中国観を作り出した。筆者はその特徴について「反体系的体系」と名付けた⁽⁵¹⁷⁾。

ところで橋樑の思想的特徴は、彼の文章のスタイルによく現れている。例をあげると、1926年8月の『満蒙』雑誌に載せた文章「北満洲農村の充実過程」⁽⁵¹⁸⁾において、橋樑は煩を厭わずに、北中国人口過剰の地域から東北への移民過程について、隅々まで記述した。そのように詳しく書く必要はあるのか、と思われるほどである。細分化し過ぎのように思われる論述の背後に、むしろ彼の知識に対するある種の「焦慮」があるのではないかと予想される。この「焦慮」は実に、古い知的体系が解体された後、自分のアイデンティティが喪失するかもしれないことに対する焦慮だと考えられよう。

このような骨が折れる労作の結果、橋樑はようやく、中国に関する知的体系を打ち建てたが、その体系を国民革命という実験場にかけて、かえって再三の失敗に突き当たることになった。彼はもともと、反軍閥の各階級の連合たる「革命同盟論」を主張していたが、現実が彼に見せたのは、むしろ「革命同盟」の分裂であった。まず、1927年4月に「四・一二」クーデターが起き、橋が熱烈な期待を寄せて望んでいた、上海総罷工をきっかけに成立した上海特別市臨時政府は、蒋介石の軍事力に当り、速やかに壊滅した⁽⁵¹⁹⁾。橋は、その現状を「左傾派の人々が久しく待ち望んで居た臨時上海政府も総罷業の進行中に具体化せられたのであるが、左派成功の華やかな夢は右派の実力を握る蒋介石氏の一撃に脆くも敗れて、前者の実力的根拠なる上海総工会の命脈すらあるかなきかに打ちのめされるに至った。此等の波瀾は緊密に相関聯するもので、今尚お如何に帰着するか混沌として万物すべからざる状態にある⁽⁵²⁰⁾」と描写し、事件の発展を見守っていた。

また1927年5月21日の「馬日事件」（「馬」は電報用語で「21日」を意味する）は、橋に革命の困難を感じさせた。北伐の進行中、湖南において共産党が指導した農民協会と労働組合の勢力は強まった一方、国民党右派、地主の巻き返しも激しくなった。国民党右派の軍人何健と許克詳は、5月21日に、共産党や労働者、農民に対する武力弾圧を行った。それがすなわち「馬日事件」であり、武漢国民政府の崩壊をもたらした重要な転換点であった。橋はその事件に接し、共産党の指導のもとでの農民運動の急激化について、革命の困難をもたらした原因であると考えた後、それを「単に方法の誤りから起った」ものとして、共産党の行動が孫文主義の範囲を出ていなかったと認識している⁽⁵²¹⁾。

当時の橋は依然として、武漢国民政府と共産党の連合によって、革命が推進されることを期待していたが、まもなく1927年7月の武漢国民政府と共産党との分裂を見るところとなった。その現実には、橋に「馬日事件」を再認識することを迫った。橋は、「馬日事件」を武漢の左翼国民党に対して「徹底的なる方向転換を余儀なくせしめた直接原因⁽⁵²²⁾」で

あったとし、それを誘発する原因を「（一）共産派のやり過ぎと（二）民衆に直接する末輩運動員の軽燥⁽⁵²³⁾」に帰したのである。さらに、共産党は11月の「土地問題党綱草案」を根拠とし、農村で土地革命とソビエト政権の樹立を目指す一連の暴動や蜂起を起し、橋に「革命同盟」の徹底な分裂を見せつけた。橋は共産党の失敗、国民党の分裂の原因を、専ら湖南農民運動の急進化に求めている。曰く、

共産党失敗の直接原因は国共分裂にあり、国共分裂の原因は武装国民党幹部の右傾にあり、国民党の右傾は、国民革命軍内部の軍閥首領が党及び政府の幹部を圧迫したことにより、軍閥反噬の原因は、湖南農民運動の刺戟による。而して過激且つ幼稚なる湖南農民運動は、独り軍閥を怒らせたばかりでなく、又所謂土豪劣紳貪官汚吏を驚かしたばかりでもなく、同時に農村の善良なる自小作農及び労働者の生活を脅かすに至った。その当然の結果として、湖南における善良な農民間の輿論も烈しく共産党乃至国民党の農民運動に反対した。この意味において、彼等の農民運動は全然失敗に終わったと断定して差支えあるまい。⁽⁵²⁴⁾

そして、革命の裏切者たる蒋介石に対し、橋は彼を「支配者の利益の為に農民及び労働者を拘束する⁽⁵²⁵⁾」右翼と罵倒しながら、孫文の政治及び軍事行動に対する迷信的な信頼や、国民党組織の散漫が、軍閥発生を誘致した原因でもあった、ともしている⁽⁵²⁶⁾。

しかし、1928年2月に再開した「北伐」が順調に進んでいったこととともに、橋は自分の思想を再調整し、蒋介石に対する評価を変えた。彼は中国の軍閥を、旧軍閥と新軍閥に分け⁽⁵²⁷⁾、蒋介石が後者に属する「近代的軍閥の首領⁽⁵²⁸⁾」であると認定した。現実の情勢に鑑みた橋は、「人口過剰に苦む前資本主義的支那を救ふ道は、只一つの資本主義しかない⁽⁵²⁹⁾」とし、現段階の中国革命は「単純資本主義革命時代⁽⁵³⁰⁾」としてあるという認識に到達した。それは確かに、ブルジョア革命において「組織ある労働者の中産階級に対する援助あるに非れば満足な結果を挙げる事は出来ない⁽⁵³¹⁾」という段階から一步後退したところの観点であるが、かつての「一方にブルジョア革命の可能性を主張する私が、同時に社会主義社会のプリンシプルたる平等及び「動かぬ者は喰うべからず」と云う思想を根底とする新文化が近き将来の支那社会に実現される⁽⁵³²⁾」という範囲からも出ていなかった。橋が期待していたのは、中国がブルジョア革命を通じて軍閥政治を克服した後、「ブルジョア中心の現過程の行詰りをその出発点⁽⁵³³⁾」として社会主義社会に邁進するということであった。こういった判断からして、橋は国民党左派が必ず再興すると信じていたようである。

しかし前に触れたように、国民党左派は実践力を欠き、激しい政治・軍事闘争の局面において、自ら存在の余地を失った。この現実には再び、橋に失望を味わせた。それだけでなく、彼が想像した「単純資本主義革命」も行き詰まった。1929年1月に開いた国軍編遣會

議において、南京政府は各地の軍閥の抵抗に遭い、政策実行が難航となった。そして3月から11月にかけて、蒋介石と各地の軍閥（閻錫山、馮玉祥、李宗仁、白崇禧など）との間で激しい衝突が起き、1930年5月の「中原大戦」（蒋介石と閻錫山ら反蔣勢力の戦い）に及び、中国の軍閥戦争の規模は一層拡大していった。橋によれば、「上海資本家階級の代弁者たる南京政權——蔣系軍閥と謂っても宜しい——の統一的機能は、昨年（1929年…趙）秋から約二箇月に亙る最後の軍事的財政的大浪費の為に消耗し盡され、その結果南京政權は一昨年六月以後に樹立した全国的統一的覇権を実質的に抛棄して、昨年十二月中旬以後は奉天・山西・西北等の諸大軍閥と同一水準線上に立つところの地方的割拠的勢力に質質するの止むなきに至⁽⁵³⁴⁾」った、ということである。しかも国民党左派も、各地の叛乱した軍閥の理論の提供者となるか⁽⁵³⁵⁾、もしくは「全く政權投機に没頭⁽⁵³⁶⁾」したものへと墮落したのである。

1931年7月から10月にかけて書かれた「広東財閥論」は、「方向転換」前の橋樑の最後の文章であった。その中で橋は、国民党内の広東派が郷土的団結、南洋及びアメリカの華僑資本家と英国資本の援助に依拠し、浙江派（蒋介石派）に対抗する実力を持った、と分析した。橋から見れば、浙江派は中国全国で覇権を樹立し、中国を完全な資本主義国家に連れていくことができるが、それはまだ予測できない未来のことだ、ということである⁽⁵³⁷⁾。さらに橋は、『満洲評論』に載せた論説、「南京政府の行路難」（1931年9月12日）、「大洪水の政治的意義」（1931年9月19日）、「広東派と浙江派」（1931年9月26日）において、それぞれ地主階級の旧勢力の牽制、大洪水の災難、広東派の叛乱、赤軍勢力の抗争などの情勢を挙げ、南京政府が大きな危機に陥ったと認識した。「革命同盟」時代から「単純資本主義革命」時代を経て、最後に橋の目の前に呈していた中国の現状は、前より一層深刻な分裂、戦争、混乱の状態にほかならないものであった。

橋樑は、情勢の急転に応じて自分の理論や思想に関して、再三の検討や調整を行ったにもかかわらず、自身の理論の破綻という結末を受け入れざるを得なかった。「如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働く」苦勞を払って獲得した、人生、歴史及び中国に関する知的体系は、一旦崩壊する危険に臨んでいた。厳しい「歴史」に臨んでいた橋が、ある種の無力感を感じたことは想像できる。「歴史」或は現実に対する無力感は、知識人である限り、直面せざるを得ない普遍的問題ではないか。この無力感を克服するために、強く「歴史」に介入しなければならないという認識は、当時の橋の頭の中に形成されたと考えられる。この「歴史」に介入する契機が、すなわち「満洲事変」ということになった。

橋樑が「私の方向転換」一文で取り上げた、「アジア解放」や「祖国の改造」、「理想国家」などの言葉を吟味すると、それらはすべて「橋樑的」なものではない。それまでの橋の思想及び文章の性格を顧みると、彼がそれらの言葉を信じるはずはなかった。実は一方で、彼はファシズムに対する冷静な認識を持っていた。「満洲事変とファシズム」（『満洲評論』1・12、1931年11月14日）という文章の中で、彼は次のようにファシズムに関す

る認識を打ち出していた。

- 1 独占資本時代即ち資本主義末期に、小市民層及び労農層を社会的地番として現はれるところの小市民的イデオロギーの一分派である。
- 2 それは独占資本に対して一応の反抗を試みると同時に、共産主義勢力に対して徹底的に反抗する。
- 3 それは多くの場合に、国家社会主義を標榜するが、他の民族又は国家に対する収奪によりて自己の民族的エゴイズムを満足させようとする強い欲求を包蔵する点から見れば、彼等は疑ひもなく国家資本主義者であり、且つ帝国主義の延長でもある。
- 4 国家機能の対内及び対外的効果を高めるために、議会政治を否定して独裁政治を主張する。
- 5 一定の階級的基礎を持たぬ彼等は階級闘争を否定し、或はこれを軽視するために、彼等の革命に対する欲求は薄弱であり、革命の方法に缺乏して居る。
- 6 前項の如き弱点は自然に彼等の独占資本との妥協に導き(伊太利及び独逸を見よ)、狭義の国家資本主義実現を不可能に陥れる傾きがある。(538)

これらは、満洲事変を起したファシズムに対する、橘の冷静な解剖であったが、注目すべきは、実は次の二点である。

- 7 但し第六の点に関しては尚十分に試験済と見る訳に行かず、随って将来資本主義及び共産主義経済進展に伴なふ環境の変化から、小市民的國家資本が今日の金融独占資本に取って代る日が来ないとは断定出来まいと思はれる。
- 8 然る場合、世界は無産者独裁の共産主義國家と小市民的集産的なる独裁諸國家との対立が或期間続くことにならう。少なくともファシスト達は斯様に考へて居るのではあるまいか。(539)

ここでわかるのは、橘がファシズムの性質を了解した一方、その中に「可能性」を見出している、ということである。「可能性」を現実に変えるために、「行動」が絶対不可欠である。一時錯誤の道を歩む「歴史」であっても、「行動」を以てそれを正確な道に引き戻すことが可能だという認識のもとで、橘は関東軍やファシズムの性質をよく知っているにも拘らず、「歴史」に介入するため、危険を冒しながら自身の一躍を決意した。このことがつまり、橘の「方向転換」を促した思想的動力であったと言えよう。

「歴史」の自律性と「歴史」を改造する可能性の間に生じた緊張感を持ちながら、橘はそこから新しい旅を開始した。その旅は、ただ単に「歴史」とかかわるものでなく、「歴史」を改造する主体——独裁政党、ファシスト、知識人ないし橘自身とかかわることであ

った。したがってその後の橋の文章において、「行動」の主体の重要性が漸次に現われてくる。

おわりに

本章は、橋樑の「方向転換」に関する先行研究を踏まえながら、彼の思想の形成——大正生命主義と、そして中国経験を関連づけて、「方向転換」を促した原因を再検討しようとした。

思想の構造についてまとめてみよう。明治時代の「国家・民族・政治」という「中心」的課題の衰退と、中国における政治エリートを「中心」とした辛亥革命の失敗という背景のもとで、橋は「個性」を持つ各「部分」の「生きんとする欲求」及び「ヨリよく生きんとする欲求」という生命の普遍的な要求から、独自の人生観、歴史観及び中国観を構築した。彼の革命に関する構想をまとめると、生命の普遍的な要求が侵害されたら、各階級、各職業の民衆は各々の立場から革命を起こし、最終的に全国の範囲で勝利を収める、というものであった。このような構想が、1924年から始まった国民革命に適用されると、商人、学生、地主、労働者及び「変質した官僚」からなる「革命同盟論」という形となった。こうした構想において、「中心」そのものは革命の結果であり、前提ではなくなる。したがって橋は、革命の担い手たる革命党の役割や作用を軽視するようになり、国共分裂につれて、革命の「中心」勢力が不在となった現実に刺激され、単一の強力な革命勢力を求め、そこから関東軍ファシストに傾き始め、さらに後の「独裁政党論」を模索し始めた。

前で触れたような歴史観に立脚している橋樑は、「歴史」そのものが自律性を持つ自然発生過程だと認識している。解釈すると、「歴史」はその規律にそって早晚発生するものであるから、人為的な努力（知識人、革命党）はあまり重要なものではない、ということであった。明治時代の古い知的体系が解体した後の時代、橋は中国を具体的な対象とし、如何に微細な情報であっても、それを自分の独自の歴史観に取り入れ、歴史の規律を把握するために力を尽くしていた。その意味で、1924年以降の国民革命は、まさに橋の中国観、歴史観の実験場であった。だが、歴史はかえって橋の想定した道を裏切っていく。厳しい現実に臨んだ橋は、「歴史」に対する無力感を感じ、直接的に「歴史」に介入する方式を以て、「歴史」と「現実」の差を克服しようとしたため、満洲事変を契機として「行動者・工作者」へと変身した。つまりそれこそ橋が「方向転換」を決意した思想的動力であった、と考えられるのである。

V 橋樑の東洋論——「実体」としての東洋は存在するか

はじめに

「方向転換」を経た橋樑は、満洲国を拠点として、「農民自治」と「民族協和」を手が

かりとして東洋改造の方法を模索し始めた。それと同時に、中国国民党左派の失敗と墮落を見た後、橘はますます個人及び集団の「行動」に関する問題を重要視するようになった。この姿勢の変化について、橘は次のように述べている。

満洲事変後は日支両民族における主体的及び客観的な諸情勢、就中双方の關係に著しい変化が起り、特に支那事変に入り昭和十四年一月北支那視察するに及んで、評論家たる私は好むと否とに論なく、最早従来のような傍觀者の立場を棄てねばならなくなった。⁽⁵⁴⁰⁾ (下線は筆者による)

この言葉が示すように、橘が「傍觀者」から「行動者」に轉換したのは、確かに満洲事変以後のことであった。つまり、満洲事変及びその後の出来事が橘に与えたのは、思想の変化だけでなく、姿勢の変化でもあった。本章は、その両方の変化を分析し、橘の到達点及び彼の思想史的位置を論じてみたい。

1. 孫文の「大アジア主義」講演——橘樸の東洋論の出発点

「アジア主義」とは何か。アジア主義について、竹内好は「ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいうべきもの⁽⁵⁴¹⁾」として把握している。橘川文三は『日本史大事典』において、アジア主義について「欧米列強のアジア侵略に対して、アジアの団結を図ろうとする主張⁽⁵⁴²⁾」と定義したが、それは、竹内が指摘した「傾向性」の基本と理解できる。アジア主義を「一つの傾向性」として把握するやり方は正しいのであるが、各時期における、アジア主義の異なる形態とその生成の背景に関する分析は欠如していたと言える。アジア主義そのものについては、曾根俊虎、植木枝盛、樽井藤吉、大井憲太郎などの人物の活動と、また玄洋社及び黒龍社の歴史まで遡れるが、「橘樸的」なアジア主義の性格を究明するためには、1920年代のアジア主義の生成及びその特徴について考察しなければならない。本節は、1920年代の日本が直面していた国際状況と、1924年11月に孫文が神戸で「大アジア主義」講演を発表したこととの関わりについての分析から出発し、橘の論説に着目し、彼のアジア主義あるいは東洋論の出発点及び問題性を究明してみたい。

(1) 1920年代のアジア主義

1920年代の日本アジア主義は、総じていえば、アジアの民族運動の進行と、第一次大戦後、西洋の勢力がアジアで回復するという背景のもとで生まれたものであった。

アジアの民族運動には、1919年の朝鮮の三・一運動⁽⁵⁴³⁾と中国の五四運動が代表的である。朝鮮の場合では、1910年の「韓国併合」をメルクマールとして、日本は朝鮮において武断政治⁽⁵⁴⁴⁾を施行して、全面的に朝鮮の統治権を獲得した。1919年1月22日、日本によ

り強制的に退位させられた旧李朝の高宗が死去した。朝鮮の輿論で日本人による毒殺の風説が広まり、その葬儀を契機に三・一独立運動が発生した。朝鮮民族独立運動の指導者たちは、三・一運動をきっかけに上海で「大韓民国臨時政府」を樹立して、民族独立運動を続けた。衝撃を受けた日本は、武断政治に取って代わり、柔軟性を持つ「文化政治⁽⁵⁴⁵⁾」を行わざるを得なかった⁽⁵⁴⁶⁾。日本の圧迫に対する抵抗は、中国でも発生した。中国の側では、1915年の「二十一カ条事件⁽⁵⁴⁷⁾」が日本の帝国主義の本質を示すものとみなされ、1919年パリ講和会議で山東問題をめぐると中日の争いが「五四運動」へと発展し、1923年の旅順、大連回収運動⁽⁵⁴⁸⁾と日貨ボイコット運動を経て、1925年の「五・三〇」運動へと至る、反日のクライマックスを形成したのである。

もう一つの背景とは、戦後欧米勢力のアジアへの復帰であった。その時期のアジア主義の特徴について、古屋哲夫は「大まかにいえば、戦後に大挙してアジアに復帰・殺到してくるであろう欧米勢力に対して、アジアの力を結集し対抗しようという発想に立つものであった⁽⁵⁴⁹⁾」と述べた。また、この時期のアジア主義は、明らかに人種論、文明論の意味合いを持っていた。文明論のアジア主義は、惨烈を極めた欧州戦争によって引き起こされた、人々の西洋文明に対する懐疑から生れたものであったと理解できる⁽⁵⁵⁰⁾。人種論のアジア主義は、ヨーロッパで流行っていた「黄禍論」との相互関係まで遡れる。

「黄禍論」とは、1895年日清戦争末期からヨーロッパで唱えられた黄色人種警戒論であった。廣部泉は『人種戦争という寓話——黄禍論とアジア主義』において、近代ヨーロッパの「黄禍論」の起源と歴史を整理して、「黄禍論がアジア主義を刺戟し、そうして刺戟されたアジア主義によって黄禍論的発想が増幅されるという循環⁽⁵⁵¹⁾」を提示した。その相互作用の関係を考えれば、今回のアジア主義は、1919年パリ講和会議における日本の人種差別撤廃案の挫折から、1921年ワシントン海軍軍縮会議において日本勢力の伸張が英米によって抑制されたことを経て、1924年7月にアメリカが「排日移民法⁽⁵⁵²⁾」を公布した事件に至り、ある種のクライマックスを形成した。アメリカの「排日移民法事件」は、当時の日本人の憤激と恨みを買ひ、日米関係に将来の禍根を残したのである⁽⁵⁵³⁾。

欧米の圧力に直面していた日本において、人種論的、文明論的なアジア主義が盛んになった。この時期のアジア主義の傾向は、「黄色人種（あるいは有色人種）」と「東洋文明」の旗印を掲げて、欧米勢力に対抗しようとした一方、朝鮮や中国の民族運動の緩和、また抑制を試みる側面もあった。例えば、『満蒙』1924年7月号に掲載された川村宗嗣の「排日宣伝扇子の流行に就て」において、そのような側面が見られる。

最後に予輩は深甚なる敬意を以て中華民國の具眼の士に一言を呈し度い、吾々は四海同胞を以て理想とする者である、従って皮色の白黄等の故を以て其親疎を別にし度くはない、然し乍ら吾人と同じ東半球に位する豪州に於てすら、西方から移り来て之を占居して居る白人が、白人豪州を高潮して、白人以外の有色人種を排斥して居る

のを見て、吾々は吾々黄色人種の東洋を顧みねばならぬのではなからうか、彼等は独り豪州を以て白人の豪州なりと主張して居る許りでなく、やがて全世界を以て白人の世界なりと称せんとして居るではないか、此形勢を吾々黄色人種たるもの徒手傍観して然る可きであろうか、中華民國の具眼の士よ、吾々は常に眼を世界の大勢の上に放ち、小異を捨て々、相俱に東洋の大経綸の爲めに全力を捧げようではないか。⁽⁵⁵⁴⁾（下線は筆者による）

川村が主張しているのは、世界の「大勢」が西洋の白色人種と東洋の黄色人種の対決であり、黄色人種の内輪喧嘩が「小異」に過ぎず、中国人が「大勢」のために「小異」、すなわち反日民族運動を放棄すべきだ、ということである。こうした「人種論」や「文明論」のアジア主義においては、アジア内部の抑圧被抑圧関係が覆い隠され、欧米勢力に対して日本の利益を守るという、エゴイズム的な傾向が窺われる⁽⁵⁵⁵⁾。それでは、被抑圧民族たる中国側の反応はどうであったかといえは。中国は、肯定的な反応を示していなかった。その原因について、近代日中関係史研究者桑兵は次のようにまとめている。

中国の人々は排日法案に対して肯定的な反応をしていないことは、中日情勢とは無関係とは言えない。原因は主に二つある、其の一つは、二十一ヶ条調印以来、中国民衆の反日感情が絶えず盛り上がり、ボイコットなどの反日運動が盛んになり、さらに1923年初に至り、一つの高潮期を迎えつつあった……第二に、関東大震災時、日本で華僑虐殺事件が起き、後に、華人の来日を制限して（1924年5月実施）、日本の華僑の激しい反発を惹起したからである。⁽⁵⁵⁶⁾

反日風潮のなかにあった中国が、日本のアジア主義に応える可能性はなかった。関東震災の際、中国人虐殺事件が起きたこと、震災の後、中国労働者にとって事実上の入国禁止の命令が発されたことなどは、中国人の反日感情を助長したに違いない。孫文は、日本のアジア主義の提案に対して、次のような答えを与えた。

日本国民は、アメリカが新たに移民法を設定したことに対し、挙国一致で反抗を示したが、それは、人種による制限が人道主義に反するという事だっただけではないか。いま、日本はアメリカからせられたくないと思うことを、中国に対して押しつけている。たとえ、アメリカが口をとがらして非難しなくても、「おのれの欲せざるところは、人に施すなかれ」ということばの意味を思えば、日本国民はみずからわかることができるはずではないのか。……（中略）

日本の中国人労働者の排除という事実に照してみると、日本のとなえるアジア人種大団結の論には、別の狙いがあるのか、それともまったく誠意がないのか、と疑わざ

るを得ない。⁽⁵⁵⁷⁾

ここで孫文が主張しているのは、抑圧民族が、被抑圧民族の信頼を得ようとするならば、まず自身の錯誤を修正して、相手に誠意を示さなければならない、ということである。孫文の言葉は、当時の中国人が日本のアジア主義を信じなかったという一般的傾向を表明している。しかし、孫文は日本のアジア主義の虚偽性を指摘したにもかかわらず、帝国主義反対を目標としたアジア諸民族の連帯の構想を放棄しなかった。1924年11月、重病にかかった孫文は最後の機会を掴み、訪日の旅を開始した。

(2) 孫文の「大アジア主義」講演の真意と問題性

1924年11月、北京へ向かう途中の孫文は日本に立ち寄り、24日に神戸に到着し、28日に神戸商業会議所など五団体が神戸高等女学校において挙行了た歓迎会に出席し、「大アジア主義」講演を発表した。この講演の内容は『大阪毎日新聞』で連載された（1924年12月3日から6日まで）。孫文の死は1925年3月のことで、時間的に近いところから、この講演は常に彼の日本に対する「遺言」と見なされてきた。孫文はこの講演において、日本が帝国主義路線を捨て、ソ連と中国と連帯し、弱小民族を助け、列強の圧迫に抵抗し、世界の平等と道義を実現させることを希望している。しかし、日本側では前向きな反響はなく、一般的に孫文の言論を「非現実」的で、弱者の「泣き声」に過ぎないと見られたのである。孫文が記者会見で繰返し強調した、対華不平等条約の撤廃の要求に対して、日本輿論は一定の同情を示したにもかかわらず、結局は拒絶した。中国はまず自国内の問題を解決し、「漸進」的に不平等条約を廃止すべきだ、という結論に至った⁽⁵⁵⁸⁾。以下、孫文の講演を簡単に紹介してみたい。

まず孫文は、歴史におけるアジアの興隆と、ヨーロッパに抑圧されていた現状の衰弱を回顧し、日本の成功をアジア復興の最初の希望としている。つまり、日本の成功は、アジア人あるいは黄色人種が、ヨーロッパ人あるいは白色人種を打ち負かす可能性を示したのである。次に孫文は、アジア全体の解放はアジア諸民族の団結を基礎とせねばならぬものとし、東アジアの最大の民族、独立運動の原動力たる中国と日本の提携を強調した。そうであるならば、アジアの団結あるいは日中両民族の提携は、どのような原則に沿って行なわれるべきかという問題に対して、孫文は「仁義道徳」を本質とした「王道文化」を提起した。以下、彼の言葉を引用する。

東洋の文化は王道文化であり、西洋文化は霸道であります。王道をとることは、仁義、道徳を主張することであり、霸道をとることは、功利と強権を主張することであり、仁義、道徳をとることは、正義と公理によって人々を感化することであり、功利と強権をとることは、鉄砲と大砲によって人々を圧迫すること

あります。⁽⁵⁵⁹⁾

西洋の「霸道文化」に相對して、孫文は東洋の固有の文化を「王道文化」と名付け、それを「大アジア主義」の基礎としている。「大アジア主義」の内容について、彼はさらに「被圧迫民族のために不平等を打破しなければならない⁽⁵⁶⁰⁾」と解説した。

続いて孫文は、ロシアを王道国家として数え、アジア民族はロシアとの連携を結ぶべきだ、という意見を表明している。曰く、

ロシアは現在、ヨーロッパの白人と分家しようとしています。どうしてそのようにするのか。それはロシアが王道を主張し、霸道を主張しないからです。ロシアは仁義、道徳をとなえ、功利と強権をとなえようとはしていません。ロシアは公正な道をあくまで主張し、少数が多数を圧迫することに賛成しないのであります。

こういう状況でありますから、ロシアの最近の新しい文化は、わが東洋の古い文化と、非常によく一致します。だからロシアは、東洋と提携し、西洋から分家しようとしている。⁽⁵⁶¹⁾

最後に、孫文は日本に次のような忠告を残した。つまり、「あなたがた日本民族は、欧米の霸道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質ももっています、日本がこれからのち、世界の文化の前途に対して、いったい西洋の霸道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなたがた日本国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかっているのです⁽⁵⁶²⁾」ということであった。

そもそも、孫文はなぜ日本を訪問したか。そして孫文の「大アジア主義」講演の真意はどこにあるのか。孫文の訪日の動機は、1924年7月に起きたアメリカ「排日移民法」事件及びそれに対する日本の激しい反応とかかわっている。この点について、桑兵の「排日移民法案と孫中山の大アジア主義演説」は参考になる。つまり、日本人の激憤を見た孫文は、それをある種の機会と見なして、「己所不欲、勿施于人」（自分が好まないことは、他人に対してもしてはならない——『論語』顔淵第十二2、衛靈公第十五23）の意味を以て、日本に対して、帝国主義政策の修正、アジア民族の援助及びロシアとの提携などを勧告しに行ったのである⁽⁵⁶³⁾。

藤井昇三は『孫文の研究』において、孫文の追隨者である戴季陶⁽⁵⁶⁴⁾の文章「日本の東洋政策に就いて」（『改造』1925年3月号所収）を合わせて検討し、孫文の目的について、次のように説明している。

孫文の過去三〇年に亘る革命運動を通じて、相次ぐ失敗の体験は、孫文をして反軍閥反帝国主義に向かわしめ、外国帝国主義によって課せられた不平等条約の廃棄を対

外的主張の第一に掲げしめるに至った。アジアにおいて、日本以外はすべて被圧迫国家であり、日本もかつては不平等条約の鉄鎖に苦しんだ経験を有する。それ故に中国の不平等条約廃棄要求が真にやむを得ないものである理由を訴えて日本国民の理解と支持を獲得することが、大アジア主義講演の最大の目的であったと考えられる。(

565)

この解釈は、桑兵のそれとほぼ同じである。孫文の真意はおそらく二人が分析したところにある、と考えてよいであろう。

孫文の演説に関する後世の解釈には、大別すれば二種が存在している。つまり、「孫文の意図は大アジア主義を強調することにあつたとするものと、被圧迫民族解放を日本に呼び掛けたとするもの⁽⁵⁶⁶⁾」という二つである。中国側の研究において、問題は「孫文は大アジア主義者であるかどうか」に置き換えられた。第一種の見解は、「孫文≠大アジア主義者」であり、つまり孫文の思想と「大アジア主義」を全くの別物として考える立場である。第二種の見解は、「孫文≡大アジア主義者」であり、孫文の思想と明治期の日本アジア主義との関連性に注目し、孫文は日本流の大アジア主義者ではないにもかかわらず、彼の「大アジア主義」演説の中には、日本側あるいは汪兆銘らに利用される危険性があるとする立場である⁽⁵⁶⁷⁾。田嶋信雄の研究によると、演説の前後、孫文の戦略的意図はただ「アジア」に限らずに、日本、中国、ソ連及びドイツの四力国がユーラシア大陸聯盟を結成して、弱小民族を扶助して、英米が主導したワシントン体制に対抗することにある、ということである⁽⁵⁶⁸⁾。ここにおいて、孫文は「人種論」や「文明論」を掲げたアジア主義者との間に、決定的な違いが見出されるが、しかし演説の内容は「総括的且つ抽象的であり表現方法においては微温的かつ間接的⁽⁵⁶⁹⁾」であったため、日本側に再解釈の余地を残したことも確かであった⁽⁵⁷⁰⁾。

では、本題に戻ると、橘樸の孫文の演説に対する解釈はどうか。

(3) 橘樸の東洋論の出発点：「実体」としての東洋への探求

1925年3月に、『月刊支那研究』に載せた文章「大革命家の最後の努力——孫文の東洋文化観及日本観」は、橘樸の東洋論の出発点であったとも言える。なぜなら、これまでの橘の文章には、東洋に関する系統をもつ文章が見られなかったからである。もちろん、欧州大戦の惨禍と「排日移民法」事件によって惹起された日本のアジア主義は、橘にも影響を及ぼしたが、その影響は、西洋と違う「文明」が存在すること、すなわち「文明」の多様性を示唆することに止まっていた。言い換えれば、この段階の橘は、東西「文明」の差異性に気付き、「某某は西洋のものだ、東洋のものではない」と主張し得たが、「東洋」とは何かという段階に至らなかった⁽⁵⁷¹⁾。孫文の講演は、まさしく橘に「東洋」を検討する機会を与えたのである。橘は評論「大革命家の最後の努力」において、孫文による「王道

文化」及び「大アジア主義」と異なる意見を打ち出した。孫文のそれと比較することで、橘の東洋論の出発点と特徴を見出すことができると考えられる。では、ここで橘の意見を整理して分析してみたい。

まず、橘から見れば、孫文の言葉は、歴史の事実にあわない。孫文は、「王道」の優越性を証明するために、ネパールの例を取り上げた。つまり、ネパールは、中国の道徳の感化を受けて、中国に朝貢にやって来て、中国の属国に加わることを榮譽としていた。「王道文化」の魅力があったため、宗主国が衰えて数百年たっても、ネパールは、中国を宗主国として仰ごうと願っている。しかしそれと対照的に、「霸道」を行なうイギリスのような強国に対して、ネパールは尊敬もしなければ朝貢もしないのだと孫文は主張した⁽⁵⁷²⁾。

孫文のそのような発想に対して橘は、阿片戦争以前の中国外交は「懐柔的外交即ち自らを高く標置し、あらゆる国家及民族を一段低い地位に見下しつつ取扱って来た⁽⁵⁷³⁾」ものであると認識し、孫文の言葉に現れた「中華中心主義」的な意味合いに対して不満を吐露した。そして、孫文の演説が歴史的事実にあわない部分について、橘は「原則としては「懐柔」であるが、特殊の場合殊に支那の国力が強くなった場合には決して武力を用いるに躊躇しなかったものである⁽⁵⁷⁴⁾」と指摘した。また、孫文の言説は、その「主観に止まるか或は学者の理論や歴史家の潤飾を孫氏が無批判に受け入れた結果「王道外交」と言う様な幻想を描き出したものに過ぎない⁽⁵⁷⁵⁾」と橘は批判した。

次に、中国歴史の所産としての「王道文化」は、そのまま東洋のほかの民族に適用することができない、と述べた。つまり、「王道」は「支那思想乃至支那の社会生活と切り離すことの出来ない一つの文化現象であり、其の儘に之を他の民族に当てはめることは不可能⁽⁵⁷⁶⁾」であり、東洋諸民族の「聯盟に共通した旗印とする事は出来まい⁽⁵⁷⁷⁾」ということである。

最後に、橘は、孫文の「王道文化」が理想主義者の妄想であるに過ぎないと述べた。曰く、

王道とは何ぞや、之は確かに困難な問題である。孫氏は無造作に其の内容を一括して「仁義道徳」と云うが、唯々之れだけでは雲を攫む様なことでさっぱり要領を得ない。恐らく仁義道徳を基調とする政治と言う意味であろうが、歴史上の事実⁽⁵⁷⁸⁾に照して言えば、斯様な結構な政治は独り西洋に於て行われぬのみならず、東洋に於ても嘗て実現されたことはない筈である。学者や人道主義者の描き出すユートピアには仁義道徳を基調とする政治が彼等の一致した目標となり、又此の事が明かに夢物語であるとは知りながら世人の興味を引く處から見ると、總ての人類には其の日常の行為と正反対な志向の潜在することが認められる。換言すれば此の点から見ると總ての人類は皆王道論者であり、必しも東洋人又は支那人と限らない。但し或個人、或社会乃至或民族のユートピアに対する態度を見るに、或者は之に共鳴し他の者は之を冷笑する。

冷笑する人々は總て霸道論者であるかと云うに必しもそうでない。大体から云えば理想主義的傾向を帯びた人がユートピアに味方し、実証主義的傾向を持った人が之に反対する。(下線は筆者による)

以上、橘樸の孫文の演説に対する基本的な姿勢を検討した。まとめると、次の三点となる。

(1)「事実」としての「王道」は、歴史において存在しなかった。

(2)「思想」としての「王道」は、中国の所産であり、ほかの民族に適用し得ず、東洋諸民族の「聯盟」の共通思想にもなれない。

(3)「理想」としての「王道」は、理想主義者の妄想に過ぎなかった。

ここにおいて、橘と孫文の根本的な違いが見出される。その違いについて、まず橘の思想の生成の背景を顧みたい。

本稿第一章において論じたように、明治時代において自明的価値をもった「国家・民族・政治」などの課題は、日清、日露戦争を経た後、日本の外部の危機の解消とともに、その自明性や価値性を失いつつあった。資本の発達によって、「個人」という要素は析出されてきた。そして、国家体制の強化は、「個人」に疎外感を感じさせた。「個人」は、一人でこの世界に直面せざるを得ない。神聖なもの、超越したものより、「社会・民衆・生命」のような、日常的で、より普遍的深層的な領域を探求しようとしたことが、当時の知識人の一つの大きな傾向となった⁽⁵⁷⁸⁾。

橘は当時の知識人の典型であったと言える。「国家・民族・政治」などの課題は、橘にとって、全く神聖や栄光の対象ではない。のみならず、橘は、超越したものに対して、根深い不信感を持つようになった。神秘的、超越的、形而上学的なものに対して、橘は必ずそれらの現実的根拠、具体的に言えば社会的根拠を探り出し、「現実的」な解釈を付けなければならないと考えた⁽⁵⁷⁹⁾。言い換えれば、橘は、形而上学的なものを「実体化」させようとしたのである。それゆえ、孫文の「理想主義」や「ユートピア」に対して、橘は「冷笑」の態度を取った。彼から見れば、東洋あるいはアジアは、「理想主義」や「ユートピア」の段階に止まってはいけない。東洋あるいはアジアは、必ず独自の社会的根拠を持つ「実体」とならなければならない。この姿勢こそが、橘を孫文と別の次元に立たせた要因であったと考えられる。

「王道」は、確かに中国史の産物であった。孫文の「王道文化」に関する講演に、ある種の「中華中心主義」の意味合いが存在することも、否定できない。しかし、孫文の講演の力点は、「王道」の「定義」や「歴史」を説明することではなく、今後、何をなすべきかという、「行動」と「未来」の次元にあった。「われわれが「大アジア主義」をとえるとき、王道を基礎とするのは、不平等を打破するためです⁽⁵⁸⁰⁾」という部分が示すように、「不平等を打破する」ことが目的であり、「大アジア主義」や「王道」は、ただ「不平等を

打破する」ための手段であり、副次的なものでしかなかった。日本に対して、「西洋の覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか⁽⁵⁸¹⁾」という孫文の問いは、すでに「王道」また「大アジア主義」の非本質性、非実体性を表明しているのではないか。「王道」であるか否かは、歴史、文化あるいは人種ではなく、未来の行動によって決められる。こういう意味に従えば、「王道」とは実体ではなく、「不平等を打破するため」の「普遍価値」であったと言えよう。

孫文の「王道」について、竹内好による理解が参考になれる。竹内は、次のように述べている。

王道は単なる道徳主義でもなければ、忍従でもない。なぜなら、それは帝国主義が植民地を収奪するのを道徳的に非難しているのではなく、帝国主義を、帝国主義成立の条件である植民地を消滅させることによって消滅させようとする一つの消極的な、だが現実的な力だからである。帝国主義が悪なら、植民地もまた悪である。なぜなら、それは帝国主義を可能にするから。一方の立場からなされる悪善の判断でなく、両者の関係を廃除しようとする絶対的な意志が王道である。⁽⁵⁸²⁾

ここから、竹内は「帝国主義」と「植民地」という次元において「王道」を捉えたことがわかる。ここでの「王道」とは、人と人、民族と民族の間に存在する不平等関係を消滅させる「絶対的な意志」であった。竹内の着眼点は、固定した不変の「実体」ではなく、将来に変えられる「関係」そのものであった⁽⁵⁸³⁾。この意味では、竹内の理解は孫文の真意に近かったと言えるのではないか。

では、被圧迫民族の共通性はどうか。橋樑によれば、それはせいぜい「薄弱な紐帯⁽⁵⁸⁴⁾」であるに過ぎなかった。日本は中国を助けて不平等条約を撤廃せよという孫文の呼びかけに対して、橋はその実現する見込みを認めなかった。なぜなら、日本人の「大多数は未だ伝統的、保守的思想に縛られて「軽薄にして不徳義」なる支那の為に髪の毛一本でも犠牲にすることは出来ない⁽⁵⁸⁵⁾」からである。この言葉は、圧迫民族と被圧迫民族の間に厳然と存在していた溝に対する、橋の悲観的な態度を示した。

ただし橋にとって、それは大事なことではない。第二章の第一節（「社会」：中国研究の出発点）において、筆者は辛亥革命が橋に与えた影響、すなわち「政治が失敗したとしても、社会がまだ生命、エネルギー及び可能性を孕んでいる⁽⁵⁸⁶⁾」と、橋が考えた意味について分析した。政治の次元は、橋の場合において、二次的なものでしかなかった。政治的次元の問題は、社会的次元の方法によって解決し得るとというのが橋の発想法であった。それゆえ、政治次元において、日中両国の圧迫被圧迫の関係が存在していたにもかかわらず、橋は依然として、日中両国の「永久の握手」を語り得る。曰く、

中国文化の特色たる所謂王道思想を以て此聯盟に共通した旗印とする事は出来まいと思う。日本と中国との関係が深い動機に基づいて永久の握手をすると云う事は洵に望ましいが、其の動機は大亜細亜主義とか王道思想とか云うもの以外に、一層現実的色彩を帯びた方面から発見されるものでなくてはなるまいと思う。⁽⁵⁸⁷⁾ (下線は筆者による)

ここで橋が述べている「現実的色彩を帯びた方面」とは何か。まず橋の次の言説を見よう。以下、引用する。

さればと言って私は決して王道思想を無価値なものであると断定するのではない。唯其れは支那思想乃至支那の社会生活と切り離すことの出来ない一つの文化現象であり、其の儘に之を他の民族に当てはめることは不可能であろう。⁽⁵⁸⁸⁾ (下線は筆者による)

ここで言われている「社会生活」に注目すべきである。「王道」は、中国の「社会生活」から生れた文化現象であったため、「聯盟」の成員たる東洋諸民族に通用し得ない。ゆえに、東洋諸民族の「社会」の次元においての共通性を見出して、それを「聯盟」の「共通した旗印」にしたとすれば、政治と別の次元において、日中両国ないし東洋民族の「握手」を実現し得るだろう、という意味になる。こうして見れば、橋が構想した「東洋聯盟」の内部では、もとより政治上の不平等関係の存在が一時的であっても許されてしまうのである。「社会」と比べて、「政治」は二次的なものであったからだ。

ここに、「政治」の作用を軽視し過ぎた橋樸の姿勢が浮かんでくる。橋の場合では、「政治的なもの」に対する拒否と、「超越したもの」、「形而上学的なもの」に対する拒否の間に、ある種の連動関係が見出される。そのため、彼は被圧迫側にあった「孫氏及び中国々民の為に気の毒に思⁽⁵⁸⁹⁾」う一方、「不平等を打破するため」の「王道」を「不得要領なもの」、「空想的又は形而上学的王道論⁽⁵⁹⁰⁾」と見なして拒絶したのである。孫文が提示した、「政治次元」における「普遍価値」としての「王道」に相對して、橋は、「社会」を根拠として、「実体」としての「東洋」を作り出そうとした。この姿勢が、橋の東洋論の出発点であった。

2. 「東洋改造論」の展開：生命思想の最大化

「大革命家の最後の努力」を書き終わった後、橋樸は「編輯の後に」においてむしろ、「王道」研究を開始する意思を表明した。なぜ「王道」を研究するかというと、橋は「政治学説」としての王道思想の中国歴史における優越性を評価して、将来、王道思想が充分の展開性と現実性を持ち、中国民族に新しい且つ生きた政治理想を提供し得るだろうと予

想していたからである。彼から見れば、王道は中国のみならず、「行詰れる西洋文明に対して或大いなる暗示を刺戟とを与え得る⁽⁵⁹¹⁾」ものである。つまり「王道」は政治思想として、中国だけでなく、東西文明のレベルにおいてもの意味を持つようになった。それから、橘は「王道」に関する研究を始めた。研究の最初の成果は、1925年9月に『満蒙』で発表した「日本に於ける王道思想—三浦梅園の政治及び経済学説—」であった。この評論において、橘は自らの「王道観」を形成して、満洲国時代の彼の「王道論」あるいは「東洋改造論」の基礎を築き上げた。

「日本に於ける王道思想」の中で、橘は三浦梅園⁽⁵⁹²⁾の王道論を検討した上で、自らの王道論を打ち出した。彼によれば、王道とは、中国古代の政治理想であり、政治の現実ではなかった。王道思想の特色は、「地方分権により民衆に直接して効果多き温情主義的政治を行う⁽⁵⁹³⁾」ことであり、その内容は善良優秀な君主によって行なわれる「道德主義・地方分権主義及び善政主義⁽⁵⁹⁴⁾」からなった。しかしその思想はあくまでも、封建時代の産物であり、「文化の発達及び普及は各人の個性を発達せしむると同時に自由に対する欲求を鼓吹する」現下の「文明世界」に適用できない⁽⁵⁹⁵⁾。それゆえ、橘は「個性」と「自由」に立脚して、新時期の王道政治について、地方分権的、「民衆は自らの為に自ら善政を行う⁽⁵⁹⁶⁾」新社会と規定したのである。その意味で、王道の新社会は、「官僚政治とコントラストを成すものであり、同時に資本主義的法治主義の行われる近代国家とも正反対の立場に立つ⁽⁵⁹⁷⁾」ものであった。

まとめると、橘の想定した王道社会は、非資本主義的、地方分権的、民衆自治の社会であった。これは橘の「王道論」の帰結であり、満洲国の「東洋改造論」の基礎であった。本節ではさらに、橘の「東洋改造論」の構造を分析してみたい。

(1) 独裁政党論の構築：「行動」に対する期待

「王道」の様態は、橘樸の「方向転換」後、「王道は王が人民の生活を保障する、自治は人民自らの団体の力によりて自己の生活を保障する⁽⁵⁹⁸⁾」、という簡明なものになった。橘は、満洲領域内に複数の民族が生活している現実を考慮に入れ、さらに「民族協和」の原則を提示し、それと「農民自治」を基本精神として、満洲国において東洋社会建設の活動を展開していった⁽⁵⁹⁹⁾。しかし彼の「東洋改造論」の完成は、1933年まで待たねばならない。1933年に構築された橘の「東洋改造論」は、橘の生命思想と社会改造の実践との結合が最大化したものであったと考えられる。まず、橘の1933年の「東洋改造論」の完成を促した契機を検討してみる。

山本秀夫は、1933年が「橘にとってアジア解放運動の理論的構築の年⁽⁶⁰⁰⁾」だと見なしている。橘の理論の中で、まず注目すべき変化は、独裁政党論の構築という点であった。それらの変化は、1932年に起きた局面の変動と深く関わっていると思われる。要するに1932年には、関東軍に対する日本政府の中央統制力が回復しはじめた。この年は橘にとっ

て、希望や理想が現実によって裏切られた一年であったと言える。

第四章で述べたように、「方向転換」後の橋は、歴史に介入するために、満洲国建設にかかわる各種の活動を精力的に支援していた。例えば1931年11月28日に発表した論文「新国家設計批判」で、橋は自分を「徹底せる分権主義者であり、自主主義者である」と自認し、「新国家が農業国家であり、随って本質的に分権の傾向を持ち、人民も一般にこれを利便とすることに在る」を分権論の理由として主張していた⁽⁶⁰¹⁾。さらに、橋は11月に所謂自治指導部の設立に際して顧問となり、奉天城内の自治指導部で「王道の実践としての自治」講演を発表し、自治は王道実践の根本方法であると力説したのである⁽⁶⁰²⁾。当時の橋にとって、満洲は軍閥の足枷から解放され、人民が個性を発揮すべき天地として見たのであろう。例えば橋は郷紳士大夫の代表たる干沖漢や袁金鎧らが指導した自治運動の展開を「郷紳及び地主を上層に戴くところの農業社会は久しく彼等の頭上を圧していた政治経済的勢力から解放せられ、彼等自身の判断と利害とに従って、新たなる統治機構を創造し得る機会が与えられた」と判断し、これらの活動を「この革命的な機会に面して東北の民衆が逸早く選んだ政治的題目⁽⁶⁰³⁾」だと楽観視したのである。

しかし、現実のプロセスはかえって彼の希望に逆行しつつあった。1932年3月1日の満洲国の成立とともに、自治指導部は解散させられた。8月8日、関東軍人事変動と武藤信義の関東軍司令就任が端的に示すように、日本中央政府の関東軍に対する統制力が徐々に回復してきたのみならず、橋が自治指導部の後継者として期待を寄せていた満洲国協和会も官僚主義的に編成されるなど、橋の視点からすると、日本政府の駐在機関に墮落しつつあったのである。当時多くの人が唱えていた日滿統制経済に対して、橋はかなり悲観的に見ていた。日滿統制経済を「日本を中心として構成さる可き運命にある。然るに日本の統制経済機構は資本家覇権の下に組織されるほか道がない⁽⁶⁰⁴⁾」として捉え、さらに日滿統制経済が「金融資本の植民地収奪の結果が必然的にそこに落着くものである⁽⁶⁰⁵⁾」と見ていたのである。したがって、日滿同盟の性質について、橋は「今日の日本は申すまでもなく帝国主義国家である。従ってそれを中心とするブロックは当然帝国主義的のものであるべきである⁽⁶⁰⁶⁾」と述べた。

関東軍の人事変動は明らかに、日本の資本の満洲国進出と連動関係を持っていた。この現実、橋に大きな衝撃を与えた。浜口裕子の研究によれば、これまでの関東軍は、「橋にとって、自己の思想を実践させる媒介⁽⁶⁰⁷⁾」であった。しかし、今回の人事変動は、「橋が中央と対抗する勢力と位置づけ期待をかけた関東軍が、再び中央の統制のもとにくみ入れられたこと⁽⁶⁰⁸⁾」を意味した。それゆえ、橋にとって、その人事は「自身の思想が建国工作に影響を与えることを可能にした媒介の消滅⁽⁶⁰⁹⁾」でもあった。そのため、橋は日本の資本主義、帝国主義を批判すると同時に、日本改造、東洋改造ないし世界改造の任務を担当し得る政治力の再建設を模索していた。それは橋の独裁政党論の出発点であった。

橋樑はまず軍隊の問題性を検討した。曰く、

彼等は徒に軍部の力を頼み、右翼革命が一举にして成功すると云ふが如き空想に耽り、軍部ないし彼等自身の勢力の社会的基礎として、あの都合良き空気の中で、農民や労働者を獲得し組織する努力を拂うことを全く懈った⁽⁶¹⁰⁾

つまり今回の独裁政党は、一時的な暴走に止まるべきでなく、社会的基礎を持たなければならなかった。社会的基礎とは、農民と労働者であった。橋は、「兵農労」（兵士、農民及び労働者）を日本改造の原動力とみなしている⁽⁶¹¹⁾。

また、今回の独裁政党は、一国にとどまらず、国際的なものでなければならない。なぜなら、橋から見れば、農民の問題は、一つの社会や一つの国の問題ではなく、世界全体の問題だからであった。それを解決するために、必ず国際的方法を用いなければならない。つまり、農民自治が「安定した状態で円満な効果を発揮し得る為めには、一社会乃至一国家限りの運動に局限すべきでない⁽⁶¹²⁾」ということであった。それゆえ、農民自治運動は「自然に亜細亜の農牧民族を包括するところの国際的政党にまで発達し、且つこの政党の規模は更に職業自治の名に於て世界的のものにまで膨張する⁽⁶¹³⁾」はずであった。したがって、今回の独裁政党は、必ず国際的なものとなるべきであった。

独裁政党のような政治力に対する橋の期待と構想は、満洲事変までには見られないものであった。国民党左派の失敗と墮落は、橋に対して革命の担い手の重要性を気づかせた。歴史を「正しい」路線に取り戻すためには、「行動」が不可欠である。同じく、一時錯誤の道を歩む「歴史」であっても、「行動」を以てそれを正確な道に引き戻すことが可能である。このような思想的地盤を持つ橋は、その姿勢が傍観者から行動者となった。1932年、日本の資本の統制力が満洲において回復しつつある現実に直面した橋は、現状を打破するため、新しい日本と新しいアジアを創造し得る強い行動力を模索し始めた。それと同時に、彼の生命思想は、人生観と中国革命の段階を経て、東洋ないし世界の範囲にまで広がることになった。

(2) 農民のルート：東洋の「個性」はどこにあるか

まず、橋樑の生命思想を振り返ってみる。

筆者は第一章「橋樑思想の形成及びその背景」において、橋の生命思想の形成と構造を分析した。橋にとって、最も重要なのは、「個性」であった。人間にせよ、民族にせよ、「個性」は生命であり、永久の価値であった。「個性」は、先天的、本質的な存在であった。「普遍性」は、生きる欲求と、よりよく生きる欲求という二つの要素からなった。「個性」と「普遍性」は、人生観の枠組みとしての「性情」を形成した。これは枠組みであるが、死物ではない。「性情」は積極的に、外在の世界に働きかける。生命は外部の情報、理論、思想に対して、自主的に検証、批判、咀嚼して、自らの「個性」に適合したものを「体験」

という方法を通じて、自らの内部に取り入れる。それは、すなわち「内部化」である。「体験」を通じないと、外部の情報、理論、思想は、ただ頭の表層に止まっており、生命の「自身のもの」とならない⁽⁶¹⁴⁾。

「体験」とは、橘の言葉を借りると、人生観の「熊手」であった。生命は、「体験」の熊手を以て、外部の思想を内部に取り入れ、人生観の内容を充実させるのである。しかし「体験」には、意識的な「体験」と無意識的な「体験」がある。両者の区別について、前者が「経験の中から有用と考へまた好ましいと考へた部分を意識的に選び出してこれに練習を加へたもの」であるに対して、後者は「何等の意識もなく従って選択もなく、或は唯一度でも激しく自身の感情乃至感覚を衝撃した為に不随意的に自身の体験となって仕舞ふ」ものである⁽⁶¹⁵⁾。橘は、生命がただ無意識の段階にとどまることには、不満足であった。つまり、「なるべく意識的に、選択を加へて自身の欲する体験をとり入れるやうにするがよろしい⁽⁶¹⁶⁾」ということである。「意識的に」自らに適合したものを選択するという行為は、自らの「個性」をよく把握しているという前提に基づく行為でなければならない。それゆえ、「反省」が不可欠である。

第一章において、筆者は橘の「反省」の概念を分析した。もし「個性」が、「ある」のカテゴリーに属するとすれば、「反省」は、明らかに「べき」のカテゴリーに属している。橘は、大正生命主義の二つの大きな傾向、すなわち「ある」に関する研究と「べき」に対する構想を、自分なりに結合して、独自の思想に鍛え上げた。しかし第一章の分析によれば、橘は、やはり「ある」に関する研究を重視し、「べき」あるいは超越したものに対して、保留の態度をとっていた。そのようなエートスを持つ思想の中で、「反省」の機能は、「個性」を認識する範囲に制限され、それ以上の役割を果してはいけぬ。まとめると、生命は、「反省」を通じて、自らの「個性」を認識し、外部の思想に対して検証、批判、咀嚼を行い、「体験」及び「練習」の方法を以て、それらのものを「内部化」して、よりよい生きる状態を実現する。これが、橘の生命思想の展開の仕方であったと考えられる。

こうして、橘樸の人物像が浮かんでくる。彼が「無意識」という言葉を平然として使用することに、当時心理学や、精神分析学が流行っていたことの一斑がうかがえる⁽⁶¹⁷⁾。もしフロイトのエス、自我と超自我という枠組みを参照すれば、橘の姿勢はむしろエスの視点から出発し、超自我に対する検証、批判を行い、またそれをエスのレベルに引き下ろそうとしたのである、と言えるのではないか。

筆者は、橘の生涯を、彼が自身の人生観を社会改造の実践と結びつける過程と見なしている。その出発点は、辛亥革命にあった。このことは、すでに第一章で述べたため、ここでは繰返さない。橘にとっては、社会改造の実践という場合でも、まずその社会の「個性」を把握しなければならないという考えに至る。

中国社会だけでなく、東洋社会の場合でも同じであった。橘は東洋を一つとして把握し、東洋の「個性」について、農民、農村及び農業社会に求めている。1934年の文章「帝政と

王道思想——鄭総理の王道政策批判——」において、橘は自ら「農民」を選択して、アジア解放の旗印とした動因を次のように説明している。

蓋しアジア大陸の諸国家及び民族は例外なく前資本主義的な農業経済の段階にあるのだから、それを解放する為の対内的方策は唯一つの農民自治あるに止る。我等が嘗て満州国建設の基本要請として、最初から王道政治を力説した真意も亦実に此の点に在ったのである。⁽⁶¹⁸⁾

時勢の判断だけでなく、彼は、中国の「中産階級革命」あるいはブルジョア革命を主張していたにもかかわらず、常に農民の身近な利害に関心を払い、工業ないし都市に対する反対の意見を出した。この姿勢から、橘の思想の中に流れている農民の視角が窺える⁽⁶¹⁹⁾。

そして現実の動因に関して言えば、橘にとって、中国ブルジョア革命の失敗と恐慌の衝撃を受けた日本農村の荒廃は疑いなく、東洋社会における資本主義ルートの難航を提示するものであった。中国の状況については、筆者は第三章「橘樸と中国革命」においてすでに述べたため、ここでは繰返さない。日本側はどうか。1941年の座談会「大陸政策十年の検討」に出席した橘の回想は、参考になる。

(満洲事変前)あの時に農産物不作、冷害その他の為に日本の農民がひどく困った。それが日本の青年将校、大隊長とか中隊長とか、こういう連中の感情を可成りに刺激した。そうすると海軍も同じだが、彼等は軍縮を食って肚も立つし、自分等の立場、公的には国防上の不安、また私的には職業上の不安というか、そういうものと結び付いて特に農民社会の要求なり感情なりが鋭敏に中堅将校に反映したものです。⁽⁶²⁰⁾
(下線は筆者による)

1929年の大恐慌の衝撃を受けた日本では、大量の中小企業の倒産とそれによる失業者の激増が見られた。失業者の多くは、都会で就職先をさがすことができず、農村に帰らざるを得なかった。しかし恐慌の影響で、アメリカへの生糸と中国及びインドへの綿製品の輸出量はともに激減した。それにともなって発生したのは、繭価の暴落(1930年9月には前年同月の価格のわずか三分の一となった)であった。そのため、農家総数の40パーセントを占める養蚕農家は、苦境のどん底におちいった。それに加えて、1930年10月になり、米の未曾有の豊作が知られると、米価も暴落した(1931年は一転して東北地方、北海道地方が冷害により大凶作となった)。しかし、都市の農村向けの工業製品(化学肥料など)の価格は、比較的にさがらなかったため、農産物価格との間の価格差は増大して、農村経済を圧迫した。こうして、複数の理由が絡み合った、満洲事変前、日本農村は異常な惨状を呈していた⁽⁶²¹⁾。

こうして、中国ブルジョア革命の挫折と世界範囲の資本主義の大恐慌の現実に直面していた橋は、大きな被害を被った農民の立場から出発し、東洋に似合った非資本主義的なルートを模索し始めた。それはまた、橋が「自由主義と資本家民主主義とに決別し、新たに勤労者民主主義——満州建国のためには特に農民民主主義を取り上げて、これを培養し鼓吹する⁽⁶²²⁾」ようになった経緯であったと言える。

東洋において、資本主義的な発展のルートはすでに行き詰まった。さらば社会主義的ルートはどうか。橋は、社会主義に好意をもっていたが、マルクス主義や中国共産党の理論を全面的に認めているわけではなかった⁽⁶²³⁾。尤もソ連のプロレタリア独裁体制に対して、橋はその東洋社会に適しなかった点を次のように指摘している。

無産階級覇権なる華やかな標語が労働者にとって強い魅惑であることは充分首肯されることであるが、併し亜細亜諸国家の如き産業の発達しない国々は固より、日本の様に工業経済の爛熟期に入り込んだ社会に於てすら、所謂プロレタリア・ヘゲモニーが果して安定的に発生し得るか、仮りに安定するとしてもそれが果して大衆の幸福であるか否か、労働者と雖も思慮あるものは先ず此の点に疑なきを得ないであろう。
(624)

農業経済の根強く存在することは、橋から見れば、東洋社会がソ連体制を受け入れられない要因であった。したがって、東洋は資本主義とソビエトと異なる、農民を主体とした発展のルートを歩まなければならない。その認識は、橋の国際情勢に対する判断の中にも現れている。

当時の橋が見た世界の情勢は、イギリス帝国、アメリカを中心とするモンロー主義区域、ソビエト連邦、フランスを盟主とする東欧ブロック、日満国防同盟という五つの「超国家的なる政治的経済的ブロックの構成及其対立⁽⁶²⁵⁾」であった。では、この構図において、東洋民族の意味はどこにあるか。橋は、東洋民族の存立根拠を「農業社会」に求めた。曰く、

前記五箇のブロックの中四つまでは西洋諸民族を中心とし且つ工業社会が農業社会を支配するところの地域である。而して西洋諸民族に対する東洋諸民族、工業社会に対する農業社会と云う問題を考へる場合、吾人は第五勢力たる日満ブロックが如何なる性質のものでなくてはならぬかに就いて深く反省せねばならぬ問題に突き当たることを感ずる。⁽⁶²⁶⁾ (下線は筆者による)

橋樑が認識した、満洲国あるいは「日満ブロック」の東洋的意義は、まさにここ「工業社会に対する農業社会」というところにある。

(3) 理想世界の創造：「普遍性」と調和思想

橋樑は、東洋の「個性」を農民、農村及び農業社会と捉えた一方、西洋の工業社会と相対して、東洋の農業社会を理想化することはなかった。彼の東洋改造論が世界改造論まで発展した経緯は、主に口田康信を代表とする「大亜細亜派」を批判していくなかで、具現化されていったのである。

「大亜細亜派」とは、大亜細亜建設協会（後に大亜細亜建設社）を拠点として活動する人々の総称である。大亜細亜建設協会は、1933年4月に笠木良明⁽⁶²⁷⁾などを中心として設立した組織であり、当時流行っていた汎アジア主義運動の一部であった。口田康信の『新東洋建設論』は、機関紙『大亜細亜』の創刊前後に出された小冊子である。その中で、口田はまずドイツ社会学者フェルディナント・テンニースの理論を引用し、東洋社会を自然な「本質意志」に基づく「共同社会（ゲマインシャフト）」、西洋社会を人為的な「選択意志」に基づく「利益社会（ゲゼルシャフト）」と捉え、前者が東洋の家族主義に発展、後者が西洋の資本主義に発展する運命を持つなど、両者の間に本質的な対立関係があると主張している。続いて口田はその前提のもとで、大亜細亜建設協会の任務が東洋の共同社会即ち農村自治社会を復活し、さらにそれを各地方、各民族までに発展させ、資本主義や帝国主義を超克する世界革命を行うことにあると主張していた⁽⁶²⁸⁾。

以上、口田康信の『新東洋建設論』の内容を簡単に紹介したが、橋樑の意見はどのようなものであろうか。橋樑は口田のように、東西を「固定的な永久的な対立⁽⁶²⁹⁾」と捉えることに賛成できなかった。彼から見れば、「村落が発達して都市を起し、農業が分化して工業を生んだ。これは歴史的必然の現象⁽⁶³⁰⁾」であり、両者の相関性を切断してはならない。つまり、「両者ともに等しく人類に属すること、随って両者の創造し展開した文化がこれ亦等しく人類共通の宝物である⁽⁶³¹⁾」という主張であった。この主張は、明かに橋の「生命」の普遍性に対する認識に基づくものである。生命である限り、生きる欲求とよりよく生きる欲求は存在している。「個性」の相違は、必ずしも対立と闘争を引き起こさない。西洋の工業社会が東洋の農業社会を圧迫することは、もちろん悪いことであるが、そのため、工業社会のすべての長所を抹殺することも正しくない。正しいやり方は、「吾等は勿論利益社会の長所を尊重し且つそれを増進することに努力せねばならぬ。併しそれと同時に利益社会の内部に働く共同主義的機能を重視することを忘れてはならぬ⁽⁶³²⁾」というものであった。橋の目的は、東洋＝農業社会＝共同社会が西洋＝工業社会＝利益社会を滅ぼすことではなく、両者の調和であった。こうした視点は、彼が農民自治論を提起した時に現れた。つまり、

吾々の一標語たる農民自治の全幅的なる意味は、単に本来の意味での農民自治のみならず、抽象され且つ拡大された意味での農民自治即ち職業自治を含み、農業社会と

工業社会、農業国家と工業国家との間に職業自治と云う一貫した組織原理を与えることに依りて、両者の運命的なる対抗を解消したいと云う願望をも併せ含む次第である。
(633) (下線は筆者による)

「一貫した組織原理」という言葉が示しているように、橋樑が目指したものは、やはり「調和」そのものであった。職業自治と東西調和は、橋のいった「個性」と「普遍性」との調和であったと言える。

続いて、口田は村落共同体の再建と拡大化を目標として掲げていたが、橋樑は、彼らが農村における階級闘争の存在を見逃しているのではないかと指摘した。橋は農村の階級闘争について、人口増加とともに発生する自然現象であると考えたのである。つまり、「一定面積の土地に依存する人口が愈々増加するにつれて貧富の差は益々拡大し、貧富の差が益々拡大するにつれて支配階級の被支配階級に対する圧迫は愈々加はり、後者の貧窮は益々甚だしかざるを得ない。その結果は被圧迫者側の破産又は逃散となり、最後に彼等の団結を促して茲に所謂階級対立の形成が馴致される次第である⁽⁶³⁴⁾」ということであった。それゆえ、どんな改革を進めようとしても、まず農村の人口過剰問題を考慮に入れなくては行けない、ということである。橋はインドのガンジーと中国の村治派首領梁漱溟の例を取りあげ、もしこの現実を無視すれば、農村における活動は失敗に向うしかないだろうと批判している。

農村を理想化してはいけない。過去の農村をそのまま復活することは、無意味であった。この橋の意見を、彼の人生観を照らしてみると、次のよになる。つまり、「個性」は尊重すべきであるが、「個性」そのままではいけない。生命は、その「個性」を根拠として、様々な方法を通じて、よりよい生きる状態を実現すべきである。したがって橋は、大亜細亜派が「社会改革の原理として共同主義を提唱するのは、寧ろ歴史の逆転を企図すること⁽⁶³⁵⁾」であるとし、「斯の如き自然発生的社会が吾等の革命運動の結果として獲得しやうとする社会形態とは非常に大きな距離のある⁽⁶³⁶⁾」ものだと指摘したのである。

では、橋の理想社会とは何かというと、「これを印度や支那や満洲の如き農業国家に即して云へば、農民デモクラシーを基調とするところの社会主義社会であり、日本や印度及び支那の工業地帯に就いて云へば職業的デモクラシーを基調とする社会主義社会である。それらの社会が先づ民族的基礎の上に結合して亜細亜聯盟となり、更に進んで質的には共産社会（所謂共産主義社会ではない）、量的には世界社会を創造するにある⁽⁶³⁷⁾」、ということであった。「共産社会」とは何かについて、橋の論説でははっきりしていない。しかしこのフレーズを分析すると、「職業」＋「民族」に対する「共産」＋「世界」という相対関係を持つ言葉が見出される。もし橋の「世界社会」が、「民族」の対立を解消するものであるとすれば、「共産社会」は、やはり「職業」の対立を解消するものであると言えよう。

まとめると、橋が設定した東洋改造の目標は、職業自治を原則として、インド、中国、

満洲、日本を内容とする「亜細亜聯盟」であり、最終的な目標は、職業、民族ないし地域の対立性を解消した「共産世界社会」であった。言い換えれば、職業と職業、民族と民族の間には、「個性」の相違が存在しているにもかかわらず、対立性がない社会ということになる。加えて、対立性がないからこそ、「個性」の完全の発揮が実現できる、ということになる。それは、橘の思想の中の、「個性」と「普遍性」の理想的な友好関係であったと言えよう。

では、目の前に置かれている、現実的な目標はどこにあるのか。それについて、橘は次のように述べている。

吾等の期待するところは吾等の同志及び其の影響下にあるところの大衆が一定のプログラムを樹て、異常なる努力と犠牲とを払って或程度まで到達し得た暁に於ては、其の結果として現はれた新社会に内在する機能が、自然且つ必然的に改造過程の完成に向って当該社会を推進めて行く様な状態を建設するにある⁽⁶³⁸⁾。(下線は筆者による)

このことは日本改造の場合も同じである。つまり、「或る位置まで進出しておけば、其後は退転の懸念なくして自動的に彼岸に到達し得るといふ如き点に日本の位置を定める事が出来れば、吾人の所謂日本改造の過程は終りを先げる次第である」というのが橘の主張であった(下線は筆者による)。以上を見ると、橘が創り出そうとしたのは、人為的に造り出す「状態」であった。「個性」の発揮を尊重する橘は、この改造の過程において、人為的な要素は必要の最小限度に押さえられるべきであると考えた。彼が期待した状態は、「個性」を抑制するものではなく、「個性」を根拠として、より高い次元でそれを発揮できる状態であったと言える。それはつまり、「共同社会及び利益社会が過去に於て成就し又に企図した一切の進歩性ある精神的及び物質的遺産を更に一段高い立場に於て継承し且つ発展せしめ⁽⁶³⁹⁾」るものであった。この「状態」を創り出すために、橘の論説において、「行動」の主体の重要性が増幅してくる。そのことは、独裁政党に対する評論のみならず、橘の知識人観にも及ぶものであった。

(4) 知識人はどうあるべきか：最小限度の「反省」

本節の2で、筆者は橘の生命思想の構成及び展開の仕方を回顧した。「個性」を重要視する橘であるが、無意識の「個性」には満足できなかった。生命は「反省」を通じて、より高い次元で「個性」を発揮できる状態に至るべきである。ところが、橘の思想にしたがうと、「個性」は先天的、自然的なものであるのに対し、「反省」は一種の後天的、人為的な行為である。両者の間には、一種の緊張関係が存在している。一つの社会を仮定した場合、もし「個性」が民衆の生活にあるものであるとすれば、「反省」の任務を担当するもの

は、おそらく知識人であろう。「反省」と「個性」との緊張感、「知識人」と「民衆」との距離感と見なすことができる。ここで「反省」についてより具体化すると、それは、知識人の民衆に対する啓蒙、動員、組織などの行為を指している。「個性」の十分な発揮を目標とする橘は、なるべく民衆＝「個性」との距離感、緊張感を抑えるために、「反省」の範囲を必要の最小限度に制限しようとした。そうした傾向は、橘の大亜細亜派に対する批判の中で、具現化されていた。

橘は、外来の強制を拒否しながらも、「個性」がそのままであれば、問題は解決し得ないと考えた。そのため、知識人は上から下へ、外部から内部へといった姿勢を捨てて、人民大衆の中に溶け込んで諒解を得た上で、漸進的に大衆を啓蒙、動員、組織していくことが必要であった。そのような知識人観から出発して、橘は大亜細亜派の人々に対して、次のような批判を下した。

彼等の宗教論者乃至理想主義者たる立場からか、改造運動に関してどこまでも大衆より一層高い立場を取らうとし、かかる運動に於て大衆の受持つべき積極な役割が如何に健全にして効果的、随って又重要缺くべからざるものであるかを殆ど全く考慮して居ない。⁽⁶⁴⁰⁾

しかもインテリや軍部の手による改造は、官僚主義の弊害をもたらすのみならず、政治的改造に止まり、社会的改造には向かわないものであった。最も重要なのは、「資本主義の根底は毛細管の如く社会のあらゆる部分に浸透して居る。故に少なくとも農民及労働者の階級意識を善導し、これによりて漸進的に且つ効果的に其基礎工事を掘返すことが絶対に必要である⁽⁶⁴¹⁾」として、橘はこの基礎工事の建設に従事する人に呼びかけている。

社会の細部に着手して、漸進的に社会改造を推進するやり方は、橘の女性論の中に最初に現われたものであった。筆者が第一章の第三節の2の(2)「女性と社会改造」において述べたように、これは、橘の社会改造という課題における一貫した姿勢であった。この姿勢も、橘の儒教に対する考え方に反映されている。橘は、儒教は漢以降になると墮落していった、と認識していた。つまり、「生命ある儒教は其宗教性と共に早く二千年前に滅亡し、爾来朝廷の政治的威力と支配階級の社会的勢力とに依り、只其形骸のみが辛うじて今日まで維持されて居るに過ぎぬ⁽⁶⁴²⁾」のである。荀子以降の儒教は、二派に分かれることになったということである。「一派はオルソドックスとして支配階級のために統治理論の供給者となり、他の一派たる名もなき儒家達は社会の内面に沈潜して、自由農民のために新しい共同態の理論と方法とを案出した⁽⁶⁴³⁾」、ということになった。詳しく言えば、以下である。

原始儒教の意味に於ては明かに覇者に過ぎない秦漢以後歴代の王朝のために、王道

や天命に関して牽強附会の解釈を与え、人民を欺瞞したものは、申すまでもなく前者であり、これに反して後者は儒家の遺稿と伝説の中から新社会の組織と運営とに役立つ如き思想を広い集めて、『儀礼』及び『礼記』の二つの叢書をまとめることが出来た。因に右二書に『周礼』を加えて『三礼』と名付け、後世社会統制の規範として、支配階級に重宝がられたものであるが、それは新しい農村共同態が、不可避免的に地主を中心として、構成され運営され、而して地主は支配階級に外ならぬという事実から、自然に発生した帰結である。この帰結あるの故を以て、無名の儒家達の二千年前の偉大なる社会的貢献を抹殺することは出来ないと信ずる。⁽⁶⁴⁴⁾ (下線は筆者による)

ここで、支配者に統治理論を提供して、人民を欺瞞する儒者たちと異なり、社会の下層部に「沈潜」して、新社会の組織、理論と方法を創出そうとした儒者たちのイメージが浮かんでくる。橋にとっては、社会改造こそが真の改造であった。ここで注意すべきは、「無名」という言葉である。「無名」とは、公式な歴史書に名前を残そうとしなかったという意味である。これら「無名」の人々は、支配者や官僚と伍せず、政治と距離を置き、もっぱら社会細部の改造に従事していた。彼らは、立派な理論を發明したにもかかわらず、自らの名を王朝の歴史に残そうとしなかった。彼らにとって、理論の所有権及び自律性よりは、実践及びその方法のほうが重要であった。このような「無名」の工作者たちは、まさしく橋が提示した知識人の在り方と一致している。のみならず、彼らの身分は、支配者でもなく、革命者でもない。彼らはあくまでも漸進的方法を以て、新しい社会を創り出す工作者であった。漸進的方法は、革命と比べてスピードが遅いかもしれないが、社会の全体の改造のために最も効果的、持久的な方法である。この中に、橋が自己の歴史的位罫に対する想像が窺えるのではないか。

「符号をつけてくれるなよ」。これは、死の直前の橋樑が、その甥・武内睦哉に言ったことである。時は、1945年10月25日である⁽⁶⁴⁵⁾。事実がどうであるかは別として、橋自身は、東洋社会建設の「無名」の工作者として死ぬことを欲していたのではないか。

とにかく、ここまでの考察で、橋樑の東洋改造論ないし世界改造論の具体像が浮かんで来たであろう。それは、彼の人生観と社会改造の事業との結合が最大化したものであったと考えられる。まとめると、次のようになる。

橋樑によれば、農民、農村及び農業社会は、東洋の「個性」である。その「個性」は、近代以来西洋の資本社会、工業社会の圧迫を受けざるを得ない。しかし第一次世界大戦、大恐慌及び中国ブルジョア革命の失敗は、資本社会、工業社会の危機を提示してくれた。そのため、東洋は、これまでの西洋追随路線を放棄して、東洋自らのルート、いわゆる農民のルートを歩まざるを得ない。東洋諸民族の連盟は、農民自治及び職業自治を組織原理として、職業と職業、民族と民族との間の対立性を解消して、**共産世界社会**の実現を最終の目標としている。それは、「個性」と「普遍性」が友好関係を持つ理想社会である。「個

性」は、貴重なものであるが、そのままではいけない。「個性」は、より高い次元で発揮するようになるべきである。しかし歴史は、「行動」がなくては、発生するはずがない。それゆえ、世界改造の計画を強力に推し進める力が不可欠である。その力は、すなわち橋のいった独裁政党であった。知識人は一方で、民衆の世界に沈潜して、社会の細部に着手して、独裁政党の養成また社会改造の計画を漸進的且つ確実的に進行すべきである。これは、「反省」のカテゴリーに属してはいるものの、最小限度の「反省」であった。

3. 「東洋」の硬化と「社会」の膨脹：橋樑の最後の努力

前節において筆者は、橋樑の東洋改造論ないし世界改造論の構造を明らかにした。それは、理想世界に対する構想であった一方、橋の知識人観ないし自身の歴史的な位置にもかかわっている。筆者はそれを、橋樑の人生観と社会改造の実践との結合が最大化したものと見なす。こういった大きな計画が、どのようなものを根拠としたかという点、それは疑いなく、東洋の「個性」としての農業社会であった。橋の立場は、あくまでも「社会」側にあった。「政治」は失敗したとしても、「社会」は依然として、変革の可能性を保持している。これは、辛亥革命の挫折の影響を受けて形成された橋の発想法であった。また、「政治」が順調に進んでいる時期には、橋の「社会」に対する関心が減少するのに対して、「政治」が行き詰まった時期には、橋の「社会」に対する関心が増幅していく傾向が見られる。橋の思想の中で、「政治」と「社会」の間には、一種のダイナミックな関係が存在しているとも考えられる。

典型的な例として、橋樑による中国人の国家意識についての論を取り上げてみたい。1922年の中国は、まだ政治の混迷期にあった。橋は5月に発表した文章「支那統一論」において、中国人の国家意識の希薄さを論じたのである。橋によれば、先秦時代の国家論には、理想があった。曰く、

先秦の諸伝説及国家論が常に一定の理想を把持して居たことである。人格的唯一神は民衆の福祉を願念して彼等のために最適當の牧者を選定する。此牧者が神の意志に凜順しつつ行うところの統治こそ上古支那人の理想する政治であったのである。周公理想も茲にあった。⁽⁶⁴⁶⁾

しかしこの「理想政治」は、秦の始皇帝から始まり、一変して「権力政治」となった。「天下は帝王の私有財産⁽⁶⁴⁷⁾」となった。国家は、人民を圧迫する道具となり、民衆はしだいにその圧迫を慣れて、一種の「豚の如き現状肯定」の嗜眠状態に陥ったのである⁽⁶⁴⁸⁾。この状態が存在する限り、橋に言わせると、中国は「国家でない。少なくとも今日の所謂完全を去ること千万里の国家である⁽⁶⁴⁹⁾」のであった。権力国家は、民衆を圧迫するものであったため、必ず民衆の力によって覆される。では、新しい国家は、どのような組織を

持つべきか。それは、民衆の要求に適合するものでなければならない。その形態について、橋は次のように説明している。

其第一は国家の取扱う仕事の範囲が極めて局限されたものでなくてはならない。第二は徹底的に民主的且平和的のものでなくてはならない。第三にはそれが民族に対してどこまでも義務的のものでなくてはならない。⁽⁶⁵⁰⁾ (下線は筆者による)

この描写は、近年中国で盛んとなった「服务型政府」(奉仕型の政府 Service-oriented government) 論とよく似ている。このような政府あるいは国家は、完全に民衆の要求を満足させることを目標としている。橋の論説の中心は、やはり政治にあらず、もっぱら民衆また社会の側にあった。しかし「民衆の要求」とは何か、「民衆の要求」は誰によって、どのような形で表現され得るのか、という問題は、曖昧なまま捨象されてしまった。

それらの問題はともかく、次いで国民革命の高潮期の橋の国家論を見てみよう。当時の一部の批評家と日本人は、中国人が国家思想を受け入れられるかどうかについて、かなり疑問を呈していたが、それに対して、橋は1927年4月の文章「支那人の利己心と国家観念」において、次のような反駁を打ち出した。

私の見るところでは支那人の実生活に最も強く働くところの心理的力は利己の欲求と面子の欲求とである。如何なる主義又は思想にせよ、此の二つの欲求に適するものは其儘或いは都合よく変形して受容せられ、然らざるものは捨てられる。⁽⁶⁵¹⁾

新しい主義乃至思想を支那人が受容する条件は(一)それが物質的又は精神的に生活利益を増進することの認識、(二)それを受容し或いは理解することが面子保持の一要素であるとの認識である。此の二つの条件を兼ね備えたものでさえあれば、外見上如何に彼等の利己主義と衝突する様に思われる主義又は思想でも、案外容易に彼等の歓迎を受けるであろう。⁽⁶⁵²⁾

1927年4月は、国民革命の最盛期であった。この後で挫折するとはいえ、国共合作の革命軍は、破竹の勢いで勝ち進み、軍閥を掃蕩して、世界を震撼させた。新しい中国は、まもなく出現するだろう、という予感が世人に広まっていった。この時期の橋の論説は、1922年の文章とは、かなり違っている。つまり、1922年の論説が、民衆が如何なる国家組織を要求するか、という視点から出発したものとすれば、1927年の論説はむしろ、国家が如何にして自らの意志を民衆に推し広めるか、という視点から出発したものである。論説のバランスが変わった。民衆の「利己の欲求」と「面子の欲求」さえ満足すれば、国家は自らの意志を順調に推し広めることができるだろう、というのである。橋において、

「社会」は思想的根拠として失われたわけではないのであるが、「社会」あるいは「民衆」の要求は、その範囲を縮小して、抽象的なものとなったのである。

「政治」との乖離が発生した時期においては、橘は「社会」の中にエネルギーと可能性を掘り出そうとした。このような橘における「政治」と「社会」とのダイナミックな関係は、満洲国時代、日中戦争ないしアジア・太平洋戦争時代の橘にも見られる。

満洲事変後、関東軍が満洲において日本の資本家及び政府主流派に対して優勢であった時期において、橘は積極的に国の建設に参加して、新国家の政治をめぐる様々な意見を出した。「新国家設計批判」（1931年11月28日）、「王道の実践としての自治」（1931年12月5日）、「満洲新国家建国大綱私案」（1931年12月10日）、「独裁か民主か—蟬山教授の新国家論を読み—」（1932年2月27日）、「王道政治」（1932年5月28日）、「国家内容としての農民自治—満洲国協和会に関する考察の三—」（1932年7月16日）などは、この時期の代表作であったと言える。

しかし1932年8月以降、中央統制力の回復と日本資本の殺到は、橘樸が期待していた「理想政治」を裏切ったのである。1934年の文章において、橘は、「私は実のところ一昨年の夏以来、満洲国に関するあらゆる政治的経済的社会的現象について、只の一つも愉快的な消息に接したことはなかった⁽⁶⁵³⁾」と、失望の心境を表明した。現実の「政治」と理想との乖離は、1933年において、橘が農業「社会」を手がかりとして、自らの東洋改造論ないし世界改造論を構築したことの動因であったと考えられる。ただし、「政治」の乖離はその程度にとどまらず、時間の推移、政治軍事闘争の激化とともに、広がっていった。それにしだいで、橘の東洋「社会」論もしだいに「硬化」していったのである。

ここで言う「硬化」とは、橘の東洋論の固定化と排外主義化を指している。「社会」の共通性を以て、「政治」の対立性を解消するという、かつての橘の構想は、しだいに「社会」の共通性を強調することを以て、「政治」の対立性を隠蔽し、日本の侵略行為を弁護するものとなった。

まず日満関係において、橘はかつて、「東北四省を版図とする—独立国家を建設し日本はこれに絶対の信頼をおいて一切の既得権を返還するばかりでない、更に進んで能う限りの援助を与える⁽⁶⁵⁴⁾」と主張した。しかし1935年、日本が華北を中国から分割しようとした、いわゆる「華北分離工作⁽⁶⁵⁵⁾」の直前、橘は満洲の「独立国家化」について、新しい解釈を提示した。それは、日本と満洲が「差等的であると同時に道徳的な東洋的国際関係⁽⁶⁵⁶⁾」を樹立すべきだ、という主張であった。そして、「この新法則がやがては他の諸民族間にも浸潤して、世界平和の基礎となるべき⁽⁶⁵⁷⁾」であるというものであった。しかし、この「差等的であると同時に道徳的な東洋的国際関係」が、如何にすれば保護国と被保護国の関係に墮落せずにいられるのか。橘にはそれに対する答えがなかった。「東洋」はここで、不平等関係の事実を隠蔽する盾に取られた。

日本の「華北分離工作」を弁護するために、橘は再び「東洋」の立場を取り出した。つ

まり、「南京政権は非東洋的且つ反農民的の存在であるから、かような存在は東洋農民社会建設途上の障碍物であり、随って北支那の農民又はその政治的代弁者達がこれと抗争し、何等かの程度の自主権を獲得しようと努力することは当然であり、日本はかくの如き新社会建設の指導者として、大びらに彼等を援助すべき⁽⁶⁵⁸⁾」である、と。1936年になると、橘は進んで、東洋社会の基礎を「零細農⁽⁶⁵⁹⁾」と規定して、テンニースのいった「共同主義」に「階級概念を導入⁽⁶⁶⁰⁾」し、それを東洋民族解放の指導原理としたのである。以上の引用から、橘の「東洋」概念の固定化と排外主義化が見出されるであろう。

1937年、日中関係は一層悪化した。中国共産党は、民衆全体が団結して、日本帝国主義を打倒する「抗日人民戦線」を呼びかけている。この危険な情勢に直面していた橘は、日本当局に建言して、蒋介石の南京政権を味方に引入れようとした。そして南京と交渉するために、日本側は二つの条件を用意しなければならないと主張した。つまり、

第一は全支那に於ける日本国民及日本商品の通商自由を保証すること、就中北支那に於いて或る程度の政治的経済的特殊地位の要求であり、第二に特殊且つ具体的な内容を持つところの郷村建設運動、それを中心として、人民戦線に対抗する東洋民族解放戦線を組織することである。⁽⁶⁶¹⁾（下線は筆者による）

東洋民族解放戦線を組織して、抗日人民戦線に対抗するのは、日中戦争の段階における、橘樸の一貫した構想であった。それは明らかに、「東洋」の「共通性」——「零細農」を基礎とした「共同社会」——を以て、現実の侵略被侵略関係を隠蔽して、反帝国主義の人民戦線を弱体化させる発想法である。

日中戦争の最中、1940年5月31日、「東洋の社会構成と日華の将来」検討会が、東京・嵯峨野で開かれた。その会において橘樸は、日本の国家性質の変化について発言した。彼から見れば、満洲事変以前の日本は、東洋の共同体的性格が排除され、「西洋風の集合体的性格⁽⁶⁶²⁾」となった。満洲事変を通じて、日本はだんだんと集合体化の傾向から抜け出し、共同体性を取り戻し、今日に至って、中国と「本質に於ては全く同じもの⁽⁶⁶³⁾」となっているのであった。

続いて、「共同体」と「集合体」との相違について、橘は次のように述べている。

共同体は自然発生的であるということが、集合体に対する共同体の第一の特色である。集合体の方は、例外なしに、目的意識的な集団だ……

共同体は政治経済的集団としては分散的なものだ。……これに対して、集合体は…大規模な集中的なものである。

心理的に云えば、共同体は血縁又は地縁を基礎とする自然の結合であり、従ってまた主情的だ。これに対して集合体は具体的な利益の追及を目的とするところの主知的

集団である。

社会と個人との関係について云えば、共同体の場合は、社会の中に個人が帰入している。彼等はその社会で与えられたポストを受け持っており、そのポストに立って社会に盡す道徳的義務を負わされている。これに対して集合体の方は、個人が社会の構成要素であるという立場の下に、社会に対する個人の権利義務を決定する。この関係は集合社会である限り、資本主義たると社会主義たるとに関わりないことだと思う。

(664)

この一文を見れば、かつて東洋西洋の「固定的な永久的な対立」という考え方を批判した橘は、かえって自らの立場を裏切っていることがわかるであろう。彼の「東洋」の概念は、一層硬化したと言える。

こうした橘の姿勢に対して、細川嘉六は、一つの問題を提起した。つまり、日本にせよ、中国にせよ、すべて西洋文化の洗礼を受けた。だから、今日、東洋文化を考える場合、共同体的なものを、「恒常的なものとして考えるのはどういうものですか⁽⁶⁶⁵⁾」。言い換えれば、今日の「東洋」また「共同体」の根拠は、どこにあるか、という疑問であった。

細川の疑問に対して、橘は「社会」の立場から、答えを出した。曰く、

日本の社会組織として、現在持つておるものは何か。それは主として共同体的なものであるという意味から云えば、私は共同体というものが、日本の社会構成のソーシャル・ボンドになっていると思うのだ。だから、あなたの認識とは正反対だ。階級的に分裂しきらない前の氏族社会は共同体であり、又近世国家は原則として集合体であると思うが、その内容たる民族が尚完全に共同性を保存して居る限り、それは共同体国家と云えるであろう。例えば今日の日本は原則通りの集合体国家であろうが、半世紀前、又は国内の民族問題に適當の解決を与えたのちの日本は共同体であり得ると信じています。⁽⁶⁶⁶⁾ (下線は筆者による)

つまり、「原則」として「近世国家」である日本は、その「内容たる民族」が共同体的な「社会組織」を保存している限り、東洋的、共同体国家であり得る。この橘の論説においては、「国家」の要素は無限に矮小化されると同時に、「社会」の要素は無限に肥大化されているのではないか。彼の言説にしたがえば、「民族」は、「国家」の次元を全く離れて、独自に存在し得るものとなる。それゆえ、日中両国の戦争が如何に激しかったとしても、国家の内容たる「民族」は共同体的「社会組織」を持つ限り、互いに諒解、団結、融合する可能性を十分に持っている、ということになる。「社会組織」は「民族」の性質を決定し、「民族」の性質は国家の性質を決定し得るからであった。

しかし細川は、橘の曖昧な結論に満足できなかった。彼は一步を進め、「共同体国家」

論は一種の策略であるのか、という疑問を發した。つまり、「従来の共同体的のもの基礎が現在になって主張されるというよりも、今日の日本の発展段階は、今日の世界の変局に際して、その存続発展の必要上、新たな共同体を組織しなくてはならん。そういう風に認識されることに基いておるのじゃないか」、という問いかけであった。(下線は筆者による)

それに対する橋の反応はどうであったか。「日本は現に共同体だ⁽⁶⁶⁷⁾」と、橋は断然として言った。この言葉を聞いた細川嘉六が、呆然としたらうことは、想像に難くない。この時の橋は、「社会」の共通性を以て、「政治」の対立性を解消する立場から、「社会」を以て、「政治」に取って代わる立場へ移行したと言えよう。「社会」が無限に膨脹していく、当時の状況のもとで、「民族」そのものも、橋に言わせれば「相当融通の利く可變的のもの⁽⁶⁶⁸⁾」とならざるを得なかった。そのことが、橋が中国の民族意識を見失った要因であったのではないか。

なぜそうってしまったのか。橋樑は、眼前の現実が見えなかったのだろうか。いや、そうではない。当時の橋は、相当憂鬱な生活を送っていた。1939年1月、華北視察に出かけた橋は現状を見て、「神魂を震撼せしめた⁽⁶⁶⁹⁾」。彼は次の如く、自らの当惑と苦悶を吐露している。

私の疑問というのは大約次の如くである。元来私は日露役直後に大陸に渡ったまま殆んど帰国しなかったので、其間に起った日本民族の道德水準の驚くべき変化を見のがして居た。単にそればかりではない。昭和の浦島太郎の眼にうつるもの、政治に經濟に文化に、何一つとして失望の種ならざるはなかった。かくて十四年春から翌年冬に亙る満二ヶ年、全く途方に暮れつつ実に憂鬱な日を送ったものである。尤も徒らに滅入ってばかり居たわけではない。私が三十年来心の奥にあたためて来た日本民族の指導者的性格は果して永遠にほろびたのであろうか、若し然らずばどうして復活させるか……⁽⁶⁷⁰⁾

こうした言葉から考えて見れば、「日本は現に共同体だ」という発言は、恐らく苦悶の中の橋の執拗な感情の表れでしかなかった。しかし現実の「政治」と理想の大きな乖離に直面していた橋樑が、「社会」を自分の思想ないし精神における唯一の、最後の根拠と見なさざるを得なかったことも想像できよう。「社会」の立場から出發して、橋は日本当局に対して、最後の建言を出した。一つは、日本の帝国主義性格の改造の意見であり、もう一つは、中国農民を扶助して、東洋社会を建設する意見であった。前者は『職域奉公論』(1942年)となり、後者は『支那建設論』(1944年)となった⁽⁶⁷¹⁾。これらは、橋の最後の努力であったと言える。

おわりに

本章は、橋樑の東洋論の生成、性格及び展開の仕方を分析した。1920年代の日本アジア主義の風潮は、橋の東洋論の形成の背景であった。如何に東洋の伝統に基づいて、西洋と違う社会を創出できるか、ということが、橋の関心事となった。

孫文の「大アジア主義」講演は、橋に東洋論を検討する直接の契機を与えたのであるが、孫の弱小民族扶助、不平等関係打破などの主張は、橋に「空虚的」「形而上学的」なものとされ、拒否された。孫文が提示したのが、一種の「普遍価値」であったとすれば、橋が追い求めたのは、やはり「実体」としての東洋社会であった。この発想法は、「国家・民族・政治」の次元に対して「社会・民衆・生命」の次元に立つ橋の思想的エートスと深くかかわっている。橋は、「社会」の共通性を探し出して、それを根拠として、東洋社会を建設しようとした。

「政治」と「社会」は、橋の思想の中で、一種のダイナミックな関係を持っている。「政治」が順調に進んでいる時期においては、橋の「社会」に対する関心が減少するのに対して、「政治」が行き詰まった時期においては、橋の「社会」に対する関心が増幅していく。しかしどの時期にあっても、橋が自分の思想や精神の依拠としたのは、あくまでも「社会」であった。「政治」との乖離に突き当たると、橋は、「社会」の次元から「政治」問題を解決する可能性を探し出そうとした。また戦争の規模の拡大にしたがって、橋の「社会」に基づく東洋論は、「実体化」から「硬化」の一途を歩むようになった。

現実の巨大な乖離を見た橋樑は、最後の拠点たる「社会」を執拗に守りながら、最後の努力に乗り出して、人生の終焉を迎えようとした。

おわりに：「実体」としてのアジアは存在するか

1945年10月25日、橋樑は中国の奉天（今、瀋陽）で、64年の人生の幕を閉じた。筆者は彼の人生を、彼の生命思想がだんだんと社会改造の実践と結合したプロセスとして見たいのである。こうした見解を基準とすると、彼の生涯は、次のような三つの時期に分けられると考えられる。

第一時期は、橋の青少年から1924年前後に至るまでで、彼の生命思想の形成期であった。日清、日露両戦争に勝利を収めたことによって、日本は存続の危機から免れ、帝国主義国家のクラブに加入した。情勢の変化につれて、「国家・民族・政治」などの明治時代の課題はその自明性、価値性を失いつつあり、その一方社会において「社会・民衆・生命」に対する関心が次第に高まっていった。橋は、当時の思潮の二つの大きな側面、すなわち「ある」に関する研究と「べき」に対する構想について、自分なりに結合させ、独自の発想法を形成した。筆者はそれを「生命思想」と呼ぶ。彼によれば、生命の「個性」は本質的なものであり、最も貴重なものであった。生命は各自の「個性」に立脚し、外来の情報、理論、思想に対して検視、咀嚼、批判また吸収を行うべきだ、という考えであった。女性観

の革命は、橘の生命の「個性」、「普遍性」、「内面性」及び「感受性」に対する自覚を促した。辛亥革命の挫折は、橘の目線を政治エリートたちから民衆、社会組織の方へ転じさせ、彼の生命思想と社会改造の実践の結合までのプロセスを開始したのである。

第二時期は、1924年から1931年の「方向転換」までである。この時期において、橘は自らの中国論、中国革命論を系統的にまとめ、情熱をこめて国民革命を支持すると同時に、それを思想の試験場とし、自らの思想を検証しようとした。橘が想定した中国革命は、中国自身の歴史のロジックに沿って生まれるものであった。商人、地主、学生、労働者及びその他の同盟者は、一種の「革命同盟」を結成し、各自の機能を発揮しながら、同じ目的に向かって合流する、というプロセスであった。橘の中国革命論には、二つの問題が含まれている。一つは、橘が中国自身のロジックに執着し過ぎて、20世紀の帝国主義が中国および中国革命に与えた重大な影響を見失ったことであり、もう一つは、「部分から中心へ」という発想法の中で、革命党の役割が無視されたことである。この二つの問題は結局、橘の「方向転換」を引き起こした思想的な要因となったと考えられる。

第三時期は、1931年の橘僕の「方向転換」から彼の死に至るまでである。国民革命の挫折に直面していた橘は、「行動」の重要性に気づき、満洲国を拠点とし、「民族協和」、「農民自治」をスローガンとして、東洋改造論ないし世界改造論のような大きな計画を模索し始めた。彼は「社会」の共通性を以て、東洋諸民族の対立を解消し、「実体」たる東洋社会を創り出し、世界規模で職業及び民族の間の対立関係を解消しようとした。が、ますます悪化してきた政治情勢は、橘の「東洋論」を硬化させていった。それは「政治」と「社会」は、橘の思想の中で、一種のダイナミックな関係を持っている。「政治」が順調に進めば、橘が「社会」に対する関心が減少するのに対し、「政治」が行き詰まったら、橘が「社会」に対する関心が増幅していく、という関係であった。日中戦争、アジア・太平洋戦争が勃発し、現実の「政治」と理想との著しい乖離に直面していた橘は、「社会」を最後の思想的、精神的な拠点とし、最後の努力に乗り出した。日本敗戦の直後、彼は中国で人生の最期を迎えた。

「政治」は失敗したとしても、「社会」は依然として、変革の可能性を保持している。これが、辛亥革命の挫折の影響を受けて形成された橘僕の発想法であった。しかし20世紀の到来とともに、世界の各国、各地域の間で激しい連動関係が生まれ、大規模な政治、軍事闘争が発生した。橘の社会改造の思想と行動は、「社会」の可能性を示している一方、「社会」の限界性をも提示しているのではないか。

20世紀はもはや過ぎ去った。現在、橘僕を読むことに、どういう意味があるのか。それはおそらく、われわれにある種の「実体」としてのアジアの可能性を提示してくれることにあるだろう。竹内好は、「方法としてのアジア」において、自らのアジア観を述べた。彼から見れば、人間は等質なものであった。したがって、近代社会及びその文化価値も、世界において共通するものであった。ところが、「自由とか平等とかいう文化価値が、西欧か

ら浸透する過程で、タゴールが言うように武力を伴って——マルキシズムから言うならば帝国主義ですが、そういう植民地侵略によって支えられた。そのため価値自体が弱くなっている、ということに問題があると思う。たとえば平等と言っても、ヨーロッパの中では平等かもしれないが、アジアとかアフリカの植民地搾取を認めた上での平等であるならば、全人類的に貫徹しない⁽⁶⁷²⁾」、ということである。それゆえ、アジアの使命は、世界の範囲においてそれらの価値の普遍性を創出することにある。曰く、

西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す。東洋の力が西洋の生み出した普遍的な価値をより高めるために西洋を変革する。⁽⁶⁷³⁾

竹内が提示したアジアは、孫文の「大アジア主義」講演と同じく、「未来」と「行動」の次元におけるアジアであり、「実体」としてのアジアではなかった。竹内だけではなく、岡倉天心、鈴木大拙などの思想家たちは、「アジア」を論じる場合、あくまで精神、道徳、美意識また宗教意識などのレベルに止まらざるを得なかった。なぜかと言えば、近代以来の社会生活の各方面にわたり、西洋文化が全面的な勝利を収めたため、「実体」としてのアジアを語る余地はすでに喪失していたからではないか（まったくないという意味ではないが）。アジアは、「方法」としてしか語れない。この意味において、西洋の襲来に直面した竹内が主張したのは、一種の文化のゲリラ戦であり、敵を内に入らせて、そして包み直すという「行動」であったと言える。しかし問うべきは、その「行動」の根拠は何か。すなわち、何を以て西洋に抵抗するか、何を以て西洋を包み直してその価値をより高い次元において普遍化させるのか、という問題である。相手の（物質的及び精神的）武器を使い、相手に抵抗することが、力学関係の循環に陥らない根拠はどこにあるというか。日中両国のすべてが西洋文化の洗礼を受けたまま、アジア（東洋また共同社会）を「恒常的なもの」として考えるのはどういうものか、という細川嘉六の質問は、依然として現在のわれわれの目の前に横たわっているだろう。その意味で、橘樸が提示した戦略は、むしろ文化の塹壕戦であったと言えるだろう。彼の想定したのは、細部であっても、遅くても、日常の社会生活において東洋文化の塹壕を深く掘り、「実体」としてのアジアを構築するものであった。橘から見れば、政治の活動より、社会生活のほうが人間に深い影響を与え得る。社会生活が変われば、人間も変わる。そのため、社会生活を改造できれば、人間を根本から改造できるということになった。ここに、橘の野心がうかがえる。彼は最も根本的なレベルにおいて、東洋の劣勢を逆転させることを試みた。その意味での「改良主義」は、真の革命につながるものでもあり得るのではないか。しかし彼の戦略には、最小限度であっても、安定した秩序とそれを支える強制手段（権力あるいは暴力）が必要であった。これこ

それは、橘と日本ファシズムとの結合をもたらした根本的な要因であったと考えられる。既存権力との結合は、いわゆる「改良主義者」たちにとって不可避的な宿命であるかもしれないが、それは別の話である。

21世紀の今日、西洋の価値自身も行き詰まりを迎えているのではないか。その中で、アジアもまた単に「方法」として存在しているだけでいいのか。現在、世界経済の最も発展した地域であるアジアが、如何に各国、各民族、各地域の連帯を実現し得るか、如何にして人類に未来に関する新しい想像と可能性を提供し得るのか。こうした問題は重要であるが、それを考える前に、われわれはまず、「方法 - 実体」、「革命 - 伝統」の二元論の問題性を再検討し、「実体」としてのアジアは存在し得るかということを再思考する必要があるのではないか。ここで言った「実体」とは、本質的、固定したものでもなく、アジアの独自の歴史と経験に対する活用である。この意味において、農民、農村、農業社会を根拠とし、「実体」としてのアジアを模索しようとした橘の活動は、経験と教訓を今日の私たちに残してくれているのではないか。

最後に、本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた指導教員の丸川哲史教授、副指導教員本間次彦教授に心より感謝致します。また、アドバイス・助言をいただいた明治大学の山泉進教授、広部泉教授及び東京外国語大学の米谷匡史教授に、感謝の意を表します。

注

- (1) 橋川文三「最近の日本ファシズム論」参照。『歴史学研究』397号、青木書店、1973年6月。
- (2) じゅつじふさく、昔の人の説を伝えるだけで、むやみに自身の考えを作らないこと——『論語』「述而篇」。
- (3) 福井紳一「橋樸と左翼アジア主義—「東亜」の新体制を提起する広松渉の絶筆に寄せて—」、『出版人・広告人』、2017年10月。
- (4) 山本秀夫『橋樸』から引用、中央公論社、1977年7月。
- (5) 橋樸『手（四）』、『新天地』1928年10月号。pp. 80-81。
- (6) 前掲、山本秀夫『橋樸』、p. 13。
- (7) 同前。
- (8) 同前、p. 14。
- (9) 同前、p. 10。
- (10) 同前、1900年11月24日の『龍南雑誌』からの引用、p. 17。
- (11) 山本は、1968年の論文と1975年の論文において橋の思想を定位づけようとしたが、結果的に、「橋とはXX」から「XXは橋ではない」に至った。山本の言葉を見ればわかる。
「橋は、日本の伝統的心情的アジア主義者あるいは超国家主義者と本質的に区別されなければならない」、「かれに対して、たんに右翼とか左翼とか、あるいは超国家主義者とかのレッテルを貼って分類することは無意味であるのみでなく生産的でないといわねばならない」（「アジア民族解放の思想—橋樸研究序説—」、『季刊東亜』、p. 65とp. 76）。
「橋の思想態度にはナショナリズムとも、ウルトラ・ナショナリズムとも、またアジア主義とも重なるものがある」が、「彼をウルトラ・ナショナリズムやアジア主義のカテゴリで括ることは到底できない。そうかといってコミュニストではもちろんない」（「橋樸と東洋民族解放論」、『伝統と現代』第32号、p. 120）
- (12) 中西勝彦「橋樸の思想形成—渡航動機とのかかわりで—」、『大阪市立大学法学雑誌』22(1)、1975年9月、p. 30。
- (13) 同前、p. 32。
- (14) 同前、pp. 32-33。
- (15) 同前、p. 36
- (16) 同前。
- (17) 同前。
- (18) 山本秀夫「橋思想形成にかかわる新資料から」、山本秀夫編『甦る橋樸』、龍溪書社、1981年、P. 302-303。
- (19) 同前、p. 304。
- (20) 同前、p. 306。
- (21) 同前、p. 307。
- (22) そのほか、橋の「個」の意識について、松竹純の「橋樸の思想形成」（『暗河』第27巻、葺書房、1980年）が参考になれる。
- (23) 船山信一『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、こぶし書房、1999年、p. 16
- (24) 同前、pp. 48-49。
- (25) 飯田泰三『大正知識人の思想風景—「自我」と社会の発見とそのゆくえ』参照、法政大学出版局、2017年。
- (26) 日本の1990年代以降、「大正生命主義」を対象とする研究や論説は続々と現れてきた。

代表的なのは、鈴木貞美の『大正生命主義と現代』である。

(27) 同前、pp. 10-11。

(28) 同前、p. 88。

(29) 同前、p. 89。

(30) 竹山護夫「大正期の政治思想」、『大正期の政治思想と大杉栄』名著刊行会、2006年、p. 3。

(31) 同前、pp. 3-4。

(32) 同前、p. 4。

(33) **大正政変** 1912年12月、陸軍がその2個師団増設の要求が満足されなかったことをきっかけに、後任陸相を出さなかったため、第二次西園寺公望内閣が総辞職に追い込まれた後、内大臣桂太郎は天皇に詔勅を出させて組閣に着手し、軍備拡張を入閣の条件とした海軍大臣齋藤実を詔勅によって留任させ、組閣を完了した。こうした軍部の横暴と藩閥政治に、ジャーナリスト、交詢社系の実業家たちが憲政擁護会を組織、「閥族打破、憲政擁護」をめざす民衆運動を引き起こした。立憲政党的中心として、尾崎行雄と犬養毅がこの運動において活躍した。1913（大正二）年2月9日、憲政擁護第3大会が開かれ、翌10日に数万の民衆に包囲されるなかで、桂内閣は内閣総辞職を表明した。民衆の政治的成長のもとで、長州閥と政友会の提携した桂内閣の終焉は、「大正政変」と呼ばれる、大正デモクラシーを切り開く意味を持った大事件である。

(34) **シーメンス事件** 1914年に起こった日本海軍の収賄事件。日露戦争後策定された日本帝国国防方針に沿って、日本海軍は新たな大拡張を開始、巨額の負担を財政にかけたにもかかわらず、ドイツの軍需会社ジーメンスからの軍需品購入に際し、海軍当局は発注品代金の3.5%ないし15%をコミッションとして受け取っていた。この秘密は、ジーメンス会社の元東京支店員のベルリンでの裁判中に発覚し、世論の大きな反発を引き起こした。第三次桂内閣を継いだ海軍大将山本権兵衛内閣は、その事件のため、総辞職へ追い込まれた。

(35) 前掲、竹山護夫『大正期の政治思想と大杉栄』p. 5。

(36) 同前。

(37) 前掲、橋樸『手（四）』、p. 77。

(38) 同前。

(39) 国民教育研究所編『近代日本教育小史』、草土文化、1978年、p. 80。

(40) 同前、「資料⑥」p. 97。

(41) 前掲、橋樸『手（四）』、p. 77。

(42) 同前、p. 73。

(43) 同前、p. 81。

(44) 夏目漱石『三四郎』、角川書店、1992年、pp. 179-180。

(45) ちなみに、当時の橋樸も九州の青年であった。山本秀夫の『橋樸』によると、1900年7月に、橋は熊本第五高等学校の入学試験に参加した。当時の試験監督は、夏目漱石であった。遅刻した橋は、漱石に入場を拒絶され、怒ってすべての試験を放棄することになった。それは人生のエピソードである。漱石は『三四郎』を執筆中、このエピソードを思い出したかもしれないと考えられる。

(46) 徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』、民友社、1916年、p. 17。

(47) 前掲、橋樸『手（四）』、p. 80。

(48) 同前。

(49) **マンチュリー** 中国語で「満洲里」、中国内モンゴル自治区北東部のフルンブイル(呼倫貝爾)盟北西部の市。ロシアとの国境にあり、浜洲鉄道(ハルビン～マンチュリー)の終点である。中口間の国際列車が通じる、交通上の要地である。

(50) 橋樸『手（一）』、『新天地』、1928年7月号、pp. 87-88。

(51) 橋樸「見ざるの記」(一)、山田辰雄・家近亮子・浜口裕子編『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、慶応義塾大学出版会、2005年、pp. 543-544。彌次郎と彌次は橋樸のペンネーム——筆者。

-
- (52) 橋樸「垣間見の記」(三)、同前、p. 549。
- (53) 橋樸「垣間見の記」(八)、同前、p. 563。
- (54) 同前。
- (55) 橋樸「垣間見の記」(五)、同前、p. 554。
- (56) 宿南八重「橘さんの思い出(二)」、『楠』第4号、1975年2月、p. 33。.
- (57) 橋樸「垣間見の記」(八)、同前、p. 564。
- (58) 橋樸「垣間見の記」(十一)、同前、p. 569。
- (59) 1885年文部大臣の森有礼は、「女子教育の主眼は、良妻賢母となり、一家を整理し、子弟を教育できる力をつけることだ」と訓示した。
- (60) 石月静恵『近代日本女性史講義』、世界思想社、2007年、p. 32。
- (61) 米田佐代子『近代日本女性史 下』、新日本出版社、1972年、p. 139。
- (62) 前掲、石月静恵『近代日本女性史講義』、p. 88。
- (63) 与謝野晶子「そぞろごと」(1911年9月)、堀場清子編『『青鞥』女性解放論集』、岩波書店、1991年、p. 12。
- (64) 平塚らいてう「元始女性は太陽であった—『青鞥』発刊に際して—」(1911年9月)、同前、p. 14。
- (65) 宿南八重『八重日記』、前掲『甦る橋樸』、p. 275。
- (66) 橋樸「女性と社会的消費(六)」、1922年7月10日(夕刊)、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 56。
- (67) 橋樸「女性と社会的消費(四)」、1922年7月7日(夕刊)、同前、pp. 52-53。
- (68) 同前、p. 53。
- (69) 「資本主義の世界は資本家のものであると同時に男のものである。此世界にあつて労働者と女性とは永久に弱者である」——橋樸「女性と社会的消費(十)」、1922年7月14日(夕刊)、同前、p. 61。
- (70) 橋樸「女性と社会的消費(十一)」、1922年7月15日(夕刊)、同前、p. 63。
- (71) 同前、p. 64。
- (72) 同前。
- (73) 橋樸「女天下(中)」、1922年7月12日、同前、p. 57。
- (74) 同前。
- (75) 前掲「女性と社会的消費(十)」、p. 62。
- (76) 同前。
- (77) 同前。「芸術化」は、「街路樹を植えられ鎮守の杜が小公園になる。貯水池の堤防に四季折々の花が咲き乱れる。……人間味のある」活動を指している。
- (78) 橋樸は1943年の講演「孫文綱領の東洋的性格」で「私は……日露戦争の際に彼(孫文—筆者注)が同盟会といふものを東京に組織しその時代からのファンなので、孫文思想といふものにかかなり苦労したことがある」と述べた。1944年5月大陸新報社刊『支那建設論』所収。橋樸著作集刊行委員会編『橋樸著作集 第三巻 アジア・日本の道』、勁草書房、1966年、p. 149。
- (79) 1940年5月31日東京で挙行した座談会における橘の発言「私は、元来、ジャーナリスト出身で、中国問題にジャーナリストとしての半生を捧げたいつもりで、辛亥革命の当時、北京に入り込んだ」。1940年『中央公論』七月号所収。同前『著作集』3、p. 600。
- (80) 「橋樸略歴」、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 669。
- (81) 橋樸「時評数則 政治と民衆」、『月刊支那研究』、第一巻第一号、1924年12月、pp. 160-161。
- (82) 橋樸「時評数則 支那芝居」、『月刊支那研究』、同前、pp. 157-158。
- (83) 同前、p. 158。
- (84) 前掲、橋樸「時評数則 政治と民衆」、p. 161。
- (85) 同前。句読点が足りない印象があるが、原文(資料)をそのまま引用した。
- (86) 橋樸「済南病院病床日記 第五信」、前掲『甦る橋樸』、p. 250。

-
- (87) 橋樸「人生観成立の過程」、同前、p. 224。
- (88) 同前、p. 225。
- (89) 前掲、竹山護夫『大正期の政治思想と大杉栄』、p. 7。
- (90) 前掲、飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』、p. 130。
- (91) 橋樸「孫文の人生哲学」、1923年4月11日、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 387。
- (92) 竹内好編集・解説『現代日本思想大系9 アジア主義』、筑摩書房、1963年。
- (93) 竹内好「橋樸の日本思想史上の位置」、前掲『甦る橋樸』、p. 9。
- (94) 前掲、橋樸「人生観成立の過程」、p. 225。
- (95) 同前、pp. 225-226。
- (96) 同前、p. 226。
- (97) 同前、p. 227。
- (98) 同前、p. 231。
- (99) 同前、p. 228。
- (100) 同前。
- (101) 同前、p. 237。
- (102) 同前、p. 228。
- (103) 同前。
- (104) 同前、p. 229。
- (105) 同前、p. 238。
- (106) 同前、p. 240。
- (107) 同前、p. 226。
- (108) 同前、pp. 239-240。
- (109) **阿部次郎**（あべ じろう、1883-1959）は、東大哲学科卒業で、新カント派の T. リップスの影響を強く受けた。彼が1914年に書いた『三太郎の日記』は、内面的生活を吐露した創作で、当時の哲学青年の愛読書になり、大正昭和の青春のバイブルとして大きな反響を呼んでいた。1917年に昔の同級生岩波茂雄が「思潮」（現在の「思想」）雑誌を創刊した時、阿部次郎はその主幹となった。主著には『倫理学の根本問題』（1916）、『美学』（1917）、『人格主義』（1922）などがある。
- (110) **土田杏村**（つちだ きょうそん、1891-1934）は京都帝国大学で西田幾多郎に師事、大学院在学中に雑誌『文化』を創刊し、社会主義と理想主義の結合を目ざし、社会、教育、文学、芸術など多方面にわたる評論活動を展開し、文化主義を主張していた。マルクス主義批判の立場をとり、河上肇と論争した。昭和になると、国家主義に傾いた。主著には『文化主義原論』（1921）などがある。
- (111) 前掲、「八重日記」、p. 276。
- (112) 阿部次郎『人格主義』、岩波書店、1922年6月、p. 56。
- (113) 土田杏村『文化主義原論』、内外出版株式会社、1921年5月、p. 54。
- (114) 前掲、阿部次郎『人格主義』、p. 37。
- (115) 前掲、土田杏村『文化主義原論』、p. 68。
- (116) 同前、p. 69。
- (117) 同前、p. 71。
- (118) 前掲、阿部次郎『人格主義』、p. 3。
- (119) 同前、p. 29。
- (120) 同前、p. 42。
- (121) 同前、p. 404。
- (122) 同前、p. 57。
- (123) 同前、p. 351。
- (124) 前掲、土田杏村『文化主義原論』、p. 101。

(125) 同前、pp. 150-151。

(126) 橋樑「支那はどうなるか—内藤虎次郎氏の新支那論を読む—」、『月刊支那研究』第一卷第三号、1925年2月、p. 444。

(127) 橋樑「女性と社会的消費（九）」、1922年7月13日（夕刊）。前掲『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 60。

(128) 橋樑「私の元旦（上）」、1923年1月5日、同前、p. 155。

(129) 橋樑「指蔓外道 第一幕」、1922年11月27日、同前、p. 142。

(130) 橋樑「指蔓外道 …第一幕昨紙のつづき…」、1922年11月28日、同前、p. 144。

(131) 橋樑「指蔓外道 第三幕」、1922年11月30日、同前、p. 152。

(132) 同前、p. 152。

(133) 同前、p. 153。

(134) 同前。

(135) **国民革命** 狭義には、国民革命とは1924年から1927年にかけて、中国国民党と中国共産党を中心とした、帝国主義反対、軍閥打倒を目指す一連の農民運動、労働者運動及び北伐戦争を指している。広義には、国民革命は1919年の五・四運動に源を発するである。

1911年の辛亥革命は、中国の皇帝制度を打ち倒して名義上の「共和制」を樹立したのであるが、共和国の理念は、民衆の心に根を下ろさず、社会において根本的な変革を引き起こさなかった。魯迅の「阿Q正伝」（1921）は、辛亥革命の失敗に対する反省から出発し、民衆の無関心が革命の失敗を招くことを物語っている。

第一次世界大戦の時期で、西洋列強が戦争に没頭したため、中国の民族工業が一定の発展を遂げたにしたがって、中国のナショナリズムと労働者の勢力はともに成長していく。そして1915年の日本「対華二十一か条」事件と、1919年のパリ講和会議において山東問題をめぐって日中の摩擦は、直接的な誘因になり、1919年5月4日に、激憤した学生のデモ隊が当時の交通総長曹汝霖宅を襲撃し放火した事件をきっかけとして、中国民衆は、学生、知識人、商人及び労働者を含めて広汎的で全国的規模の反帝愛国運動を起し始めたのである。この運動が中国のナショナリズムと民衆の力を示している一方、1917年に勝利を収めた「十月革命」の消息がその運動を通じて中国に吹込み、社会主義思想やレーニズムの路線は中国共産党の成立と、中国国民党の改組に多大な影響を及ぼした。こうして国共両党が指導した、帝国主義反対、軍閥打倒のスローガンを掲げていた、農民、労働者を中心とする革命同一戦線を基盤とする国民革命は、1924年1月の中国国民党第一回全国代表大会をメルクマールとして開始したのである。労働運動の高揚、農民運動の拡大のなかで、1925年の「五・三〇事件」と上海のゼネストが起り、26年から始る北伐の進行過程で国民革命軍は労農大衆の強力な支援のもとに破竹の勢いで軍閥を撃破し続けたが、27年4月12日蒋介石の上海クーデターによって統一戦線は崩壊しはじめ、7月15日の武漢政府の反共決定によって国民革命は挫折した。

以上の議論は、野沢豊「中国の国民革命についての序論的考察」（野沢豊編『中国国民革命史の研究』所収、青木書店、1974年5月）を参考にした。

(136) 革命前、1911年6月の文章「清国の立憲政治」の中で、内藤湖南は清朝の立憲政治について、「輿論を恐れると云う風習」、「黄宗羲の作った「明夷待訪録」の民主思想」及び中国の「習慣たる平等主義」という三つの基礎を提示し、中国将来の共和政治の実現に対して楽観的態度を示している。——内藤湖南「清国の立憲政治」参照、『内藤湖南全集』第五卷、筑摩書房、1972年。

(137) 内藤湖南「清朝衰亡論」、同前、p. 257。

(138) 内藤湖南「支那時局と新旧思想」、『内藤湖南全集』第四卷、筑摩書房、1972年、p. 490。

(139) 内藤湖南「支那論」、前掲『内藤湖南全集』第五卷、p. 296。「都統政治」とは、列国が中国に介入した時、協議機関を設けて、各国の軍隊が中国において臨時的な軍事統治を行うことである。1900年義和団事件の時、八か国連合軍が天津を占領した後、「都統衙門」（暫行管理津郡城廂内外地方事務都統衙門）という統治機構を設立した。各国の軍事将官

はすべて「都統」と呼ばれている。

(140) 「橋樑略歴」、前掲『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 669。

(141) **辛亥革命の「失敗」** 久保田文次の研究によると、辛亥革命に対する否定的意見は、主に革命が「大きな社会経済的変革をともわなかったこと、旧支配階級（郷紳、エリート、地主制、官僚、軍人等）が打倒されず、権力を維持したこと、革命がブルジョアジー（資本家、商人の意味における）の指導のもとでなされなかった」ことを論拠としている。久保田は、辛亥革命を簡単に否定すべきでなく、むしろそれを「その後続く長い革命の出発点で」と捉えるべきだと主張している。（久保田文次「世界史における辛亥革命」、『孫文・辛亥革命と日本人』、汲古書院、2011年）

さらに、坂元ひろ子が提示した、「辛亥革命期の「政治の季節」から、多角的に多様な方向性を示しつつ、もうひとつの「政治の季節」を迎えながら、いわば国民—共和国を体現するための社会・精神文化の「練習」をした時代をここまでみとどけたことになる」という、辛亥革命からの二十年間に対する積極的な評価も参照されたい。（坂元ひろ子「解説」、野村浩一、近藤邦康、並木頼寿、坂元ひろ子、砂山幸雄、村田雄二郎編『新編原典中国近代思想史4 世界大戦と国民形成』、岩波書店、2010年）

(142) 橋樑「東洋の社会構成と日華の将来」、『中央公論』1940年7月号所載、前掲『著作集』3、pp. 600-601。

(143) 同前、p. 601

(144) 「時評数則」、『月刊支那研究』第一巻第一号、1924年12月1日、p. 161。

(145) 第一章を参考されたい。

(146) 橋樑「支那統一論（十九）」、1922年5月27日、前掲『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 39。

(147) 橋樑「支那統一論（一〇）」、1922年5月17日、同前、p. 29。

(148) 「訳者のあとがき」、アーサー・H・スミス（石井宗皓、岩崎菜子訳）『中国人的性格』（Chinese Characteristics, 1894）、中央公論新社、2015年、p. 431。

(149) 同前、「序章」、p. 11。

(150) 同前、p. 15。

(151) 前掲「橋樑略歴」、『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 669。

(152) 橋樑「支那を識る途」、『月刊支那研究』第一巻第一号、1924年12月、p. 13。

(153) 前掲、アーサー・スミス『中国人的性格』、p. 357。

(154) 同前、p. 353。

(155) 同前、p. 373。

(156) 前掲、「支那を識る途」。p. 7。

(157) 同前、pp. 9-10。

(158) 同前、p. 13。

(159) 同前、p. 14。

(160) 同前、p. 17。

(161) 橋樑「通俗道教の経典（上）——太上感應篇解説」を参照、『月刊支那研究』第一巻第五号、1925年4月。

(162) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 231。

(163) 橋樑『職域奉公論』、日本評論社、1942年、p. 1。

(164) 前掲、橋樑「支那を識る途」、p. 18。また、橋は中国児童の心理を研究する際、「日本人の支那を知りたいと云う希望は一年毎に高まって来る様だが、日本人が支那人を知る為めの第一の手段は先ず支那人の性情及習慣を理解することにあると思う。即ち所謂支那人気質を明にすることが先決問題である。此の点から見て支那の児童心理を実験的に観察し得る便宜を持つものが、吾々の同胞の中に多く存在することは甚だ心強い訳である」と述べている。——「支那児童心理の研究」、『月刊支那研究』第一巻第四号、1925年3月、p. 40。

(165) 橋樑は「墨子の宗教思想（下）」で、墨子の貢献とそれが将来の改革に寄与し得る可

能性を展望し、次のように述べている。「神の愛及厚生の性質を高調したと宿命観を否定したことは、彼の民族に対する偉大なる貢献と言わねばならぬ。尤も此偉大なる貢献も過去に於ては殆ど全く葬られて居たのであるが、将来に於ては彼等の民族宗教たる道教の改革が、二千年前に為された賢者の示唆から必ず一道の光明を授けられるであろうと思う」——「墨子の宗教思想（下）」、『月刊支那研究』第二巻第二号、支那研究会、1925年7月、p. 103。

(166) 橋樸「聊齋研究（五）」、1922年9月7日、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 70。

(167) 橋樸「女神崇拜（一）」、1922年11月2日、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 118。

(168) 同前。

(169) 橋樸「通俗道教の経典（上）——太上感應篇解説」、『月刊支那研究』第一巻第五号、1925年4月、p. 87。

(170) 橋樸「政治革命と社会革命（上）」、1923年3月10日（夕刊）、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 279。

(171) 橋樸「辛亥革命と癸亥革命」、1923年2月24日、同前、p. 228。

(172) 同前、「辛亥革命と癸亥革命」参照。

(173) 前掲、橋樸「政治革命と社会革命（上）」、p. 279。

(174) 前掲、橋樸「墨子の宗教思想（上）」、p. 69。

(175) 同前、p. 70。

(176) 橋樸「英雄か民衆か」、1923年3月3日、前掲、『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 254。

(177) 同前。

(178) 同前、p. 255。

(179) 橋樸「支那はどうなるか——内藤虎次郎氏の『新支那論』を読む」、『月刊支那研究』第一巻第三号、1925年2月、『支那思想研究』所収、日本評論社、1936年、p. 388。

(180) 「bureaucracy 官僚（制度・政治・主義）」、レイモンド・ウィリアムズ（椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳）『完訳 キーワード辞典』、平凡社、2011、pp. 74-76。

(181) 橋樸「官僚の社会的意義」、『月刊支那研究』第一巻第一号、1924年12月、『支那社会研究』所収、日本評論社、1936年、p. 442。

(182) 同前、p. 430。

(183) 橋樸「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」、『月刊支那研究』第一巻第一号、1924年12月、p. 36。

(184) 同前、pp. 36-37。

(185) 同前、p. 34。

(186) 同前、p. 53。

(187) 同前、p. 59。

(188) 同前。

(189) 橋樸「官僚生活の営業性」、『月刊支那研究』、第一巻第五号、1925年4月、p. 83。

(190) 前掲、橋樸「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」、p. 48。

(191) 同前。

(192) 前掲、内藤湖南『支那論』、p. 313。

(193) 前掲、橋樸「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」、p. 49。

(194) 同前、p. 46。

(195) 橋樸「支那農村の階級構成」、『満蒙』第九年第四号、1928年4月、前掲『支那社会研究』、p. 29。

(196) 前掲、「官僚の社会的意義」、p. 440。

(197) 橋樸は「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」（1924年12月）で、湖南の説を引用した。つまり「単に明代若くば清朝以後を称して近世と云うのは、普通の

素人考えであって、若し歴史上の見地から、近世と云うものに内容あり、意義あるものとして考えると云うことになる、更に遡って、唐の中頃から、五代、北宋の時に及ぶまで、即ち今より一千百年前頃より八百年前頃までの間に、此の近世紀（ママ）と云うものが漸々纏って来たと見る方が穏当である」。橋は、「政治史としては正に内藤氏の説に従うべきであろう」と自分の賛意を表明している。前掲、「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」、p. 46。

(198) 前掲、内藤湖南『支那論』、p. 310。 .

(199) 同前、p. 313。

(200) 同前、p. 316。

(201) 同前、p. 325。

(202) 同前、p. 327。

(203) 同前、p. 311。

(204) 同前。

(205) 同前、p. 314。

(206) 同前、p. 315。

(207) 同前、p. 326。

(208) 内藤湖南『新支那論』、『内藤湖南全集』第五卷、筑摩書房、1972年、p. 502。

(209) 湖南の場合での「政客」は、知県（王朝行政システムの末端たる県を管理する官僚）をはじめとして、原籍を離れて各地で転任し続ける官僚たちを指している。それらの官僚は、詩文を主な内容とする科举制度を通じて当選したこと、就任期間が短すぎることなどの原因のため、県の実務さえ知らず、ただ自分の名声の向上及び昇進を目ざしていたのである。『支那論』参照。

(210) 前掲、橋樸「官僚生活の営業性」、pp. 60-61。

(211) 橋樸「支那家族制度の破綻」、『我等』第九巻第一号、1927年1月、前掲『支那社会研究』、p. 547。

(212) 同前、p. 548

(213) 同前。

(214) 同前、p. 549。

(215) 同前。

(216) 同前。

(217) 同前、pp. 549-550。

(218) 同前、p. 552。

(219) 橋樸「通俗道教と民族道德との関係（一）」、『月刊支那研究』第二巻第二号、支那研究会、1925年7月、p. 7。

(220) 同前。

(221) 橋樸「支那の村落及家族組織 官場現形記評釈 其二」、『月刊支那研究』第一巻第二号、1925年1月、p. 40。

(222) 前掲、橋樸「通俗道教と民族道德との関係（一）」、p. 23。

(223) 前掲、橋樸「支那の村落及家族組織 官場現形記評釈 其二」、p. 42。

(224) 同前、p. 44。

(225) 前掲、橋樸「通俗道教と民族道德との関係（一）」、p. 11。

(226) 同前、p. 21。

(227) 橋樸「永久飢饉論」、『上海日報』、1930年2月、前掲『支那社会研究』、p. 66。

(228) 同前、pp. 78-79。

(229) 同前、pp. 79-80。

(230) 前掲、橋樸「支那家族制度の破綻」、p. 559。

(231) 前掲、橋樸「支那の村落及家族組織 官場現形記評釈 其二」、p. 33。

(232) 前掲、橋樸「永久飢饉論」、p. 84。

(233) 同前、p. 80。

-
- (234) 橋樸「支那農村の人口抱擁力」、『満蒙』1926年7月、前掲『支那社会研究』、p. 123。
- (235) 橋樸「旧支那社会に於ける資本家と地主」、『満鉄支那月誌』、1930年2月、同前、p. 19。
- (236) 橋樸「北満洲農村の充実過程」、『満蒙』第七年第七十六冊、同前、p. 142。
- (237) 同前、p. 145。
- (238) 塚本元『中国における国家建設の試み—湖南1919~1921年—』、東京大学出版会、1994年、p. 90。
- (239) 同前、p. 98。
- (240) 同前、p. 122。
- (241) 同前、p. 145。
- (242) 同前、p. 153。
- (243) 前掲、橋樸「永久飢饉論」、p. 83。
- (244) 斎藤修『プロト工業化の時代——西欧と日本の比較史』、岩波書店、2013年、p. 49。
- (245) 前掲、橋樸「旧支那社会に於ける資本家と地主」、p. 6。
- (246) 前掲、橋樸「支那農村の階級構成」、p. 33。
- (247) 前掲、橋樸「旧支那社会に於ける資本家と地主」、p. 3。
- (248) 同前、p. 5。
- (249) マルクス「経済学批判」序言、『マルクス・エンゲルス全集』第13巻、人民出版社（中国）、1973年、p. 9。
- (250) マルクス「インドにおけるイギリスの支配」、『マルクス・エンゲルス全集』第28巻、人民出版社（中国）、1973年、pp. 761-764。
- (251) 趙一紅「マルクスの『アジアの生産様式』理論と東洋の社会構造」（《马克思的“亚细亚生产方式”理论与东方社会结构》）、『マルクス主義研究』、2002年第5期、pp. 56-57。
- (252) 同前、p. 57。
- (253) 同前。
- (254) 同前、p. 58。
- (255) 同前、p. 59。
- (256) 同前。
- (257) **国共合作の分裂** 「一九二六年、蒋介石を総司令とした北伐軍は進撃をつづけ、武漢三鎮を占領したが、東南揚子江をめざす蒋介石軍と、武漢に遷都し、国民党左派の汪兆銘を首席とする国民党本部、いわゆる武漢政府との間に対立が生じた。国共統一戦線のもとで不平等条約廃棄をさげぶ大衆は、漢口の英租界を実力で接收した。これが揚子江下流に、上海租界をはじめ、莫大な権益をもつ英国を硬化させた。南昌・上海・南京を陥れた蒋介石は、英米の外国勢力・国内財閥・大地主たちと妥協して、労働組合の弾圧にのり出した。労働大衆を重視してきた武漢政府も、これにモスコーからの指令もあって共産党員を国民党外に追放したため、第一次の国共統一戦線はここで崩壊し、それ以後、中国革命における農民の役割をおもんじて湖南の農民運動を指導した中国共産党の毛沢東らと、南京をはじめ都市による蒋介石の国民政府とのあいだに、一九三七年まで十年に及ぶ激しい内線がくりかえされることになる。」——貝塚茂樹『中国の歴史 下』、岩波書店、2000年、pp. 175-176。
- (258) 前掲、橋樸「支那農村の階級構成」、pp. 29-30。
- (259) 「中国共産党土地問題党綱草案」、中央檔案館編『中共中央文献選集』第三冊（1927）、中共中央党校出版社、1991年、p. 490。
- (260) 前掲、橋樸「支那農村の階級構成」、pp. 25-26。
- (261) 同前、p. 31。
- (262) 同前、p. 27。
- (263) 同前、pp. 27-28。
- (264) 同前、p. 29。
- (265) 同前。

- (266) 前掲、橋樸「官僚生活の営業性」、p. 71。
- (267) 同前、p. 85。
- (268) ピーター・ブルッカー（有元健、本橋哲也訳）『文化理論用語集カルチュラル・スタディーズ+』、新曜社、2008年、p. 36。
- (269) 「階級class」、レイモンド・ウィリアムズ（椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳）『完訳 キーワード辞典』参照、平凡社、2011年。
- (270) 同前、「bourgeois ブルジョア・中産階級・有産階級・市民階級」参照。
- (271) 橋樸「時評数則 商人と段祺瑞」、『月刊支那研究』第一巻第二号、1925年1月、p. 377。
- (272) 橋樸「支那統一論（六）」、1922年5月13日。前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 21。
- (273) **中国の「停滞性」** 中国の「停滞性」というものは、主に歴史発展段階論の立場から、中国が長期にわたって封建社会の段階に止まっており、資本主義社会へと発展しなかったことを語っているものである。そういう説は、ヘーゲル、マルクスまたアダム・スミスなどの思想家の中国に関する論説のなかでよく現れている。橋の友人尾崎秀実は、マルクスの「アジア的生産様式」を基礎としながら、林語堂（りんごどう、1895—1976、中国の文学者、言語学者）と稲葉岩吉（1876—1940、歴史学者、中国研究者）の観点を引用して、中国社会の停滞性の原因を、内的に「家族制度と村落制度」、外的に「周囲に支那社会を破壊、吸収するに足る強力な社会をもたなかった」ことに求めている。（尾崎秀実『現代支那論』参照、勁草書房、1964年10月）
- 橋も、中国ブルジョアの弱さの原因を中国発展の停滞性に帰したが、マルクス主義者の言った「アジア的生産様式」の理論に沿わなかった。橋によれば、中国はヨーロッパのように資本主義社会に入らなかった原因は、中国社会が農業を主位として工業を従位とすること、動力及び機械が進歩しなかったこと、そして政治的搾取の効果が経済的搾取の効果より遥かに優越していることという三点にまとめられる、ということである。（橋樸「旧支那社会に於ける資本家と地主」参照、1930年2月）一点目において、農業を主位とする原因に加えて、橋は中国の農業生産様式によってもたらされた土地の過小分割を提示した。二点目はとにかく、三点目は、官僚階級の支配ないし中国伝統の支配様式を指しているのではないか。もちろん、橋が最も注目していたのは、疑いなく官僚階級そのものであるが。
- (274) 橋樸「政治革命と社会革命（下）」、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 289。
- (275) 前掲、橋樸「支那統一論（一〇）」、p. 28。
- (276) 橋樸「支那統一論（十一）」、1922年5月18日、同前、p. 31。
- (277) 橋樸「支那統一論（十四）」、1922年5月21日、同前、p. 34。
- (278) 同前、p. 33。
- (279) 同前。
- (280) 橋樸「支那統一論（十六）」、1922年5月23日、同前、pp. 36-37。
- (281) 橋樸「支那統一論（十二）」、1922年5月19日、同前、p. 31。
- (282) 同前。
- (283) 同前、pp. 31-32。
- (284) 同前、p. 32。
- (285) 前掲、橋樸「支那統一論（十一）」、p. 30。
- (286) 前掲、橋樸「支那統一論（十二）」、p. 32。
- (287) 沈雨梧「第一次世界大戦時期的浙江民族工業」参照、『浙江師範大学学報：社会科学版』、1984年第4期。
- (288) 橋樸「商人と労働者」、1923年2月24日（夕刊）。前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 231。
- (289) 同前、p. 233。
- (290) 前掲、橋樸「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」、p. 20。

(291) **五・三〇運動** (1925年5月30日)「上海の在華坊(中国における日本資本の紡績工場)での賃上げストに際して工場側が中国人労働者を射殺し、これに抗議するデモ隊に対し租界警察が発砲して数十人の死傷者を出した事件に端を発する。この事件をきっかけに、租界回収、帝国主義打倒をスローガンとする抗議行動が全国の都市に広がった」——岸本美緒『中国の歴史』、筑摩書房、2015年、pp. 233-236。

(292) 橋樸「支那近時の民族運動及上海事件の思想的背景」、『月刊支那研究』第二巻第三号、支那研究会、1925年8月、pp. 128-129。

(293) 橋樸「孫文の赤化(一九)」、『京津日日新聞』、1924年1月-2月推定、山本秀夫編『橋樸と中国』、勁草書房、1990年、p. 306。

(294) 前掲、「時評数則 商人と段祺瑞」参照。

(295) 橋樸は「萬おぼえ帳・広東の市街戦」(『月刊支那研究』第一巻第三号、1925年2月)という評論の中で、中産階級の組織形態を分けて論じた。曰く、「中産者は都市及び村落を通じての存在であり、都市の中産者は大体に於て商会即ち商団に抱括されるのであるが、村落の中産者は別に郷団と云うものを組織して居る。而し商団及び郷団を総称する場合には保衛団と名付けられて居る。商団の組織者は主として商人及び其資本主であり、郷団の組織者は地主及び或る程度以上の自作農である」(p. 593)という。また、「英雄が階級か」(『月刊支那研究』第一巻第五号、1925年4月)においても、地主と郷団との関係が見られる。つまり、「保衛団は所謂保甲制度と違って純粹に人民の必要から起った組織であり、都市では商工業者が其の弟子及使用人を参加せしめ、農村では地主が中心と成って編成する。近頃の言葉では前者を商団と言ひ後者を郷団又は民団と名付け」る(p. 140)、ということである。

(296) 前掲、橋樸「通俗道教と民族道德との関係(一)」参照。

(297) 前掲、橋樸「商人と段祺瑞」、p. 178。

1920年代の広東、福建の農民運動は、共産党の指導下において飛躍的な発展を成し遂げたにもかかわらず、それ自身はあくまでも郷及び族という伝統的な単位として、従来の郷及び族の自衛の動機に基づくものであった。小さい郷或は族は、大きな郷或は族の圧迫に対抗するために、常に数多くの「小郷」また「小族」と連合する、という習慣がある。両者の闘争は「械闘」と呼ばれている。1920年代の広東、福建の農民運動は、共産党の「農民協会」によって組織されたものであった一方、中国の伝統たる郷族間の「械闘」のモデルに沿って行われるものでもあった。その問題について、蒲豊彦の「地域史のなかの広東農民運動」(狭間直樹編『中国国民革命の研究』、京都大学人文科学研究所、1992年)が参考になる。

(298) 前掲、橋樸「孫文の赤化(一九)」、p. 306。

(299) **郷紳** 退職した官僚或は「科挙(かきょ)」制度(中国の官吏登用試験制度の一種)を通じて「功名(こうみょう)」(官吏登用試験に合格したものに、中央政府が授ける特権身分)を獲得した、官僚の予備隊と呼ばれる人々である。彼らは、地方の実力者であると同時に、民衆と政府との仲介者でもある。その定義は、中国人の郷紳研究の代表作と見なされている張仲礼(1920-2015)の『中国紳士——19世紀の中国社会における、その作用に関する研究(The Chinese Gentry, Studies on Their Role in Nineteenth-Century Chinese Society)』(University of Washington Press, Seattle, Washinton, 1955)に見える。郷紳の定義については、王先明(1957~)の『近代紳士——ある封建階層の歴史的運命(近代紳士——一个封建階層的歷史命運)』(1997)と『變動時代の郷紳——郷紳と鄉村社会構造の変遷(變動時代的郷紳——郷紳与鄉村社会結構的变迁)』(2009)も参考になる。費孝通(1910-2005)は、『中国士紳——都市と鄉村の関係に関するエッセイ(China's Gentry, Essays in Rural-Urban Relations)』(1953)において、退職した官僚、官僚の家族、また教育を受けた地主さえも郷紳の一員だ、と認めている。この定義は、科挙制度に拘らず、社会における「勢力」そのものに着目している、と思われる。費孝通の定義は橋樸のそれに近いが、しかし橋樸は、郷紳を「非役官僚、其の家族及び挙人以上の学位又は所謂品官を有する者並びに其の**家族**」(「旧支那社会に於ける資本家と地主」、1930年2月)

と定義づけ、「教育を受けた地主」そのものを入れなかった。その定義は、中国の政治権力及び家族制度の作用に着眼したものであり、民衆自ら土地の所有者になった場合を別のものだとしているのではないか。

(300) 前掲、橋樸「支那農村の階級構成」、p. 36。

(301) 本稿第二章「橋樸の中国研究——官僚、家族及び農村——」、第一節「『社会』：中国研究の出発点」参照。

(302) 橋樸「支那人気質の階級別的考察」、『月刊支那研究』第二巻第一号、1925年6月、p. 39-40。

(303) 張仲礼著、李栄昌訳『中国紳士——关于其在十九世紀中国社会中作用的研究』、上海社会科学院出版社、2002年、p. 9。

(304) 王先明『近代紳士——一个封建階層的歴史命运』、天津人民出版社、1997年、p. 3。

(305) 王先明は、紳士階層を「封建時代の社会流動の交差点」と認めている。平民は科挙及びほかの方法を通じて一定の身分や功名を得て紳士になり得るが、官僚階層の一部も退職した後に、紳士になった。——同前、p. 40。

(306) 同前、pp. 6-10。

(307) 同前、p. 29。

(308) 前掲、張仲礼『中国紳士』、pp. 73-74。

(309) 前掲、王先明『近代紳士——一个封建階層的歴史命运』、pp. 65-68。

(310) 溝口雄三「辛亥革命の歴史的個性」、『中国思想のエッセンスⅡ 東往西来』、岩波書店、2011年、p. 48。

(311) 溝口雄三、池田知久、小島毅『中国思想史』、東京大学出版会、2007年9月、p. 195。

(312) 前掲、「辛亥革命の歴史的個性」注(22)、pp. 195-196。

(313) 前掲、橋樸「支那農村の階級構成」、p. 29。

(314) 同前。

(315) 前掲、橋樸「支那人気質の階級別的考察」、p. 22。

(316) 橋樸「士階級と軍閥」、1923年3月7日(夕刊)、前掲『橋樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 267。

(317) **統一戦線** 1921年コミンテルン第三回大会で初めて提起された、社会民主党の影響下の労働者階級の多数を獲得するために、社会民主主義との統一戦線を結ぶという、戦術的理論であった。その出現自身は、ロシア革命の経験、すなわち労働者と農民の階級同盟(労農同盟)を基礎としたポリシェビキ、メンシェビキ、左翼エスエルなどの共同闘争の経験と深く関わっていると見なされている。その内容は、特定の具体的な政治状況のなかで、政治支配にかかわる具体性のある基本的争点や課題を解決する目的で、諸階級、諸階層、諸党派が、それぞれの政治的要求の独自性を保持しながら、共同で行動する戦術または運動形態、ということである。

中国国民革命の場合では、帝国主義及びその手先たる軍閥の支配を打倒するために、労働者、農民、商人、学生など、社会の各階級、各勢力は、国民党と共産党の共同指導のもとで、革命同盟を結ぶことを指している。当時の共産党の総書記陳独秀は「造国論」(『嚮導』1922年9月10日)で、現状を鑑みて、列強支配下の半植民地中国を救うために、各階級の連合に基づく革命運動が唯一の道だ、と述べた。曰く、「中国の産業状況からみて、……どの階級も単独で国家を創造するほどに強大にはなれず、私有財産制度の下では資産階級が強大でなければ無産階級も当然強大でありえないから……プロレタリア革命の時期はいまだ熟せず、ただ両階級の連合した国民革命(National Revolution)の時期だけが熟している」、ということであった。——野沢豊「中国の国民革命についての序論的考察」(『中国国民革命史の研究』、1974年5月)参考。

さらに、野沢豊の「中国における統一戦線の形成過程」(『思想』447号、1964年3月)も参考になる。

(318) 「中国国民党第一次全国代表大会宣言」、1924年1月23日、『孫中山全集』第九巻、中華書局、1986年、p. 119。

- (319) 橋樸「大革命家の最後の努力——孫文の東洋文化観及日本観」、『月刊支那研究』第一卷第四号、1925年3月、p. 150。
- (320) 前掲、山本秀夫『橋樸』、p. 70。
- (321) 山田辰雄「橋樸の中国国民革命論」、前掲『橋樸と中国』、p. 75。
- (322) 1920年代の中国の反日運動に対する橋の態度に注目した、浜口裕子の文章「1920年代前半の中国における反日運動と日本」(『政治・経済・法学研究』Vol. 9 No. 1、2006年8月、pp. 32-43)も参考されたい。
- (323) 中山義弘「橋樸の中国認識と孫文思想理解——道教研究から孫文思想研究へ——」、『中国の歴史と経済』、東洋経済史学会、2000年、p. 67。
- (324) 橋樸「時評数則 政治と民衆」、『月刊支那研究』、第一卷第一号、1924年12月、p. 161。
- (325) 前掲、座談会「東洋の社会構成と日華の将来」、p. 601。
- (326) 同前、p. 602。
- (327) 唐木順三『現代史への試み』筑摩書房、1949年、前掲飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』、法政大学出版社、2017年、p. 129。
- (328) 前掲、飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』、p. 130。
- (329) 飯田泰三は大正知識人を世代別によって、四つの組に分けている。
1. 「先行世代」、1855年～1865年生まれ、明治二十年代で活躍した「老人世代」。代表的な人物には、井上哲次郎、陸羯南、穂積八束、三宅雪嶺、内村鑑三、新渡戸稻造、岡倉天心、徳富蘇峰、志賀重昂、山路愛山などがいる。
 2. 「橋渡し世代」、1867年～1876年生まれ、明治末期で活躍、「明治社会主義」の中心世代。代表的な人物には、夏目漱石、幸田露伴、田中王堂、正岡子規、北村透谷、徳富芦花、木下尚江、西田几多郎、宮崎滔天、国木田独步、幸徳秋水、高山樗牛、田山花袋、島崎藤村、岩野泡鳴、津田左右吉、美濃部达吉、福田徳三、長谷川如是閑、柳田国男、石川三四郎などがいる。
 3. 大正知識人の「中心世代」、1877年～1887年生まれた人。代表的な人物には、有島武郎、与謝野晶子、吉野作造、河上肇、永井和風、正宗白鳥、厨川白村、山川均、橋樸、岩波茂雄、生田長江、志賀直哉、高村光太郎、阿部次郎、北一輝、野村隅畔、白柳秀湖、大杉栄、田辺元、武者小路実篤、木下杢太郎、石川啄木、荻原朔太郎、大川周明などがいる。
 4. 「後継世代」、1887年～1897年に生れた人。代表的な人物には、荒畑寒村、折口信夫、小泉信三、和辻哲郎、中江丑吉、柳宗悦、土田杏村、室伏高信、芥川龍之介、佐野学、矢内原忠雄、徳田球一、福本和夫、蠟山正道、宮沢賢治、三木清、平野義太郎、山田盛太郎などがいる。
- 『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』、pp. 43-46。
- (330) 前掲、橋樸『職域奉公論』、p. 1。
- (331) 前掲、橋樸「人生観成立の過程」、p. 225。
- (332) 竹山護夫「日本ファシズムの文化史的背景」、『近代日本の文化とファシズム』、名著刊行会、2009年、p. 115。
- (333) 同前、p. 121。
- (334) 同前、p. 123。
- (335) 同前、p. 124。
- (336) 同前、p. 125。
- (337) **大同思想** 孔子が描いたといわれる理想世界の構想。漢代の『礼記・礼運』の描写によると「大道が行われていた時代には、天下全体を公とし、賢人と能力のある者を挙用し、信実を述べ親睦を進めていた。だから、人々は自分の親だけを親とすることはなく、自分の小だけの子とすることもなかった。…こういう社会を大同と言う」。大同とは、天理に基づき、人心が和合し、よく治まった、あらゆる差別のなくなった至公無私の平和な社会、

ということである。——溝口雄三、丸山松幸、池田知久編『中国思想文化事典』（東京大学出版会、2012年）参照。

橋樑は、大同思想の内容を「政道の倫理化、財富の社会化」とまとめている（「王道理論の展開—満洲国協和会に関する考察の五—」、『満洲評論』、1932年8月13日）。

(338) 橋樑「漢民族の性格と其の文化」、『満洲評論』19巻21号、22号連載、1940年11月23日、24日。1941年『興亜』1月号、第二巻第一号所載、『著作集』3所収、p.107。

(339) 同前、p.108。

(340) 同前。

(341) 橋樑「孫文思想の東洋的基礎」、『興亜』1943年9月号、第四巻第九号所載、前掲『著作集』3所収、p.168。

(342) 橋樑によれば、第一次社会革命は、春秋戦国であり、その特徴は、中央集権体制の樹立、官僚階級と中産階級の発生及び自由農民の出現であった。第二次社会革命は、唐末五代であり、貴族階級の滅亡、官僚階級が支配権を握り、社会階級としてその権威を全体社会に浸透させていくこと、荘園の崩壊とともに完全な自由農民が成立したことなどは、その時代の特徴をなしていると述べている。——前掲、橋樑「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」参照。

(343) 前掲、橋樑「孫文思想の東洋的基礎」、p.169。

(344) 前掲、橋樑「漢民族の性格と其の文化」、p.109。

(345) 家近亮子は、1924年12月の「支那革命史論稿」の中に橋の傾向を見出した（解説すると、「支那革命史論稿」において橋は、中国歴史の発展を三つの社会革命の過程として捉えた。彼によれば、太平天国や辛亥革命も、中国社会自身の発展の延長線にあるものでしかなかった…趙）。曰く、「橋は、初期の段階から中国革命の内部発展論を説き、「西力の東漸」、いわゆるウエスタン・インパクトと中国の近代の出発との因果関係を否定した。橋がそのような説を展開した背景には、彼の中国の歴史と社会に対する独自の理解と深い洞察とがあったのである。すなわち、橋は中国における歴史の継続性を未来にわたって予測したのである」、ということである。——家近亮子「橋樑の中国共産党批判」（『橋樑と中国』）、pp.239-240。

(346) **郭松齡**（かく しょうれい、1883~1925）奉天派の有力な軍人、張作霖の東北覇権に多大な貢献を捧げた人物である。1924年以来、郭は張作霖の戦争継続政策に対する不満を抱き、西北「国民軍」の首領たる馮玉祥との連絡を通じてソ連に親近感を持ち、日本をますます敵視するようになった。1925年11月に、張作霖に対する討伐を行い、12月に敗北し殺された。この事件は、当時満洲在住の日本人に大きな衝撃を与えた。

(347) 中西勝彦「中国国民革命の展開と橋樑（一）」、『大阪市立大学法学雑誌』30（1）、1983年、p.72。

(348) 「帝国主義と農民経済」（『満蒙』第九年第七号、1928年7月、『支那社会研究』所収）の中で、橋は軍閥と帝国主義が中国の受けた「絶大なる二重の圧迫」として捉えていたにもかかわらず、外国の大農場制の圧迫から中国の小農制農村を救うためには、「第一に軍閥支配なる呪うべき歴史的過程をやり過ごし、第二に保護関税を設けなくてはならない」

（p.54）というような順序にそってやるべきだ、と主張している。それはあくまで、「軍閥は主、帝国主義は従」という発想を離れていないことを示しているのではないか。

(349) 前掲、「中国国民党第一次全国代表大会宣言」、p.122。

(350) **郷団** 別名は団連。地主や郷紳が中心となって組織した郷村での自衛軍。

郷勇 地主、郷紳が中心となって組織した郷村自衛軍。本来の目的は郷土防衛だが、郷勇は郷土を離れて他地方での戦いにも動員された。とくに清代中期以降、正規軍が弱体化したため利用されることが多かった。——三省堂編修所編『世界史用語事典』（三省堂、2002年）、p.261。

(351) **曾国藩**（1811-1872）清末の政治家。湖南省で湘勇を組織して、太平天国鎮圧に功をあげた。その後要職を歴任して軍政を握り、要務運動初期の指導者としても活躍。

湘勇 別名湘軍。曾国藩が1853年に郷里の湖南省湘郷（しょうきょう）県で組織した郷

勇。同地出身の地主・官僚の子弟を幹部に、農民を兵とし、無力な正規軍にかわって太平天国鎮圧の中心となった。——同前『世界史用語事典』、p. 264。

(352) 内藤湖南「新支那論」、『内藤湖南全集』第五卷、筑摩書房、1972年、pp. 519-520。

(353) 前掲、橋樸「支那はどうか——内藤虎次郎氏の『新支那論』を読む」、p. 362。

(354) 橋樸の「地方分権主義」については、三輪幸子の文章が参考になる。三輪幸子は、橘の思想的エートスには、「地方主義的発想」があるとしていた。具体的には、「近代日本は、地方主義を排除し抑圧したところにおこったということが共通の了解点としてあり、この地方主義を起さねばならないという考えがある。この地方主義を定義すれば、国民国家と称される主権国家の国土内にありながら、一特定地方の住民が共通の歴史体験の記憶などを通じてその帰属意識を持ち、中央集権化・画一化に抵抗し、政治的な自主自立を追求し文化的独立性を維持発展させようとする」ということである。——三輪幸子「若い世代の見た橋樸像」、『楠』第3号、1975年、pp. 69-70。

(355) 前掲、橋樸「支那はどうか——内藤虎次郎氏の『新支那論』を読む」、p. 378。

(356) 同前、p. 381。

(357) 同前、p. 382。

(358) 前掲、橋樸「支那人気質の階級別的考察」、p. 24。

(359) 同前、pp. 31-35。

(360) 同前、pp. 42-43。

(361) 同前、p. 47。

(362) 同前、pp. 47-48。

(363) 岸本美緒「中国中間団体論の系譜」、『「帝国」日本の学知 第三巻東洋学の磁場』、岩波書店、2006年、p. 262。

(364) 同前、p. 266。

(365) 同前、pp. 266-267。

(366) 橋樸は「支那はどうか」の中で、内藤湖南の英雄崇拜思想を批判しながらも、英雄そのものの作用を全否定するわけにはいかなかった。ただ「英雄」は、「歴史の発展」にそってしかその役割を果さない。つまり「郷団自衛の思想なり組織なりが長い歴史の訓練を経て暗滋潜長し、それが十分に成熟したところを曾國藩のような不世出の偉人を得て彼が如き異常なる発展を遂げた」(p. 381)、ということであった。1923年3月10日の「社会革命と政治革命」のなかで、橋は「私共の見る所によると社会の歴史は進化の連続である。この長い連続の中から旧社会組織の解体及び新社会組織の発生の急速に行われた部分を選んでこれを切り取ればこの断片の全体を総称して「社会革命の過程」と呼ぶ事が出来よう」(p. 279)と述べたように、橋が認めた「歴史の発展」は具体的には、社会組織の変革ということである。社会組織の変革はすなわち社会革命であり、社会革命というものは多数人が参加した革命でなければならない。それゆえ、この革命において、「民衆が主であり英雄は従である」(「英雄か民衆か」、という認識になった。

(367) **商団事件** 中国の孫文研究者、近代広東社会経済研究者邱捷は、「商人」の視角で「商団事件」に対する再検討を行った結果、「所詮広州商団の発展及び強化は、辛亥革命後の軍閥混戦、国家分裂、治安混乱の局面が醸成したものであり、近代中国軍閥制度のもとでの産児であった。積極的な政府は、商団のような政府の統轄を受けず、大量の武装を持つ団体の存在を、長期にわたって容赦するわけにはいかない」という結論に到着した。(邱捷「廣州商団与商団事変——从商人団体角度的再探討」参照、『歴史研究』、2002年2月)

山田辰雄の研究では、孫文の軍隊と商団軍との衝突に、労農群衆が支えていた反帝国主義闘争の側面を見出した。彼は革命政府と商団との衝突のプロセスを詳しく述べたことがある。その一部を引用すれば、「一〇月一〇日、広州で双十節を祝う学生、労働者、農民のデモと商団軍が衝突したのである。このとき商団は、再び罷市をもって広東政府に対抗した。府側ではただちに孫文を会長とする革命委員会を組織し、十五日には商団を鎮圧した。鎮圧に投入された軍隊は、蒋介石の率いる黄埔学生軍、呉鉄城の率いる警衛軍、譚平山の率いる工団軍と農民自衛軍、ならびにその他の客軍からなっていた。ここで注目すべきは、

一〇日の衝突で工団軍と農民自衛軍が商団との戦争の最先端で戦っており、また党直轄の学生軍がはじめて実戦に参加し、商団から押収した武器によって教導団を組織した、ということであった。すなわち、広東政府の存立は、反帝国主義闘争において、党直轄の軍隊と大衆組織によって教導団を支えられていた」、ということであった。(山田辰雄『中国国民党左派の研究』、慶応通信、1980年。pp. 86-87)

(368) 孫文「為广州商团事件对外宣言」、1924年9月1日、『孫中山全集』第十一卷所収、中華書局、1986年、p. 1。

(369) 同前、p. 2。

(370) 孫文「告広東民衆書」、同前、p. 35。

(371) 同前、p. 36。

(372) 同前、p. 35。

(373) 前節、「一、橋樑の中産階級革命論——革命同盟の理論的構造」の1の(3)を参照されたい。

(374) 橋樑「孫文の赤化(十七)」、『京津日日新聞』、1924年1月-2月推定、前掲『橋樑と中国』所収、p. 303。

(375) 橋樑「孫文の赤化(十二)」、同前、p. 294-295。

(376) 橋樑「孫文の赤化(七)」、同前、p. 287。

(377) 「一、橋樑の中産階級革命論——革命同盟の理論的構造」の「1. ダイナミックな革命同盟」の「(5) 郷紳」参照。

(378) 橋樑「時評数則・武装的自治」、『月刊支那研究』第一巻第一号、1924年12月、p. 163。

(379) 前掲、橋樑「萬おぼえ帳・広東の市街戦」、p. 181。

(380) 広東政府は、十月中旬に起った市街戦に関する对外宣言において、商団の罪悪を「一、広州商団が無許可で莫大な武器の輸入を行ったこと、二、広州商団の中心人物なる陳廉伯は香港の英人を背景として広東政府に対して陰謀を企むだこと、三、彼は呉佩孚及び陳炯明と結託して広東政府の転覆を企てて居たこと」と指摘していた。一はともかく、橋は、二と三の批難に反駁を加えた。商団と帝国主義との関係について、橋は「香港の英人が孫文氏に対する反感や陳廉伯氏に対する友情から、後者に好意を寄せて居たことは事実であるが、併し香港の政庁と陳廉伯との間に果して広東政府の疑って居たような立ち入った関係が成立して居たとは容易に信じられない」と述べ、商団と軍閥の関係について、橋は「広州商団は第一に中産階級の自衛と云うことを根本精神とし、第二に広東人の広東と云うことを標榜するところの革命的団体である。第一の立場から見れば彼等は軍閥と両立することを許さないのである」と弁解している。(「広東の市街戦」)

(381) 同前、pp. 181-182。

(382) 山田辰雄は、橋の孫文批判を「(孫文の…趙)無原則的な軍閥との合従連衡にあった。……孫文の立場が他の軍閥と同じ地位に置かれている……別の面から見れば、孫文が民衆から遊離していることを意味した」(山田辰雄「橋樑と中国研究」、『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 636)とまとめているが、しかし「今日的観点に立てば、陳炯明のクーデター以後進展した国共合作の形成過程は、孫文が橋の言う「民衆」(商人、労働者、学生)へ接近する契機を含んでいた。それにもかかわらず橋はこのような状況を十分に評価しえず、その結果として孫文の運動に対して積極的評価ができなかった」(同前、pp. 637-638)、ということになった。

(383) 前掲、橋樑「支那革命史論稿(一)「乱世」に関する社会史的考察」、p. 72。

(384) 前掲、橋樑「辛亥革命と癸亥革命(下)」、p. 233。

(385) 注287参照。

(386) 前掲、橋樑「支那近時の民族運動及上海事件の思想的背景」、pp. 128-129。

(387) 前掲、橋樑「支那統一論(十一)」、p. 30。

(388) 前掲、山本秀夫「橋思想形成にかかわる新資料から」、pp. 304-307。

(389) 前掲、橋樑「辛亥革命と癸亥革命(下)」、p. 234。

- (390) 前掲、橋樸「女神崇拜（一）」、p. 116。
- (391) 前掲、橋樸「辛亥革命と癸亥革命（下）」、p. 234。
- (392) 橋樸「労働争議の思想的背景」参照、『月刊支那研究』第一巻第五号、1925年4月。
- (393) 同前、p. 186。
- (394) 前掲、橋樸「支那近時の民族運動及上海事件の思想的背景」、p. 118。
- (395) 橋樸「中国共産党の階級闘争観」、『新天地』、1926年8月、9月号、『中国革命史論』所収、日本評論社、1950年、pp. 45-46。
- (396) 同前、p. 47。
- (397) 同前、p. 48。
- (398) 「階級闘争には二つ以上の相対立する階級の存在を予想する。然るにシナには匪徒を覇者とするところの貧民と農村、及びギルド組織に倚存するところの中産者、武力に倚存するところの官僚階級とがあるに過ぎない。斯ような社会組織において何處に労資の階級闘争の発生する余地があるか」——橋樸「中国共産党の階級闘争観」、p. 64。
- (399) 橋の中国共産党批判は、家近亮子の研究「橋樸の中国共産党批判」（『橋樸と中国』）が参照になれる。家近亮子は、橋の用いた「階級」と「革命」という二つの言葉の意味を手がかりとして、橋の中国共産党に対する認識を三つの時期に分けて論じている。彼女が着目しているのは、橋の中国問題に関する見解が、彼の中国社会に対する深い理解と洞察によって培われた、中国の歴史的連続性に執着したところから生じた、ということである。それも橋の共産党批判の基調をなしている。
- (400) 同前、p. 60。
- (401) 橋樸「国共合作の理論的基礎」、1927年1月、『満蒙』第八年第一号所載、『中国革命史論』所収、p. 34。
- (402) 同前、p. 35。
- (403) 同前、p. 34。
- (404) 前掲、橋樸「支那はどうなるか——内藤虎次郎氏の『新支那論』を読む」、p. 408。
- (405) 「四・一二」クーデター 1927年4月12日に起った、蒋介石の軍隊が上海を舞台に多数の共産党分子を逮捕・虐殺し、また労働者糾察隊の武装を解除して労働運動に大弾圧を加え、国民革命の潮流を一挙に反共——共産党との決裂へと転換させるきっかけとなった武力行動である。——野村浩一『蒋介石と毛沢東 世界戦争のなかの革命』（岩波書店、1997年）参照。
- (406) 野村浩一『蒋介石と毛沢東 世界戦争のなかの革命』と、貝塚茂樹『中国の歴史（下）』（岩波書店、2000年）参照。
- (407) 橋樸「新軍閥の発生とその意義」、『満蒙』第八年第十一号、1927年11月、前掲『中国革命史論』所収、p. 164。
- (408) 橋樸「左翼国民党の方向転換」、『満蒙』第八年第七号、1927年7月、同前、p. 66。
- (409) 橋は汪兆銘の1927年6月3日の演説、「労働者及び農民は本党の最大基礎であるが、唯資本主義の下にあっては、我々はその他の階級の勢力を結合せざるを得ない。何となれば、我々の資本の力は薄弱であるからその集積を計るに非ざれば、帝国主義に対抗することが出来ない。我々の資本集積は資本を少数人の手に収める為でなく、分散せる資本を国家の力で統合することによって、帝国主義者の資本勢力と戦はんとするのである」を引用して、「孫文の晩年の思想及び方法を標準とする限り、汪氏の右の言は総て正しい」と評価した（「国民党の再分裂」参照、『中国革命史論』）。「小資産階級」の定義について、橋は1927年6月4日の汪兆銘の説明に賛同している。つまり「地主の全部と、買弁を除いた殆んどすべての商工業者とを包括するもの」、ということである。その立場からして、橋は今日の中国革命が、「小資産階級」と「地主の全部と、買弁を除いた殆んどすべての商工業者とを包括するもの」で、「民主主義的革命であって、共産主義的革命にあらざる」と判断した。——「左翼国民党の方向転換」（『中国革命史論』）参照。
- (410) 前掲、山田辰雄「橋樸と中国研究」、p. 645。
- (411) 張作霖 1875～1928。奉天軍閥の首領。1920年の安直戦争に参加して勢力を拡大し、

24年の第2次奉直戦争後、北京政府を支配した。北伐に敗れて奉天に向かう途中、奉天郊外で列車ごと関東軍に爆破され死亡した。——前掲、『世界史用語事典』、p. 335。

(412) 張学良 1901～2001。東北軍閥張作霖の長子。1928年父のあとを継ぎ東北地方の事件を握る。抗日に傾き、彼が南京国民政府の翼下に入り、北伐は完了する。のち西安事件を起こした。同前、p. 336。

(413) 前掲、橋樸「新軍閥の発生とその意義」、p. 180。

(414) 同前、p. 179。

(415) 「軍閥は官僚及び郷紳と共に同一社会階級に属し、従って大体においては同じ経済利害の上に立つのみならず、地方の郷紳社会は軍閥者流の揺籃であり、且つその社会的経済的根拠地である……斯ような関係にあるところから民衆革命——私の所謂社会革命——を完成させる為には、どうしても地方の農村及び小都市における郷紳の勢力を芟除しなくてはならない。郷紳の勢力の衰えない間は、軍閥の生命も亦決して終焉を告げるものでない。」——橋樸「北伐軍部内における軍閥的勢力」(『満蒙』第八年第十号、1927年10月、前掲『中国革命史論』所収、p. 147。

(416) 「前者(旧軍閥…趙)の経済基礎は郷紳階級即ち旧支配階級にあり、後者(新軍閥…趙)のそれは資産階級即ち新支配階級にある」——橋樸「国民党軍閥の解剖」、『新天地』第八卷第五号、1928年5月、同前、pp. 189-190。

(417) 同前、pp. 184-185。

(418) 橋樸「中国革命の本質」、『東亜』第一巻第一、第二号所載、1928年9月、10月、同前、p. 4。

(419) 同前、p. 3。

(420) 同前、pp. 9-10。

(421) 橋樸「蒋介石と馮玉祥」、『中央公論』、1928年11月、同前、p. 202。

(422) 同前、p. 215。

(423) 山本秀夫「三浦義臣と橋樸」、『楠』第4号、1975年5月、p. 51。

(424) 前掲、橋樸『職域奉公論』、p. 1。

(425) 増田渉はその『魯迅の印象』で魯迅の橋に対する評価を触れている。——孫江「橋樸と魯迅」参照、『読書』、三聯書店、2012年。

(426) 橋樸「私の方向転換」、『満洲評論』7・6、「創刊第三週年記念」、1934年8月11日、p. 32。

(427) 会見の時間は、山本秀夫の『橋樸』によれば、10月2日から10月9日に至る一週間に限定されているに対し、伊藤昭雄は「橋樸と満洲国協和会—「農民自治」と「民族協和会—」(『橋樸と中国』)において、直ちにそれを10月9日と確定した。曰く、「橋樸等は十月初めに奉天におもむき、九日に板垣・石原と会見した」(p. 163)、ということである。

(428) 前掲、「私の方向転換」、p. 33。

(429) 同前。

(430) 同前、p. 32。

(431) 前掲、山本秀夫『橋樸』、p. 193。

(432) 同前、p. 200。

(433) 山田辰雄「橋樸の中国国民革命論」(『法学研究』第56巻第3号、1983年3月。『橋樸と中国』所収)と「橋樸の中国軍閥論」(『法学研究』第68巻第5号、1995年5月)を参照されたい。

(434) 野村浩一「橋樸—アジア主義の彷徨—」、『近代日本の中国認識—アジアへの航跡』、研文出版、1981年、p. 271。

(435) 野村浩一「橋樸：アジア主義の彷徨」、『立教法学』第19号、立教大学、1980年12月25日、pp. 39-40。

(436) 同前、p. 42。

(437) 福井紳一「橋樸と満鉄調査部事件『左翼アジア主義』の生成」、『情況』2005年4月号、情況出版、p. 144。

-
- (438) 同前、p. 146。
- (439) **日比谷事件** 1905年9月5日に、ポーツマス条約が調印された日、東京市内で無賠償講和に反対する民衆は日比谷公園で集会を開き、周辺の警察隊との衝突を皮切りに、内部大臣官邸に放火と投石をくりかえしたのち、講和賛成の論陣を張っていた徳富蘇峰の国民新聞社に押しかけ、そこと、麴町、本郷、下谷、日本橋、京橋、小石川、牛込、深川、本所及び浅草などの交番で焼き打ちを行った事件である。10万に近い民衆は、大部分が下層市民からなったもので、無賠償講和に反対したのは、帝国主義的膨張をもとめるといふより、自分たちの生活のさきゆきを心配していたことであつた。——坂野潤治『大系 日本の歴史 13 近代日本の出発』、小学館、1989年、pp. 285-286。
- (440) 中西勝彦「橋樑の思想形成—渡航動機とのかかわりで」、『大阪市立大学法学雑誌』22(1)、1975年9月、p. 32。
- (441) 同前、pp. 32-33。
- (442) 同前、pp. 33-34。
- (443) **教科書疑獄事件** 1902年に発覚した、小学校の教科書の採用をめぐる発生した教科書会社と教科書採用担当者との間の贈収賄事件である。日本全国では、県知事、県書記官、師範学校長、県会議長、教科書会社社長など200人近くが検挙され、国民の国家に対する信頼はかなりの損傷を与えられたのである。
- (444) 前掲、中西勝彦「橋樑の思想形成—渡航動機とのかかわりで」。p. 36。
- (445) 同前、p. 39。
- (446) 同前、p. 48。
- (447) 中西勝彦「中国国民革命の展開と橋樑（二）」、『大阪市立大学法学雑誌』30(2)、大阪市立大学法学会、1984年、p. 202。
- (448) 同前、p. 205。
- (449) 同前、p. 212。
- (450) 同前。
- (451) 同前、p. 213。
- (452) 同前、p. 220。
- (453) 酒井哲哉「アナーキズム的想像力と国際秩序—橋樑の場合」、『近代日本の国際秩序論』、岩波書店、2007年、p. 163。
- (454) 同前、p. 164。
- (455) 同前、p. 165。
- (456) 同前、p. 173。
- (457) 同前、p. 175。
- (458) 同前、pp. 179-180。
- (459) 同前、p. 180。
- (460) 橋樑はその自伝『手』において、印度大統領になることが少年時代の夢であつたことを述べたが、18歳の時(1899年)、その夢が全く彼の「頭から影を潜めた」、転じて人生問題に対して懐疑し始めた、ということを書いてある。また彼の自己評価としての「第一に豪傑病、第二に反逆癖、第三に懐疑又は批判癖」が彼を支配し始めたのも、ちょうどその頃である。——前掲、橋樑「手（四）」参照。
- (461) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 227。
- (462) 前掲、レイモンド・ウィリアムズ(椎名美智・武田ちあき、越智博美・松井優子)『完訳 キーワード辞典』参照、pp. 265-271。
- (463) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 228。
- (464) 同前。
- (465) 前掲、酒井哲哉「アナーキズム的想像力と国際秩序—橋樑の場合」、pp. 181-182。
- (466) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 234。
- (467) 章永樂『旧邦新造 1911-1917』(第二版)参照、北京大学出版社、2016年。
- (468) 前掲、橋樑「時評数則 支那芝居」、p. 158。

(469) 第三章「橋樑と中国革命—革命連盟の理論的構造—」を参照されたい。

(470) 橋はかつて、「家族及宗族結社、村落自治体、会館、幫及公所（公会）、同業組合の聯合団体、総合ギルド、商会及其聯合体」など、中産階級の自治組織を中国統一の基礎とし、それに高く評価をあげた（「支那人気質の階級別的考察」）。が、革命の高潮期としての1927年に、農民運動の飛躍的な発展とともに、農村において「民団」（文武官憲及び土匪の侵略に対して農村を擁護する為の武装団体…橋）と無産者の「農民協会」（国民党は民団の中から無産者を引離して（作った…趙）新団体…橋）の間に分裂が起きた。当時の橋は、明らかに農民協会のほうに傾くようになった。

さらに彼は、「血縁」と「地縁」に基づく団結を「自然社会」と呼び、それを「幼稚なもの」とし、それが「利益社会」、すなわち「自我意識の発達した人々が団結に依って其の生活の安定及び改善を企図する場合に自然に組織される社会」に進化すべきだ、と認識している。つまり、「労働運動者達は意識すると否とに論なく斯かる幼稚な団結を破壊して、労働組合即ち純粋な利益社会を彼等に与えようと努力して居る」、という方向であった（1927年4月「支那人の利己心と国家観念」）。橋の場合では、革命党の勢力が伸張していた時期に、「中産階級」がかつての革命の中堅勢力から、革命党の組織、啓蒙を受ける対象となったのである。曰く、「支那の民衆は中産者と無産者から成り、無産者の一部は既に国民党の指導に依って国家思想を獲得し、中産者の子弟なる学生達も亦自発的に国家思想に醒め進んで其の宣伝者となることが出来たから、残るは支那民衆の中堅的勢力とも云うべき中産者殊に農村居住者の国家思想が、何人に依り如何にして与えられるかの問題である」（同前、p. 331）、ということになる。

(471) 橋樑は、国民党左派（汪兆銘を代表とする）の理論及び路線、すなわち軍閥帝国主義打倒を目指している、プチブルジョアを中心とした各階級の「統一戦線」に賛成しながらも、理論的指導者たる国民党左派の実践力の欠乏について、次のような厳しい批判を加えた。

左派の指導者たちが活動の自由を当へられた時代にさへ、専ら政治及び理論闘争に没頭し、彼等の強調する民衆運動としては、片手間的に学生団体の組織及び指導に携った位なもので、彼等の理論に照して最も重要なべき労農及び小市民に対しては、全然背を向けて居たと評しても決して過言ではない。これを如何なる圧迫が加っても、命掛けの地下運動を停止しない共産党首領達の態度に較べて、何と著しい相違ではあるまいか。（「左翼国民党の政治的立場」、『満蒙』1929年8月号、『中国革命史論』所収、p. 326）

こうして、国民党左派と比較した上、橋は共産党の「実践力」に、高い評価を与えた。にもかかわらず、共産党が1927年11月の「中国共産党土地問題党綱草案」に始まり、土地革命とゲリラ戦を以て農村でソビエト政権を建設することは、橋からみれば、「民主主義革命の範囲を乗越えて、社会主義革命の埒内へと進み入った」急進的行動であった。そして毛沢東、朱徳、彭湃らによって指導される「南嶺山麓の東西地帯」の暴動は、「無意味な反乱」になってしまう、というのが橋の見方である。（「中国共産党の退却」参照、『満蒙』、1928年9月、11月、12月、前掲『中国革命史論』所収）

したがって、理論に正しい国民党左派が実践力を持たず、実践力を持つ共産党が理論的に錯誤を犯した、ということは、満洲事変前の橋が持った、中国革命の担い手に対するイメージであった。

(472) 前掲、酒井哲哉「アナキズム的想像力と国際秩序—橋樑の場合」、p. 185。

(473) 「年譜」、『著作集』3、p. 728。

(474) 山室信一『キメラ—満洲国の肖像 増補版』、中公新書、2004年、pp. 85-91。

(475) 前掲、山本秀夫『橋樑』、p. 206。

(476) 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』参照、満蒙同胞援護会、1971年。

協和会の官製化に関しては、伊藤昭雄の「橋樑と満洲国協和会—「農民自治」と「民族

協和」一」（山本秀夫編『橋樑と中国』所収）を参照されたい。

- (477) 橋樑「新国家設計批判」、『満洲評論』1・14、1931年11月28日、p.5。
(478) 橋樑「王道の実践としての自治」、『満洲評論』1・15、1931年12月5日、p.6。
(479) 橋樑「回顧と展望——涙高かるべき昭和七年を迎えて」、『満洲評論』2・1、1932年1月2日、p.6。
(480) 橋樑「満洲新国家建国大綱私案」、『満洲評論』2・1、1932年1月2日、p.28。
(481) 同前。
(482) 同前。
(483) 同前、注4、p.30。
(484) 同前、p.31。
(485) 同前、注3、p.30。
(486) 同前、p.31。
(487) 同前、p.32。
(488) 同前。
(489) 同前。
(490) 同前、pp.32-33。
(491) 同前、p.33。
(492) 橋樑「独裁か民主か——蠟山教授の新国家論を読みみて——」、『満洲評論』2・8、1932年2月27日、p.6。
(493) 同前。

(494) **知識人** 哲学的・倫理的・美学的に重要な問題に関して、特定の利益を超えて語る権利を主張し、またそのように語ることを保証されている様々な知的・科学的・芸術的職業に携わる人々を指している。知識人にはこうした役割を与えるのは、そのような人々が持つ専門知識と、言説を生み出す理性や真理の権威である。つまり知識人とは、啓蒙的理性への信仰や近代が生み出したものの遺産相続者なのだが、知識人は同時にこの遺産相続の社会的・政治的影響に対する批判者でもある。——ピーター・ブルッカー（有元健・本橋哲也）『文化理論用語集』、新曜社、2008年、p.154。

もとより知識人に関する定義は様々にあり、概念を以て、生きている人を規定することもおかしいが、筆者は一応、以上の定義を参考しながら、「知識の進歩と整合性」に対する追求と「反省」に対する自覚という角度から、橋樑を知識人と認定しようとする。「知識の進歩と整合性」に対する追求は、「支那を識る途」という文章に現れる。当時、中国知識の豊富な所有者はよく「支那通」と呼ばれていたが、その呼称は世人の尊重の一面を持つが、軽侮の意味合いをも帯びている。橋は、世人が「支那通」を軽侮する原因について、「支那通」の頭が非科学的であること、彼らの持つ中国知識が「断片的」であることに求めている。それは明らかに橋の「知識」の進歩と整合性に対する追求を示したのである。

「反省」という概念は、1923年の文章「人生観成立の過程」に出ている。約言すると、橋が提示した「反省」は、一種の自己を客観し得る状態であった。その詳細に関する論説は、後の部分に譲ることにしよう。

- (495) 前掲、橋樑「支那を識る途」、p.18。
(496) 前掲、橋樑『職域奉公論』、p.5。
(497) 山本秀夫の『橋樑』と『甦る橋樑』の年譜を参照。
(498) 1966年4月25日、東京で開いた座談会「橋樑の思想をめぐって」（出席者：後藤文夫、市井三郎、山本秀夫、坂本徳松、大来佐武郎、判沢弘、小林英三郎、林緑、中下正治）で、坂本徳松は、中江丑吉のことを取り上げ、橋樑と比較したうえ、後者の思想の実証的性格を説明した。曰く、「中江さんが蔵書を京都大学に贈ったでしょう。それを見ましたが、ヘーゲルの『精神現象論』の原書への書込みなんか大変なものです。中江さんには、方法的に、ヘーゲル哲学の、つまり世界史の出来事をやや距離をおいてずっと見ているというようなことがある。これは感じですがね。それに比べると、橋さんの場合は、実証的かつ実行的なような感じがする。もうひとつ、その実証的な方法がある時期までは、在野

的な立場を生かそうとして、民衆に直接接触して行くというようなことがあった」、ということである。(前掲、『著作集』3、 p. 750)

(499) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 228。

(500) 同前、pp. 228-229。

(501) 辛亥革命後、政治エリート（北洋軍閥、国民党）及び康有為、梁啓超などのような知識人は、中国統合の方法をめぐって政治的、軍事的、理論的な闘争を繰返して行っていたが、中国は結果的に南北分裂、軍閥割拠という危機に陥った。この現実を凝視していた橋樑は、政治エリートと知識人に対する不信感を生じたと思像できる。

(502) 本論文第三章第一部分「橋樑の中産階級革命論—革命連盟の理論的構造」の1。(3)「商人、学生、労働者の『三角同盟』」を参照されたい。

(503) 橋樑「政治と『智識階級』」、『月刊支那研究』第一巻第二号、1925年1月1日。

p. 189。

(504) 同前、pp. 189-190。

(505) 前掲、橋樑「北伐軍部内における軍閥的勢力」、p. 146。

(506) 橋樑「新軍閥の発生とその意義」、『満蒙』第八年第十一号、1927年11月。同前、p. 164。

(507) 同前、p. 171。

(508) 同前。

(509) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 226。

(510) 同前、p. 228。

(511) 前掲、橋樑「女神崇拜（一）」、p. 116。

(512) 本論文第三章第二部分「中国革命の理想と現実」、2の(2)「橋樑の中国共産党批判」参照。

(513) 国民党左翼の理論を簡単にまとめると、第一に、現在の中国において、資本主義はまだ幼稚であり、階級分化も不十分であるゆえに、階級調和の可能性が存在する。第二に、中国の根本的矛盾は、階級矛盾ではなく、中華民族と帝国主義との矛盾にほかならず、そのために、階級調和による各階級の反帝統一戦線を結び付ける必要がある、というものであった。——陳公博「国民党所代表的は何」(1927)参照、李志毓「国民党“左派”的『小資産階級革命論』」、『長白学刊』、長白学刊雑誌社、2010年6月。

統一戦線理論が、形式的に橋樑の提示した「革命同盟論」とよく似ていることは、すでに第三章第一部分「橋樑の中産階級革命論——革命連盟の理論的構造」で述べた。中国共産党が1927年11月の「土地問題党綱草案」を転換点にして、農村で急進的な土地政策を推進していたことは、橋樑の場合では確かに「統一戦線理論」或は「革命連盟論」の範囲を出て、中国の「個性」を裏切った行動となった、と思われる。

(514) 民国史研究者李志毓は、国民党左派の失敗の原因を次のようにまとめている。「『左派』自身の行動は理論と乖離し、実践力がない。『革命評論』はある種の革命運動及び現政権に対する批判として、説得力はあるにもかかわらず、しかしあくまでも自分自身を『評論』に止まると位置づけたのである。特に当時の知識人の中に、民国初頭の道徳議論を貴び、政治實際を貶める流儀が流行っていた」——李志毓「1928年国民党内激進左派的『党治』理論」、『首都師範大学学報（社会科学版）·中国近現代史研究』、首都師範大学学報編集部、2011年。p22。

(515) 第三章第一部分、2の1の(B)「大正思潮と第一次世界大戦の衝撃」を参照されたい。

(516) 前掲、橋樑「人生観成立の過程」、p. 225。

(517) 第一章を参照されたい。

(518) 前掲、橋樑「北満洲農村の充実過程」、1936年6月。

(519) 第一次世界大戦において、イギリス、フランス、ドイツ各国が戦争に忙しかったから、中国に対する経済的侵略が弱まり、中国の工業の発展は、有利な条件を得た。この中国民族産業の「黄金時期」には、特に上海の商工業の発達が目立った。1920年代の上海において、上海総商会と上海各馬路商会連合会を代表としてのブルジョアジーは、量が増大する

とともに、政治勢力としての自覚も生み出した。彼らは、軍閥の搾取と戦争の破壊に不満を持ち、軍閥戦争の間隙について、上海市の自治を模索し始めた。(笠原十九司「江浙戦争と上海自治運動」参照、野沢豊編『中国国民革命史の研究』、青木書店、1974年)

北伐の進行にしたがって、共産党が指導した労働運動は上海で活発になり、軍閥孫伝芳から上海市の政権を奪取するために、ブルジョアたちとの協力のもとで、1926年から1927年3月にかけて、三回の総罷工を行った。1927年3月21日に起きた第三回総罷工の勢いで、22日に上海特別市臨時市政府は成立したが、蒋介石の軍隊が上海を占領し、4月12日の政変を起したことによって、速やかに失敗した。

(520) 前掲、橋樑「上海総罷工及び其の意義」、p. 424。

(521) 橋樑「支那の輿論」、前掲『支那思想研究』所収、p. 422。

(522) 前掲、橋樑「左翼国民党の方向転換」、p. 73。

(523) 同前、p. 66。

(524) 橋樑「革命失敗の二大因由」、『満蒙』第九年第一号、1928年1月、前掲『中国革命史論』所収、p. 227。

(525) 前掲、橋樑「新軍閥の発生とその意義」、p. 164。

(526) 同前、pp. 174-178。

(527) 「前者の経済基礎は郷紳階級即ち旧支配階級にあり、後者のそれは資産階級即ち新支配階級にある。」——前掲、橋樑「国民党軍閥の解剖」、pp. 189-190。

(528) 同前、p. 184。

(529) 前掲、橋樑「帝国主義と農民経済」、p. 60。

(530) 前掲、橋樑「中国革命の本質」、p. 4。

(531) 前掲、橋樑「支那近時の民族運動及上海事件の思想的背景」、p. 128。

(532) 前掲、橋樑「支那はどうか——内藤虎次郎氏の『新支那論』を読む」、p. 408。

(533) 前掲、橋樑「中国革命の本質」、p. 10。

(534) 前掲、橋樑「旧支那社会に於ける資本家と地主」、p. 2。

(535) 前掲、橋樑「永久飢饉論」、p. 99。

(536) 同前、p. 105。

(537) 橋樑「広東財閥論」参照、『支那研究』第八卷第七、八、九、十号、1931年7月、8月、9月、10月、前掲『支那社会研究』所収。

(538) 橋樑「満洲事変とファシズム」、『満洲評論』1・12、1931年11月14日、pp. 2-3。

(539) 同前、p. 3。

(540) 前掲、橋樑『職域奉公論』、pp. 1-2。

(541) 竹内好「日本のアジア主義」、丸川哲史、鈴木将久編『竹内好セレクション2——アジアへの/からのまなざし』、日本経済評論社、2006年、p. 259。

(542) 『日本史大事典』第一巻、平凡社、1995年、p. 114。

(543) **三・一運動** 1919年3月1日に始まった反日独立運動。運動はソウルなど主要都市で始まり、独立宣言が発表された大規模な街頭デモを展開した。日本は軍事力をもって弾圧し、死傷者2万3000人を出した。——前掲『世界史用語事典』、p. 332。

(544) **武断政治** 1910年代の日本の朝鮮支配の呼称。総督は現役大将から選ばれ、朝鮮の立法・司法・行政・軍事の権限を握っていた。憲兵・警察中心の軍事支配を柱として朝鮮人の言論・集会を禁止し、民族運動を弾圧するものであった。——同前。

(545) **文化政治** 三・一運動以降の日本による朝鮮統治政策。武断政治の行き詰まりにより、民族運動の分断・弱体化をはかるための政策である。会社令の廃止などの朝鮮人ブルジョア・地主の抱き込みと新聞・雑誌の規制緩和を行なったが、究極的には日本人への同化を目指すものであった。——同前。

(546) マーク・ピーティは『植民地——帝国50年の興亡』において、日本の植民地政策を三段階に分けて論じた。まとめると、第一段階において、植民地占領直後に、当該地域の人民の抵抗に遭い、日本は軍事力を使って抵抗の勢力を排除した。第二段階は、日本が植民地に確固とした軍事的政治的支配を確立した後、軍事的支配に大幅に手直しをして、

経済的開発と搾取へ関心を向け、現地に対して一定程度の政治的自由を与えた段階である。第三段階の1930年代に入ると、国内外情勢の緊張にともない、日本は軍事的利害を考慮したうえで、植民地において権威的支配を建立した。1920年代は、すなわち日本の植民地支配の第二段階であった。日本の鞏固たる支配はすでに確立された一方、過去の朝鮮総督府の硬化した統治が朝鮮民族の激しい抵抗に遭い、日本は国際世論の悪化と日朝間の長期的な関係に対して、政策の調整をせざるを得なかった。——マーク・ピーティ（浅野豊美）『植民地——帝国50年の興亡』参照、読売新聞社、1996年。

駒込武は『植民地帝国日本の文化統合』において、日本が朝鮮における支配のモデルを調整する要因について、「三・一独立運動の衝撃、第一次世界大戦後の帝国主義的世界の再編成の動向は、従来の中途半端な統合の方式が、支配の対立物としての「民族」の理念のもとでの結集力を高めこそすれ、支配の安定をもたらすものではない」と述べた（228頁）。その後の日本は、朝鮮における支配が、内地延長主義かもしくは自治主義かという選択肢に直面していた。——駒込武『植民地帝国日本の文化統合』参照、岩波書店、1997年。

(547) **二十一カ条事件** 1915年、日本は在華利益の拡大を目指して、ドイツの膠州の中国返還の代償として、当時の袁世凱政府に提出した膨大な要求であった。尤も第五号の第一条「（中国の）中央政府に政治財政及び軍事顧問として有力なる日本人を傭聘」すること、第三条「必要の地方における警察を日支合同としまたは……警察官庁に多数の日本人を傭聘」すること、第四条「日本より一定の数量（たとえば支那政府所要兵器の半数）以上の兵器の供給を仰ぎ、または……日支合弁の兵器工場廠を設立」すること、および華中・華南の鉄道敷設権、福建省に外資導入の際の日本の優先権をみとめるなどは、中国を日本の保護国ないし属国にしてしまうような過酷で尊大な代物である。それらの要求はもちろん、中国の驚きと憤激を買い、国際上において大きな悪名を日本に招致したのである。——江口圭一『大系 日本の歴史 14 二つの大戦』参照、小学館、1989年。

(548) **旅順、大連回収運動** 1898年3月27日、ロシアは「還遼干渉」の勢いを帯びながら、強いて清政府をして「旅大租地条約」に調印させ、戦略的に重要な地位にある旅順、大連をロシアに25年に渡って租借させた。1904年2月、日露戦争が勃発し、一年後にロシアが敗戦した。翌年、日露が「ポーツマス条約」を締結し、ロシアが旅順、大連は日本に譲渡されることになった。第一次世界大戦の時期、日本はヨーロッパ列強が戦争を交える機会を利用し、中国を独占するために、1915年1月に袁世凱政府に所謂「二十一ヶ条」要求を提示した。そのなかには、旅順、大連及び南満、安奉両鉄道の租借期限を99年延長する要求もある。袁世凱は5月25日に日本の要求を余儀なく受諾した。第一次世界大戦が終わった後、欧米列強は再び勢力範囲を分割するため、1921年11月12日にワシントンにおいて九ヶ国で会議を開いた。翌年の2月6日に「九ヶ国条約」が調印され、各国が中国の主権を尊重し、門戸開放、機会均等の原則を実行することが規定された。それによって、日本は在中での権益が抑制され、中国の山東にある大部の権益を帰還させられることになった。1923年、「九ヶ国条約」の影響を受けて、「旅大租地条約」に規定される租借期間が満了したため、1923年3月10日に、北京政府は日本に対して、「二十一ヶ条」の全廃と旅順と大連を回収する要求を打ち出した。3月20日、中華留日学生総会が東京で集会を開き、4000名の留学生が宣言を発表、「旅大を我に還せ」と叫びながら、デモを行った。5月9日、旅大回収運動はクライマックスに至り、北京、天津、済南、長沙、吉林、ハルビンなどの都市では、反日集会とデモが発生した。——同前。

(549) 古屋哲夫「アジア主義とその周辺」、古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』、緑蔭書房、1996年、p. 88。

(550) 第三章、第1節、第2項のB「大正思潮と第一次世界大戦の衝撃」を参照されたい。

(551) 廣部泉『人種戦争という寓話——黄禍論とアジア主義』、名古屋大学出版会、2017年、p. 2。

(552) **「排日移民法」** 二〇世紀初め日本移民を制限したアメリカの一連の法律。とくに一九二四年に成立した割当移民法を指す……この法律によって、日本人は帰化不能外国人ということで入国はいっさい禁止された。日本移民の排斥は、一九世紀末日本移民がアメリ

カ本土に数千人しかいなかったころから始まり、二〇世紀になると、カリフォルニアをはじめ西部諸州で激しくなった。日本移民が安い賃金で働き白人労働者の反発を買ったことが主因とされるが、その貧しい生活や異様な風習がアメリカ人に嫌悪感を起させ、人種的偏見によって増幅され、さらにはアメリカのアジア進出と日本の興隆による利害の衝突が黄禍論にまで発展した。……ベルサイユ条約（一九一九）により一等国の仲間入りをしたと自任する日本国民にとっては、差別的排日移民法はその自尊心を著しく傷つけるものであった。……日本の新聞はこぞって反米熱をあおり、一部には日米開戦論さえ真剣に論じられたほどである。この法律は明治初年以来の親米的国論に終止符を打ち、日本人のなかに反米的気運を沈潜させることになった。——前掲『日本史大事典』、p. 738。

(553) 排日移民法が日本に与えた影響については、吉田忠雄と簗原俊洋の研究を参照されたい。

「日本人は、この移民法が制定された大正十三年七月一日を忘れなかった。徳富蘇峰は、この日を「国辱の日」とせよ、と訴えた。日本人は、それほどの屈辱を、この「排日」移民法によって受けたのである。屈辱をそそぐことは、日本人の精神的伝統である。日本人は、この時、米国に一矢を報い、恥をそそぐことを決意した。したがって精神上、日本はこの時に米国と戦争を始めたと言っても過言ではない」——吉田忠雄『排日移民法の軌跡』、経済往来社、1990年、p. 1。

(554) 川村宗嗣「排日宣伝扇子の流行に就て」、1924年6月13日、『満蒙』1924年7月号。

(555) 五四運動の指導者、中国最初のマルクス主義者の一人たる李大釗は、「大アジア主義と新アジア主義」（『国民雑誌』第一巻第二号、1919年2月）において、日本のアジア主義の侵略主義的、モンロー主義的性格について、次のように指摘している。

第一に、「大アジア主義」は中国併呑主義をごまかすことばであることを知るべきである。中国の運命が全く列強の勢力均衡によってはじめて維持できるものであることは、いまさらいうのをはばかるにはおよばない。だから日本がもし中国をひとりじめにしたい、どうしてもこれらの均衡している勢力を排除しなければならない。そこであれこれ考えたあげく、この「大アジア主義」という名称を考え出した。表面だけみれば同文同種の親しみをこめたことばにすぎないようだが、実際はひとりじめの意図がこのことばにかくされているのだ。

第二に、「大アジア主義」とは大日本主義の別名であることを知るべきである。つまり、アジア・モンロー主義ということばを借りて欧米人を玄関払いし、かれらに東方に勢力を拡張させないようにするのだ。アジアに住む民族は凡て日本人の指図にしたがい、アジアの問題はすべて日本人が解決し、日本はアジアの盟主となり、アジアは日本人の舞台なのである。そうなれば、アジアは欧米人のアジアでもなければ、アジア人のアジアでもなくなり、まるで日本人のアジアになってしまうのだ。このようにみれば、「大アジア主義」は平和の主義ではなく、侵略の主義である。民族自決主義ではなく、弱小民族を併呑する帝国主義である。世界組織に適応する主義ではなく、世界組織を破壊する種子である。

——張競、村田雄二郎編『共和の夢 膨張の野望 1894—1924』、岩波書店、2016年、p. 201。

(556) 桑兵《排日移民法案与孙中山的大亚洲主义演讲》（排日移民法案と孫中山の大アジア主義演説）、《中山大学学报（社会科学版）》、2006年11月、p. 287。

(557) 孫文「中国国民党の日本国民への忠告宣言」（1924年8月7日）、『孫文選集』第三巻、社会思想社、1989年、pp. 333-334。

(558) 当時の日本の世論について、陳徳仁、安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集：1924年11月日本と中国の岐路』（法律文化社、1989年）を参照されたい。

(559) 孫文「大アジア主義」、同前、p. 371。

(560) 同前、p. 374。

- (561) 同前。
- (562) 同前、p. 375。
- (563) 前掲、桑兵「排日移民法案と孫中山の大アジア主義演説」参照。
- (564) 戴季陶 たいきとう、1891. 1. 6-1949. 2. 12 国民党右派の理論家、国民政府初代考試院長。原籍は浙江省呉興、四川省広漢に生れる。名は良弼・伝賢、字は選堂・季陶、号は天仇。05年日本に留学、11年ペナンで中国同盟会に参加。辛亥革命後、上海で孫文に出会い、秘書を務める。19年「星期評論」を創刊、社会主義に関心を寄せる。20年上海共産主義小組の準備活動に参加、後に離脱。国共合作に反対するも、24年国民党第1回党大会で中央執行委常務委員、宣伝部長に就任。孫文死後、「孫文主義之哲学基礎」「国民革命与中国国民党」を出版し、階級闘争否定論、儒家思想に基づく三民主義解釈を掲げて国民党右派の理論的支柱と目された。28-48年国民党考試院長として官吏人事制度の整備を図る。蒋介石を支える国民党“元老”の1人であったが、晩年は仏教信仰への傾斜を強めた。国共内戦期、政権退却先の広州にて睡眠薬を大量に服用し、死亡。著書に「日本論」（二八年）もある。——『現代中国事典』、岩波書店、1999年。
- (565) 藤井昇三『孫文の研究——とくに民族主義理論の発展を中心として——』、勁草書房、1966年、pp. 231-232。
- (566) 同前、p. 228。
- (567) 趙軍『中国における大アジア主義——「聯日」と「抗日」のあいだ』、ミネルヴァ書房、2018年、pp. 11-13。
- (568) 田嶋信雄、「孫文の『中独ソ三国連合』構想と日本 一九一七—一九二四——「ソ連」路線および『大アジア主義』再考——」参照、服部龍二・土田哲夫・後藤春美編『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、2007年。
- (569) 前掲、藤井昇三『孫文の研究』、p. 230。
- (570) 孫文の訪日は、もう一つの問題を残した。それについて、古屋哲夫は次のように述べた。

アメリカの「排日移民法」を契機に盛り上がったアジア主義論は、人種論的観点から文明論的観点へと展開されたが、その壮大な構想を実現する現実的条件は存在せず、急速に消滅する運命にあったといえる。しかしこうした状況のもとで二四年十一月に来日した孫文が、「大アジア主義」に関する講演を行ったことは、日本人からは中国にもアジア主義に同調する可能性があることを示すものとして受け取られたであろう。

——前掲、古屋哲夫「アジア主義とその周辺」、p. 95。

- (571) 「東西文化の契合点（下）」（1923年5月5日、『橘樸 翻刻と研究』）において、橘は「東洋思想と西洋思想との間には大なる差別がある」（p. 455）と述べたが、東洋思想について橘は、ただ老荘思想を取り上げて、中国思想の範疇に収斂させてしまった。「支那を識るの途」（『月刊支那研究』）の中で、日本人の中国人に対する優越感を批判するために、橘は「東洋史」の概念を提起した。曰く、「日本が支那に対して先進国であると正当に主張し得る範囲は極めて狭いものであるに過ぎず、東洋史を一見しても明らかである通り先進国として誇り得る理由は逆に支那の方が遥に多くを持ち合わせて居ると云う方が正しい」（pp. 9-10）のであった。しかし、題目「支那を識るの途」が示した通り、この文章は中国をめぐって展開するものであり、「東洋」のことを論じなかった。

橘から見れば、中国は東洋の一部分であった。それゆえ、中国の思想を取り上げて、西洋の思想を相対化させることはできる。しかし、「東洋」とは何か、「東洋」のロジック及び「東洋」諸民族の共通性はどこにあるか。それらの問題は、当時の橘において、残されつつあった。

- (572) 前掲、孫文「大アジア主義」、pp. 369-371。

- (573) 前掲、橘樸「大革命家の最後の努力——孫文の東洋文化観及日本観」、p. 129。

-
- (574) 同前。
(575) 同前。
(576) 同前、p. 139。
(577) 同前。
(578) 第一章、第二節「明治から大正への転換期と橘樸」参照。
(579) 例えば、東洋共同体の共通論理を模索するうちに、橘はテンニースの共同社会説を取り上げた。テンニースは、ドイツの社会学者である。彼は人間の思考と意思に基づき、人類のあらゆる集団を「ゲマインシャフト」（共同社会）と「ゲゼルシャフト」（利益社会）という二種類に分けた。橘は、テンニースの「ゲマインシャフト」説を用いて、東洋社会の本質を説明しようとしたが、テンニースの学説の出発点、すなわち「人間の思考と意思」が心理学に偏るものであることに対して、橘は「歴史的」、「社会学的」な基礎を与えようとした。曰く、

彼等の間では主として心理学的に説明された集合体、共同体という観念に、適当なる歴史的社会的な修正を加えたならば、東洋社会と西洋社会のそれぞれの持っている特質を表現するに適当な観念が得られるのではないだろうか。——座談会「東洋の社会構成と日華の将来」、『中央公論』1940年7月号所載、『著作集』3、pp. 602-603。（下線は筆者による）

彼等は心理的解釈に重きをおいておるが、これは彼等自身の主張をぼかすことになり、もっと実証的方面の材料を持って来るがいいと思うのだ。——同前、p. 604。

私がこの学説を取入れた動機は、決してフェルデナント・テンニースをそのまま祖述することではなく、そこに適当な変更を加えた上で、東西の相違を説明する社会的乃至社会史的基礎を構築したいと考えたから外ならぬ。——「満洲政治力の特殊性」、『満洲経済』、1942年10月号、『著作集3』所収、p. 201。（下線は筆者による）

- (580) 前掲、孫文「大アジア主義」、p. 374。
(581) 同前、p. 375。
(582) 竹内好「中国の民族主義」、『新編 現代中国論 竹内好評論集1』、筑摩書房、1966年、p. 134。
(583) 竹内好は、「政治」や「文学」などの概念を、実体から解放して、展開した空間を開けようとした。「実体」ではなく、「行為」と「機能」に着眼するのは、竹内の一貫した姿勢であった。——孫歌『竹内好的悖論』参照、北京大学出版社、2005年。
(584) 前掲、橘樸「大革命家の最後の努力——孫文の東洋文化観及日本観」、p. 139。
(585) 同前、p. 145。
(586) 第二章、一の1の(2)「橘樸の辛亥革命観」を参照されたい。
(587) 前掲、橘樸「大革命家の最後の努力——孫文の東洋文化観及日本観」、p. 139。
(588) 同前。
(589) 同前、p. 145。
(590) 「編輯の後に」、『月刊支那研究』第一巻第四号、1925年3月、p. 202。
(591) 同前。
(592) 三浦梅園 みうらばいえん、1723-1789。江戸中期の哲学者。20歳ころから西洋天文学書に触れ、自然現象の中に法則（〈条理〉）のあることを知り、これを探究する学を〈条理学〉と名付けた。条理を把握する方法として、心の所執（習気）を捨て、正しき徴（証拠）によることを主張、これを〈反観合一〉とよんだ。この彼の思想はきわめて高次の弁証法的論理をもつとされる。著書には条理探究書の《玄語》、科学概論ともいべき《贅語》、人倫哲学の《敢語》（以上を梅園三語という）があり、ほかに経済論の《価原》、漢詩概論の《詩轍》など多数。——前掲『日本語事典』、p. 648。
(593) 橘樸「日本に於ける王道思想—三浦梅園の政治及び経済学説—」、『満蒙』第六年第六

十五冊、1925年9月、前掲『支那思想研究』所収、p. 486。

(594) 同前、p. 516。

(595) 同前。

(596) 同前。

(597) 同前、p. 486。

(598) 前掲、橋樸「王道の実践としての自治」、p. 6。

(599) 第四章の2の(1)「行動者、工作者としての橋樸」を参照されたい。

(600) 山本秀夫『橋樸』、中央公論社、1977年、p. 235。

(601) 前掲、橋樸「新国家設計批判」、p. 5。

(602) 前掲、橋樸「王道の実践としての自治」参照。

(603) 橋樸「日本の新大陸政策としての満州国」、『満洲評論』第二巻第一号、1932年1月2日、『著作集』2所収、p. 73。

(604) 橋樸「統制経済の資本家性」、『満洲評論』第三巻第九号、1932年8月27日、p. 8。

(605) 橋樸「財閥的統制経済と其犠牲(下)」、『満洲評論』第三巻第十一号、1932年9月10日、p. 13。

(606) 橋樸「満洲国の現在及将来—世界政治の—中心としての—」、『満洲評論』第四巻第一号、1933年1月1日、p. 6。

(607) 浜口裕子「橋樸と石原莞爾—「東洋民族解放論」と「東亜連盟論」—」、前掲『橋樸と中国』所収、p. 199。

(608) 同前、p. 200。

(609) 同前、p. 201。

(610) 橋樸「軍部とファシズム」、『満洲評論』第三巻第二十五号、1932年12月17日。

p. 11。

(611) 「職業自治の国家に日本を改造するための原動力はこれを何処に求むべきか。一言で尽くせばあらゆる勤労国民の聯合体、就中軍部・農民及労働者の結成した勢力でなくてはならぬ」——橋樸「日本改造の原動力—汎亜細亜運動の新理論の四—」、『満洲評論』5・7、1933年8月12日、p. 14。(下線は筆者による)

(612) 橋樸「国家内容としての農民自治—満洲国協和会に関する考察の三—」、『満洲評論』3・3、1932年7月16日、p. 14。

(613) 同前。

(614) 第一章「橋樸思想の形成及びその背景」参照。

(615) 前掲、橋樸「人生観成立の過程」、p. 229。

(616) 同前、p. 238。

(617) 橋樸が精神分析学を学んだことを証明できる直接的な資料はないのだが、彼の女性の友人宿南八重の日記によれば、八重は橋樸から下田次郎『性の原理』、西田天香『懺悔の生活』、永井潜『生物学と哲学との境』、上野陽一『児童心理学講義』及び阿部次郎『人格主義』などいろんな本をもらっている。これらの本は、それぞれ女性の身体及び精神に関する教育、宗教体験から生じた内面的転換、生理及び生命に対する探究、児童心理学また人格主義などが含まれ、すべてが生命の内面問題、個体の自覚と関連する内容を有していた。とりわけ上野陽一(1883-1957)は、心理学を専攻した人で、精神分析学から深く影響を受けており、「フロイドの夢の説(上)(下)」(1914)、「精神分析学者の観たる教育」(1915)などの論文を発表している。こうしてみると、青少年時代からすでに「理を心の中に求め、心の外に理はなし」などを真髄としている陽明学に酔心、1918年の療養生活でお喜久との付き合いを通じて生命の内面性を発見した橋が、大正時代の心理学とフロイトの精神分析学を受け入れたとしても、それはごく自然的なことであったと言える。

(618) 橋樸「帝政と王道思想——鄭総理の王道政策批判——」、『満洲評論』6・8、1934年2月24日、p. 7。

(619) 例えば、橋は「帝国主義と農民経済」において、共産党が中国の小農場制が外国の大農場制に負けるしかないと悲観視したことについて、生産者たる農民の生活という立場か

ら出発して、次のような反駁を打ち出した。つまり、「若し農業の意味が主として市場生産にあるならば大農制は疑ひもなく小農制に優るが、併し斯様な考へ方は資本主義の要求にのみ妥当するもので、社会主義の立場から両者間の差等を附すべきでない。生産の意義が主として生産者自身の生活資料を創造することにあるとすれば、非資本主義的な自給自足の小農組織は何時の世にも立派に其の存在理由を主張し得る」ということであつた。(前掲、橘樸「帝国主義と農民経済」、pp. 53-54。下線は筆者による)

また、「永久飢饉論」の中で、橘は都市と農村の利害相反のことに注意を払った。曰く、

南京政権の最大の支持者たる資本家階級の利益に就いて言えば、彼等は第一に保護関税を設けて彼等の繁栄を図ろうとする。農村住民の日用品たる外国商品は関税のより高き障壁によりて輸入を阻止せられ、それだけ国内の企業は容易となり且つ繁栄するが、併し農村住民はそれだけ高い商品を強いられることとなる、又資本家は企業費用の低下を望むが故に、労働者の食糧品価格の騰貴を好まない。之れは単に企業家ばかりでなく都市住民の大部分に共通するところで、其の意味に於いて都市と農村との利害が相反する。——橘樸「永久飢饉論」、pp. 100-101。(下線は筆者による)

ここで、中国の近代化、工業化と別の次元を提示した橘の像が浮かんでくる。

(620) [座談会]「大陸政策十年の検討」、『満洲評論』21・17、1941年10月25日、前掲『著作集』3所収、p. 553。

(621) 遠山茂樹、今井清一、藤原彰『昭和史〔新版〕』参照、岩波書店、1989年。

(622) 前掲、橘樸「私の方向転換」、p. 33。

(623) 第三章「橘樸と中国革命—「革命同盟」の理論的構造—」第二節第2項の(2)「橘樸の中国共産党批判」参照。

(624) 橘樸「日本改造の過程(上)—汎亜細亜運動の新理論の七一」、『満洲評論』5・15、p. 13。

(625) 前掲、橘樸「満洲国の現在及将来—世界政治の—中心としての—」、p. 6。

(626) 同前、p. 7。

(627) 笠木良明 かさぎ よしあき、1894—1955。大正・昭和期の右翼運動家。日本ファシズムの起源・老社会、大川周明、北一輝らの猶存社に加入。満鉄に入り、大川の影響で行地社創立に参加。昭和4年から大連で帝大出身の満鉄社員を集め大雄峯会と称した。7年満鉄を辞め、満洲国自治指導部(後の資政局)に入り、大雄峯会の青年らを地方官吏に任命、満洲国の王道楽土化をめざして尽力した。その後、8年「大亜細亜」を編集発行、興亜塾を結成。日中戦争中は軍の北支工作に当たった。21年極東国際軍事裁判に証人として出廷。著書に「笠木良明遺芳録」がある。——日外アソシエーツ『20世紀日本人名事典』、2004年、p. 661。

(628) 口田康信『新東洋建設論』参照、建設社刊行、1933年4月。

(629) 橘樸「汎亜細亜運動の新理論(2)」、『満洲評論』5・3、1933年7月15日、p. 13。

(630) 橘樸「王道社会に於ける工業の地位—汎亜細亜運動の新理論の三一」、『満洲評論』5・6、1933年8月5日、p. 19。

(631) 橘樸「独裁政党論(上)—汎亜細亜運動の新理論の五一」、『満洲評論』5・9、1933年8月26日、p. 12。

(632) 前掲、「汎亜細亜運動の新理論(2)」、p. 15。

(633) 前掲、「国家内容としての農民自治—満洲国協和会に関する考察の三一」、p. 11。

(634) 前掲、「汎亜細亜運動の新理論(2)」、p. 16。

(635) 前掲、「王道社会に於ける工業の地位—汎亜細亜運動の新理論の三一」、p. 20。

(636) 前掲、「汎亜細亜運動の新理論(2)」、p. 14。

(637) 同前、p. 15。

(638) 前掲、橘樸「日本改造の過程(上)—汎亜細亜運動の新理論の七一」、p. 11。

(639) 前掲、「王道社会に於ける工業の地位—汎亜細亜運動の新理論の三一」、p. 21。

-
- (640) 前掲、「日本改造の原動力—汎亜細亜運動の新理論の四—」、pp. 14-15。
- (641) 同前、p. 15。
- (642) 前掲、橋樑「支那を識るの途」、p. 13。
- (643) 前掲、橋樑「帝政と王道思想——鄭総理の王道政策批判——」、p. 3。
- (644) 同前、pp. 3-4。
- (645) 「年譜」、前掲『著作集』3、p. 734。
- (646) 橋樑「支那統一論（五）」、1922年5月12日、前掲『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 19。
- (647) 同前。
- (648) 同前、p. 20。
- (649) 同前。
- (650) 橋樑「支那統一論（七）」、1922年5月14日、前掲『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、p. 24。
- (651) 橋樑「支那人の利己心と国家観念」、『支那研究論叢』第一輯、1927年4月、前掲『支那思想研究』所収、p. 288。
- (652) 同前、p. 289。
- (653) 橋樑「自治から王道へ」、『満洲評論』6・12、1934年3月24日、p. 2。
- (654) 前掲、橋樑「私の方向転換」、p. 33。
- (655) **華北分離工作** 華北侵略をもくろむ日本側は、長城を越える軍事行動に出て中国側の譲歩を引き出し、長城以南の河北省東部に非武装地帯を設定させた。——前掲『世界史用語事典』、p. 360。
- (656) 橋樑「日満不可分関係の性質とその発展」、『満洲評論』8・25、1935年6月22日、p. 4。
- (657) 同前、p. 6。
- (658) 橋樑「大陸工作の質的發展」、『満洲評論』9・24、1935年12月14日、p. 2。
- (659) 橋樑「北支那農民問題と其対策」、『満洲評論』10・17、1936年4月25日、p. 23。
- (660) 橋樑「満洲帝国協和会の本質と其の当面工作」、『満洲評論』11・21、1936年11月21日、p. 10。
- (661) 橋樑「日本大陸政策革新の目標」、『満洲評論』12・1、1937年1月1日、p. 11。
- (662) 前掲「東洋の社会構成と日華の将来」、p. 603。
- (663) 同前。
- (664) 同前、p. 604。
- (665) 同前、p. 613。
- (666) 同前。
- (667) 同前。
- (668) 同前、p. 617。
- (669) 前掲、橋樑『職域奉公論』、p. 2。
- (670) 同前。
- (671) 橋樑『支那建設論』、大陸新報社、1944年5月。
- (672) 竹内好「方法としてのアジア」、前掲『竹内好セレクション2—アジアへの/からのまなざし』、pp. 44-45。
- (673) 同前、p. 45。

参考資料

橋樑「済南病院病床日記 第五信」、1921年、山本秀夫編『甦る橋樑』、龍溪書社、1981年。

橘樸「支那統一論（五）」、1922年5月12日、山田辰雄、家近亮子、浜口裕子編『橘樸翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、慶応義塾大学出版会、2005年。

橘樸「支那統一論（六）」、1922年5月13日、同前。

橘樸「支那統一論（七）」、1922年5月14日、同前。

橘樸「支那統一論（一〇）」、1922年5月17日、同前。

橘樸「支那統一論（十一）」、1922年5月18日、同前。

橘樸「支那統一論（十二）」、1922年5月19日、同前。

橘樸「支那統一論（十四）」、1922年5月21日、同前。

橘樸「支那統一論（十六）」、1922年5月23日、同前。

橘樸「支那統一論（十九）」、1922年5月27日、同前。

橘樸「女性と社会的消費（四）」、1922年7月7日（夕刊）、同前。

橘樸「女天下（中）」、1922年7月12日、同前。

橘樸「女性と社会的消費（九）」、1922年7月13日（夕刊）、同前。

橘樸「女性と社会的消費（十）」、1922年7月14日（夕刊）、同前。

橘樸「女性と社会的消費（十一）」、1922年7月15日（夕刊）、同前。

橘樸「聊齋研究（五）」、1922年9月7日、同前。

橘樸「女神崇拜（一）」、1922年11月2日、同前。

橘樸「指蔓外道 第一幕」、1922年11月27日、同前。

橘樸「指蔓外道 …第一幕昨紙のつづき…」、1922年11月28日、同前。

橘樸「指蔓外道 第三幕」、1922年11月30日、同前。

橘樸「私の元旦（上）」、1923年1月5日、同前。

橘樸「辛亥革命と癸亥革命」、1923年2月24日、同前。

橘樸「商人と労働者」、1923年2月24日（夕刊）、同前。

橘樸「英雄か民衆か」、1923年3月3日、同前。

橘樸「士階級と軍閥」、1923年3月7日（夕刊）、同前。

橘樸「政治革命と社会革命（上）」、1923年3月10日（夕刊）、同前。

橘樸「政治革命と社会革命（下）」、1923年3月14日、同前。

橘樸「孫文の人生哲学」、1923年4月11日、同前。

橘樸「東西文化の契合点（下）」、1923年5月5日、同前。

橘樸「見ざるの記」（一）、1923年6月4日、同前。

橘樸「垣間見の記」（三）、1923年6月6日、同前。

橘樸「垣間見の記」（五）、1923年6月8日、同前。

橘樸「垣間見の記」（八）、1923年6月12日、同前。

橘樸「垣間見の記」（十一）、1923年6月15日、同前。

橘樸「人生觀成立の過程」、1923—1924、前掲『甦る橘樸』。

橘樸「孫文の赤化」(七)、『京津日日新聞』、1924年1月—2月推定、山本秀夫編『橘樸と中国』、勁草書房、1990年。

橘樸「孫文の赤化」(十二)、同前。

橘樸「孫文の赤化」(十七)、同前。

橘樸「孫文の赤化」(十九)、同前。

橘樸「時評数則 政治と民衆」、『月刊支那研究』、第一卷第一号、1924年12月。

橘樸「時評数則 支那芝居」、同前。

橘樸「支那を識る途」、同前。

橘樸「時評数則・武装的自治」、同前。

橘樸「官僚の社会的意義」、同前。

橘樸「支那革命史論稿(一)「乱世」に関する社会史的考察」、同前。

橘樸「支那の村落及家族組織 官場現形記評釈 其二」、『月刊支那研究』第一卷第二号、1925年1月。

橘樸「時評数則 商人と段祺瑞」、同前。

橘樸「政治と『智識階級』」、同前。

橘樸「支那はどうか—内藤虎次郎氏の支那論を読む—」、『月刊支那研究』第一卷第三号、1925年2月。

橘樸「萬おぼえ帳・広東の市街戦」、同前。

橘樸「支那児童心理の研究」、『月刊支那研究』第一卷第四号、1925年3月。

橘樸「大革命家の最後の努力——孫文の東洋文化観及日本観」、同前。

橘樸「通俗道教の経典(上)——太上感應篇解説」、『月刊支那研究』第一卷第五号、1925年4月。

橘樸「官僚生活の営業性」、同前。

橘樸「英雄か階級か」、同前。

橘樸「労働争議の思想的背景」、同前。

橘樸「支那人気質の階級別的考察」、『月刊支那研究』第二卷第一号、1925年6月。

橘樸「墨子の宗教思想(下)」、『月刊支那研究』第二卷第二号、1925年7月。

橘樸「通俗道教と民族道德との関係(一)」、同前。

橘樸「支那近時の民族運動及上海事件の思想的背景」、『月刊支那研究』第二卷第三号、1925年8月。

橘樸「日本に於ける王道思想—三浦梅園の政治及び経済学説—」、『満蒙』第六年第六十五冊、1925年9月、『支那思想研究』所収、日本評論社、1935年。

橘樸「支那農村の人口抱擁力」、『満蒙』1926年7月、『支那社会研究』、日本評論社、1936年。

橘樸「中国共産党の階級闘争観」、『新天地』、1926年8月、9月号、『中国革命史論』所収、日本評論社、1950年。

橘樸「支那の輿論」、1927年、前掲『支那思想研究』所収。

橘樸「国共合作の理論的基礎」、1927年1月、『満蒙』第八年第一号所載、前掲『中国革命史論』。

橘樸「支那家族制度の破綻」、『我等』第九卷第一号、1927年1月、前掲『支那社会研究』。

橘樸「支那人の利己心と国家観念」、『支那研究論叢』第一輯、1927年4月、同前。

橘樸「左翼国民党の方向転換」、『満蒙』第八年第七号、1927年7月、前掲『中国革命史論』。

橘樸「北伐軍部内における軍閥的勢力」(『満蒙』第八年第十号、1927年10月、同前。

橘樸「新軍閥の発生とその意義」、『満蒙』第八年第十一号、1927年11月、同前。

橘樸「革命失敗の二大因由」、『満蒙』第九年第一号、1928年1月、同前。

橘樸「支那農村の階級構成」、『満蒙』第九年第四号、1928年4月、前掲『支那社会研究』。

橘樸「国民党軍閥の解剖」、『新天地』第八卷第五号、1928年5月、前掲『中国革命史論』。

橘樸『手(一)』、『新天地』、1928年7月号。

橘樸「帝国主義と農民経済」、『満蒙』第九年第七号、1928年7月、前掲『支那社会研究』。

橘樸「中国革命の本質」、『東亜』第一卷第一、第二号所載、1928年9月、10月、前掲『中国革命史論』。

橘樸『手(四)』、『新天地』、1928年10月号。

橘樸「蒋介石と馮玉祥」、『中央公論』、1928年11月、前掲『中国革命史論』。

橘樸「中国共産党の退却」参照、『満蒙』、1928年9月、11月、12月、同前。

橘樸「左翼国民党の政治的立場」、『満蒙』1929年8月、同前。

橘樸「北満洲農村の充実過程」、『満蒙』第七年第七十六冊、1930年、前掲『支那社会研究』。

橘樸「永久飢饉論」、『上海日報』、1930年2月、同前。

橘樸「旧支那社会に於ける資本家と地主」、『満鉄支那月誌』、1930年2月、同前。

橘樸「広東財閥論」参照、『支那研究』第八卷第七、八、九、十号、1931年7月、8月、9月、10月、前掲『支那社会研究』。

橘樸「満洲事変とファシズム」、『満洲評論』1・12、1931年11月14日。

橘樸「新国家設計批判」、『満洲評論』1・14、1931年11月28日。

橘樸「王道の実践としての自治」、『満洲評論』1・15、1931年12月5日。

橘樸「回顧と展望——涙高かるべき昭和七年を迎えて」、『満洲評論』2・1、1932年1月2日。

橘樸「日本の新大陸政策としての満州国」、同前。

橘樸「満洲新国家建国大綱私案」、『満洲評論』2・1、1932年1月2日。

橘樸「独裁か民主か—蠟山教授の新国家論を読みて—」、『満洲評論』2・8、1932年2月27

日。

橘樸「国家内容としての農民自治—満洲国協和会に関する考察の三—」、『満洲評論』3・3、1932年7月16日。

橘樸「王道理論の展開—満洲国協和会に関する考察の五—」、『満洲評論』3・7、1932年8月13日。

橘樸「統制経済の資本家性」、『満洲評論』3・9、1932年8月27日。

橘樸「財閥的統制経済と其犠牲（下）」、『満洲評論』3・11、1932年9月10日。

橘樸「軍部とファシズム」、『満洲評論』3・25、1932年12月17日。

橘樸「満洲国の現在及将来—世界政治の一中心としての—」、『満洲評論』4・1、1933年1月1日。

橘樸「汎亜細亜運動の新理論（2）」、『満洲評論』5・3、1933年7月15日。

橘樸「王道社会に於ける工業の地位—汎亜細亜運動の新理論の三—」、『満洲評論』5・6、1933年8月5日。

橘樸「独裁政党論（上）—汎亜細亜運動の新理論の五—」、『満洲評論』5・9、1933年8月26日、p. 12。

橘樸「日本改造の過程（上）—汎亜細亜運動の新理論の七—」、『満洲評論』5・15、1933年10月7日。

橘樸「帝政と王道思想——鄭総理の王道政策批判——」、『満洲評論』6・8、1934年2月24日。

橘樸「自治から王道へ」、『満洲評論』6・12、1934年3月24日。

橘樸「私の方向転換」、『満洲評論』7・6、「創刊第三週年記念」、1934年8月11日。

橘樸「日滿不可分関係の性質とその発展」、『満洲評論』8・25、1935年6月22日。

橘樸「大陸工作の質的發展」、『満洲評論』9・24、1935年12月14日。

橘樸「北支那農民問題と其対策」、『満洲評論』10・17、1936年4月25日。

橘樸「満洲帝国協和会の本質と其の当面工作」、『満洲評論』11・21、1936年11月21日。

橘樸「日本大陸政策革新の目標」、『満洲評論』12・1、1937年1月1日、

橘樸「東洋の社会構成と日華の将来」、『中央公論』1940年7月号所載、橘樸著作集刊行委員会編『橘樸著作集 第三巻 アジア・日本の道』、勁草書房、1966年。

橘樸「漢民族の性格と其の文化」、『満洲評論』19巻21号、22号連載、1940年11月23日、24日。1941年『興亜』1月号、第二巻第一号所載、同前。

〔座談会〕「大陸政策十年の検討」、『満洲評論』21・17、1941年10月25日、同前。

橘樸『職域奉公論』、日本評論社、1942年。

橘樸「満洲政治力の特殊性」、『満洲経済』、1942年10月号、前掲『著作集3』所収。

橘樸「孫文思想の東洋的基礎」、『興亜』1943年9月号、第四巻第九号所載、同前。

橘樸「孫文綱領の東洋的性格」、1944年5月大陸新報社刊『支那建設論』所収、同前。

橘樸『支那建設論』、大陸新報社、1944年5月。

参考文献

- 徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』、民友社、1916年。
- 土田杏村『文化主義原論』、内外出版株式会社、1921年。
- 阿部次郎『人格主義』、岩波書店、1922年。
- 川村宗嗣「排日宣伝扇子の流行に就て」、『満蒙』、1924年7月。
- 口田康信『新東洋建設論』、建設社刊行、1933年4月。
- 竹内好編集・解説『現代日本思想大系9 アジア主義』、筑摩書房、1963年。
- 野沢豊「中国における統一戦線の形成過程」、『思想』447号、1964年3月、273-286頁。
- 尾崎秀実『現代支那論』、勁草書房、1964年。
- 座談会「橋樑の思想をめぐって」、橋樑著作集刊行委員会編『橋樑著作集3 アジア・日本の道』、勁草書房、1966年。
- 藤井昇三『孫文の研究——とくに民族主義理論の発展を中心として——』、勁草書房、1966年。
- 竹内好「中国の民族主義」、『新編 現代中国論 竹内好評論集1』、筑摩書房、1966年。
- 山本秀夫「アジア民族解放の思想—橋樑研究序説—」、『季刊東亜』、1968年1月、65-76頁。
- 満州国史編纂刊行会編『満州国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年。
- 米田佐代子『近代日本女性史 下』、新日本出版社、1972年。
- 内藤湖南「支那時局と新旧思想」、『内藤湖南全集』第四巻、筑摩書房、1972年。
- 内藤湖南「清国の立憲政治」、『内藤湖南全集』第五巻、筑摩書房、1972年。
- 内藤湖南「清朝衰亡論」、同前。
- 内藤湖南「支那論」、同前。
- 内藤湖南「新支那論」、同前。
- 橋川文三「最近の日本ファシズム論」、『歴史学研究』397号、1973年6月、41-44頁。
- マルクス「経済学批判」序言、『マルクス・エンゲルス全集』第13巻、人民出版社（中国）、1973年。
- 野沢豊「中国の国民革命についての序論的考察」、野沢豊編『中国国民革命史の研究』所収、青木書店、1974年。
- 笠原十九司「江浙戦争と上海自治運動」、野沢豊編『中国国民革命史の研究』、青木書店、1974年。
- 山本秀夫「橋樑と東洋民族解放論」、『伝統と現代』第32号、1975年3月、110-120頁。
- 三輪幸子「若い世代の見た橋樑像」、『楠』第3号、1975年、68-70頁。
- 宿南八重「橋さんの思い出（二）」、『楠』第4号、1975年2月、32-43頁。
- 山本秀夫「三浦義臣と橋樑」、『楠』第4号、1975年5月、48-51頁。
- 中西勝彦「橋樑の思想形成—渡航動機とのかかわりで—」、『大阪市立大学法学雑誌』22

(1)、1975年9月、27-48頁。

山本秀夫『橋樑』、中央公論社、1977年7月。

国民教育研究所編『近代日本教育小史』、草土文化、1978年。

松竹純「橋樑の思想形成」、『暗河』第27巻、葺書房、1980年、75-88頁。

山田辰雄『中国国民党左派の研究』、慶応通信、1980年。

野村浩一「橋樑—アジア主義の彷徨—」、『近代日本の中国認識—アジアへの航跡』、研文出版、1981年。

山本秀夫「橋樑思想形成にかかわる新資料から」、山本秀夫編『甦る橋樑』、龍溪書社、1981年。

竹内好「橋樑の日本思想史上の位置」、同前。

中西勝彦「中国国民革命の展開と橋樑（一）」、『大阪市立大学法学雑誌』30（1）、1983年11月、48-82頁。

中西勝彦「中国国民革命の展開と橋樑（二）」、『大阪市立大学法学雑誌』30（2）、1984年1月、186-223頁。

沈雨梧「第一次世界大戦時期的浙江民族工業」、『浙江師範大学学報：社会科学版』、1984年第4期、92-99頁。

孫文「中国国民党第一次全国代表大会宣言」1924年1月23日、『孫中山全集』第九巻、中華書局、1986年。

孫文「為廣州商團事件對外宣言」、1924年9月1日、『孫中山全集』第十一巻、中華書局、1986年。

孫文「中国国民党の日本国民への忠告宣言」、1924年8月7日、『孫文選集』第三巻、社会思想社、1989年。

坂野潤治『大系 日本の歴史 13 近代日本の出発』、小学館、1989年。

江口圭一『大系 日本の歴史 14 二つの大戦』、小学館、1989年。

陳徳仁、安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集：1924年11月日本と中国の岐路』、法律文化社、1989年。

遠山茂樹、今井清一、藤原彰『昭和史〔新版〕』、岩波書店、1989年。

吉田忠雄『排日移民法の軌跡』、経済往来社、1990年。

山田辰雄「橋樑の中国国民革命論」、山本秀夫編『橋樑と中国』所収、勁草書房、1990年。

家近亮子「橋樑の中国共産党批判」、同前。

伊藤昭雄「橋樑と満洲国協和会—「農民自治」と「民族協和」—」、同前。

浜口裕子「橋樑と石原莞爾—「東洋民族解放論」と「東亜連盟論」—」、同前。

与謝野晶子「そぞろごと」（1911年9月）、堀場清子編『「青鞜」女性解放論集』、岩波書店、1991年。

平塚らいてう「元始女性は太陽であった—『青鞜』発刊に際して—」（1911年9月）、同前。

「中国共産党土地問題党綱草案」1927年、中央檔案館編『中共中央文献選集』第三冊、中

共中央党校出版社、1991年。

夏目漱石『三四郎』、角川書店、1992年。

狭間直樹編『中国国民革命の研究』、京都大学人文科学研究所、1992年。

塚本元『中国における国家建設の試み—湖南 1919～1921年—』、東京大学出版会、1994年。

『日本史大事典』第一巻、平凡社、1995年。

山田辰雄「橋樑の中国軍閥論」、『法学研究』第68巻第5号、1995年5月。

古屋哲夫「アジア主義とその周辺」、古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』、緑蔭書房、1996年。

マーク・ピーティ（浅野豊美訳）『植民地—帝国50年の興亡』、読売新聞社、1996年。

駒込武『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店、1997年。

王先明『近代紳士—一个封建階層的歴史命运』、天津人民出版社、1997年。

野村浩一『蒋介石と毛沢東 世界戦争のなかの革命』、岩波書店、1997年。

船山信一『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、こぶし書房、1999年。

『現代中国事典』、岩波書店、1999年。

貝塚茂樹『中国の歴史 下』、岩波書店、2000年。

中山義弘「橋樑の中国認識と孫文思想理解—道教研究から孫文思想研究へ—」、『中国の歴史と経済』、東洋経済史学会、2000年。

『世界史用語事典』、三省堂、2002年。

張仲礼（李栄昌訳）『中国紳士—关于其在十九世紀中国社会中作用的研究』、上海社会科学院出版社、2002年。

邱捷「广州商团与商团事変—从商人团体角度的再探討」、『歴史研究』、2002年2月、53-66頁。

趙一紅「マルクスの『アジア的生産様式』理論と東洋の社会構造」（《马克思的“亚细亚生产方式”理论与东方社会结构》）、『マルクス主義研究』、2002年5月、54-60頁。

山室信一『キメラ—満洲国の肖像 増補版』、中公新書、2004年。

日外アソシエーツ、『20世紀日本人名事典』、2004年。

福井紳一「橋樑と満鉄調査部事件『左翼アジア主義』の生成」、『情況』、2005年4月、124-163頁。

山田辰雄「橋樑と中国研究」、山田辰雄、家近亮子、浜口裕子編『橋樑 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』、慶応義塾大学出版会、2005年。

孫歌『竹内好的悖論』、北京大学出版社、2005年。

竹内好「日本のアジア主義」、丸川哲史、鈴木将久編『竹内好セレクション2—アジアへの/からのまなざし』、日本経済評論社、2006年。

竹内好「方法としてのアジア」、同前。

竹山護夫「大正期の政治思想」、『大正期の政治思想と大杉栄』名著刊行会、2006年。

-
- 岸本美緒「中国中間団体論の系譜」、『「帝国」日本の学知 第三巻東洋学の磁場』、岩波書店、2006。
- 浜口裕子「1920年代前半の中国における反日運動と日本」、『政治・経済・法学研究』Vol.9 No.1、2006年8月、32-43頁。
- 桑兵『排日移民法案与孙中山の大アジア主義演説』（排日移民法案と孫中山の大アジア主義演説）、『中山大学学報（社会科学版）』、2006年11月、1-13頁。
- 田嶋信雄、「孫文の『中独ソ三国連合』構想と日本 一九一七—一九二四——「ソ連」路線および『大アジア主義』再考——」、服部龍二・土田哲夫・後藤春美編『戦間期の東アジア国際政治』、中央大学出版部、2007年。
- 酒井哲哉「アナーキズム的想像力と国際秩序—橋樑の場合」、『近代日本の国際秩序論』、岩波書店、2007年。
- 石月静恵『近代日本女性史講義』、世界思想社、2007年。
- 溝口雄三、池田知久、小島毅『中国思想史』、東京大学出版会、2007年9月。
- ピーター・ブルッカー（有元健、本橋哲也訳）『文化理論用語集カルチュラル・スタディーズ+』、新曜社、2008年。
- 竹山護夫「日本ファシズムの文化史的背景」、『近代日本の文化とファシズム』、名著刊行会、2009年。
- 坂元ひろ子「解説」、野村浩一、近藤邦康、並木頼寿、坂元ひろ子、砂山幸雄、村田雄二郎編『新編原典中国近代思想史4 世界大戦と国民形成』、岩波書店、2010年。
- 李志毓「国民党“左派”的『小資産階級革命論』」、『長白学刊』、長白学刊雑誌社、2010年6月、110-114頁。
- 李志毓「1928年国民党内激進左派的『党治』理論」、『首都師範大学学報（社会科学版）・中国近現代史研究』、首都師範大学学報編集部、2011年1月、16-22頁。
- 久保田文次「世界史における辛亥革命」、『孫文・辛亥革命と日本人』、汲古書院、2011年。
- レイモンド・ウィリアムズ（椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳）『完訳 キーワード辞典』、平凡社、2011。
- 溝口雄三「辛亥革命の歴史的個性」、『中国思想のエッセンスⅡ 東往西来』、岩波書店、2011。
- 溝口雄三、丸山松幸、池田知久編『中国思想文化事典』、東京大学出版会、2012年。
- 孫江「橋樑と魯迅」、『読書』、三聯書店、2012年。
- 内藤湖南『支那論』、『文芸春秋』、2013年。
- 斎藤修『プロト工業化の時代——西欧と日本の比較史』、岩波書店、2013年。
- アーサー・H・スミス（石井宗皓、岩崎菜子訳）『中国人的性格』（Chinese Characteristics, 1894）、中央公論新社、2015年。
- 岸本美緒『中国の歴史』、筑摩書房、2015年。
- 章永樂『旧邦新造 1911—1917』（第二版）参照、北京大学出版社、2016年。
- 李大釗「大アジア主義と新アジア主義」、『国民雑誌』第一巻第二号、1919年2月、張競、

村田雄二郎編『共和の夢 膨張の野望 1894—1924』所収、岩波書店、2016年。

廣部泉『人種戦争という寓話——黄禍論とアジア主義』、名古屋大学出版会、2017年。

飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』参照、法政大学出版局、2017年。

福井紳一「橋樑と左翼アジア主義—「東亜」の新体制を提起する広松渉の絶筆に寄せて—」、
『出版人・広告人』、2017年10月。

趙軍『中国における大アジア主義——「聯日」と「抗日」のあいだ』、ミネルヴァ書房、2018年。
